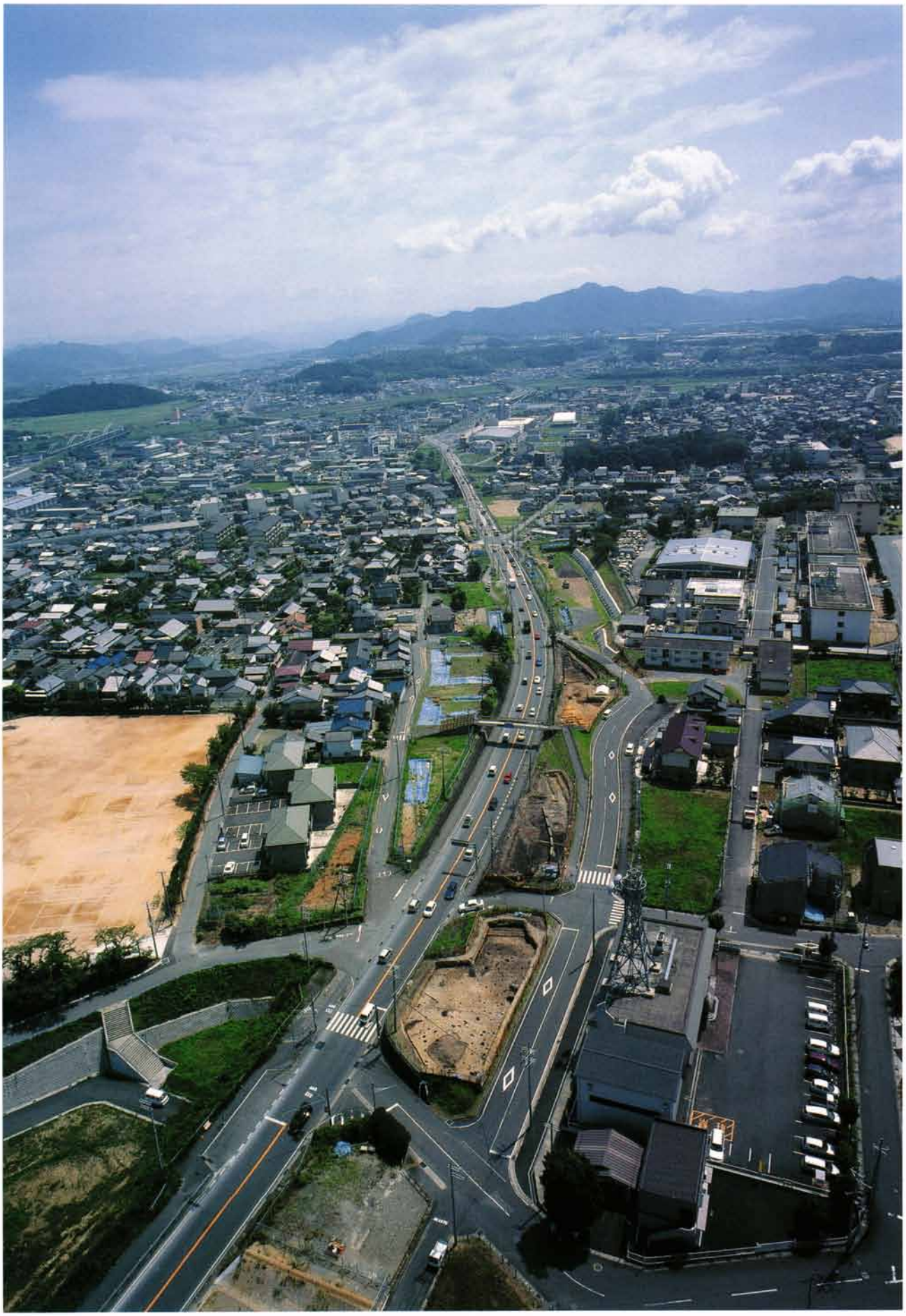
京都府遺跡調査概報

第121冊

1．難波野条里制遺跡・難波野遺跡（平成17年度）
2．岡ノ遺跡第４次
3．美濃山遺跡
4．薪遺跡第７次

2007

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター



岡ノ遺跡調査地全景（上が南）

序

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成17・18年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部、国土交通省近畿地方整備局、京都府教育委員会の依頼を受けて行った、難波野遺跡、岡ノ遺跡第4次、美濃山遺跡、薪遺跡第7次に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、御活用いただければ幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、宮津市教育委員会、福知山市教育委員会、八幡市教育委員会、京田辺市教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
理　事　長　　上　田　正　昭

凡　　例

1．　本書に収めた概要は、下記のとおりである。

　1．難波野条里制遺跡・難波野遺跡(平成17年度)

　2．岡ノ遺跡第４次

　3．美濃山遺跡

　4．薪遺跡第７次

2．　遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1．	難波野条里制遺跡・難波野遺跡	宮津市字大垣・江尻・難波野	平17.10. 6 ～平18. 3 .27	京都府土木建築部	石尾政信 村田和弘
2．	岡ノ遺跡第４次	福知山市東岡町・南岡町	平17. 5 .10～平18. 1 .12	国土交通省近畿地方整備局	松井忠春 高野陽子
3．	美濃山遺跡	八幡市内里柿谷	平18. 6 . 1 ～平18. 8 .18	京都府教育委員会	石尾政信
4．	薪遺跡第７次	京田辺市大字薪小字巽・泥々・狭道	平17. 9 .26～平18. 2 .27	京都府土木建築部	増田孝彦 柴　暁彦

3．　本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第６座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。

4．　本書の編集は、調査第１課資料係が当った。なお、遺物の写真撮影は、同資料係主任調査員田中彰が行った。

本　文　目　次

1．難波野条里制遺跡・難波野遺跡平成17年度発掘調査概要----------1
2．岡ノ遺跡第４次発掘調査概要----------35
3．美濃山遺跡発掘調査概要----------77
4．薪遺跡第７次発掘調査概要----------83

挿　図　目　次

1．難波野条里制遺跡・難波野遺跡

第１図　調査地および周辺遺跡分布図----------1
第２図　調査トレンチ配置図----------2
第３図　第３トレンチ上層遺構平面図----------5
第４図　第３トレンチ北壁断面図----------6
第５図　第３トレンチ上層出土遺物実測図----------7
第６図　第３トレンチ下層遺構平面図----------8
第７図　竪穴式住居跡ＳＨ27実測図----------9
第８図　方形貼石墓ＳＸ22実測図(平面図・立面図)----------10
第９図　方形貼石墓ＳＸ22周溝断面図・墳丘断ち割り断面図----------11
第10図　方形貼石墓ＳＸ29実測図(平面図・立面図)----------11
第11図　竪穴式住居跡ＳＨ27出土遺物実測図----------12
第12図　第３トレンチ下層出土遺物----------13
第13図　第５トレンチ平面図----------14
第14図　第５トレンチ土層断面図----------15
第15図　掘立柱建物跡ＳＢ01・02実測図----------16
第16図　掘立柱建物跡ＳＢ04実測図----------17
第17図　掘立柱建物跡ＳＢ03、柵列ＳＡ05５・06実測図----------17
第18図　第５トレンチ出土遺物----------18
第19図　第６トレンチ北壁土層断面図Ａ・Ｂ----------19

第20図　第６トレンチ遺構配置図----------20
第21図　第６トレンチ井戸ＳＥ１・洗い場遺構ＳＸ77・不明土坑ＳＸ313平面図----------21
第22図　第６トレンチＳＥ１土層断面図----------22
第23図　第６トレンチＰ49・64・65平面図----------22
第24図　第６トレンチＳＤ269土層断面図----------22
第25図　第６トレンチ出土遺物(1)----------23
第26図　第６トレンチ出土遺物(2)----------24
第27図　第６トレンチ出土遺物(3)----------25
第28図　第６トレンチ出土遺物(4)----------26
第29図　第６トレンチ出土遺物(5)----------27
第30図　第６トレンチ出土遺物(6)----------28
第31図　第６トレンチ出土遺物(7)----------29
第32図　第６トレンチ出土遺物(8)----------30
第33図　第７トレンチ平面図----------31
第34図　第７トレンチ北壁断面図----------32
第35図　第７トレンチ出土遺物実測図----------32

２．岡ノ遺跡第４次

第36図　調査地位置図----------35
第37図　調査地配置図----------36
第38図　３地区遺構配置図----------37
第39図　３－５地区遺構配置図・土層断面図----------38
第40図　掘立柱建物跡ＳＢ3501・3403、柵跡ＳＡ3502実測図----------40
第41図　４・３－５地区遺構配置図・土層断面図----------42
第42図　井戸ＳＥ4214、土坑ＳＫ4213、不明土坑ＳＸ4202実測図----------43
第43図　４－６地区遺構配置図・土坑ＳＫ4006・土層断面図----------44
第44図　４－８地区遺構配置図・土層断面図----------46
第45図　５－１地区遺構配置図----------48
第46図　５－２地区遺構配置図----------49
第47図　６地区遺構配置図・土層断面図----------50
第48図　竪穴式住居跡ＳＨ0601土器出土状況実測図----------52
第49図　竪穴式住居跡ＳＨ6013・円形土坑ＳＫ6001実測図----------53
第50図　７地区北西壁・西壁土層断面図----------54
第51図　７地区遺構平面図----------55
第52図　掘立柱建物跡ＳＢ7050・ＳＢ7051実測図----------56
第53図　掘立柱建物跡ＳＢ7049・井戸ＳＥ7052実測図----------57

第54図　掘立柱建物跡ＳＢ7048実測図----------58
第55図　溝ＳＤ7021・7042実測図----------58
第56図　土坑ＳＫ7019・井戸ＳＥ7020実測図----------59
第57図　14地区遺構配置図、柵列柵ＳＡ1401実測図・土層断面図----------57
第58図　15地区遺構配置図・土層断面図第59図　16地区遺構配置図----------62
第59図　16地区遺構配置図----------63
第60図　16地区土層断面図----------64
第61図　竪穴式住居跡ＳＨ16101・掘立柱建物跡ＳＢ16102実測図----------65
第62図　出土遺物実測図(1)----------68
第63図　出土遺物実測図(2)----------69
第64図　出土遺物実測図(3)----------70
第65図　出土遺物実測図(4)----------72
第66図　出土遺物実測図(5)----------73
第67図　西部調査地遺構変遷図----------74
第68図　東部調査地遺構変遷図----------75

３．美濃山遺跡

第69図　調査地および周辺遺跡分布図----------77
第70図　調査地周辺旧地形およびトレンチ配置図----------78
第71図　１トレンチ平面図----------79
第72図　１トレンチ西壁および下層断面図----------79
第73図　２トレンチ平面図----------80
第74図　２トレンチ西壁およびおよび下層断面図----------80
第75図　出土遺物実測図----------81
第76図　出土遺物----------81

４．薪遺跡第７次

第77図　調査地および周辺の主要遺跡----------84
第78図　調査地位置図(1)----------85
第79図　調査地位置図(2)----------86
第80図　Ａ地区平面図----------87
第81図　Ａ地区土層柱状図----------88
第82図　土坑ＳＫ51・溝ＳＤ66実測図----------89
第83図　掘立柱建物跡ＳＢ56・57、溝ＳＤ55実測図----------90
第84図　溝ＳＤ01・02実測図----------91
第85図　竪穴式住居跡ＳＨ84実測図----------92
第86図　Ａ地区土坑実測図(1)----------93

第87図　Ａ地区土坑実測図(2)----------95
第88図　Ａ地区土坑実測図(3)----------96
第89図　Ｂ地区平面図----------97
第90図　Ｂ地区南西壁断面図----------97
第91図　Ｃ地区平面図----------98
第92図　Ｃ地区南西壁断面図----------99
第93図　土坑ＳＫ10実測図----------100
第94図　流路跡ＳＲ21実測図----------101
第95図　土坑ＳＫ18実測図----------102
第96図　Ｃ地区南西断ち割り断面図----------103
第97図　Ａ地区出土遺物実測図(1)----------104
第98図　Ａ地区出土遺物実測図(2)----------105
第99図　縄文土器および土製品実測図----------106
第100図　石器実測図----------108
第101図　Ｃ地区出土遺物実測図----------110
第102図　縄文土器実測図(1)----------111
第103図　縄文土器実測図(2)----------112
第104図　縄文土器実測図(3)----------113
第105図　石棒・石皿実測図----------114
第106図　近畿地方の大型石棒分布図----------116
第107図　笠状二段石棒集成図----------117

図　版　目　次

1．難波野条里制遺跡・難波野遺跡

図版第１　(1)調査地全景(東から)　(2)調査地全景(西から)
図版第２　(1)調査地全景(北から)
(2)５トレンチ全景(上が北)
図版第３　(1)第３トレンチ全景(東から)　(2)第３トレンチ全景(上が北)
図版第４　(1)方形貼石墓ＳＸ22(上が北)　(2)方形貼石墓ＳＸ22・ＳＸ24(上が北)
図版第５　(1)第３トレンチ上層遺構全景(西から)
(2)第３トレンチ上層遺構全景(東から)

(3)第３トレンチ上層遺構全景(南から)
図版第６　(1)第３トレンチ下層遺構全景(西から)
(2)第３トレンチ下層遺構全景(東から)
(3)第３トレンチ下層遺構全景(南東から)
図版第７　(1)方形貼石墓ＳＸ22東周溝断面(北東から)
(2)方形貼石墓ＳＸ22南周溝断面(南西から)
(3)竪穴式住居跡ＳＨ26(南から)
図版第８　(1)方形貼石墓ＳＸ29(北西から)　(2)方形貼石墓ＳＸ29北西隅(北西から)
(3)方形貼石墓ＳＸ29北側貼石中央部(北から)
図版第９　(1)方形貼石墓ＳＸ22東側貼石北部(北西から)
(2)方形貼石墓ＳＸ22東側貼石南部(東から)
(3)方形貼石墓ＳＸ22南東隅貼石(南東から)
図版第10　(1)方形貼石墓ＳＸ22東側貼石東部(南から)
(2)方形貼石墓ＳＸ22南側貼石中央部(南から)
(3)方形貼石墓ＳＸ22西側貼石(西から)
図版第11　(1)方形貼石墓ＳＸ22東側貼石除去前(東から)
(2)方形貼石墓ＳＸ22東側貼石除去状況(東から)
(3)方形貼石墓ＳＸ22東側貼石除去後の断面(北西から)
図版第12　(1)方形貼石墓ＳＸ22南側貼石除去前(南から)
(2)方形貼石墓ＳＸ22南側貼石除去後(南から)
(3)方形貼石墓ＳＸ22南側貼石除去後の断面(南西から)
図版第13　(1)第５トレンチ全景(西から)　(2)第５トレンチ全景(東から)
(3)第５トレンチ東壁断面(西から)
図版第14　(1)第６トレンチ全景(南から)　(2)第６トレンチ全景(東から)
図版第15　(1)第６トレンチ遺構検出状況(東から)
(2)第６トレンチ遺構検出状況(南東から)
(3)作業風景(北東から)
図版第16　(1)井戸ＳＥ01、洗い場遺構ＳＸ77全景(東から)
(2)洗い場遺構ＳＸ77上層遺物出土状況(西から)
(3)洗い場遺構ＳＸ77下層遺物出土状況(西から)
図版第17　(1)洗い場遺構ＳＸ77下層土器出土状況(北から)
(2)ピットＰ65土器出土状況(西から)
(3)ピットＰ49下駄出土状況(東から)
図版第18　(1)第７トレンチ全景(東から)　(2)第７トレンチ全景(西から)
(3)第７トレンチ中央部自然流路跡(北から)

図版第19　(1)方形貼石墓ＳＸ22南側周溝土器出土状況(南から)
(2)方形貼石墓ＳＸ22出土遺物
図版第20　第３・５・７トレンチ出土遺物
図版第21　第３・５・６トレンチ出土遺物(木製品・銭貨)
図版第22　第６トレンチ出土遺物(1)(木製品)
図版第23　第６トレンチ出土遺物(2)
図版第24　第６トレンチ出土遺物(3)
図版第25　第６トレンチ出土遺物(4)
図版第26　第６トレンチ出土遺物(5)

２．岡ノ遺跡第４次

図版第27　(1)調査地全景航空写真(上が西)　(2)３－５地区発掘調査前全景(北東から)
(3)３－５地区全景航空写真(上が南)
図版第28　(1)３－５地区検出遺構全景(北東から)
(2)３－５地区掘立柱建物跡ＳＢ3501・3403全景(北から)
(3)３－５地区遺物出土状況(北から)
図版第29　(1)４－３～６地区全景航空写真(上が南)
(2)４－３～５地区検出遺構全景(西から)
(3)４－３～５地区検出遺構全景(東から)
図版第30　(1)４－６地区発掘調査前全景(北北東から)
(2)４－６地区検出遺構全景(北から)
(3)４－６地区検出遺構全景(西から)
図版第31　(1)４－６地区中世墓ＳＸ4006全景(南から)
(2)４－６地区中世墓ＳＸ4006遺物出土状況(北から)
(3)４－６地区柵ＳＡ4007全景(北から)
図版第32　(1)４－８地区発掘調査前全景(西から)
(2)４－８地区全景航空写真(上が南)　(3)４－８地区検出遺構全景(東から)
図版第33　(1)５地区全景航空写真(上が北)　(2)５－１地区調査区全景(西から)
(3)５－１地区調査区全景(東から)
図版第34　(1)５－２地区検出遺構全景(東から)　(2)５－２地区検出遺構全景(西から)
(3)６地区(上)・16地区(下)全景航空写真(上が南)
図版第35　(1)６地区全景航空写真(上が南)　(2)６地区検出遺構全景(西から)
(3)６地区竪穴式住居跡ＳＨ6013全景(北から)
図版第36　(1)６地区竪穴式住居跡ＳＨ0601全景(北から)
(2)６地区竪穴式住居跡ＳＨ0601遺物出土状況(北から)
(3)６地区井戸ＳＥ6001遺物出土状況(北から)

図版第37　(1) 7 地区全景航空写真(上が北)　(2) 7 地区東部遺構検出状況(西から)
(3) 7 地区西部遺構検出状況(東から)
図版第38　(1) 7 地区掘立柱建物跡ＳＢ7050(南東から)
(2) 7 地区掘立柱建物跡ＳＢ7051(北西から)
(3) 7 地区掘立柱建物跡ＳＢ7048(北西から)
図版第39　(1) 7 地区井戸ＳＥ7052(北から)　(2) 7 地区井戸ＳＥ7020(南から)
(3) 7 地区土坑ＳＫ7019(南から)
図版第40　(1) 7 地区溝ＳＤ7021・7042・柵列ＳＡ7048全景(西から)
(2) 7 地区溝ＳＤ7021・7042・柵列ＳＡ7048全景(南から)
(3) 7 地区溝ＳＤ7021土層断面(南から)
図版第41　(1) 7 地区掘立柱建物跡ＳＤ7050柱穴Ｐ7037土層断面
(2) 7 地区柱穴Ｐ7038遺物出土状況
(3) 7 地区掘立柱建物跡ＳＢ7048柱穴Ｐ7024土層断面
図版第42　(1)14地区全景航空写真(上が北)　(2)14地区検出遺構全景(西から)
(3)14地区柵ＳＡ1401(東から)
図版第43　(1) 4 － 8 ・14・15地区全景航空写真(上が北)
(2)15地区全景航空写真(上が南)
(3)15地区検出遺構全景(東から)
図版第44　(1)16地区検出遺構全景(西から)
(2)16地区竪穴式住居跡ＳＨ16101全景(南から)
(3)16地区掘立柱建物跡ＳＢ1602全景(南から)
図版第45　出土遺物(1)　3 － 5 地区出土
図版第46　出土遺物(2)　4 － 6 地区中世墓ＳＸ4006出土
図版第47　出土遺物(3)　6 地区竪穴式住居跡ＳＨ0601出土
図版第48　出土遺物(4)

3．美濃山遺跡

図版第49　(1)調査前状況(南西から)　(2)調査前状況(南東から)
(3) 1 トレンチ重機掘削状況(南東から)
図版第50　(1) 1 トレンチ全景(南西から)　(2) 1 トレンチ全景(南東から)
(3) 1 トレンチ西側壁断面(南東から)
図版第51　(1) 1 トレンチ下層掘削状況(北東から)
(2) 1 トレンチ下層西側断面(南東から)
(3) 2 トレンチ作業状況(南から)
図版第52　(1) 2 トレンチ全景(南から)　(2) 2 トレンチ溝群(西から)
(3) 2 トレンチ西壁断面(東から)

4．薪遺跡第７次

図版第53　(1)Ａ地区調査前の状況(北西から)　(2)Ａ地区全景垂直写真(左上が北)
図版第54　(1)Ａ地区掘立柱建物跡ＳＢ57(左上が北)
(2)Ａ地区掘立柱建物跡ＳＢ56(左が北)
図版第55　(1)Ａ地区掘立柱建物跡ＳＢ57　柱痕検出状況(北から)
(2)Ａ地区掘立柱建物跡ＳＢ56完掘状況(北から)
図版第56　(1)Ａ地区掘立柱建物跡ＳＢ57　Ｐ２柱根出土状況(東から)
(2)Ａ地区掘立柱建物跡ＳＢ56　Ｐ２柱根出土状況(北から)
図版第57　(1)Ａ地区溝ＳＤ66遺物出土状況(南東から)
(2)Ａ地区土坑ＳＫ51、溝ＳＤ55(中央)遺物出土状況(東から)
(3)Ａ地区土坑ＳＫ51遺物出土状況(北から)
図版第58　(1)Ａ地区掘立柱建物跡ＳＢ57Ｐ５断面(東から)
(2)Ａ地区掘立柱建物跡ＳＢ57Ｐ８断面(南から)
(3)Ａ地区掘立柱建物跡ＳＢ57Ｐ15断面(北から)
図版第59　(1)Ａ地区掘立柱建物跡ＳＢ57Ｐ16断面(北から)
(2)Ａ地区竪穴式住居跡ＳＨ84ピット半裁状況(西から)
(3)Ａ地区竪穴式住居跡ＳＨ84完掘状況(西から)
図版第60　(1)Ａ地区溝ＳＤ01完掘状況(南東から)
(2)Ａ地区溝ＳＤ02完掘状況(北西から)
(3)Ａ地区溝ＳＤ02断面(北東から)
図版第61　(1)Ａ地区土坑ＳＫ11断面(西から)　(2)Ａ地区土坑ＳＫ12断面(西から)
(3)Ａ地区土坑ＳＫ15断面(西から)
図版第62　(1)Ａ地区土坑ＳＫ16断面(西から)　(2)Ａ地区土坑ＳＫ22断面(西から)
(3)Ａ地区土坑ＳＫ24断面(北東から)
図版第63　(1)Ａ地区土坑ＳＫ62断面(南から)　(2)Ａ地区土坑ＳＫ07完掘状況(南から)
(3)Ａ地区土坑ＳＫ14(手前)・ＳＫ08(右)・ＳＫ09完掘状況(南から)
図版第64　(1)Ａ地区土坑ＳＫ11完掘状況(南から)
(2)Ａ地区土坑ＳＫ11(左)・ＳＫ12完掘状況(北東から)
(3)Ａ地区土坑ＳＫ15完掘状況(北西から)
図版第65　(1)Ａ地区土坑ＳＫ17完掘状況(北から)
(2)Ａ地区土坑ＳＫ22完掘状況(北西から)
(3)Ａ地区土坑ＳＫ23完掘状況(南東から)
図版第66　(1)Ａ地区土坑ＳＫ24完掘状況(南から)
(2)Ａ地区土坑ＳＫ61完掘状況(北東から)
(3)Ａ地区土坑ＳＫ62完掘状況(西から)

図版第67　(1)Ｂ地区調査前の状況(南東から)　(2)Ｂ地区全景(南から)
図版第68　(1)Ｃ地区調査前の状況(南から)　(2)Ｃ地区全景(上が北)
図版第69　(1)Ｃ地区流路跡完掘状況(南東から)　(2)Ｃ地区全景(北西から)
図版第70　(1)Ｃ地区流路跡全景(北西から)
(2)Ｃ地区流路跡ＳＲ15完掘状況(北から)
図版第71　(1)Ｃ地区流路跡ＳＲ15・19完掘状況(東から)
(2)Ｃ地区流路跡ＳＲ19近景(東から)
図版第72　(1)Ｃ地区上層検出遺構(南西から)
(2)Ｃ地区流路跡ＳＲ21杭列検出状況(南西から)
(3)Ｃ地区流路跡ＳＲ15石棒出土状況(南西から)
図版第73　(1)Ｃ地区流路跡ＳＲ15石皿出土状況(南西から)
(2)Ｃ地区土坑ＳＫ18土器出土状況(南西から)
(3)Ｃ地区土坑ＳＫ18完掘状況(南から)
図版第74　須恵器
図版第75　(1)石器(1)　(2)石器(2)・土製品
図版第76　(1)縄文土器(1)　(2)縄文土器(2)
図版第77　縄文土器(3)
図版第78　石棒

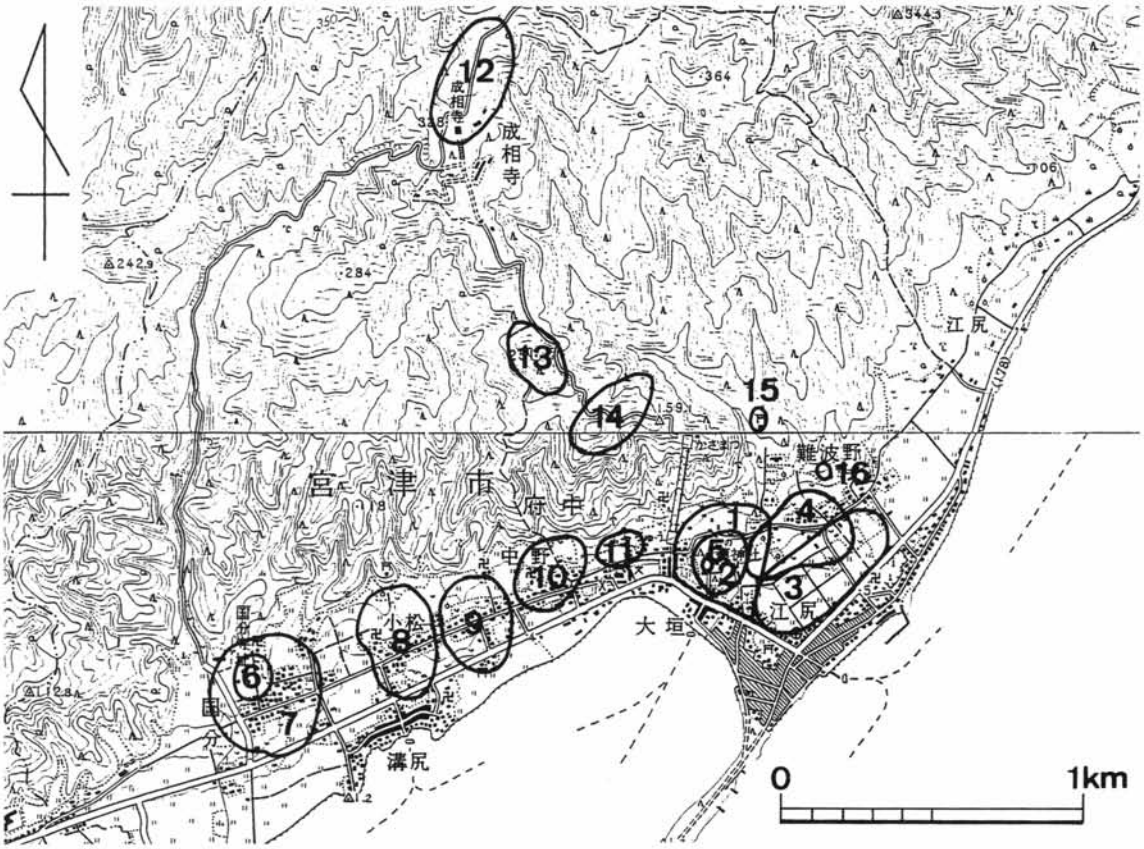
1．難波野条里制遺跡・難波野遺跡
平成17年度発掘調査概要

1．はじめに

今回の調査は、京都府土木建築部が計画・推進する国道178号線府中道路新設改良事業に伴う事前調査である。

本事業予定地には、周知の遺跡として、丹後一の宮である籠神社周辺に大垣遺跡や一の宮遺跡、さらにその東側に難波野条里制遺跡、難波野遺跡などが所在する。このため、当調査研究センターでは、同事業に伴い、平成14年度から一帯において試掘調査および発掘調査を継続実施している。平成17年度の調査は、このうち東半部にある難波野条里制遺跡、難波野遺跡を対象として実施した。

難波野条里制遺跡・難波野遺跡は、日本三景の一つ天橋立の北側の付け根付近、宮津市字難波



第1図　調査地および周辺遺跡分布図(国土地理院1/25,000日置・宮津)

1．大垣遺跡　2．一の宮遺跡　3．難波野条里制遺跡　4．難波野遺跡　5．籠神社(籠神社経塚)
6．丹後国分寺　7．国分遺跡　8．小松遺跡　9．安国寺遺跡　10．中野遺跡
11．慈光寺遺跡　12．成相寺旧境内　13．阿弥陀ヶ峰城跡　14．今熊野城跡　15．真名井神社経塚
16．難波野千躰地蔵遺跡

野に所在する。難波野条里制遺跡は、一辺約109mの方格地割が一帯に展開していることなどから、これらを古代律令制に基づいて施工された条里制の遺跡として周知されてきたものである。ところが、近年、一帯で当調査研究センターが実施した発掘調査では、古代までさかのぼる明確な条里制地割の痕跡は確認されず、一方で弥生～鎌倉時代に営まれた集落跡や墳墓などが次々と発見される状況となった。こうした経過から、昨年度(平成17年度)の調査時に関係機関と協議のうえ、当地に展開する方格地割りについては条里制遺跡(難波野条里制遺跡)として認識しつつ、これに重複して存在する集落跡などについては難波野遺跡と把握し、周知の遺跡とすることとなった。

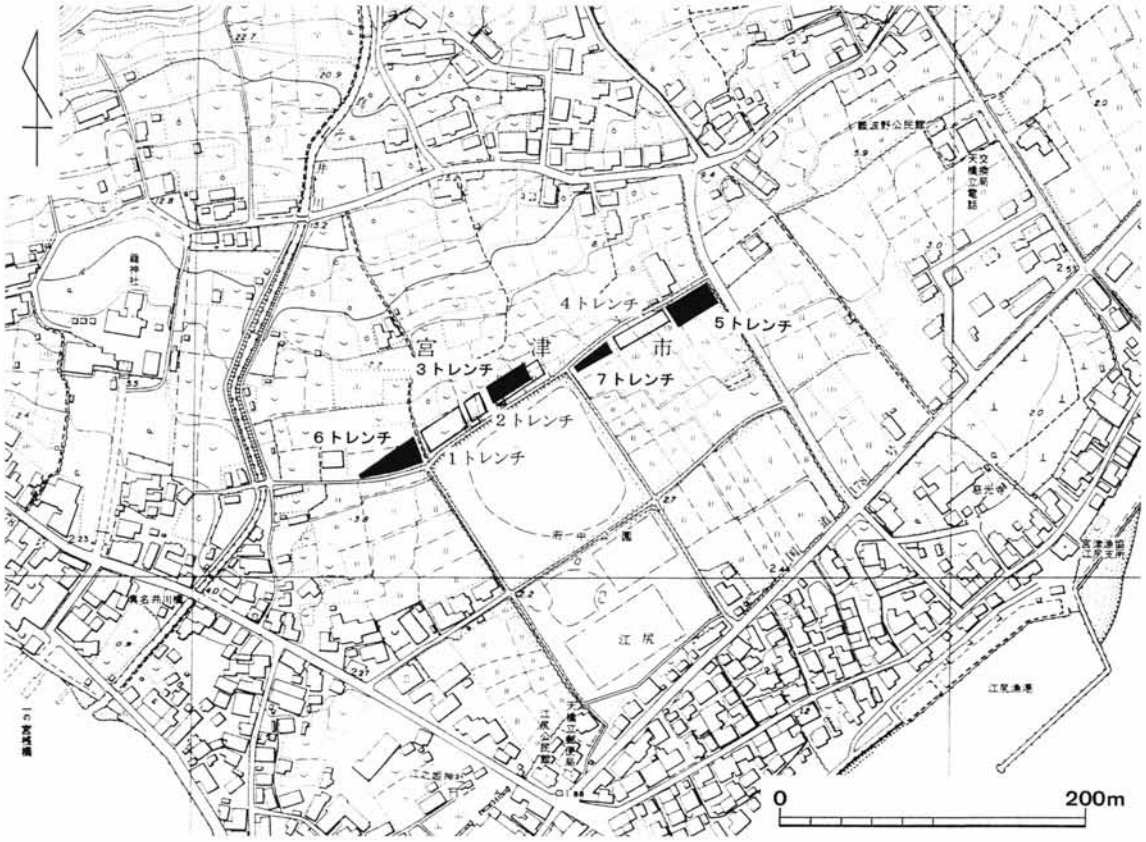
現地調査は、当調査研究センター調査第２課課長補佐兼調査第２係長奥村清一郎、調査第２係主任調査員松井忠春、同主任調査員田代弘、同専門調査員石尾政信、同調査員村田和弘が担当し、平成17年10月６日～平成18年３月27日までの間に実施した。調査面積は、1,300m²である。

調査にあたっては、地元自治会のほか宮津市教育委員会、京都府教育委員会をはじとする関係機関のご指導、ご協力があった。また、現地調査から整理・報告作業を進める過程では地元宮津市在住の方々などの参加・協力があった。記して感謝したい。(注1)

なお、発掘調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

２．位置と環境

大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野遺跡・難波野条理制遺跡は、日本三景のひとつ天橋立の北側、



第２図　調査トレンチ配置図(宮津市都市計画図1/2,500に加筆・縮小)

成相山系と阿蘇海・宮津湾に挟まれた狭い緩斜面上に立地している(第1図)。

大垣遺跡は直径約300mの範囲に広がる奈良時代から中世の遺跡であり、大垣遺跡の中でも特に丹後一の宮である籠神社を中心に展開する遺跡を一の宮遺跡と呼称している。この籠神社の周辺では弥生時代中期の遺物も採集されており、遺跡の成立は弥生時代中期まで大きく遡る可能性もある。なお、平成15年度に当調査研究センターが実施した同遺跡の調査では、16世紀の土器とともに、現国道178号線とほぼ平行した方位を示す溝跡や柵列などを検出している。また、平成14・16年度の同地点での調査では、平安時代から中世の漆椀や各種の木製品、輸入陶磁器をはじめとする大量の土器類も出土している。

難波野条里制遺跡は、府中から国道178号線を伊根方面に進んだ丘陵側、江尻集落の西北方向に広がる遺跡である。一帯の道路や水田畦畔を観察するとおよそ一町約109m四方の区画が連続して認められ、古代律令制に伴って施工された条里制地割が踏襲されたものではないかと指摘されてきた。平成14・15年度に当調査研究センターが実施した周辺の試掘調査や平成16年度の発掘調査では、条里制に関連する溝などの遺構は確認できなかったが、奈良時代から中世の溝、土坑、井戸、掘立柱建物跡や柱穴群を検出するとともに、古墳時代～中世の遺物が大量に出土した。

阿蘇海沿岸の宮津市府中地区を中心とする国分から江尻・難波野にかけての一帯は、成相山系から幾筋もの小河川が阿蘇海・宮津湾に注ぎ込み、扇状地が連なった平地部を形成している。この平地部も、府中地区西南部の国分から中野までは、現在の国道178号線付近の海岸段丘状を呈するラインを境に、海に面した低地部と山麓の高台部とに大きく分かれる。そのうち、段丘面から背後に迫る丘陵裾部までの高台部は、大雨時に小河川沿いに発生する土石流などの危険はあるものの、比較的安定した地勢をなし、縄文時代から中世にいたる各時代の遺跡が濃密に分布している。

この付近が「府中」と呼ばれるのは、この地に丹後国府が置かれて以後とされるが、丹後国府の所在地は諸説あるものの、いまだ明らかでない。その候補地の一つとして、また丹後国分尼寺の推定地として中野遺跡をあげる説もある。中野遺跡からは、奈良時代から室町時代にかけての遺構・遺物が検出されており、中でも輸入陶磁器の出土点数の多さは阿蘇海周辺の遺跡では群を抜いていることが注目される。しかし、現状ではこの遺跡を国府跡あるいは国分尼寺とするには決め手に欠けており、今後の調査が期待される。

丹後国分寺跡は、宮津市字国分の地に礎石・基壇などが残されているが、この遺構群は創建当時のものではなく、『丹後国分寺再興縁起』に記された再建時(1226～1334)のものであり、創建当時の遺構については確認されていない。

天橋立の東側の付け根、今回の調査地の西方約200mの成相山麓には、丹後一の宮である籠神社が所在する。籠神社には国宝の海部氏系図のほか、多数の重要文化財が伝えられている。境内から出土した経塚出土品もその一つで、文治4(1188)年采女秋重などが法華経を納めたことを記す銘文を有す銅製経筒や銅鏡2面などがある。なお、今回の調査地付近では、籠神社経塚のほか真名井神社経塚が近隣に所在する。

成相山中腹の標高330m付近には、慶雲４(704)年開山との寺伝をもつ山岳寺院の成相寺があり、現在も古本堂と呼ばれる地区を中心に堂院の跡と思われる平坦面が多数みられる。それより南方の府中の裏山には、阿弥陀ヶ峰城跡、今熊野城跡などの中世山城も所在する。

こうした遺跡以外に注目されるのが、雪舟等楊(1420～1506？)が描いた『天橋立図』がある。天橋立を中心に当時の府中の様子が詳しく描かれている。この絵画資料に記されている地名は、現在も小字名にみることができ、中世の府中の様子を復原するうえで、大きな手がかりを与えてくれる。

３．調査経過

前述のとおり、本道路新設改良事業に伴う調査は、平成14年度から継続実施している。事業予定地において、環境整備が整った地点から、随時、必要に応じて試掘調査もしくは発掘調査を実施してきた。

平成16年度の調査では、大垣遺跡・一の宮遺跡で１か所、難波野条里制遺跡・難波野遺跡で４か所(第１～４トレンチ)の計５か所の調査区で調査を実施した。このうち難波野条里制遺跡内の第３トレンチにおいて、調査最終段階で、古墳時代～中世の遺構面の下層に弥生時代中期の遺構面の存在が確認され、平面「Ｌ」字状にのびる貼石遺構が検出された。本遺構の検出状況は、近年、京都府北部で類例が増加しつつある弥生時代中期の方形貼石墓の一部である可能性を示唆するものであった。このため、急遽、関係機関と協議を行った結果、改めて平成17年度調査時に第３トレンチを一部拡張し、本遺構の調査を行うこととなった。

平成17年度の調査は、難波野条里制遺跡、難波野遺跡の範囲内に４か所の調査区(第３・５～７トレンチ)を設け調査を行った。平成17年10月６日から、まず、前年度から継続して調査を実施することとなった第３トレンチの再掘削並びに一部拡張するための表土掘削に着手した。その後、第５～７トレンチを順次掘削し、遺物包含層の掘削、遺構精査、遺構掘削、記録作成作業などを進め、最終的に平成18年３月27日には各調査トレンチの埋め戻し作業を完了し、すべての現地作業を終了した。なお、この間、平成18年３月10日には現地説明会を開催し、130名をこえる多くの方々の参加を得た。

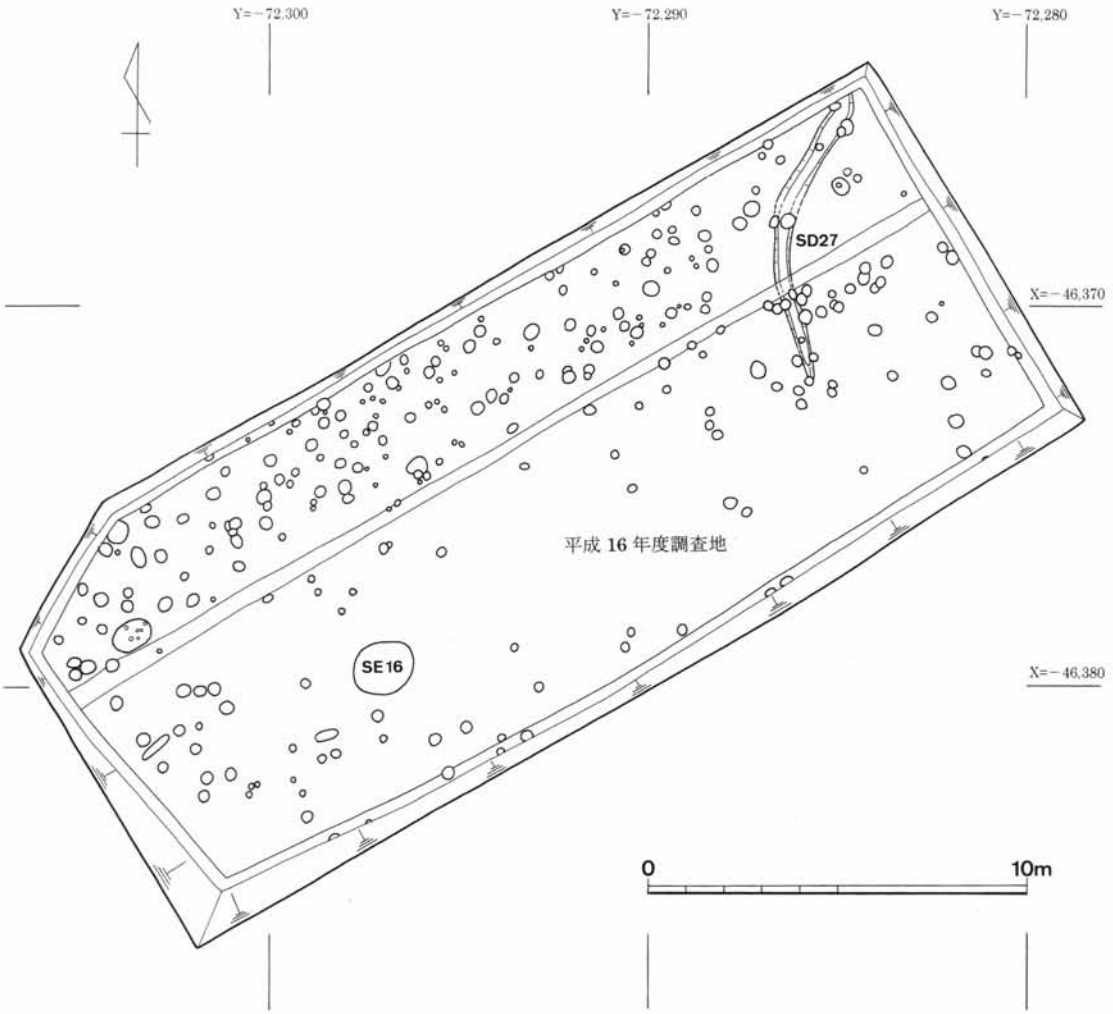
４．調査の概要

(1)第３トレンチ

1）調査経過

第３トレンチは、昨年度の調査でその一部を検出した方形貼石墓の貼石範囲を中心として、周溝が想定される範囲を含めてトレンチを設定した。

上層遺構として、茶褐色(西部では暗い茶褐色に変わる)、褐色砂質土などを掘り込んだ柱穴群・小土坑を検出した。柱穴の中には柱根がわずかに残存するものもあるが、建物跡に復原されるものはほとんどない。柱穴の中には、埋土中から土器が出土したものがあり、その多くは出土



第３図　第３トレンチ上層遺構平面図

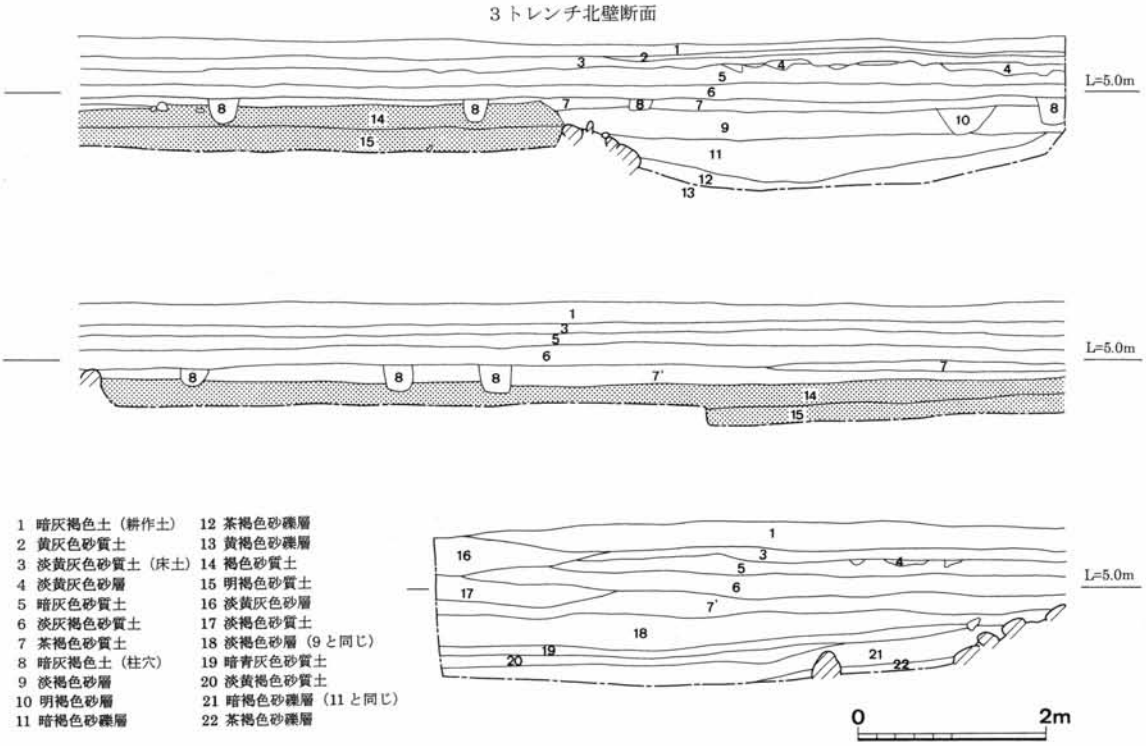
土器から平安時代後期と考えられる。しかし、柱穴の一部には古墳時代の土器が出土したものがある。柱穴群には古墳時代の建物も存在したと考えられるが、埋土がほぼ同じで識別が困難である(第３図)。

柱穴群の調査終了後、褐色砂質土面で下層遺構の貼石墓ＳＸ22の埋葬施設の検出に努めたが、埋葬施設は検出できなかった。その過程で貼石墓西部の墳丘上面から、竪穴式住居跡ＳＨ260を１基を検出した(第６図)。

方形貼石墓ＳＸ22の東側周溝は、上面を淡褐色砂層が厚く覆い、その下に暗褐色砂礫層・茶褐色砂礫層が堆積していた。南側周溝では、淡褐色・暗褐色・褐色砂質土の下層に暗褐色砂礫層が確認できた(第４図)。

東周溝の茶褐色砂層は遺物を含まず、暗褐色砂礫層から古墳時代の土器と弥生土器が出土した。南周溝の暗褐色砂礫層からも古墳時代の土器と弥生土器が出土した。南東隅や南西部では周溝を明確に確認することができなかった。また、下層の貼石墓の東側周溝の淡褐色砂層を抉り込んだ、砂堆積の自然流路跡と考えられる溝ＳＤ27が検出されたが、遺物は出土していない。

2) 上層(中世以前)の出土遺物(第５図)



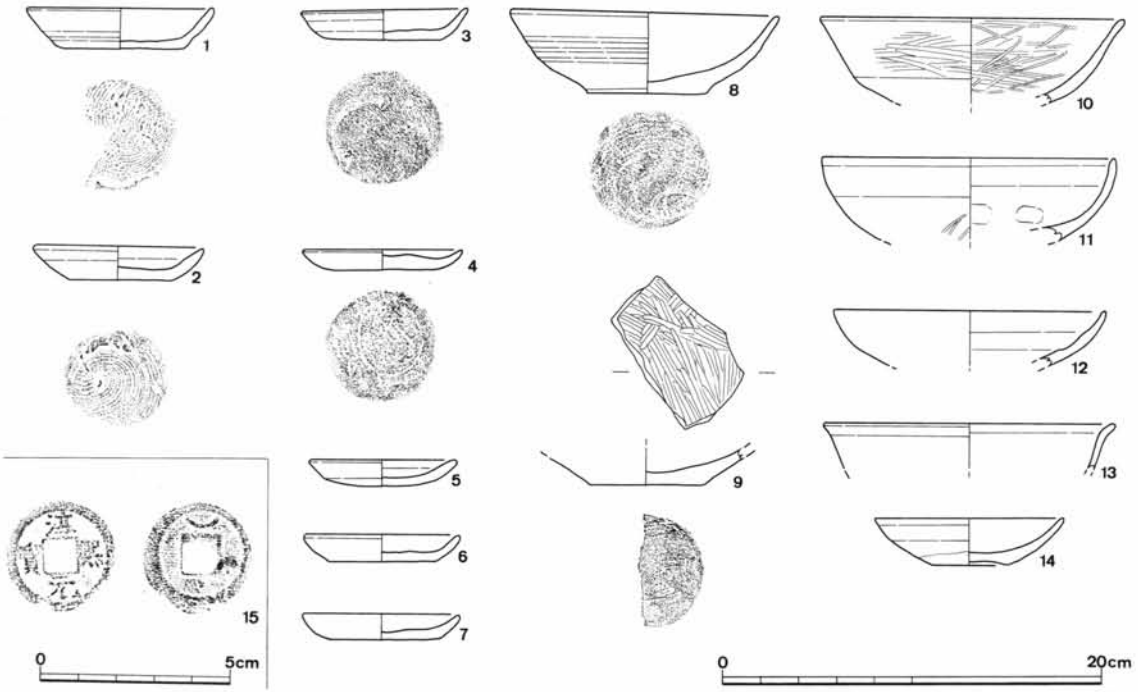
第４図　第３トレンチ北壁断面図

第３トレンチの若干の砂礫を含む淡灰褐色砂質土などから古墳時代～中世の遺物が出土した。出土遺物の多くは平安時代後期～鎌倉時代にかけてのものである。以下にその概要を記述する。

１は柱穴から出土した底部糸切りの土師器皿である。口径9.8cm、器高2.1cmを測り、胎土が良好で淡褐色を呈す。２は包含層から出土した底部糸切りの土師器皿である。３・４は同じ柱穴から出土した底部糸切りの土師器皿である。３は口径8.7cm、器高1.7cmを測り、胎土が良好で淡茶褐色を呈す。５～７も柱穴から出土した全体をヨコナデした土師器皿である。８・９は包含層から出土した底部糸切りの黒色土器椀である。８は口径13.9cm、器高4.3cmを測り、胎土が良好で淡橙茶褐色を呈す。10は柱穴から出土した黒色土器である。口径16cmを測る。11は包含層から出土した土師器杯で、口径15.4cmを測る。12は柱穴から出土した土師器杯で、口径14.4cmを測る。13は包含層から出土した青磁椀で、口径15cmを測り、淡緑灰色の釉薬がかかる。14は包含層から出土した青磁皿で、口径9.9cm、器高2.5cmを測り、淡緑灰色の釉薬がかかる。15は包含層から出土した渡来銭の淳熙元寳(南宋1190年)で裏面に「月・星」がある。

3）下層の検出遺構

竪穴式住居跡ＳＨ26(第７図)　第３トレンチ北部、方形貼石墓の墳丘上で検出した方形の竪穴式住居跡である。隅丸方形の北辺と東辺および西辺の一部を検出した。北辺の長さ約4.2ｍを測り、床面は検出面から深さ約20cmを測る。床面では、各辺に沿って幅約30cm、深さ10cm前後の周壁溝がめぐる。主柱穴と推定される柱穴２か所を検出した。柱穴は30～40cmの楕円形で、深さ20～30cmを測る。炉跡は検出していないが、中央付近で焼土層を確認した。埋め土から土師器高杯・甕などが出土している。



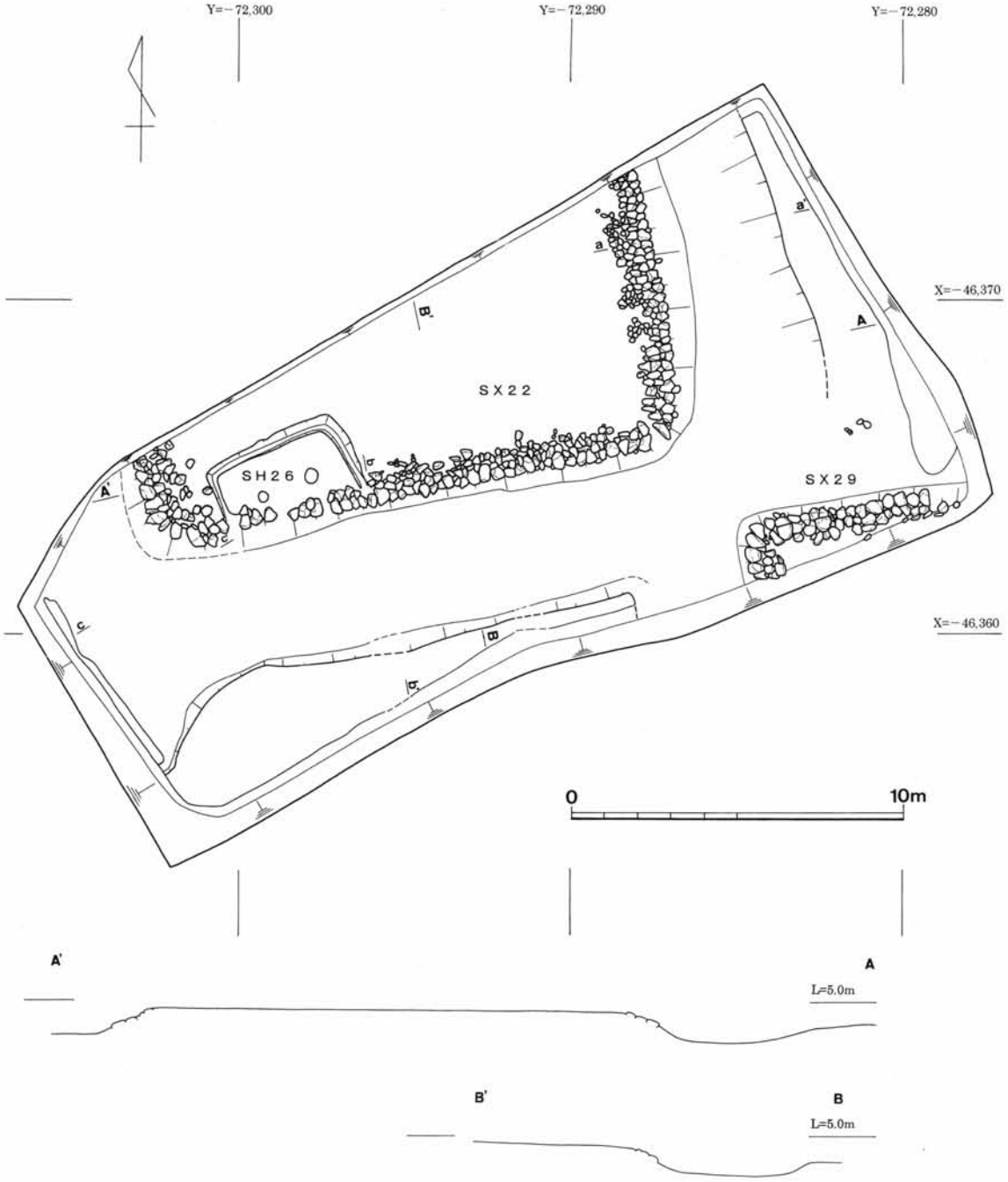
第５図　第３トレンチ上層出土遺物実測図

方形貼石墓ＳＸ22(第８図)　第３トレンチの北側で確認した。墳丘斜面に石を貼り付けた墳墓である。墳形は方形または長方形と考えられるが、南辺と東辺の一部、および南西隅を確認したにとどまり大半が調査地外に広がる。このため、全体の規模は確認できていない。

一辺の規模を確認した南辺の貼石基底部の長さは約16.2mを測り、南半分を確認した東辺の貼石基底部の長さ約7.8m、南端部のみ確認した西辺での長さ約2.8mを検出した。貼石の外側には周溝がめぐらされており、周溝の規模は東辺で上面幅約4.5m、南辺で上面幅約５ｍを測る。西辺は不明である。周溝内には貼石が転落したと考えられる石材が点在していた。墳丘の高さは南辺で貼石基底部から約0.6m残存しており、東辺の良く残る部分で周溝底部からは約１ｍを測る。

墳丘斜面の貼石は、竪穴式住居跡ＳＨ26により壊された部分を除き、基底部からほぼ３段目付近まで遺存している。東辺・西辺では、貼石が３段目以上残る部分もある。貼石は長軸を縦(天地)方向にそろえるように設置している。南東隅には縦長の石が２石設置されていたと推定されるが、ひとつが抜け落ちていた。南西隅は遺存状況が悪く状況を確認できなかった。貼石は基底部がやや湾曲する部分、ほぼ直線をなす部分があり施工単位の違いが考えられる。貼石の傾斜角度は30°前後である。貼石に使用されている石は、いずれもやや磨滅した花崗岩で、調査地周辺から採取されたものと考えられる。

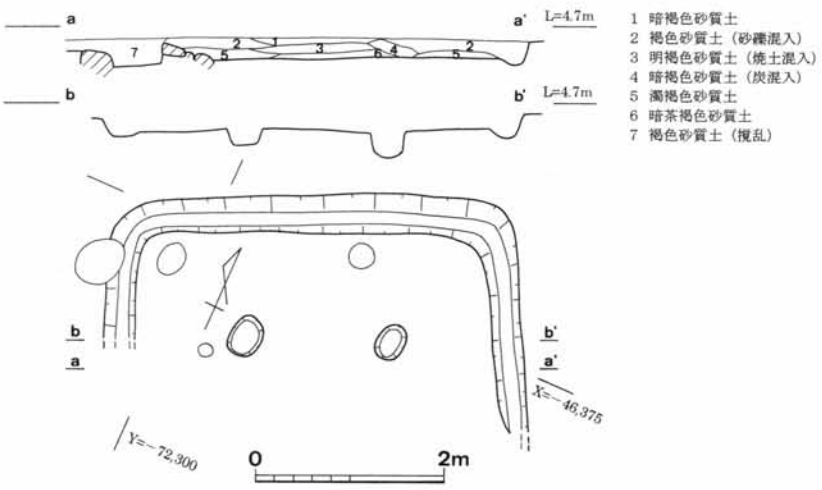
墳丘斜面の遺存状況は良好であったが、墳丘上の平坦部に設けられたと考えられる埋葬施設は、検出できなかった。これは埋葬施設が後世に削られたか、あるいは調査地外に存在するものと考えられる。墳丘上面で覆土の可能性を考慮して墳丘上の断ち割りを行ったが、埋葬施設は確認できなかった。墳丘断ち割りの土層観察から、方形貼石墓ＳＸ22は沖積地の砂礫層の上に、砂質土を置いて墳丘を造っていることが判明した(第９図)。



第６図　第３トレンチ下層遺構平面図

貼石墓に関連する遺物は、東側周溝・西側周溝から弥生土器片が古墳時代の土器とともに出土しているに過ぎない。

方形貼石墓ＳＸ29(第10図)　第３トレンチの南東隅付近で、上から見て「Ｌ」字状に並ぶ石列を確認した。その状況から方形貼石墓ＳＸ22とは別の方形貼石墓と判断した。この方形貼石墓ＳＸ29は北辺の一部で長さ約６ｍと西辺の一部で長さ約1.5ｍを検出したことになる。貼石の外周には周溝がめぐっていたと考えられるが、今回の調査では検出できなかった。墳丘の高さは貼石基底部から0.3～0.4ｍを測る。墳丘斜面の貼石は２ないし３段目まで遺存している。



第７図　竪穴式住居跡ＳＨ27実測図

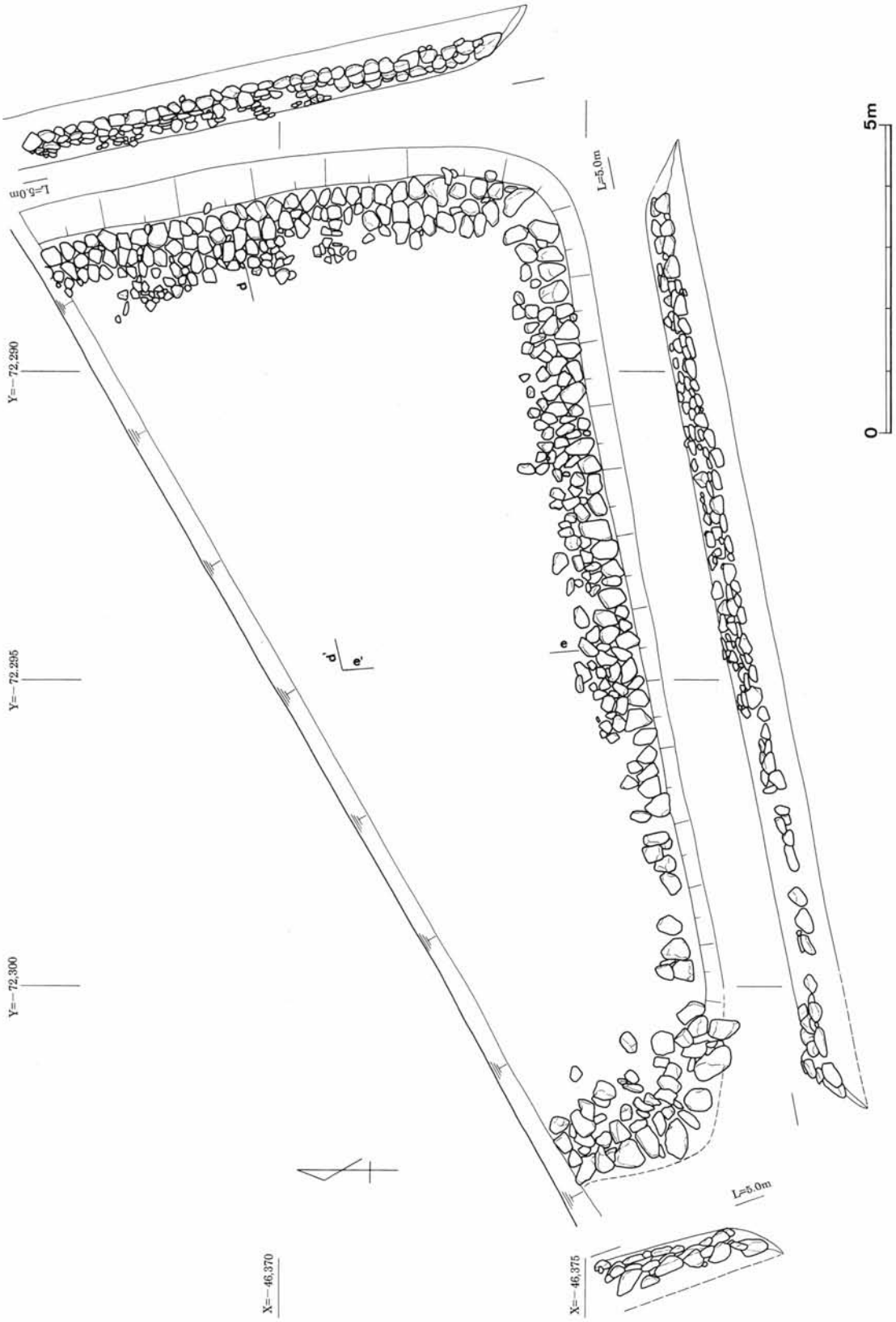
墳丘斜面の貼石に使用された石材は、方形貼石墓ＳＸ22に比べ扁平で磨滅が進んだものを使用している。海浜部から採取したものと考えられる。北側での貼石の傾斜角度は20°前後で、貼石墓ＳＸ22に比べてかなりゆるやかである。確認した範囲が限られているため、全体の規模など詳細は不明である。

4）下層の出土遺物

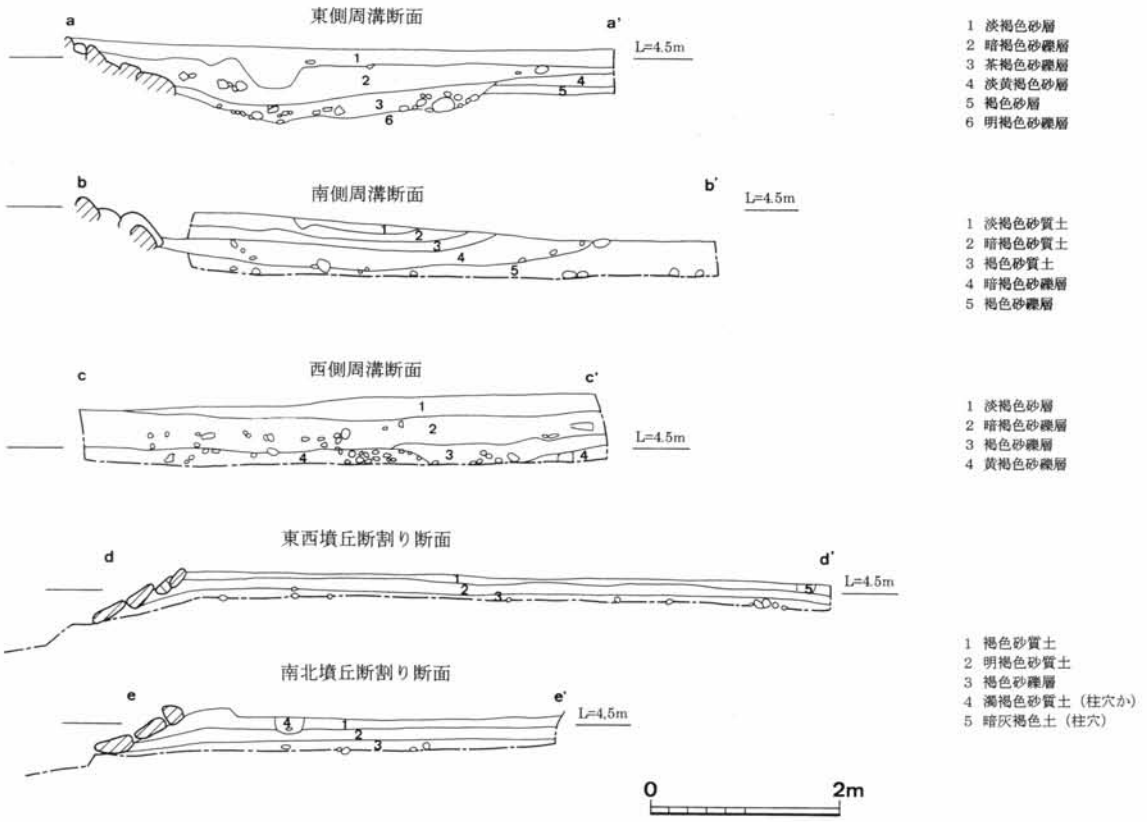
竪穴式住居跡ＳＨ26出土土器（第11図）　住居跡の埋土から土師器高杯・甕などが出土しているが須恵器は出土していない。１は内湾ぎみに立ち上がる土師器高杯の杯部で口径15.9cmを測る。２は土師器高杯の脚部である。３は土師器甕の口縁部で口径21cmを測る。口縁部をヨコナデして口頸部が強く「く」字状に外反する。４も土師器甕の口縁部で口径23.6cmを測る。口縁部をヨコナデして口頸部が強く「く」字状に外反し、体部内面をヘラ削りする。５も土師器甕の口縁部で口径18.8cmを測る。高杯の杯部の形状、甕の頸から口縁部にかけての形状から６世紀末頃のものと考えられる。

その他の遺物（第12図）　方形貼石墓ＳＸ22の墳丘上面を精査中、周溝部分の掘削中で暗褐色砂礫層などの堆積層から古墳～弥生時代の遺物が出土している。また、墳丘上の柱穴から出土した古墳時代の土器も合わせて記述する。

１は柱穴から出土した土師器高杯である。口径16.7cmを測る。２も柱穴から出土した土師器高杯の脚部である。３・４も土師器高杯である。５は柱穴から出土した土師器小型壺である。口径12.2cmを測る。６は須恵器杯蓋である。口径14cmを測る。胎土は精良で焼成も良く青灰色を呈す。７は須恵器杯身である。口径12.5cmを測る。８は須恵器鉢の口縁部と推測される。９は須恵器壺の口縁部と推定される。10は土師器小型丸底壺である。11は口縁部下半に稜をもつ土師器高杯である。12・13は土師器高杯の脚部である。14・15も土師器高杯である。16は椀型鍛冶滓である。17は土師器甕の口縁部である。口径17.7cmを測る。胎土に１mm前後の白・灰色の小石を多く含み、焼成が良く淡褐色を呈す。18も土師器甕の口縁部である。口径17.5cmを測る。17とよく似た胎土で、焼成が良く淡茶褐色を呈す。19は口縁部外面に擬凹線文を施した弥生時代後期の甕である。口径17.4cmを測る。胎土に１mm前後の白・灰色の小石を含み、焼成が良く黄褐色を呈す。20は口縁端部をわずかにつまみ上げた外面に凹線を施した弥生土器広口壺の口縁部である。口径21cmを測る。胎土に0.5～2.0mmの白・灰色の小石を多く含み、焼成が良好で淡褐色を呈す。21は口縁端

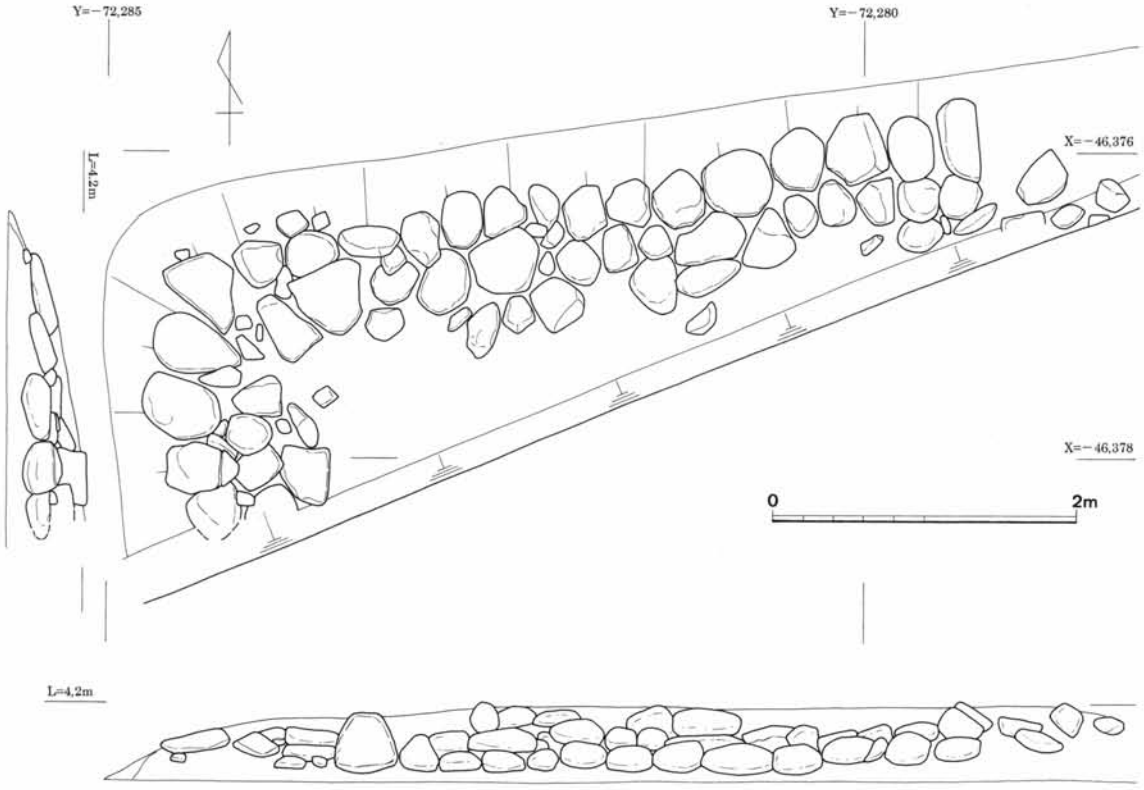


第８図　方形貼石墓ＳＸ22墳丘実測図（平面図・立面図）



第９図　方形貼石墓ＳＸ22周溝断面図・墳丘断ち割り断面図

部をわずかに肥厚させて外面に刻み目を施した弥生土器広口壺の口縁部である。口径16.6cmを測る。22も口縁端部をわずかに肥厚させて外面に刻み目を施した弥生土器広口壺の口縁部である。口径18.8cmを測る。22は胎土に0.5～2.0mmの白・灰色の小石を多く含み、焼成が良好で淡黄褐色を呈す。23は直立する口縁部の外面に凹線を施した弥生土器壺である。口径8.7cmを測る。胎土に0.5～2.0mmの白・灰色の小石を多く含み、焼成が良好で淡茶褐色を呈す。24は頸部に貼り付け凸帯をもつ弥生土器の壺と推定される。胎土に0.5～2.0mmの白灰・灰色の小石を含み、焼成が良好で淡黄褐色を呈す。25は弥生土器壺の底部である。底部径8cmを測る。胎土に0.5～3.0mmの白灰・灰色の小石を含み、焼成がやや甘く淡赤褐色～黄褐色を呈す。26も弥生土器壺の底部である。底部径7.4cmを測る。内面に工具による下から上に強いナデ痕がある。胎土に１mm前後の白灰・灰色の小石を多く含み、焼成が良く淡赤褐色～淡褐色を呈す。27も弥生土器壺の底部である。底部径6.2cmを測る。胎土に0.5～3.0mmの白灰・灰色の小石をやや多く含み、焼成が良好で暗茶褐色を呈す。28は弥生土器の底部である。胎土に0.5～2.0mmの白灰・灰色の小石を多く含み、焼成が良好で淡赤褐色を呈す。29は弥生土器甕の底部である。底部径８cmを測る。内面に工具による下から上にケズリ痕がある。胎土に1.0～0.5mmの白灰・灰色の小石を多く含み、焼成が良好で明赤褐色を呈す。30は外面にタタキ痕が残る弥生時代後期の甕の底部である。底部径3.7cmを測る。胎土に0.5～2.0mmの白灰・灰色の小石を含み、焼成が良好で内面が黒灰色、外面が淡茶褐色を呈す。31も弥生土器の甕の底部である。底部径8cmを測る。胎土に0.5～2.0mmの白灰・灰色の小石を含み、焼成が良好で淡黄褐色を呈す。



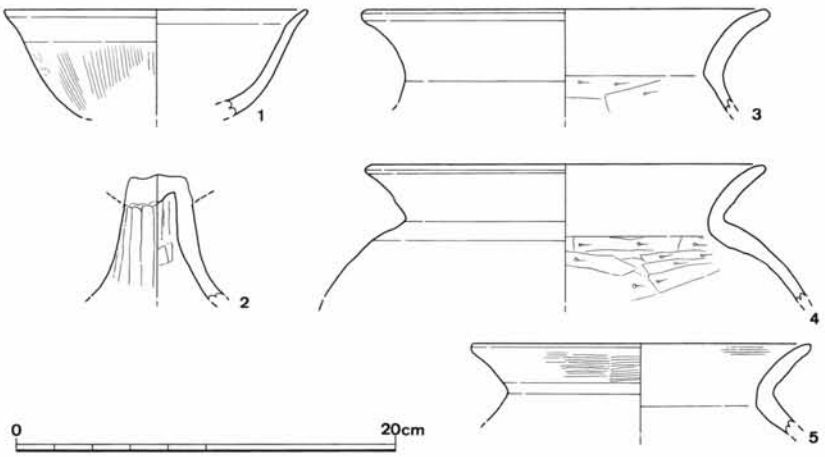
第10図　方形貼石墓ＳＸ29実測図(平面図・立面図)

このうち方形貼石墓ＳＸ22の周溝、暗褐色砂礫層などから出土した弥生土器は、20～25・28・31である。19・26・27・29・30はＳＸ22の墳丘上面から掘削中に出土した。前者は、弥生時代中期後半に相当するものである。

(2)第５トレンチ

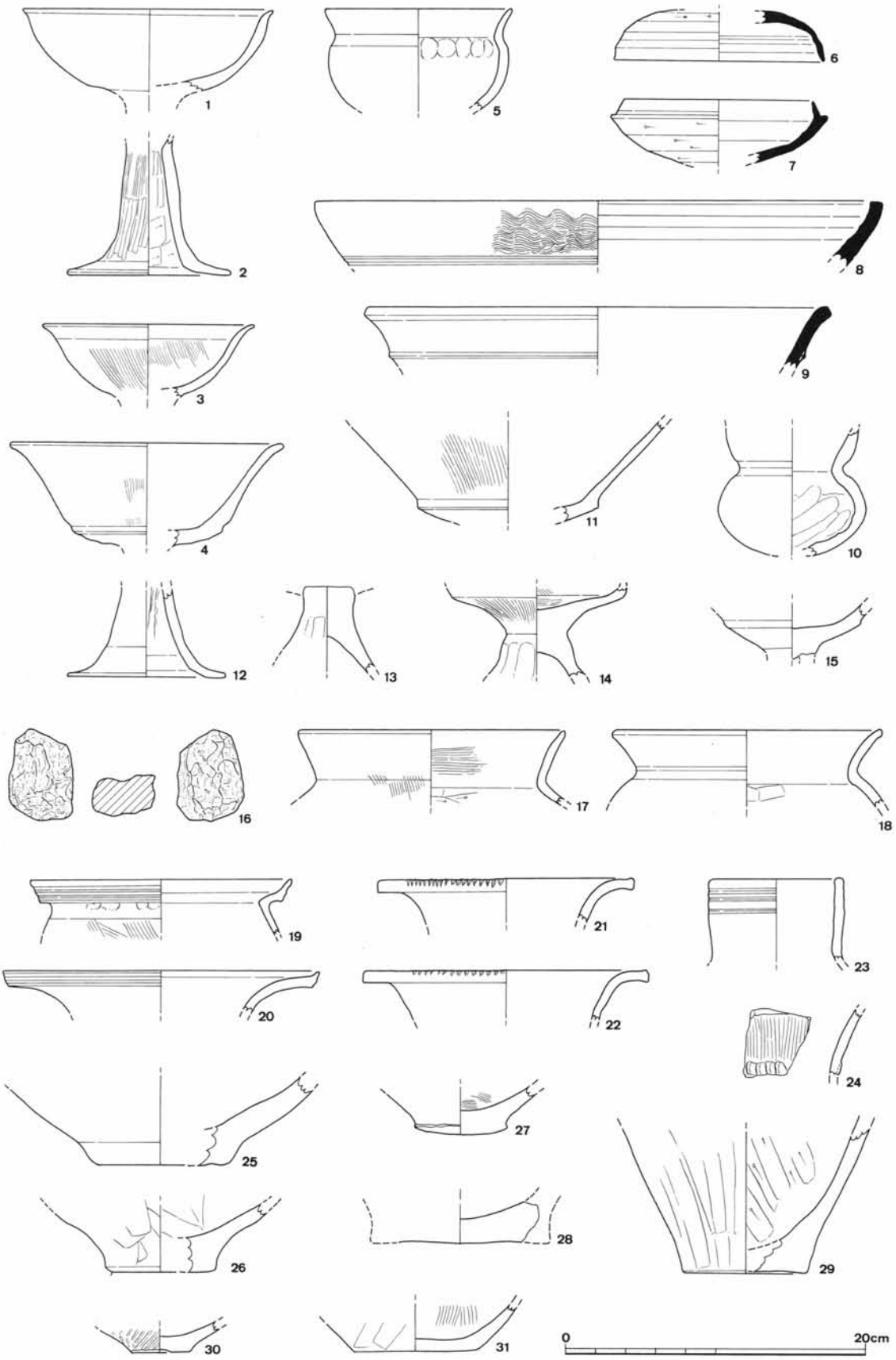
1）調査経過

昨年度調査した第４トレンチの東側に設定した15m×30mのトレンチである(第13図)。第14図のように東壁断面では、標高3.5m以下に濁暗灰色・青灰褐色砂質土、灰色・暗灰色砂層、灰色砂礫層が堆積している。堆積状況は一様でなく、トレンチ西側で砂礫層が見られない場所もあるが、沖積地を示すこれらの砂層や砂礫層の堆積は、およそ北西から南東方向に傾斜している。なお、砂層や砂礫層上面には、弥生時代の遺物が包含されていた。

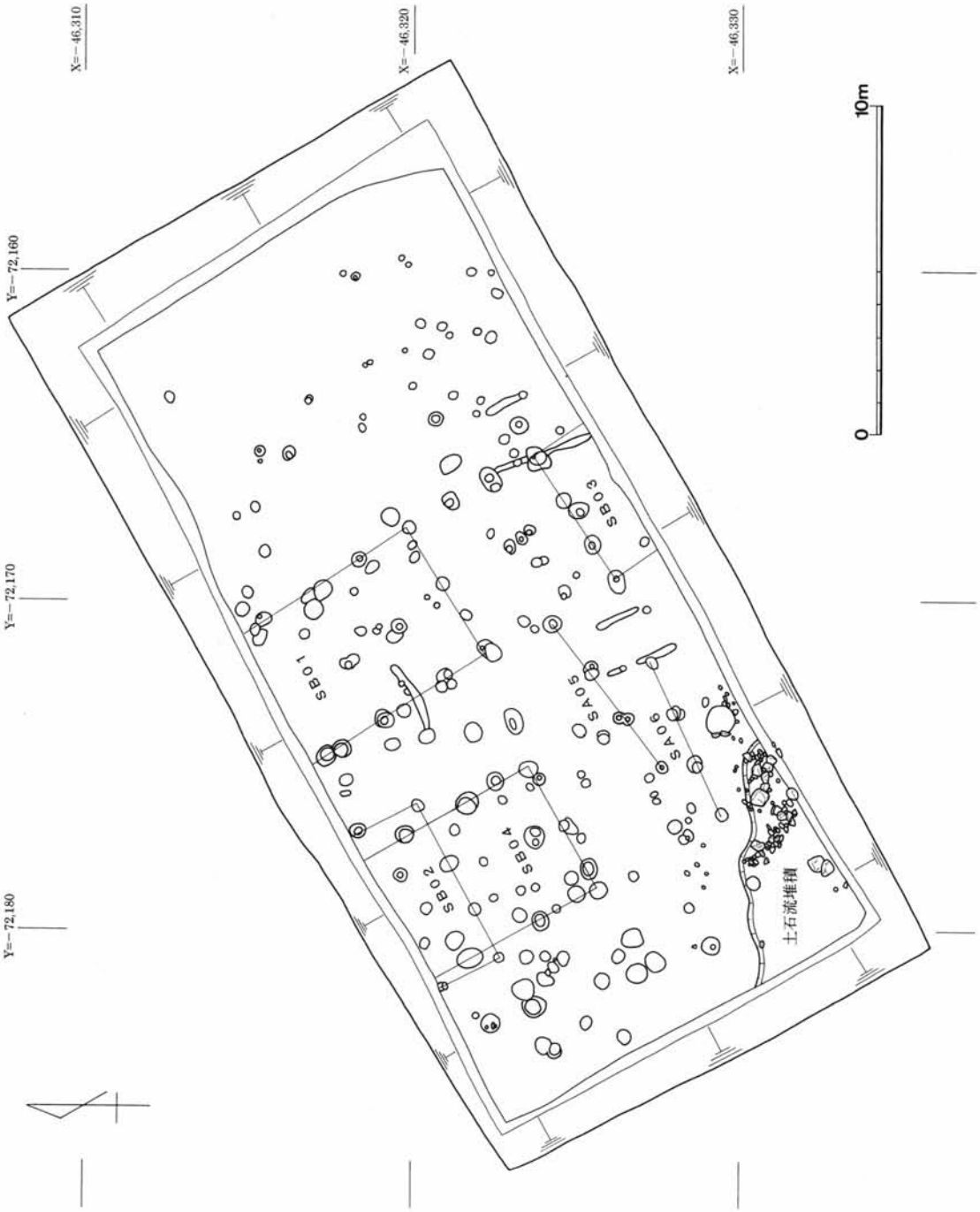


第11図　竪穴式住居跡ＳＨ27出土遺物実測図

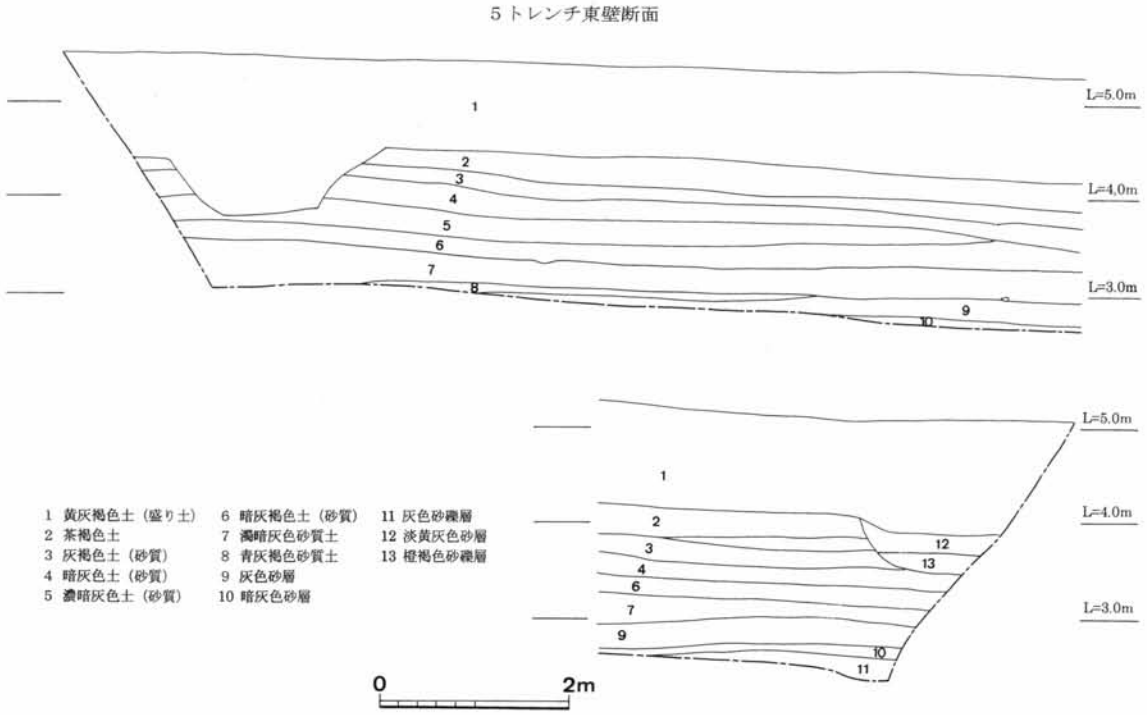
トレンチのほぼ全域で、砂層・砂礫層を掘り込んだ多数の柱穴や浅い



第12図　第３トレンチ下層出土遺物



第13図　第５トレンチ平面図



第14図　第５トレンチ土層断面図

溝跡を検出した。柱穴群の中には、掘立柱建物跡、柵列と考えられるものがある。柱穴の埋土中から若干の土師器片が出土しているが、時期のわかる遺物はみられない。柱穴群の時期は、柱穴が掘り込まれた砂礫層から平安時代前期の土器が出土していること、砂礫層上面から12世紀頃の白磁など少量の土器が出土したことから平安時代後期と考えている。

トレンチ西南部では40cm以上の礫を含む土石流跡を検出した。昨年度調査の第４トレンチで検出した土石流と同様のものである。

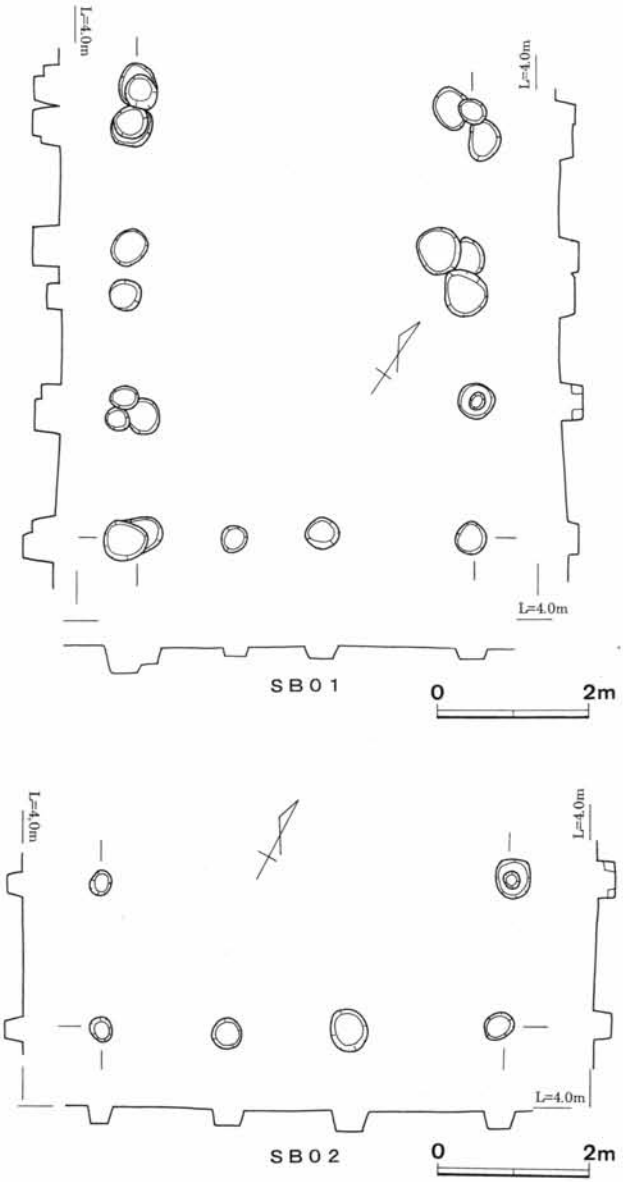
2）検出遺構

掘立柱建物跡ＳＢ01（第15図）　第５トレンチ北部で検出した掘立柱建物跡である。東西２間×南北３間以上の建物跡と推定される。円形掘形の柱穴で柱間隔は南北方向が南から約1.8・2.0・2.0m、東西方向が西から約1.6・2.0mを測る。方位は北から約32°西に振れている。柱掘形が重複する部分があるので、建て替えがあった可能性が高い。

掘立柱建物跡ＳＢ02（第15図）　第５トレンチ北部で検出した掘立柱建物跡である。東西３間×南北１間以上の建物跡と推定される。円形掘形の柱穴で柱間隔は南北方向が約2.0m、東西方向が西から約1.7・1.7・2.0mを測る。方位は北から約27°西に振れている。

掘立柱建物跡ＳＢ03（第17図）　第５トレンチ南部で検出した掘立柱建物跡である。東西３間で方位が掘立柱建物跡ＳＢ01とほぼ同じなので、南にのびる建物跡と推定している。円形掘形の柱穴で柱間隔は東西方向が西から約1.3・1.6・1.6mを測る。方位は北から約32°西に振れている。

掘立柱建物跡ＳＢ04（第16図）　第５トレンチ北部で掘立柱建物跡ＳＢ02と重なるように検出した掘立柱建物跡である。東西２間×南北２間以上の建物跡と推定される。円形掘形の柱穴で柱間



第15図　掘立柱建物跡ＳＢ01・02実測図

隔は東西・南北とも約2.1m等間を測る。方位は北から約30°西に振れている。

柵列ＳＡ05(第17図)　第５トレンチ南部で検出した柵列である。東西３間分を検出している。円形掘形の柱穴で柱間隔は約1.8m等間を測る。方位は北から約38°西に振れている。

柵列ＳＡ06(第17図)　柵列ＳＡ05の南で検出した柵列である。東西３間分を検出している。円形掘形の柱穴で柱間隔は約1.8m等間を測る。方位は北から約25°西に振れている。

3）出土遺物(第18図)

濁暗灰色砂質土・青灰褐色粘質土・灰色砂層・暗灰色砂層・灰色砂礫層などから、弥生時代～中世にかけての遺物が出土した。柱穴から出土した遺物には図化できるものがなかった。以下に概要を記述する。

１は須恵器杯Ａである。口径13.3cm、器高3.4cmを測る。胎土は精良で焼成も良く灰青色を呈す。２～７、13～15は高台の付く須恵器杯Ｂである。２のように高台が底部と口縁部の境より内側に付くものと、高台が境付近に付くものがある。２は８世紀前半、ほかは８世紀後半～９世紀前半のものである。15は須恵器杯Ｂの底部外面に墨書があり、墨書位置などから「井」の可能性が高い。16も須恵器底部外面に「中」と推測される墨書がみられる。８は扁平な宝珠つまみが付く須恵器蓋である。９～12も須恵器蓋である。17は須恵器高杯の脚部である。18は白磁の椀で、口径14cmを測る。19は須恵器壺の底部である。20は長さ5.4cm、最大径2.7cmを測る土錘である。21は須恵器甕の口頸部で、口径12cmを測る。胎土は精良で、焼成が強く表面の荒れた部分がみられ灰青色～黒青色を呈す。22は須恵器提瓶の体部と推測される。23は裏面に八角の脚が付くので須恵器円面硯とわかる。内面はほとんど使用されていない。24は楕円状の胴体に短い脚が付き、顔に刺突した目を表現した土馬である。25は口径15.8cmを測る土師器甕の口縁部である。26は口径10.9cmを測る土師器小型甕の口縁部である。27は口径19.6cmを測る土師器甕の口縁部である。28は土師器器台の脚部と推定される。29・30は土

師器甑または甕の把手である。31は弥生土器の底部である。32は内面を強くなで上げた弥生土器の底部である。底径７cmを測る。33は円錐状に削りだした先端に芯が付く独楽を表現した木製品である。上面に円形の窪みがある。長さ5.5cm、最大径4.45cmを測る。34は土錘に似た形状で、最大径3.9cm、長さ８cmを測り、中央に径1.3cmの穴を穿つ木製品である。浮きとして使用したものと考えられる。また、包含層から若干の布目瓦が出土した。

（石尾政信）

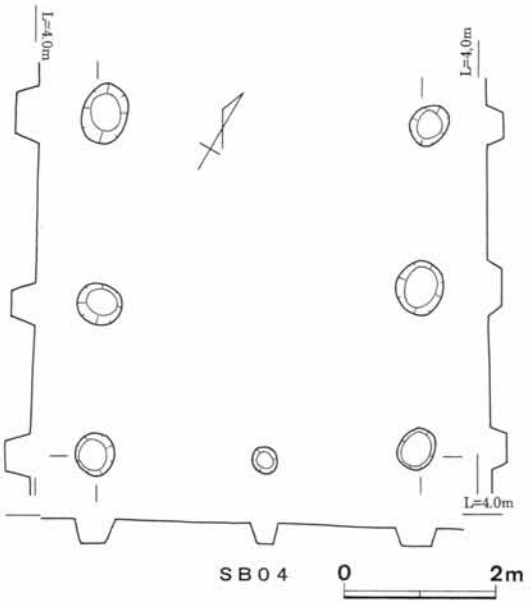
(3)第６トレンチ

1）調査経過

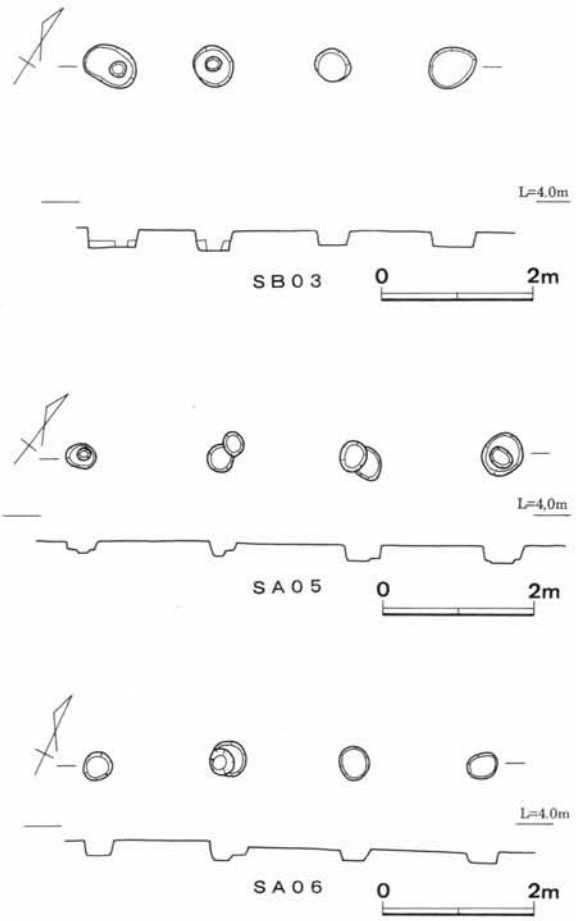
第６トレンチは、今回の難波野条里制遺跡の中の調査トレンチとしては最も西側に位置する（第２図）。調査トレンチは、調査範囲と既存の道路との関係から、調査トレンチの形状を三角形に設定し、調査を実施した。

調査トレンチを設定したのち、重機により遺構検出面までの掘削作業を行った。重機による遺構面までの掘削中、標高約3.8mの面で木材が直立しているところを数か所確認した。おそらく、柱穴に残る柱材であると判断し、この面までの掘削を慎重に行った。重機による掘削作業終了後は、人力による遺構検出作業ならびに遺構の掘削作業を実施した。

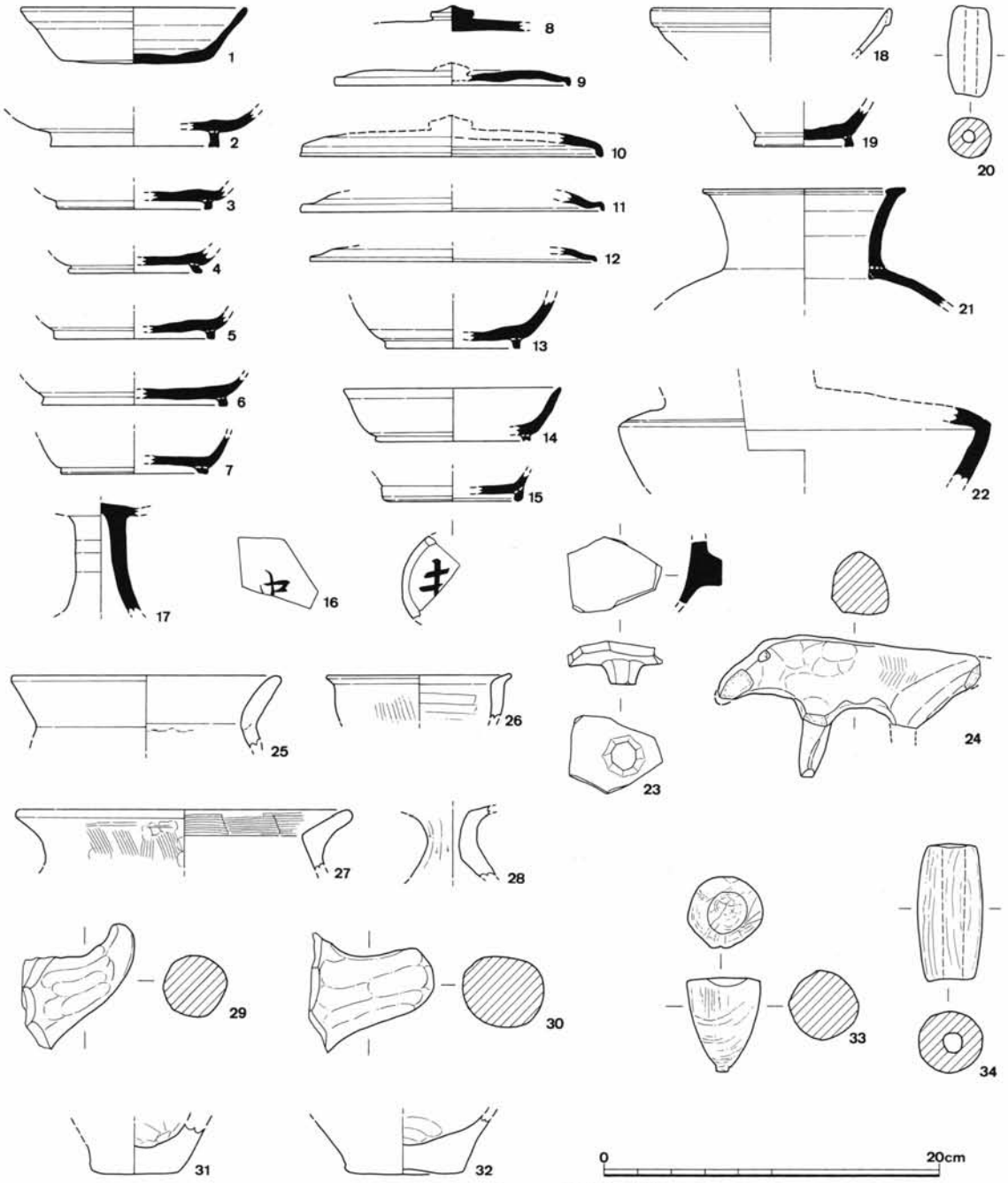
トレンチの基本的な層序は、現地表面から、淡茶灰色砂質土（耕土）、暗黄灰色砂質土層（床土）、暗茶灰色砂質土層、暗茶灰色粗砂層（遺物包含層）、暗灰色粘質土層（遺構検出面）である（第19図）。現地表面から遺構検出面までは約0.8～１mの深さである。遺構検出面の上層には、何層かの砂層があり、北側の丘陵からの流土と考えられる。遺構を検出した面は、軟弱な地層であり不安定な地盤であった。



第16図　掘立柱建物跡ＳＢ04実測図



第17図　掘立柱建物跡ＳＢ03、柵列ＳＡ05５・06実測図



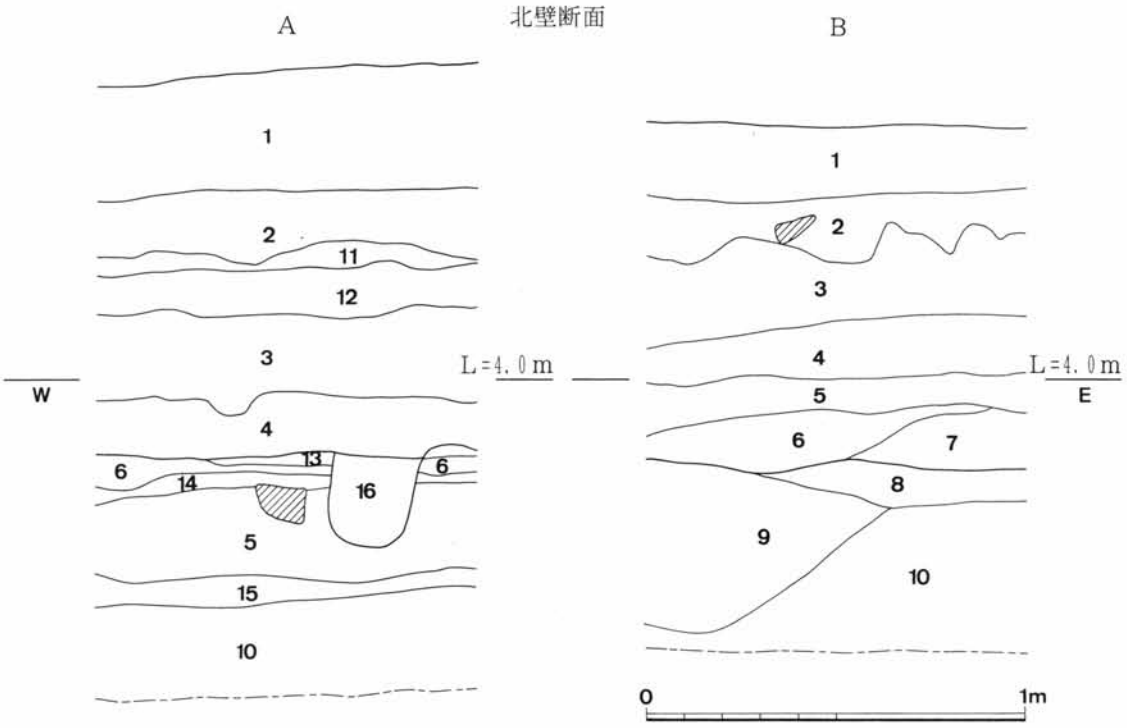
第18図　第５トレンチ出土遺物

2）検出遺構

第６トレンチで検出した遺構は、木製の柱が残る円形や方形の柱穴や溝、土坑、ピット（小穴）があり、そのほかに井戸やそれに伴う洗い場遺構などを検出した（第20図）。

井戸ＳＥ１（第21・22図）　トレンチの南東部で、一辺が約1.2mの隅丸方形を呈する掘形に方形の横板組みの木枠をもつ井戸を検出した。横板のほとんどは抜き取られ、一部しか残っていなかった。深さは、遺構検出面から約0.5mを測る。埋土中からは、平安時代後期～鎌倉時代初期の土師器や黒色土器（第26図20）などが出土した。

土坑ＳＫ２　南北約７m、東西約3.5mの不定形な土坑である。埋土上層からは、須恵器や土



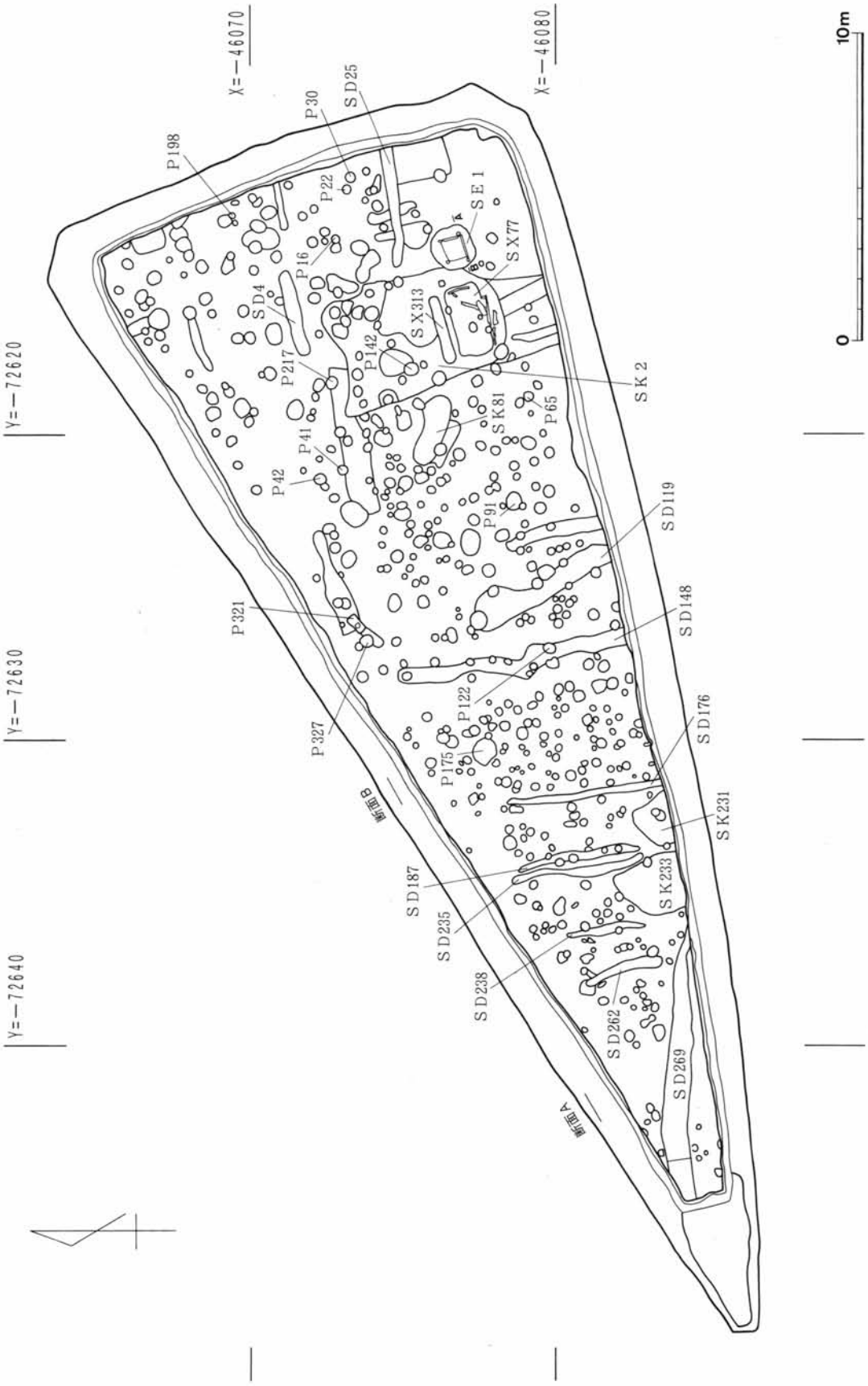
1．淡茶灰色砂質土　2．暗黄灰色砂質土　3．暗茶灰色砂質土
4．暗茶灰色粗砂　5．黒灰色粘質土　6．暗灰色粘質土
7．暗灰色粗砂　8．淡灰色粗砂　9．暗黄灰色粘質土(礫混じり)
10．淡灰色粘質土(細砂混じり)　11．淡茶灰色細砂　12．淡灰白色粗砂
13．淡灰白色細砂　14．暗黄灰色粗砂　15．暗灰色粗砂(礫混じり)
16．暗灰褐色粘質土

第19図　第６トレンチ北壁土層断面図Ａ・Ｂ

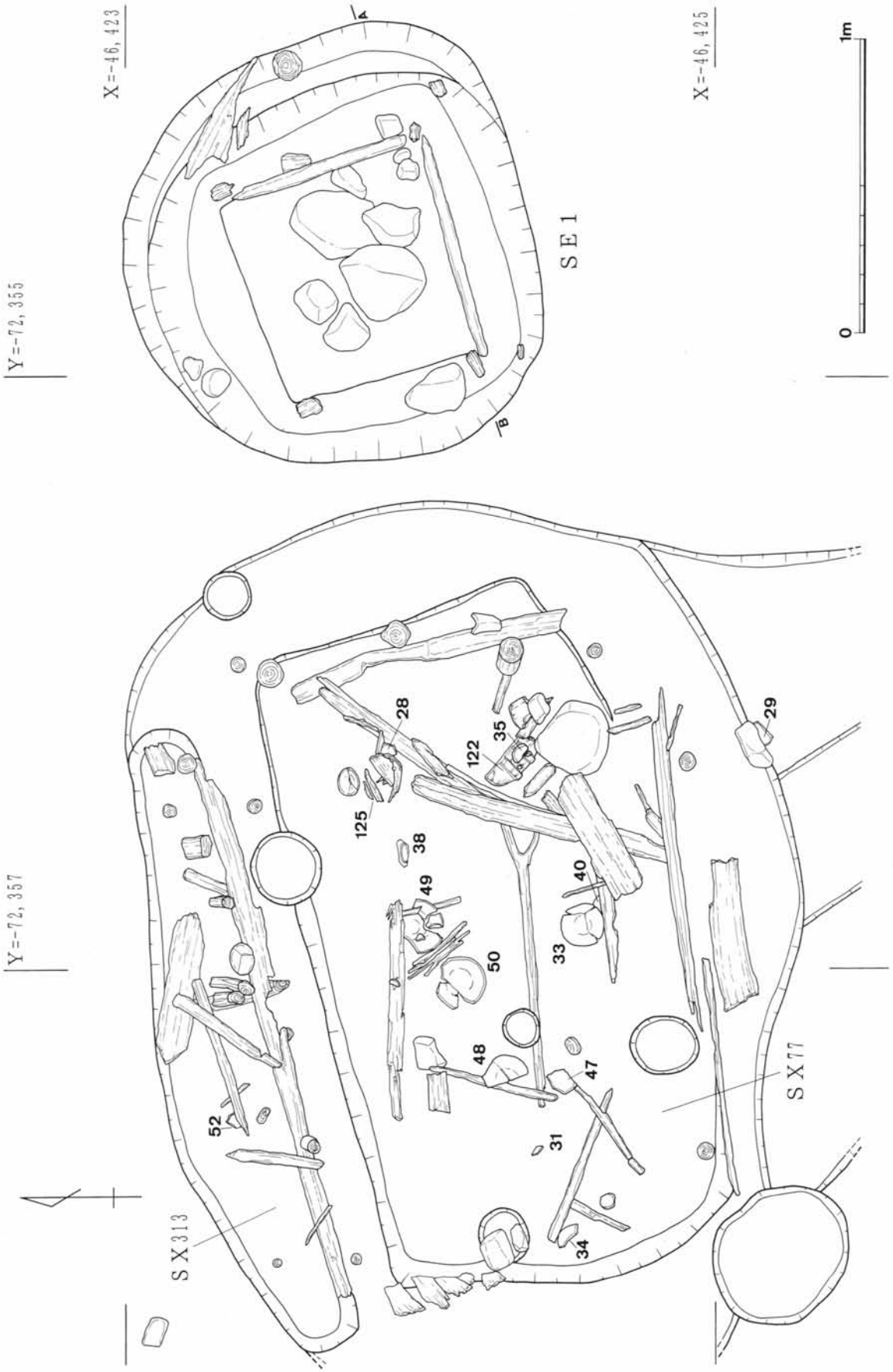
師器、黒色土器などの土器類のほかに、製塩土器の脚柱片(第26図27)や土錘(第30図101)、滑石製の石鍋片(第30図106)、石皿の破片(第31図114)などが出土した。土坑内の中央部から南側にかけて、土坑ＳＸ77とＳＸ313などを検出した。

洗い場遺構ＳＸ77(第21図)　土坑ＳＫ２内の南側において、南北約2.3m、東西約３ｍを測る楕円形の土坑を検出した。さらに、その土坑内に長辺約2.3m、短辺約1.3mの長方形の木枠が設けられた遺構を検出した。長方形の木枠内からは、多くの遺物が出土した。出土遺物としては、平安時代後期～鎌倉時代初期に属する須恵器や土師器、黒色土器、無釉陶器、古瀬戸、白磁などがある。そのほかには、中国製褐釉陶器の壺の破片(第26図28)や「古」または「十口」と書かれた墨書土器(第27図43)が出土した。木製品としては、曲物の桶(第32図125)、下駄(第32図122)などが出土した。

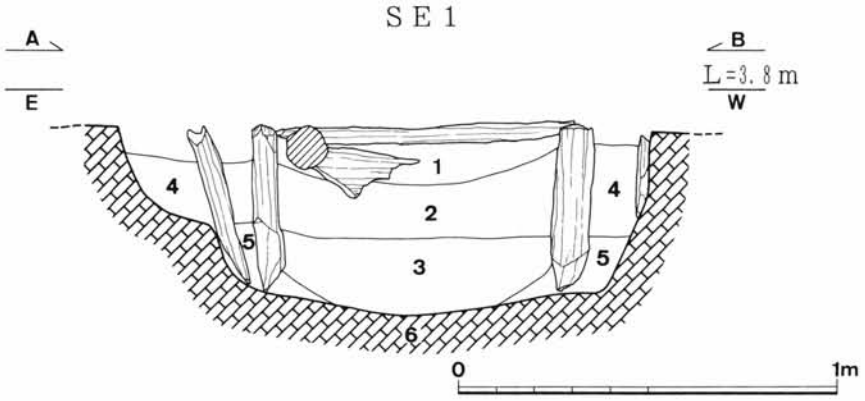
井戸ＳＥ１に隣接して設けられたこの遺構には類例があり、新潟県北蒲原郡紫雲寺町大字中島字住吉に所在する住吉遺跡[注2]が挙げられる。この遺跡は、鎌倉時代の屋敷跡とされ、検出された洗い場遺構の時期は、13世紀前後と想定されている。住吉遺跡の遺構との共通点は、井戸と隣接していることや内側に長方形の木枠が組まれていること。遺物も土師器皿や白磁のほか滑石製の石鍋や曲物、板材、下駄などが出土していることがあげられる。これらの事例から、ＳＸ77は、井



第20図　第６トレンチ遺構配置図

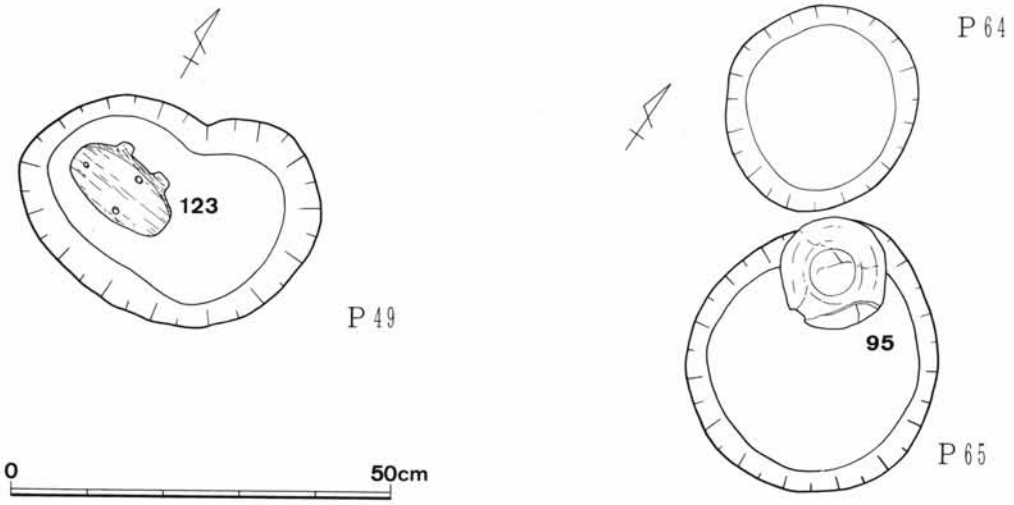


第21図　第６トレンチ井戸ＳＥ１・洗い場遺構ＳＸ77・不明土坑ＳＸ313平面図



1．暗褐色粘質土　2．暗灰褐色粘質土　3．黒褐色粘質土
4．暗灰色粗砂　5．黒灰色細砂　6．暗黄灰色粘質土(礫混じり)

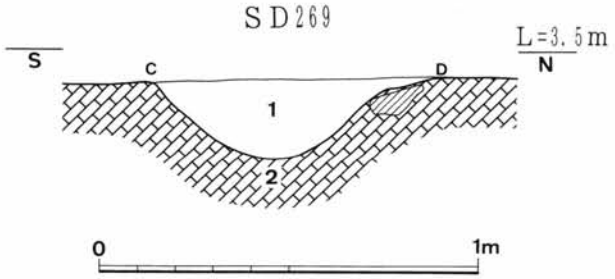
第22図　第６トレンチＳＥ１土層断面図



第23図　第６トレンチP49・64・65平面図

戸に付随する洗い場的な施設であったと考える。

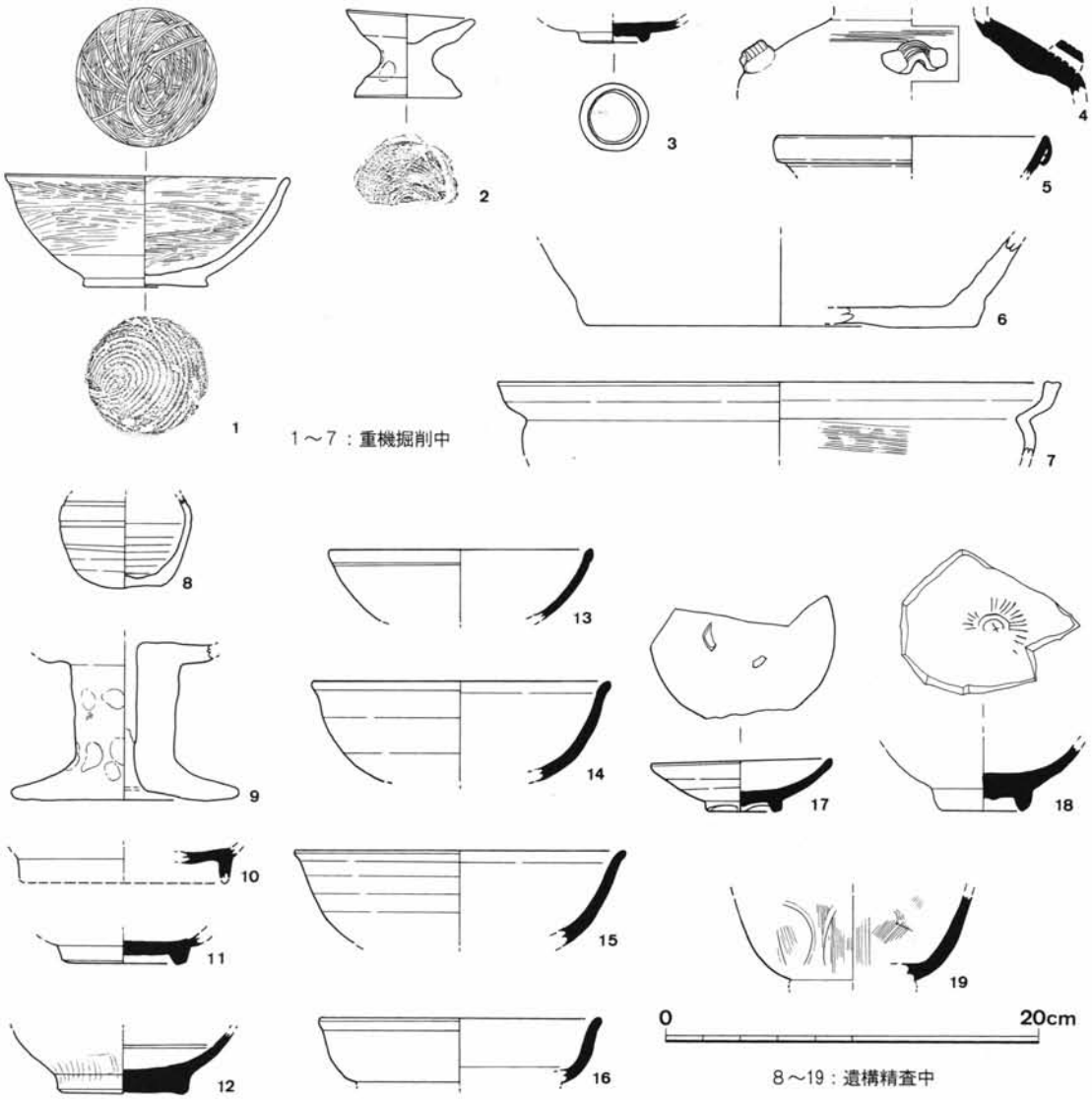
不明土坑ＳＸ313(第20図)　土坑ＳＫ２内の洗い場遺構ＳＸ77の北側に隣接して検出した東西の長さ約2.2m、南北の幅約0.4mを測る東西に細長い溝状を呈した遺構である。土坑内には長さ約1.9m、幅約0.12mの細長い板が立てられ、杭によって留められている。また、土坑内から土師器(第27図52・53)などが出土した。



1．黒褐色粘質土　2．暗黄灰色粘質土(礫混じり)

第24図　第６トレンチＳＤ269土層断面図

溝ＳＤ269(第24図)　トレンチの西端で検出した東西方向の溝である。幅約7.5m、深さ約0.2mを測る。溝の長さは、トレンチの範囲内で約９m確認した。溝の埋土からは、平安



第25図　第６トレンチ出土遺物(1)

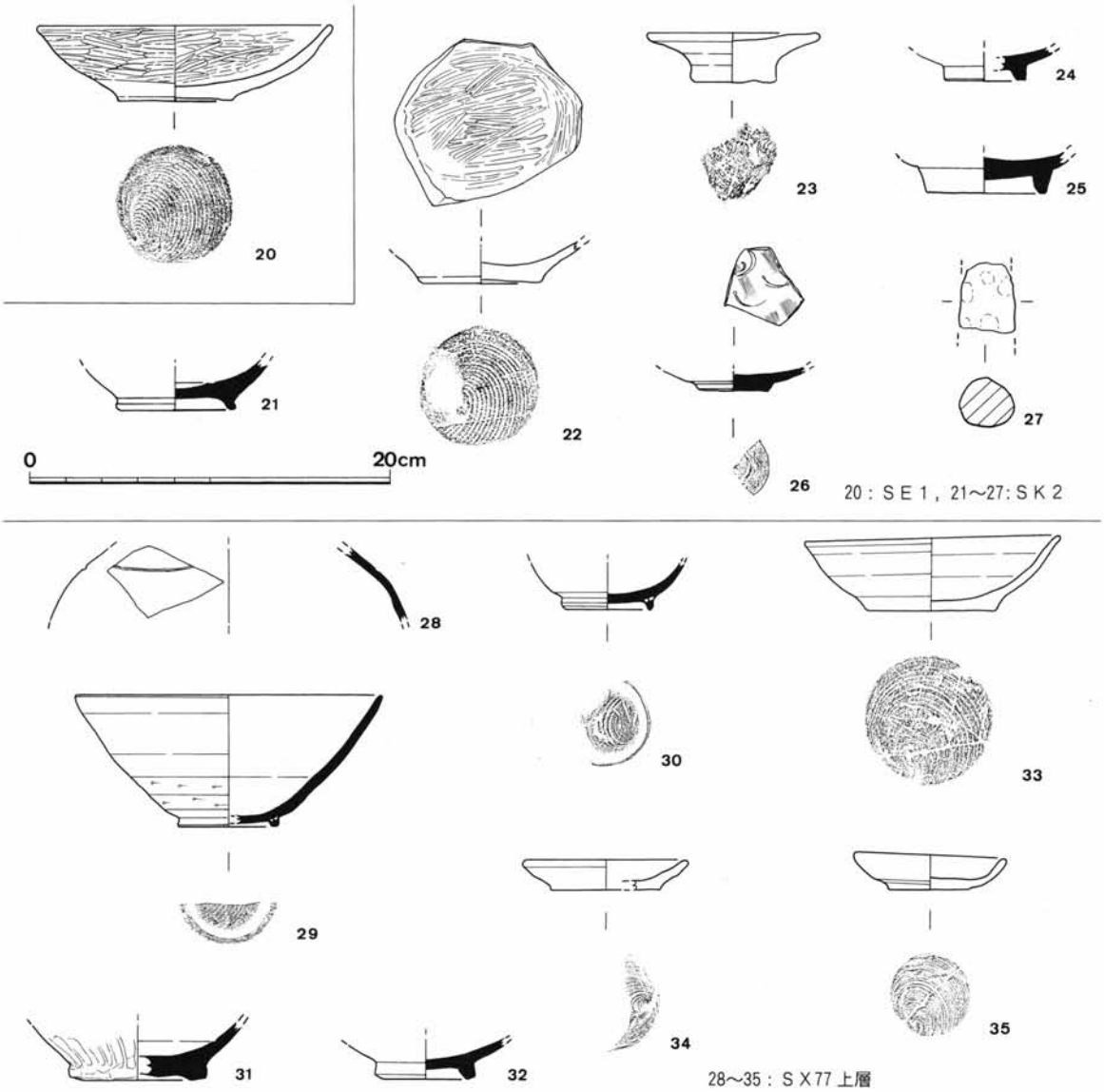
時代後期の土器が出土した。検出したほかの溝ＳＤ25・148・187などとは異なり、幅も広く出土した遺物の量も多い。また、ほぼ東西方向を向く溝であることから、何らかの区画溝である可能性が考えられる。

柱穴Ｐ142　柱材が残る柱穴である。このほかにも、柱の太さは異なるが、約20基ものピットに柱材が残っていた。トレンチ内には、300基以上もの大小の柱穴やピットが検出できたが、建物を復原できるまでには至らなかった。

柱穴Ｐ217　柱材(第32図120)が残る柱穴で、柱の直径が約18cmを測り、表面には、９面の面をもつ。

柱穴Ｐ321　柱材(第32図121)が残る柱穴で、柱の直径が約14cmを測り、面をもたない。

ピットＰ16　直径約20cmの円形の小穴で、埋土から滑石製の勾玉(第30図105)が出土した。このトレンチ内には、古墳時代の遺物を含む遺構が存在しないことや、この勾玉が古墳時代に属するものと考えられるため、混入の可能性が考えられる。



第26図　第６トレンチ出土遺物(2)

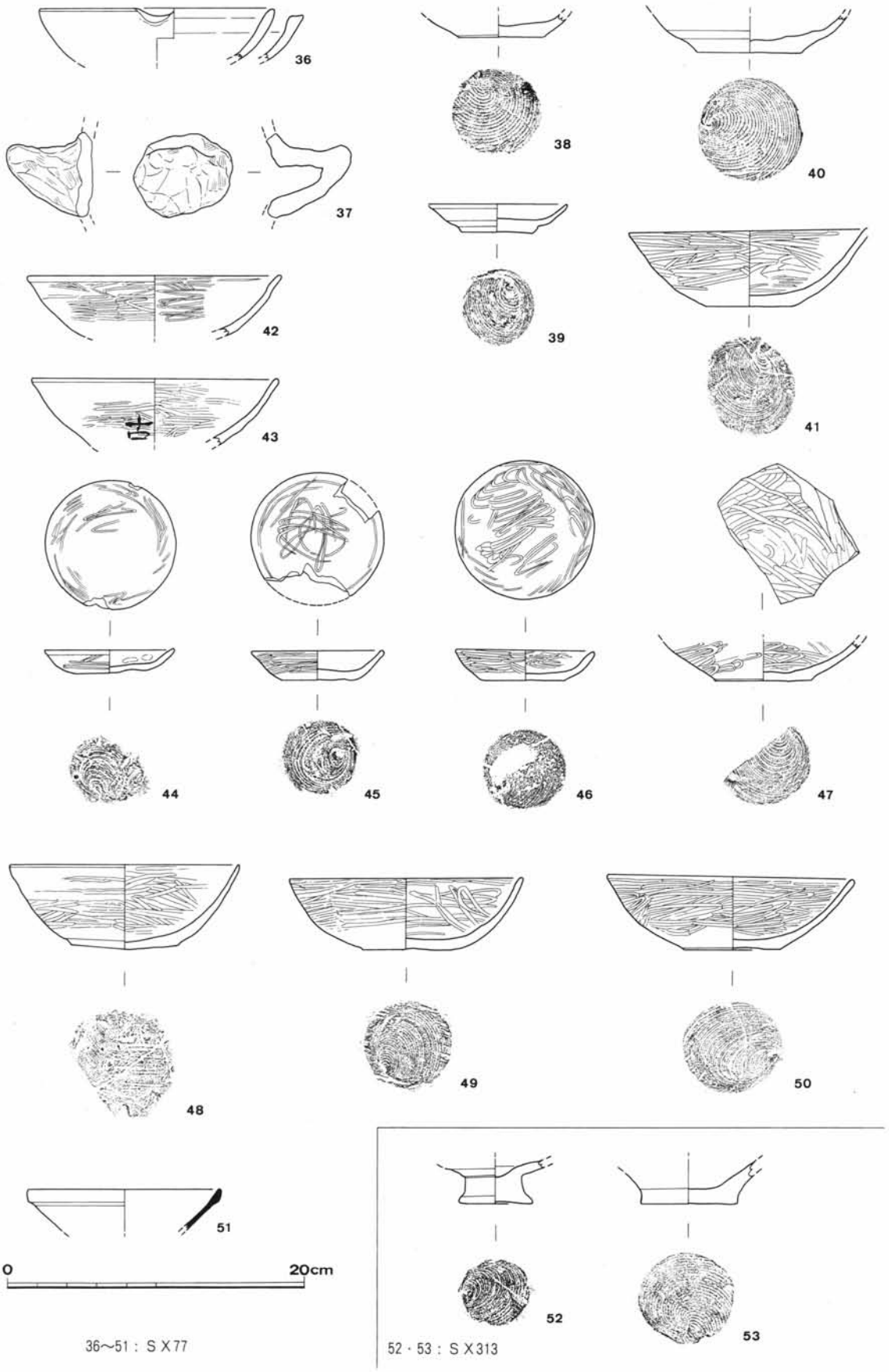
ピットＰ49(第23図左)　南北約25cm、東西約40cmを測る不定形の小穴で、底からは木製の下駄(第32図123)が出土した。

ピットＰ65(第23図右)　直径約35cmの円形の小穴で、埋土上層から、土師器の椀(第29図95)が出土した。

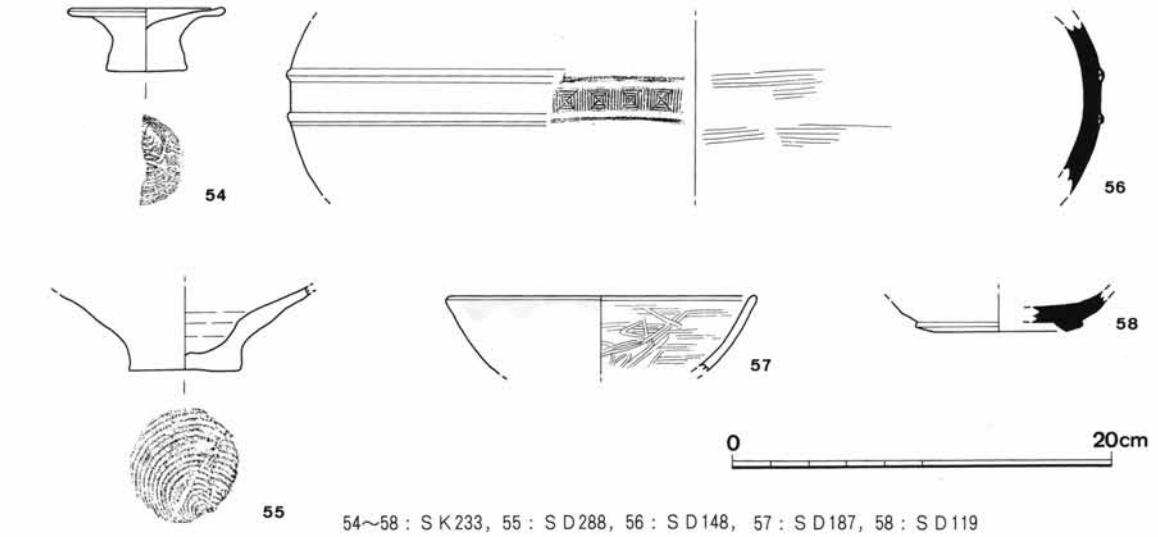
3) 出土遺物

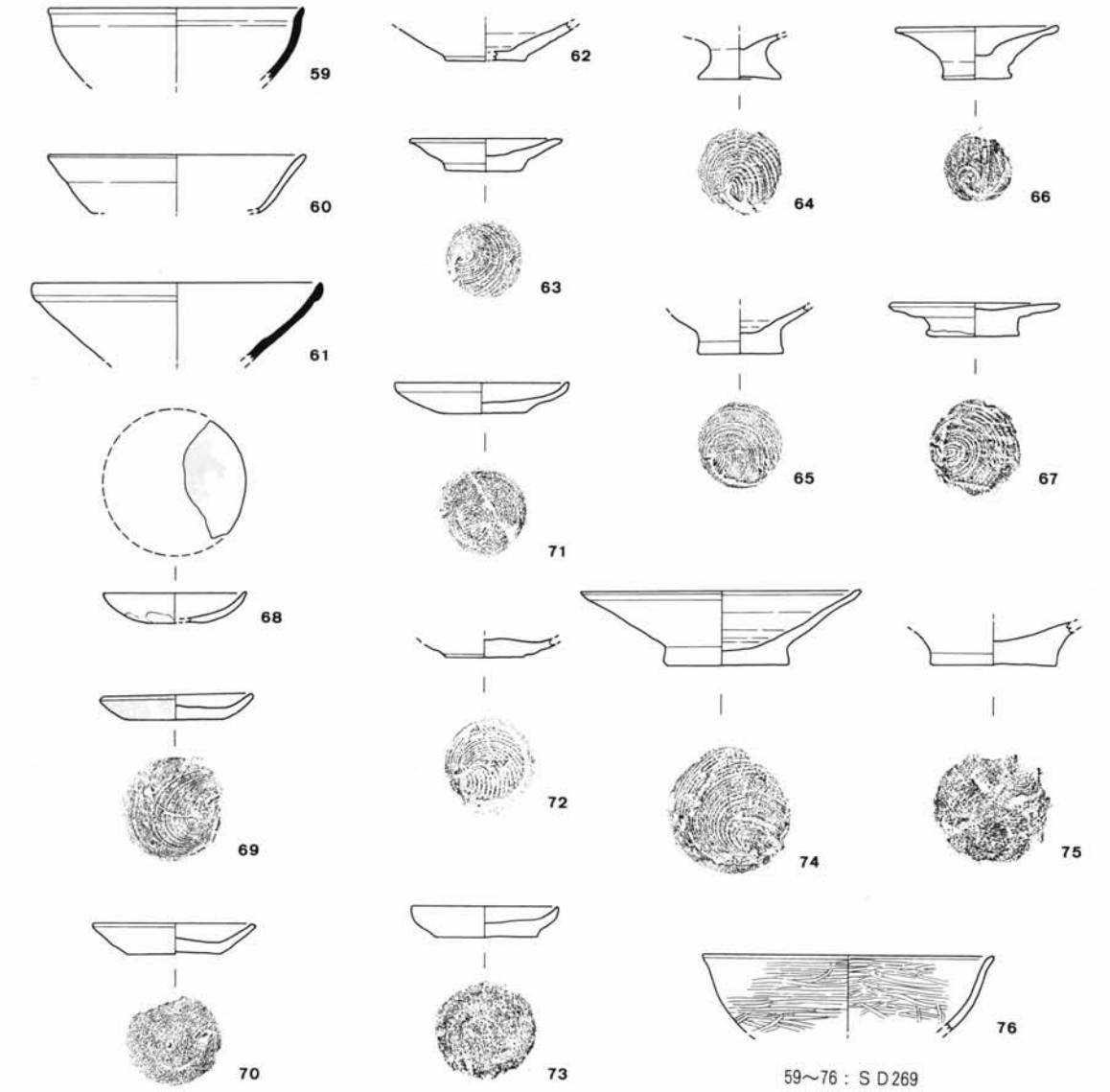
第６トレンチから出土した遺物は、平安時代後期～鎌倉時代初期に属する遺物が中心であるが、一部に古墳時代に属する遺物もある。遺物は、須恵器や土師器、黒色土器などの土器類や石鍋や碁石などの石製品、桶や下駄などの木製品、古銭などが出土した(第25～32図１～125)。

１～19は、重機掘削時および遺構精査中に出土した遺物で、黒色土器の椀(1)や底部外面に「十」と墨書された須恵器の椀の高台(3)、四耳壺片(4)などが出土した。また、緑釉陶器(11)や陶磁器(17～19)なども出土した。20は、井戸ＳＥ１井戸枠内下層から出土した黒色土器の椀で井戸の時期を示す遺物である。21～27は、土坑ＳＫ２から出土した遺物である。24～26は白磁椀の

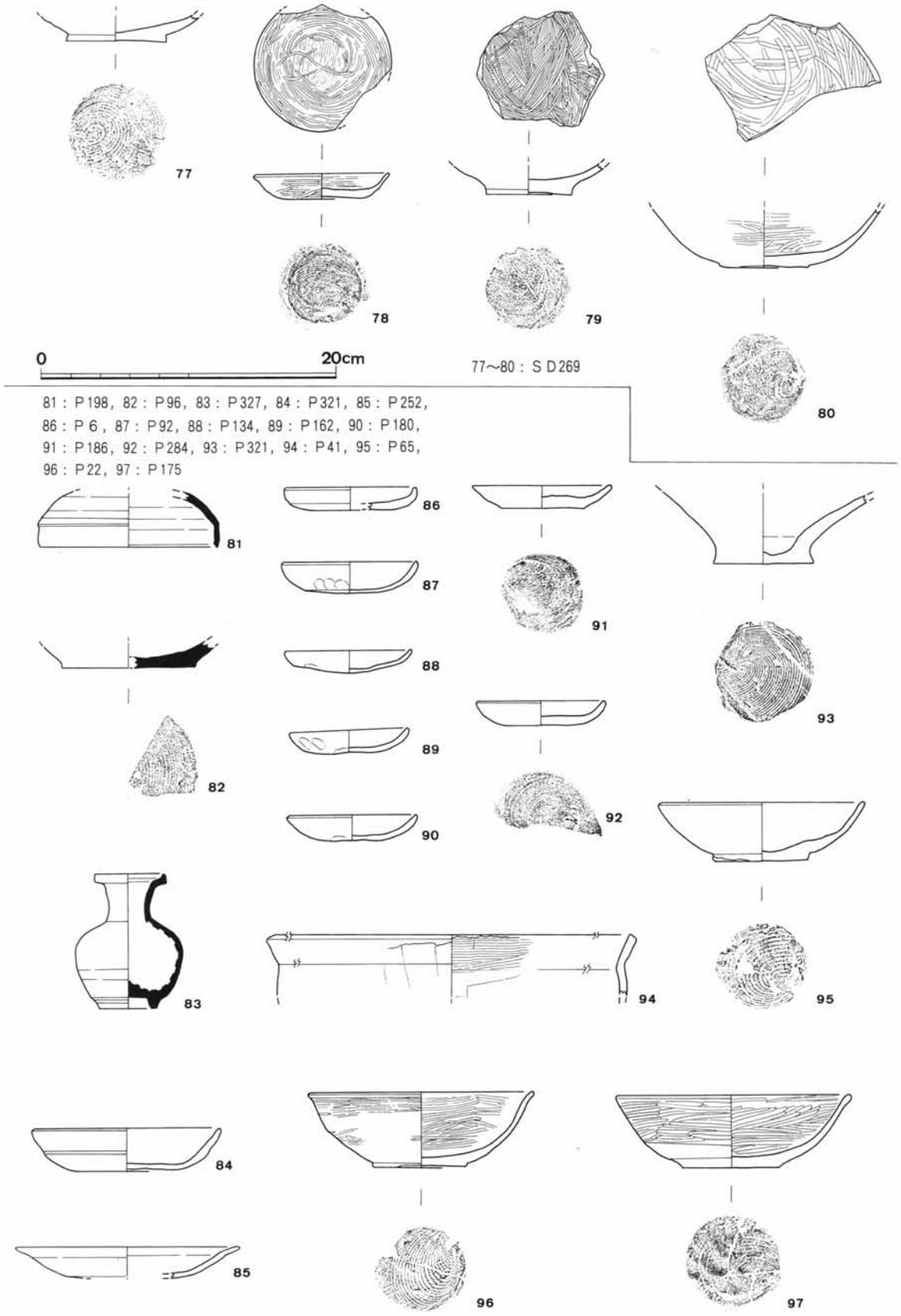


第27図　第６トレンチ出土遺物(3)

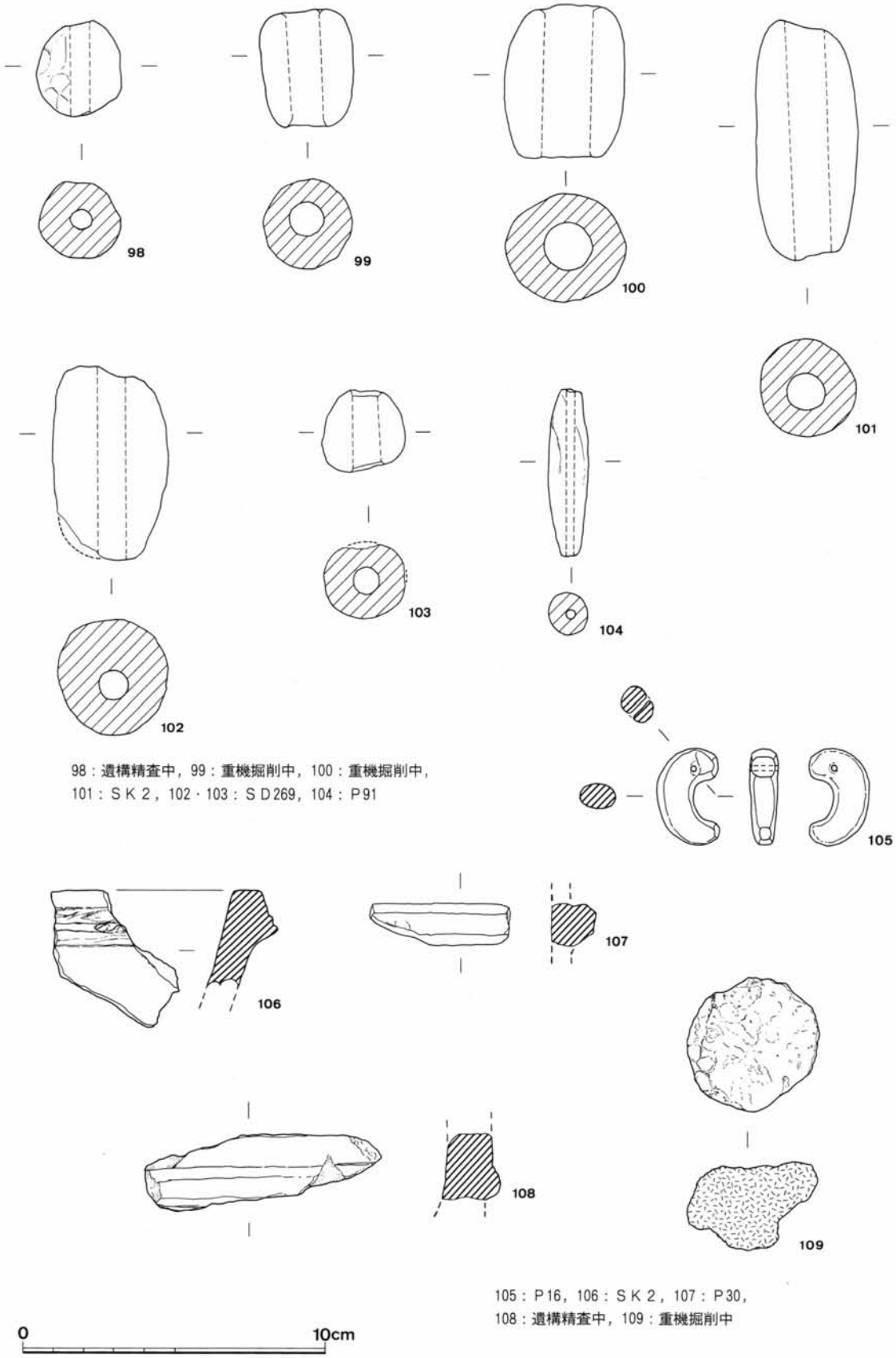




第28図　第６トレンチ出土遺物(4)



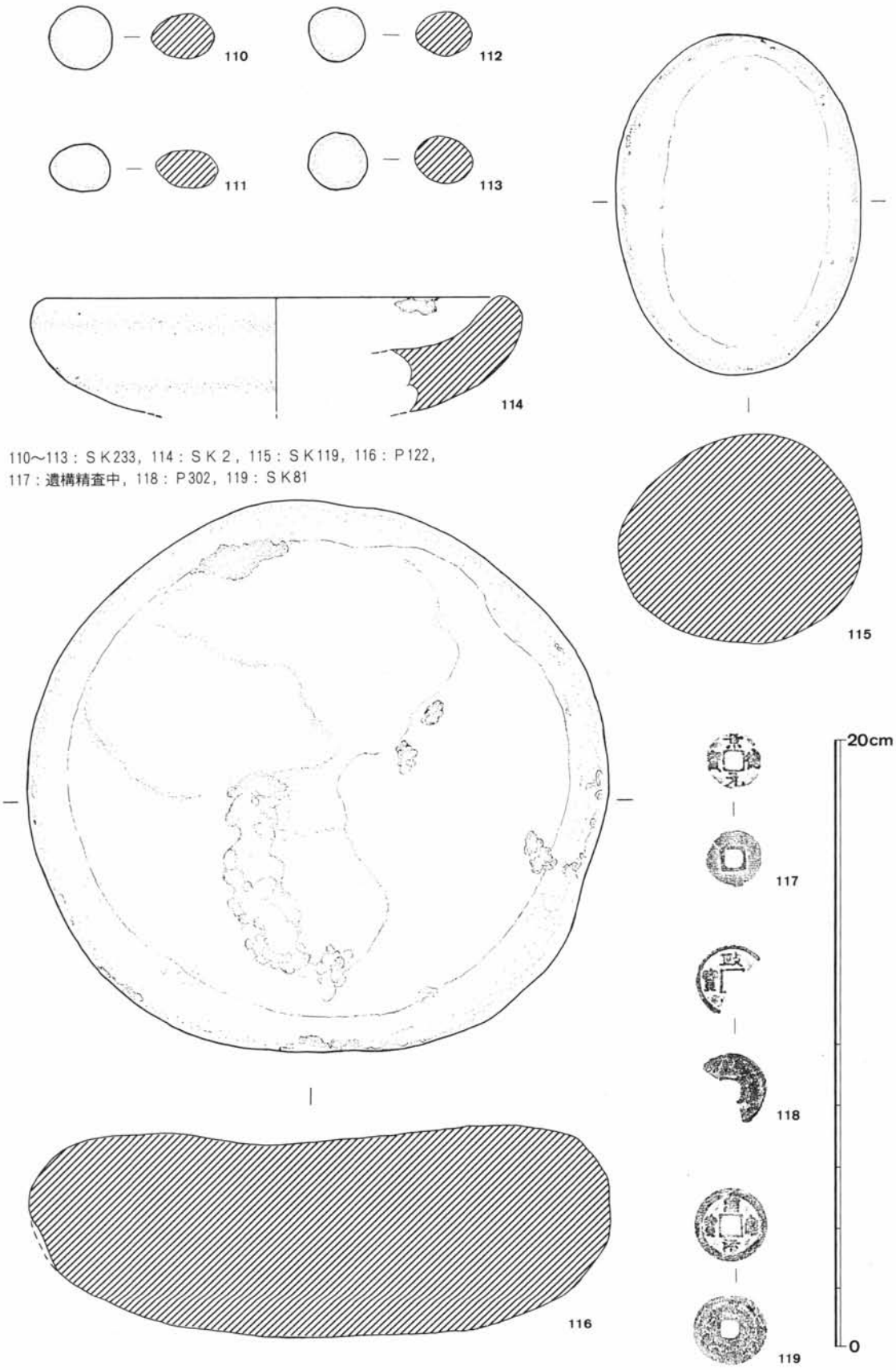
第29図　第6トレンチ出土遺物(5)



98：遺構精査中，99：重機掘削中，100：重機掘削中，
101：ＳＫ２，102・103：ＳＤ269，104：Ｐ91

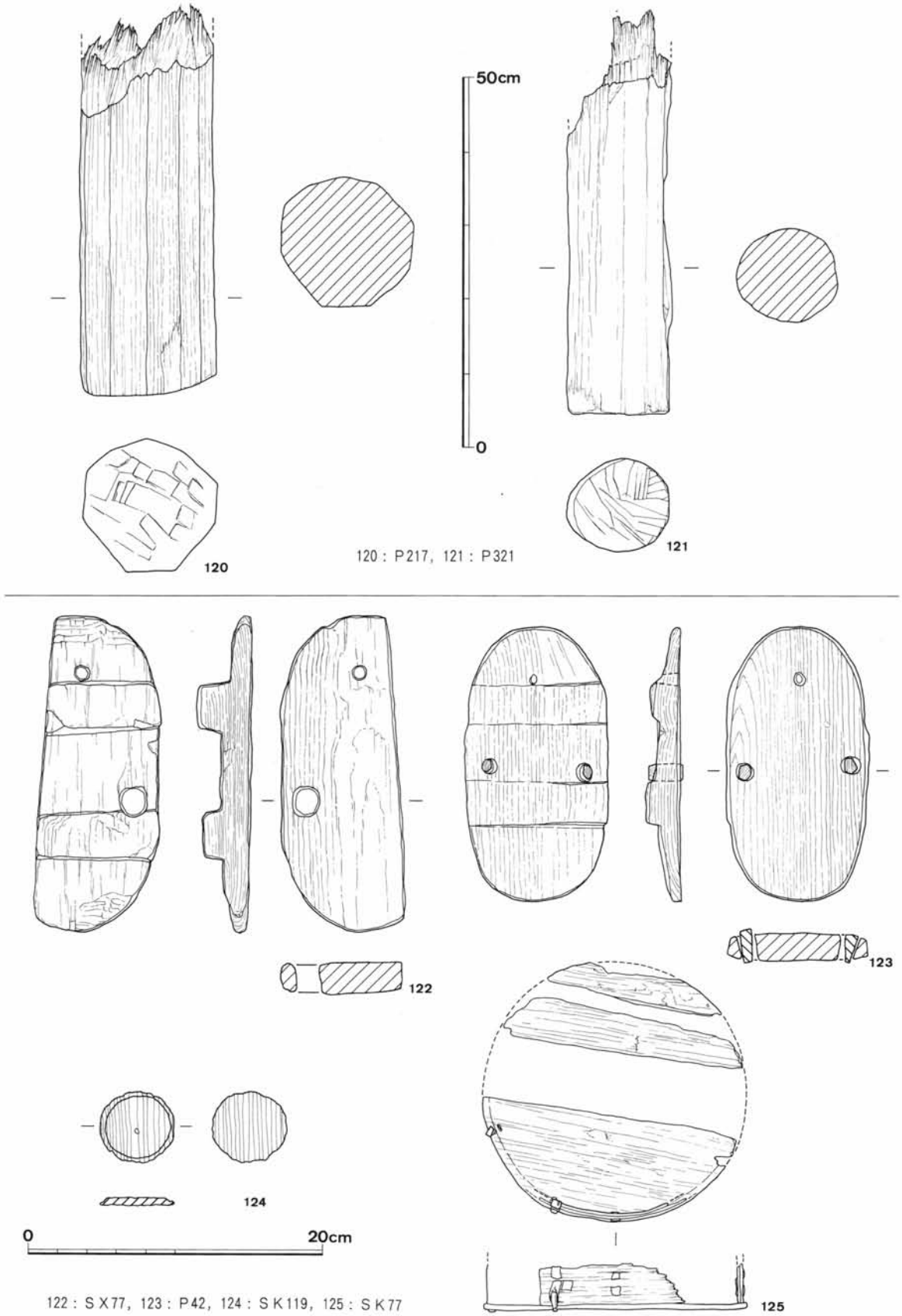
105：Ｐ16，106：ＳＫ２，107：Ｐ30，
108：遺構精査中，109：重機掘削中

第30図　第６トレンチ出土遺物(6)



110～113：ＳＫ233，114：ＳＫ２，115：ＳＫ119，116：Ｐ122，
117：遺構精査中，118：Ｐ302，119：ＳＫ81

第31図　第６トレンチ出土遺物(7)



第32図　第６トレンチ出土遺物(8)

破片である。また、27は製塩土器の脚柱部分の破片で、舞鶴市の浦入遺跡から出土したものと同形式と考えられ、塩の流通や生産を考える上で重要な資料である。28～35は、洗い場遺構ＳＸ77の上層で出土した遺物である。28は中国製褐釉陶器の壺の破片である。そのほかに、白磁の椀(31・32)などが数点出土している。

36～51は、洗い場遺構ＳＸ77の中層から下層にかけて出土した遺物である。土器は土師器や黒色土器の皿、土師器や黒色土器の椀がほぼ完形品に近い状態のものが多く出土した。また、43の黒色土器の椀は、その外面に「古」または「十口」と墨で文字が書かれている。52・53は不明土坑ＳＸ313から出土した土師器である。54～58は土坑や溝から出土した遺物である。59～80は溝ＳＤ269から出土した遺物である。土師器や黒色土器の皿がほぼ完形品に近い状態のものが多く出土した。また、土師器の灯明皿(68・69)も出土している。

81～97は柱穴やピットから出土した遺物である。81はＰ198から出土した須恵器の蓋であるが、古墳時代に属するもので混入の可能性が高い。83は須恵器の短頸壺である。

98～104は土製品で、形状や大きさは異なるがすべて土錘である。98～100は遺構精査中、93は土坑ＳＫ２、102・103は溝ＳＤ269、104はＰ91から出土した。

105～108は石製品である。105はＰ16の底から出土した滑石製の勾玉である。形状からみて古墳時代に属するものと思われる。106～108は滑石製の石鍋の破片である。それぞれ口縁部付近の破片と考えられ、突帯部がみられる。

109は遺構精査時に出土した鉄滓である。110～116は石製品である。110～113は土坑ＳＫ233から出土した碁石で、色はすべて黒色である。114は石皿、115は敲き石で磨耗しているが若干使用痕が残る。116は摺り石で磨耗しているが上部に使用痕がみられる。

117～119は古銭で、117は景徳元寶と判別できる。120・121は柱穴の柱材である。120はＰ217から出土した柱材で直径約18cmを測り、断面は９面の面をもつ。121は直径が約14cmを測る。

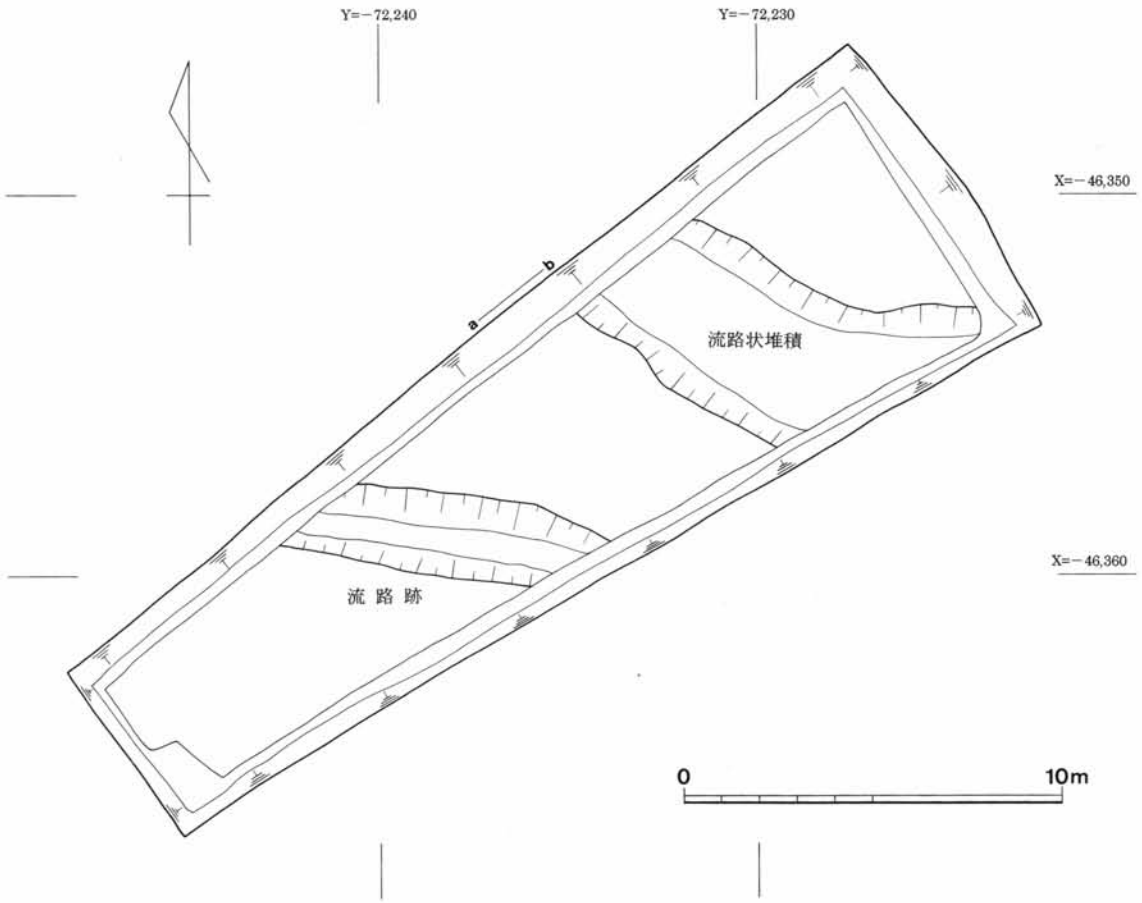
122～125は木製品である。Ｐ122は洗い場遺構ＳＸ77の下層面から出土した下駄である。123はＰ42から出土した下駄で、鼻緒の穴に鼻緒止めの楔が残っていた。124は用途不明の円盤状の製品である。125は洗い場遺構ＳＸ77から出土した曲物の桶である。

(村田和弘)

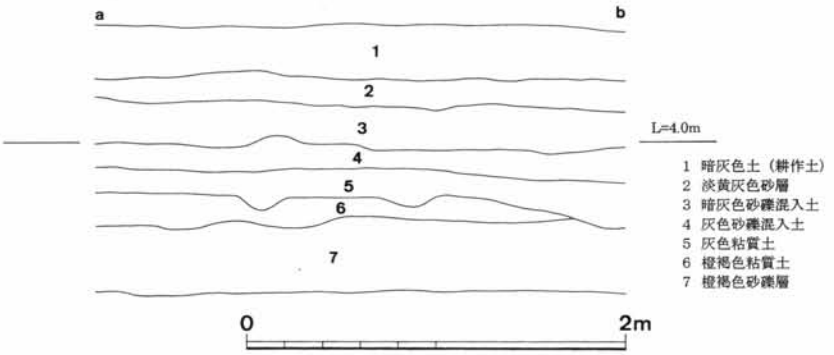
(4) 第７トレンチ

1) 調査経過

府中公園東側に設定した第７トレンチ(第33図)北側の土層観察では、暗灰色の耕作土、淡黄灰色砂層の床土の下に、若干の遺物を含む暗灰色・灰色砂礫混入土が堆積している(第34図)。その下に、西部では固く締まった橙褐色砂礫層が堆積し、トレンチ中央から東では灰色粘質土と鉄分などが酸化し変色した橙褐色粘質土、西部同様に橙褐色砂礫層が堆積している。橙褐色砂礫層からは、遺物は出土していないので、古い沖積層で付近のベース面と考えられる。中央付近に橙褐色砂礫層を削り込んだ、暗灰色砂礫混入土が堆積する幅約２ｍ、深さ0.1～0.2ｍ前後の自然流路跡を検出した。遺物は出土していない。東部で幅４～５ｍ、深さ約0.2ｍの暗灰色粘質土などが



第33図　第７トレンチ平面図



第34図　第７トレンチ北壁断面図

堆積する流路状堆積層を検出したが、遺物は出土していない。

第７トレンチは、府中公園北側の昨年度調査地（第１～３トレンチ）で確認される茶褐色砂質土・褐色砂質土などの遺物包含層がみられないので、後世に削られた可能性が高い。

2）**出土遺物**（第35図）

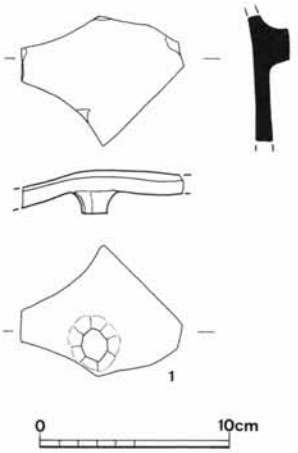
出土遺物には、暗灰色・灰色砂礫混入土から出土した若干の土師器・須恵器とトレンチ南西部の砂礫層上面から出土した須恵器風字硯(1)がある。風字硯は、硯の後ろ部分の一部で、裏面に八角に面取りした短脚が付くため風字硯とわかる。８世紀後半～９世紀前半のものである。これ以外の土師器・須恵器には図化可能なものがほとんどない。

5．まとめ

主な調査成果をみた第３・５・６トレンチの調査成果を以下に簡単にまとめる。

1）第３トレンチ

２基の方形貼石墓ＳＸ22・29は、調査範囲内では、その全体の規模や埋葬施設を確認することはできなかったが、貼石の状況などから、ほかの調査事例と比べ、極めて良好に遺存しているものと判断される。また、２基が連なって確認されたことも注目される。推測ではあるが、調査地外にさらに複数の貼石墓が存在することも考えられる。



第35図　第７トレンチ
出土遺物実測図

これらの築造時期については、埋葬施設が未検出であり、直接的にこれを示す土器が出土しなかったことから詳細な検討はできていない。現時点では、周溝内から出土した土器片をもとに弥生時代中期後半と想定している。

2）第５トレンチ

第５トレンチでは、平安時代後期～鎌倉時代と考えられる掘立柱建物跡や柵列を検出した。後述する第６トレンチの調査成果と合わせ、当該期の遺構が広範囲(東西400m以上)に分布していることが判明した。出土遺物には、弥生時代～中世にわたるものが混在するが、ほかのトレンチに比べて、特に奈良時代後期の土器類がやや多い傾向にある。特に、墨書土器や硯(風字硯)の存在は建物跡の性格を考えるうえで注目される。なお、風字硯は第７トレンチでも出土している。

3）第６トレンチ

本トレンチにおいても、平安時代後期～鎌倉時代初期の溝、土坑、ピット群などの遺構を検出するとともに多量の遺物が出土した。建物跡として把握はできなかったものの、数多く存在するピットなど、遺構の密度は高い。中でも井戸とそれに伴う洗い場遺構は類例も少なく注目されるものである。出土遺物のなかには、第５トレンチと同様に墨書土器、硯(円面硯)などのほか、中国製の褐釉陶器片や無釉陶器、古瀬戸、白磁など多種多彩な陶磁器類や土師器の皿に高い高台が付く柱状高台皿が多く認められた。また、製塩土器など塩の生産、流通に係るものや石鍋などもある。これらは遺跡の性格を考えるうえで重要な資料である。

以上、今回の調査成果の概要である。

最も大きな成果は、昨年度から引き続いて調査を行った第３トレンチで２基の方形貼石墓(ＳＸ22・29)を確認したことと言える。方形貼石墓は、弥生時代中期中葉から後葉にかけて備後(広島県)から石見・出雲(島根県)、因幡(鳥取県)、そして丹後(京都府北部)にまたがる広い地域で採用された独自の墓制として位置づけられている。最古の事例は島根県江津市波良浜遺跡例とされ、その後、弥生時代中期後半には中国地方から京都府北部までの広範囲に分布するようになる。今回の貼石墓は、これが最も広範囲に造営された時期の一つの事例と考えられる。なお、丹後地域では、これまでに６遺跡で11例の方形貼石墓が確認されている。これらの規模・形態をみると、

いずれも平面長方形をなし、７ｍ×3.5ｍの小型墓、15～17ｍ×６～７ｍの中型墓、32ｍ×17ｍ前後の大型墓がある(注3)。ちなみに、今回確認した方形貼石墓ＳＸ22は、全体の規模は不明であるが、平面長方形で南辺が長方形の短辺と仮定した場合、大型墓に属すこととなる。

また、この第３トレンチを含め、第５・６トレンチにおいて奈良時代後半～鎌倉時代にわたる時期の柱穴や溝、井戸など多くの遺構を確認するとともに、多量の遺物が出土したことも大きな成果であった。出土遺物の中に墨書土器や硯(風字硯)などが認められたことは、確認した遺構が単なる集落跡ではなく、当地に所在したとされる国府に関係した官衙もしくは近接する籠神社に附属した管理施設であった可能性を示したものと評価している。

なお、今回の調査では、条里制地割に直接関わる遺構は検出できなかった。ただし、第５・６トレンチで確認した平安～鎌倉時代の掘立柱建物跡や柵列、溝などの中には、想定されている条里制地割の方位に近いものもあり、一帯にこうした方位の地割りが存在したことは否定できない。いずれにしても遺跡の性格付け、条里制地割の有無など、今回の成果のみで結論を出すことはできない。今後の調査に期待したい。

（石尾政信・村田和弘）

注１　以下の関係諸機関・個人から御協力・御援助を得た
宮津市教育委員会・京都府立丹後郷土資料館・中嶌陽太郎・東高志・細川康晴・吹田直子・加藤晴彦・野島永・椋平正盛
調査参加者は、以下のとおり(敬称略・順不同)　**作業員**　岳崎巌・桜井玲子・丸谷昭彦・中田由紀子・平田裕子・坂根宏則・岡田代志乃・神南勝利・小林美里・岳崎伸子・平林徳江・牧野春生・丸谷隆・宮崎廣子・椋平克・山本邦男・広野葉子・後藤睦子・後藤健二・福田晴美・斉藤早智子・安田恵・下垣節夫・福田均・後藤邦二・上前達弥・大槻一春・小池正明・谷本幸男・徳本喜久子・松田孝優・毛呂井敏男・中山敏春　**調査補助員**　小笠原順子・高井亮平　**整理員**　藤村文美・寺尾貴美子・春日満子・丸谷はま子・三好ひとみ

注２　杉田健一「住吉遺跡」(『新潟県埋蔵文化財調査事業年報　平成10年度』　(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団)　1999

注３　与謝野町教育委員会の加藤晴彦氏の御教示による。

参考文献

加藤晴彦ほか『日吉が丘遺跡』　京都府加悦町教育委員会　2005

野島永「京都府北部の貼り石方形墳丘墓について」(京都府埋蔵文化財論集』第２集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1991

奥村清一郎ほか「奈具岡遺跡第３次発掘調査報告書」　弥栄町教育委員会　1986

奥村清一郎ほか「寺岡遺跡」(京都府野田川町文化財報告　第２集)　野田川町教育委員会　1988

田代弘ほか「浦入遺跡群　本文編・図版編」(『京都府遺跡調査報告書　第29冊』　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2001

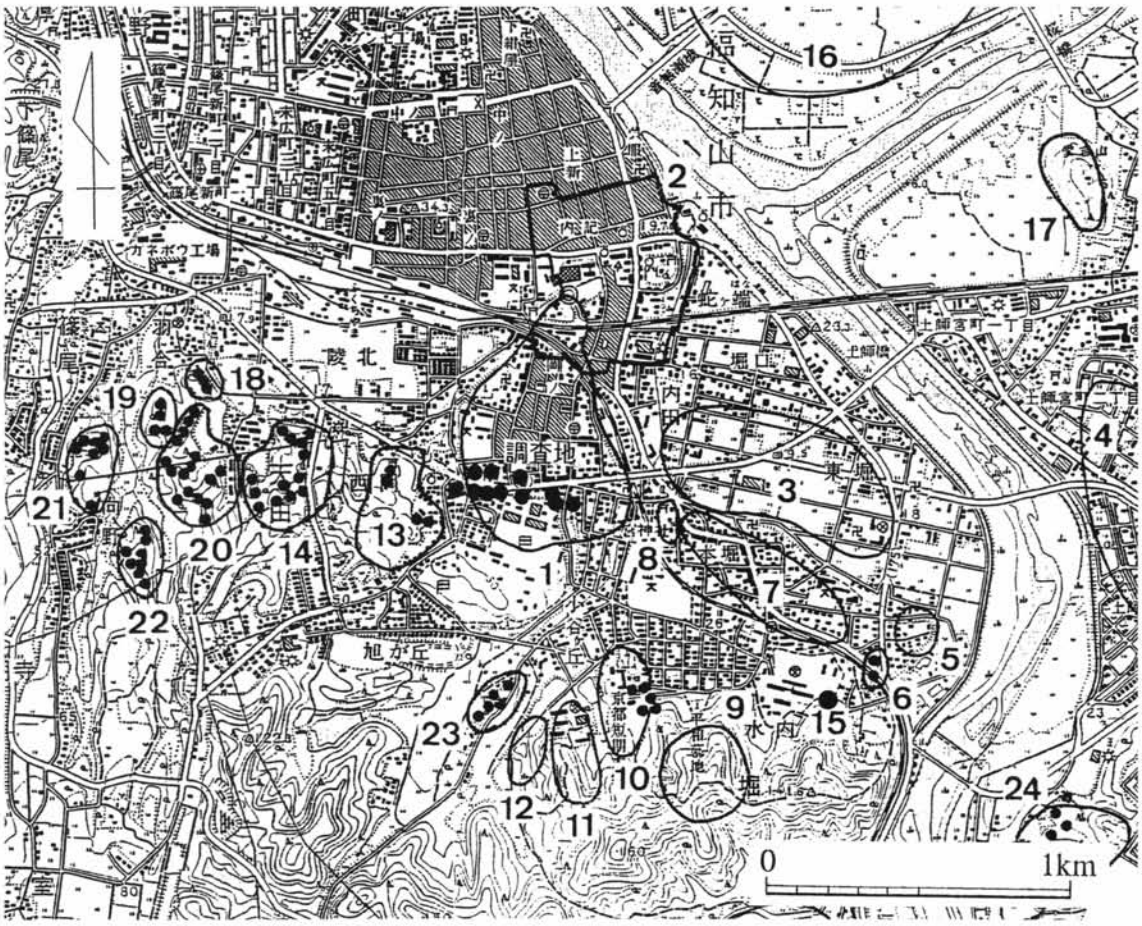
杉田健一「住吉遺跡」(『新潟県埋蔵文化財調査事業年報　平成10年度』　(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団)　1999

2．岡（おかの）ノ遺跡第４次発掘調査概要

１．はじめに

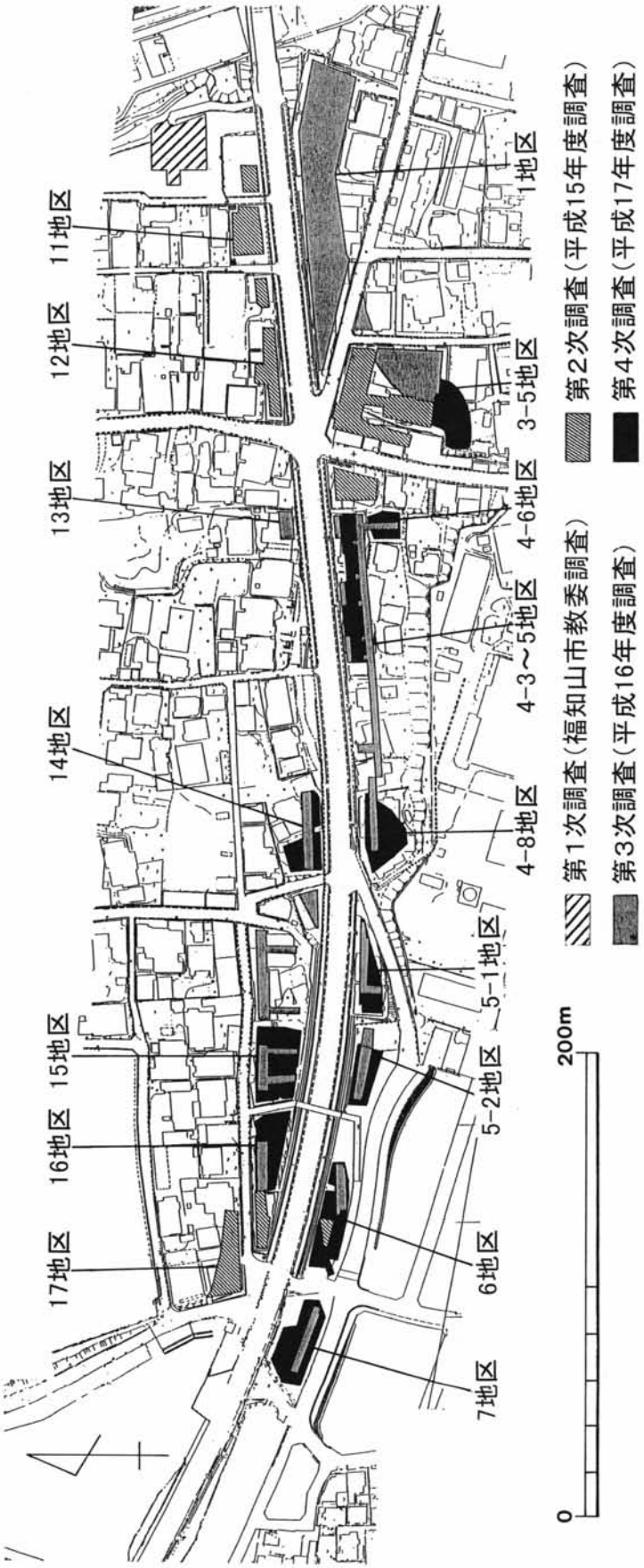
岡ノ遺跡は、福知山市の市街地中央に南方に広がる台地上に位置する。平成12年度に国道９号線北側隣接地での福知山市教育委員会による発掘調査（第１次調査）で、弥生時代後期の方形周溝墓や古墳時代・中世の集落跡などが検出され、はじめて遺跡の具体的な様相が明らかになった。今般、国土交通省近畿地方整備局により国道９号線に面して、東西約500ｍを対象に、平成15年度から、当調査研究センターが試掘および発掘調査を遂行してきた（第36図、巻頭図版）。

昨年度の発掘調査は、過去２か年にわたって実施した試掘調査などの結果を受けて、11調査地区で面的な発掘調査を順次行った。現地調査期間は平成17年５月10日～平成18年１月12日で、調



第36図　調査地位置図（国土地理院1/25,000福知山西部・東部）

１．岡ノ遺跡	２．福知山城跡	３．東堀遺跡	４．土師新町遺跡	５．水内城跡
６．水内東古墳群	７．本堀遺跡	８．一宮神社文化財環境保全地区		９．切岸山城跡
10．武者ヶ谷遺跡	11．荒神山城跡	12．草地遺跡	13．寺ノ段古墳群	14．広峯古墳群
15．和久市遺跡	16．猪崎遺跡	17．愛宕山城跡	18．羽合ノ段古墳群	19．川上古墳群
20．川上南古墳群	21．向野古墳群	22．持原古墳群	23．五位坂古墳群	24．高畑城跡



第37図　調査地配置図（福知山都市計画図1/5,000を転載加筆）

査面積は2,700㎡である。

現地調査は、当調査研究センター第２課課長補佐兼第２係長奥村清一郎、同第２係主任調査員松井忠春、調査員高野陽子が担当した。

調査にあたっては、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所・京都府教育委員会・福知山市教育委員会より多大のご指導、ご助言を得た。また、現地作業では、南岡町、東岡町、緑ヶ丘町、北小谷ヶ丘町の各自治体の方々のご理解とご支援をいただいた。また今年度は昨年度発掘調査の整理・報告作業を実施した。両年にわたり調査補助員・整理員・作業員から多くの協力を賜った。記して感謝したい。（注）

なお、発掘調査および整理報告にかかわる経費については、全額、国土交通省近畿地方整備局が負担した。

2．これまでの調査

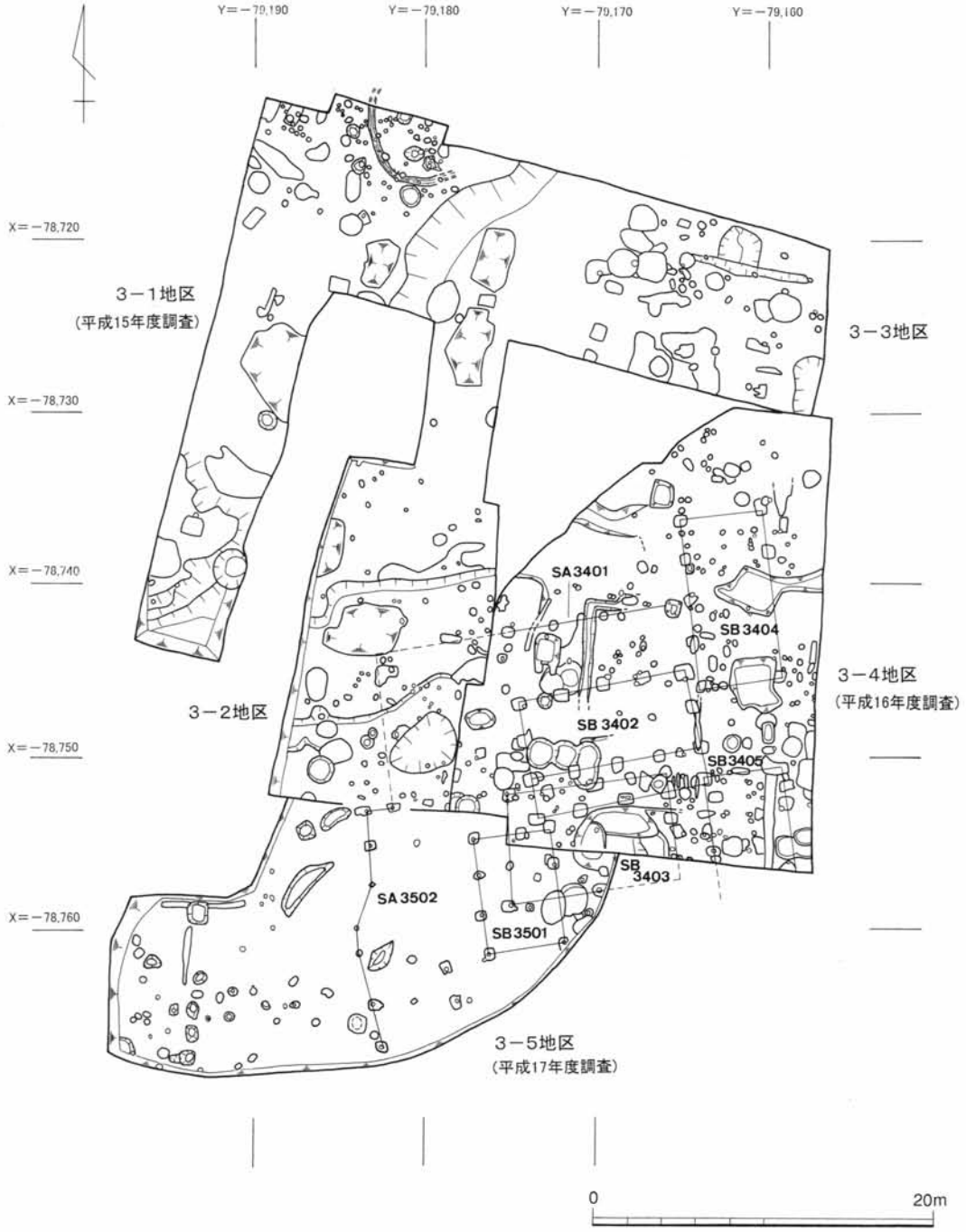
岡ノ遺跡の第１次調査は、前述したとおりである。平成15年度からは国道９号線拡幅工事に伴う発掘調査を３か年にわたり当調査研究センターが実施してきた（第37図）。

第２次調査は、国道の南北両側に計10か所にトレンチを設定し調査し、さらに３・12地区で

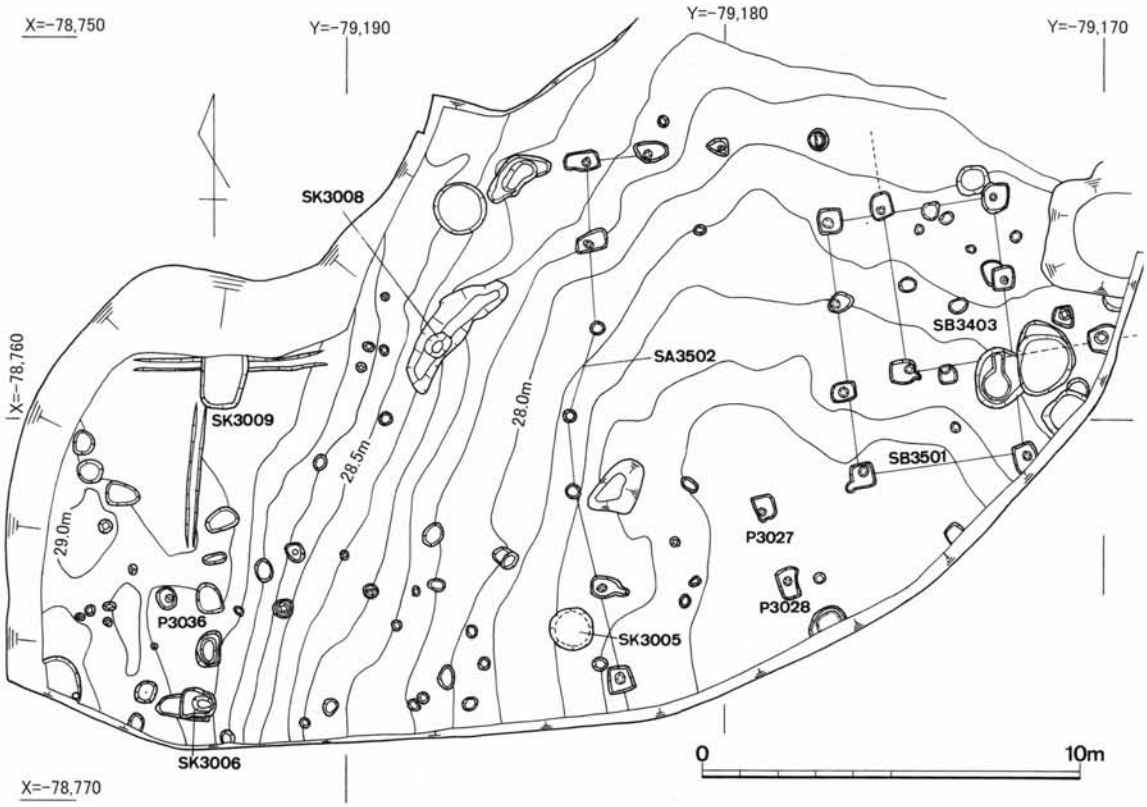
は３か所の次試掘トレンチの追加があった。その結果、弥生時代の竪穴式住居跡・溝・柱跡・古墳時代の住居跡、平安時代の柱跡・土坑、中世の柱跡、近世の井戸・柱穴を検出し、弥生土器、土師器、須恵器・中世土器類・近世の陶磁器類が出土した。

第３次調査は、17か所にトレンチを設け試掘調査を、１～３トレンチで本調査を実施したところ、弥生時代の竪穴式住居跡、中～近世のピット・土坑・溝、奈良～平安時代の堀立柱建物跡群などを確認した。出土遺物には、石器をはじめ、弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器、瓦器、輸入陶磁器、近世陶磁器(唐津・丹波系など)、石仏などがある。

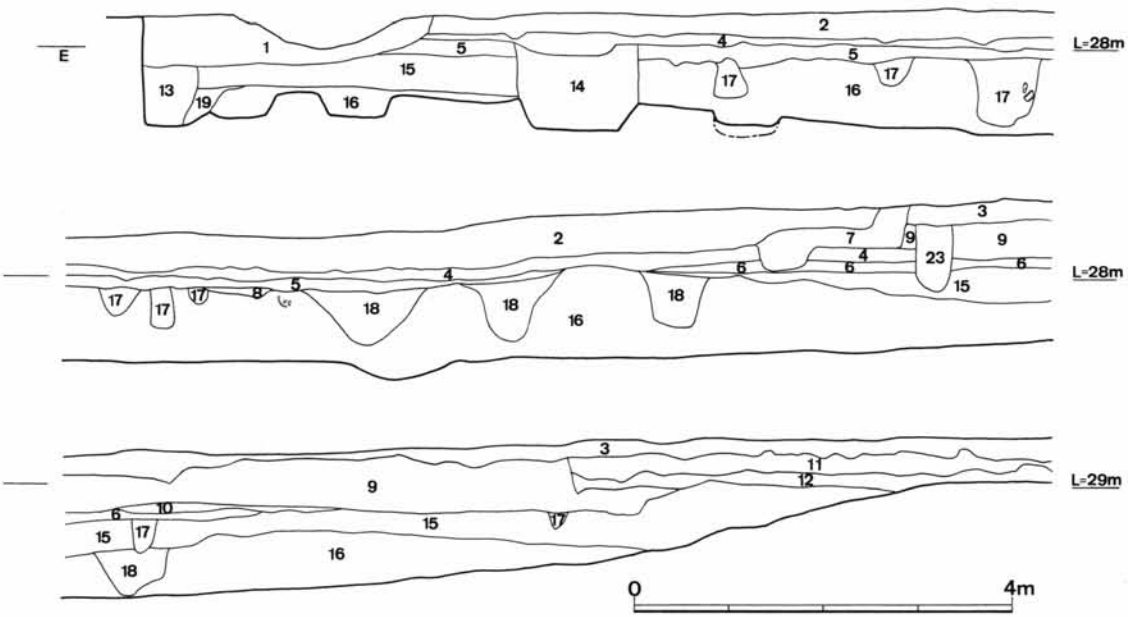
(松井忠春)

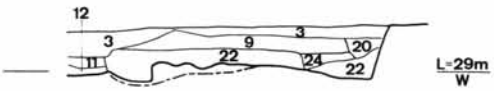


第38図　３地区遺構配置図



南壁層序





1. 淡褐色砂礫土 2. 灰褐色砂礫土 3. 灰色礫 4. 黄灰色砂質土
5. 淡茶褐色砂質土 6. 黄色砂質土 7. 灰色砂礫土 8. 淡茶褐色土
9. 灰褐色土 10. 灰褐色砂質土 11. 黄色粘質土 12. 灰色礫
13. 淡褐色粘質土 14. 茶褐色砂礫土 15. 暗褐色粘質土
16. 黒褐色粘質土 17. 茶褐色粘質土 18. 濃褐色粘質土
19. 暗褐色粘質土 20. 灰褐色礫混じり砂質土 21. 褐色粘質土
22. 淡褐色粘質土 23. 灰褐色砂礫土 24. 灰色礫混じり砂質土

第39図　3－5地区遺構配置図・土層断面図

３．調査の概要

先述したように調査地は、国道９号線の南辺に沿って３－５、４－３～６・８、５－１・２、６・７の８地区、同北辺に14～16の３地区の、計11か所で、南辺調査地の東西端両調査地である３－５地区・７地区から着手し、５－１・２地区→４－６地区→４－３～５地区→６地区→16地区→15地区→14地区→４－８地区へと順次作業を並行・重複させつつ発掘調査を進行させた。その結果、各調査区から、弥生時代の住居跡・溝・ピット、掘立柱建物跡などを、当該期の遺物とともに確認した。以下、各地区ごとに検出した遺構を中心に説明を加える。

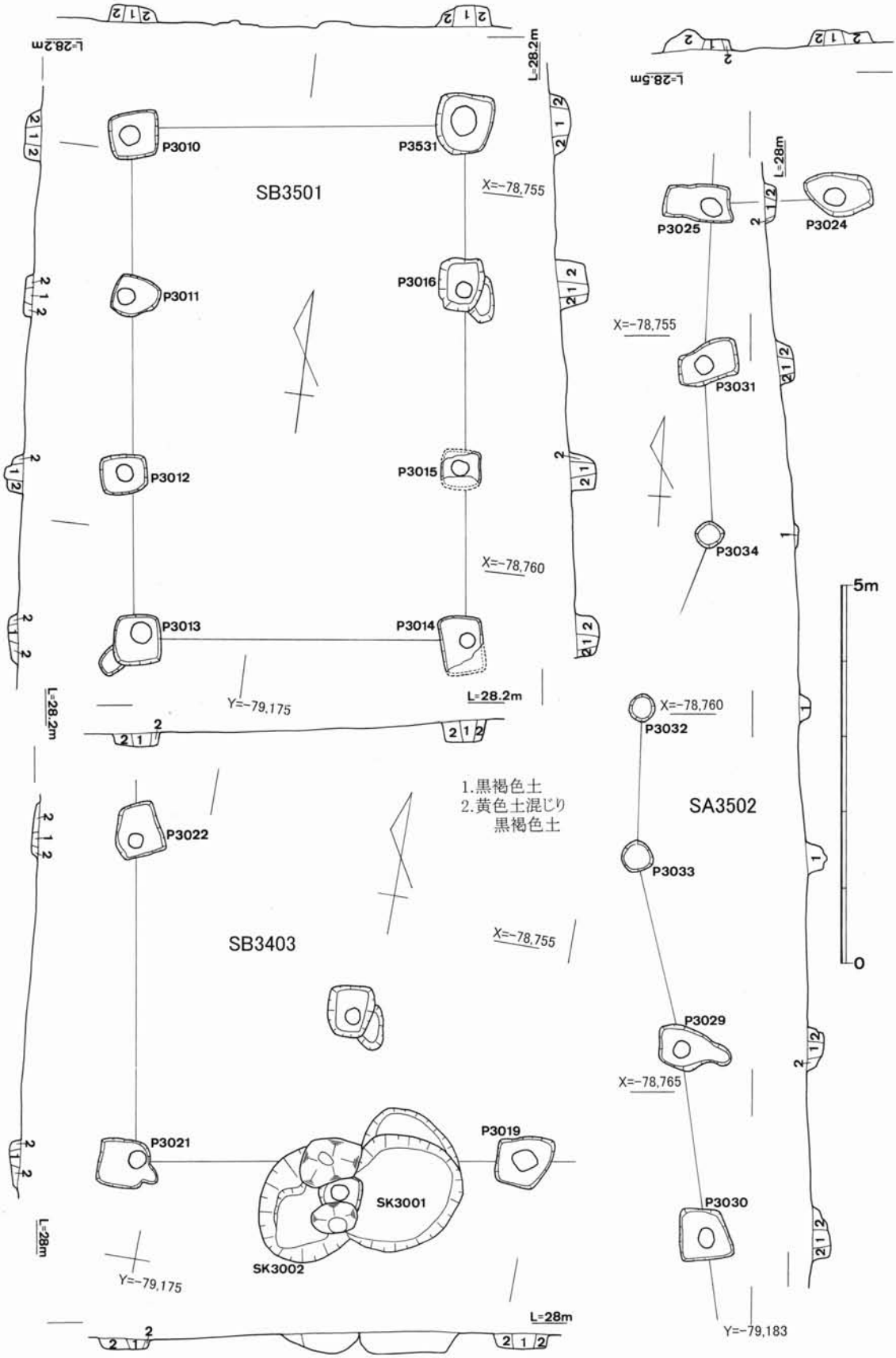
(1) ３地区（第38～40図、図版第27－(2)～28－(3)）

３－５地区

平成15・16年度の２か年にわたって発掘調査を実施した３－１～４地区の南西側に位置している。平成16年度に確認した奈良～平安時代の掘立柱建物跡群の南側への展開が当初から想定された地区である。調査地は東半部は平坦地と化し、西側へ向ってゆるやかに登り勾配をもって平坦地を経て西端部で丘陵東辺の崖面と化する。昨年度の調査結果から、淡茶褐色土から上層は近・現代の堆積土であることが判明しているため、重機による掘削作業で上層を除去して、人力による精査を開始した。特に東側に広がる黒褐色土は通称「丹波黒ボク層」に相当し、最大約90cmの厚さで堆積し、多くの遺構・遺物が存在する土層でもあるが、土層中での遺構検出に当たっては難儀が推定された。今年度の調査では上・中・下層に任意で３分割して遺構・遺物の検出に努力したにも拘らず、遺物の出土は認めても柱穴や土坑などの遺構を確認できず、地山面である黄色粘土層・砂礫土層上面での検出となった。既述したように東側に向って緩斜面をなすが、西端部では本来斜面地であったところを削平して平坦地に造成し、その際の土砂と東側の淡茶褐色土の上面に再堆積させて、平坦地を拡張した。それは黒褐色土など遺物、包含層が西側平坦面には存在せず、傾斜面から東方に向って、同層が厚くなることからも信証できる。以下、検出した顕著な遺構を列挙する。

掘立柱建物跡ＳＢ3501（第40図、図版２－(2)）　調査地東側で確認された東西１間×南北３間の南北棟である。身舎の柱間は東西が4.8m（16尺）で、南北のそれは2.1m（７尺）等間である。柱穴は一辺0.6～0.8mの堀形をもち、柱の直径は0.2～0.3mを測る。検出した深さは0.1～0.4mで一定していない。妻部の間柱は、攪乱によるものか、元来存在したが浅かったため黒褐色土中で留まり確認できなかったが、あるいは存在しなかったのか、南北辺とも検出していない。

東部の柱列は、北からＰ3531、Ｐ3016、Ｐ3015、Ｐ3014となる。Ｐ3531は、東西0.75m、南北0.8mで、深さ0.26mを測り、北西隅は、第３次調査で検出した掘立柱建物跡ＳＢ3042の南西隅庇部の柱穴Ｐ3330で上面が壊れている。検出した柱の直径は0.3mである。Ｐ3016は、東西0.6m、南北0.7mで、深さ0.4mである。検出した柱の直径は0.24mで、柱の位置が南側に偏する。Ｐ3015は東西・南北0.25mの正方形で南・北辺とも後世の攪乱により形状を止めていない。深さは0.35mである。検出した柱の直径は0.2mである。Ｐ3014は、東西0.56m、南北0.6m以上で、深さ0.34mである。柱穴の堀形の南辺は調査地外へ続く。検出した柱の直径は0.22mである。



第40図　掘立柱建物跡ＳＢ3501・3403、柵跡ＳＡ3502実測図

西平部の柱列は、北からＰ3010、Ｐ3011、Ｐ3012、Ｐ3013となる。Ｐ3010は東西0.65m、南北0.62mで深さ0.24mを測る。検出した柱の直径は0.25mである。Ｐ3011は、東西0.65m、南北0.55m、楕円形に近い形状をなす。深さは0.12mである。検出した柱の直径は0.24mである。柱の位置は西方に偏する。Ｐ3013は、東西0.66m、南北0.5mで、深さ0.28mを測る。底面は二段掘りにより柱部がより深くなる。Ｐ3012は、東西0.64m、南北0.68mで、深さ0.16mを測る。検出した柱の直径は0.28mで、北東側に偏して位置する。土師質皿の小片が出土した。

掘立柱建物跡ＳＢ3403（第40図、図版第28－(2)）　調査地の東側で前述した掘立柱建物跡ＳＢ3501に重複するかのように確認された。桁行9.0m（30尺）、梁間6.6m（22尺）を測る東西棟である。検出した柱穴は建物跡の南西部に相当し、身舎の柱間は東西約2.7m（９尺）で、南北4.2m（14尺）等間である。柱穴は一辺約0.6～0.8mの堀形をもち、柱の直径は約0.2～0.3mを測る。検出した深さは0.1～0.2mで一定しない。南辺の間柱は近～現代の攪乱により形状などは不明であるが、切り合いのわずかな残存土壌などから、この地点に柱穴を想定して大過ない。

南平部の柱列は西からＰ3021、不明、Ｐ3019となる。Ｐ3021は、東西0.7m、南北0.66mで、深さ0.16mを測る。検出した柱の直径は0.16mである。Ｐ3019は、東西約0.8m、南北0.66mで、深さ0.22mを測る。検出した柱の直径は0.3mである。土師質皿の小片が出土した。

西妻部の柱列は、南からＰ3021、Ｐ3022となり、それ以外の柱列はすでに報告したので、ここではふれない。Ｐ3021は、東西0.6m、南北0.68mで、深さは0.1mである。検出した柱の直径は0.18mである。身舎の主軸は東へ７°偏する。

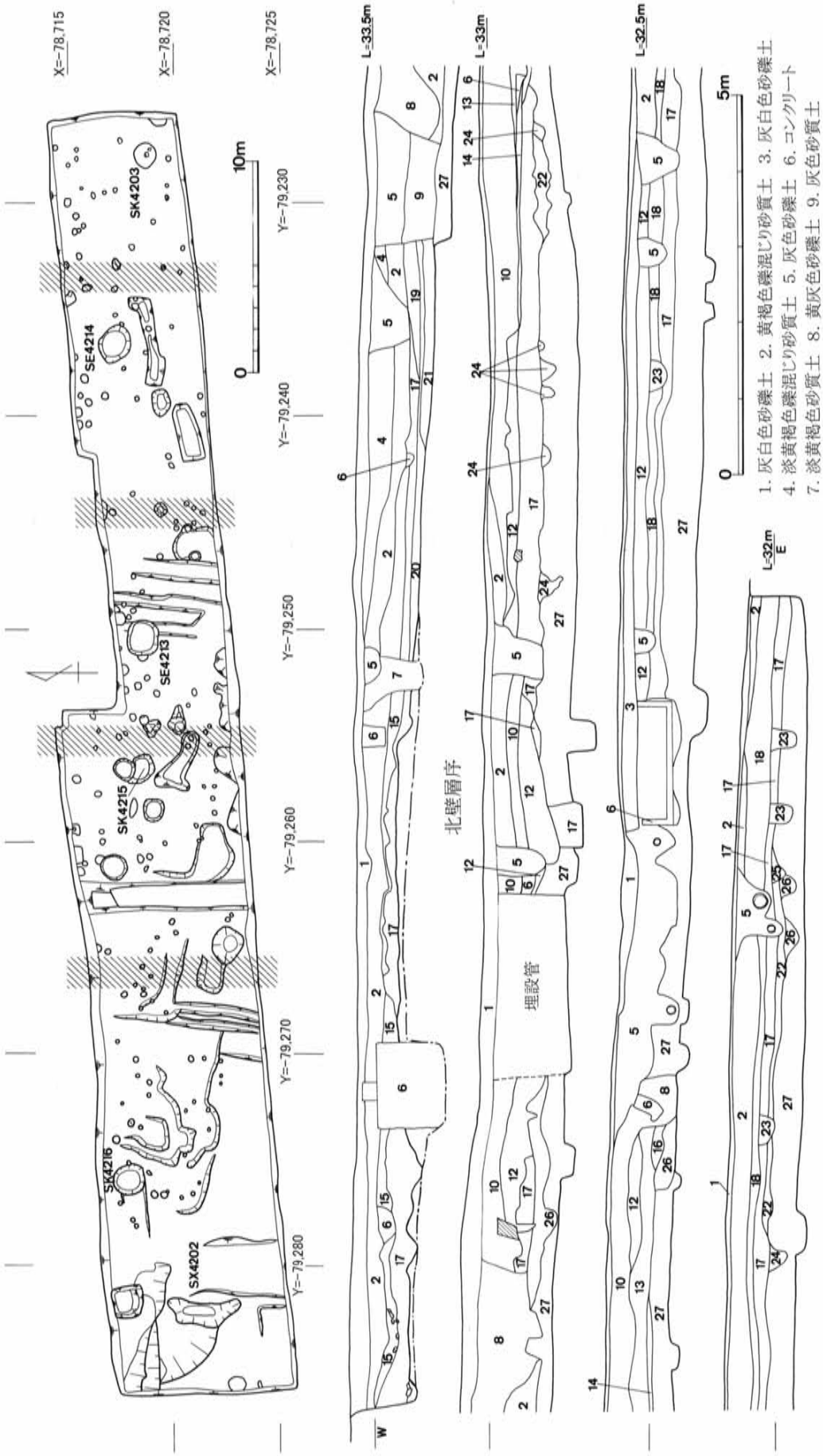
柵跡ＳＡ3502（第40図、図版第28－(1)）　調査地のほぼ中央部で検出した南北走する柱穴列で、北側で一間分東方に張り出す。南側は調査地外へのびる。柱穴は、中央３か所が円形で、ほかは長方～方形を呈する。Ｐ3030は、東西0.65m、南北0.7mで、深さは0.22mである。検出した柱の直径は0.2～0.3mと若干楕円形である。Ｐ3029は、東西0.95m、南北0.65mで、深さ0.24mを測る。検出した柱の直径は0.22mである。土師質皿の小片が出土している。Ｐ3032～Ｐ3034はいずれも円形で直径0.3～0.4mで、深さ4～25cmである。Ｐ3031は、東西0.8m、南北0.5mの長方形を呈し、深さ0.22mを測る。柱の直径は0.22mである。Ｐ3025も、Ｐ3031と同規模であるが、柱の位置が東に偏する。Ｐ3024は、東西0.9m、南北0.6mの楕円形を呈し、深さは0.2mである。柱の直径は0.24mを測る。この柱穴列は、本来の地形の傾斜地から平坦地化する変換点に展開していることから考え、掘立柱建物跡群の西限を画する柵跡と把握して大過ない。柵跡ＳＡ3401に北方での接続も推定できる。

上記、奈良～平安時代に属する遺構のほかに、土坑、溝、ピットなどがあるが、大部分は近代以降の構築物に伴うものである。ただ淡茶褐色土を形成する江戸期の文化面ではない小形ピットや0.12m四方の花崗岩製基礎を20数か所確認したが、江戸時代の建物を復原できていない。

(2)　４地区

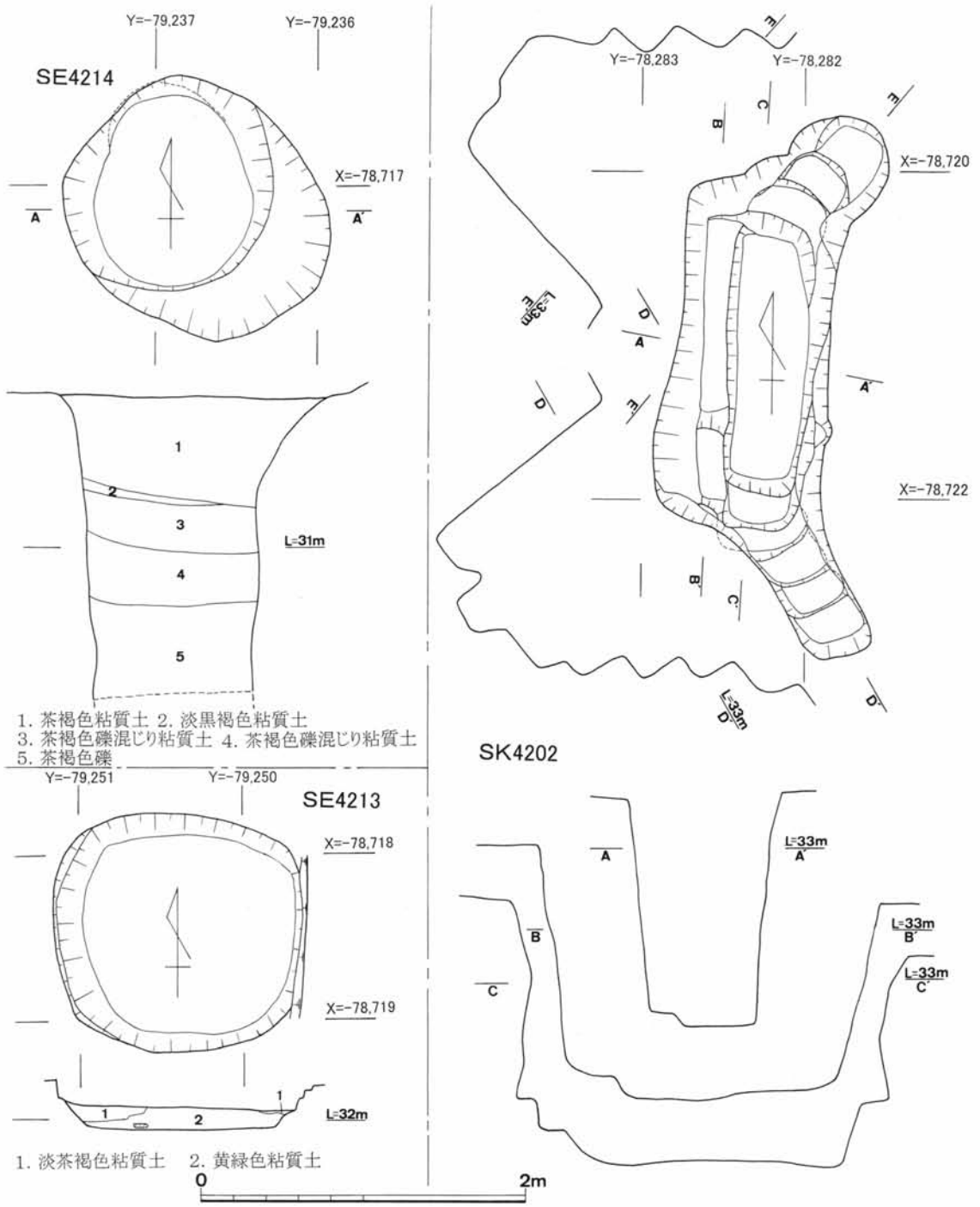
４－３～５地区（第41・42図、図版第29）

第３次調査でピットや弥生土器片などを検出した３本のトレンチを南北に拡張し東西に連絡さ



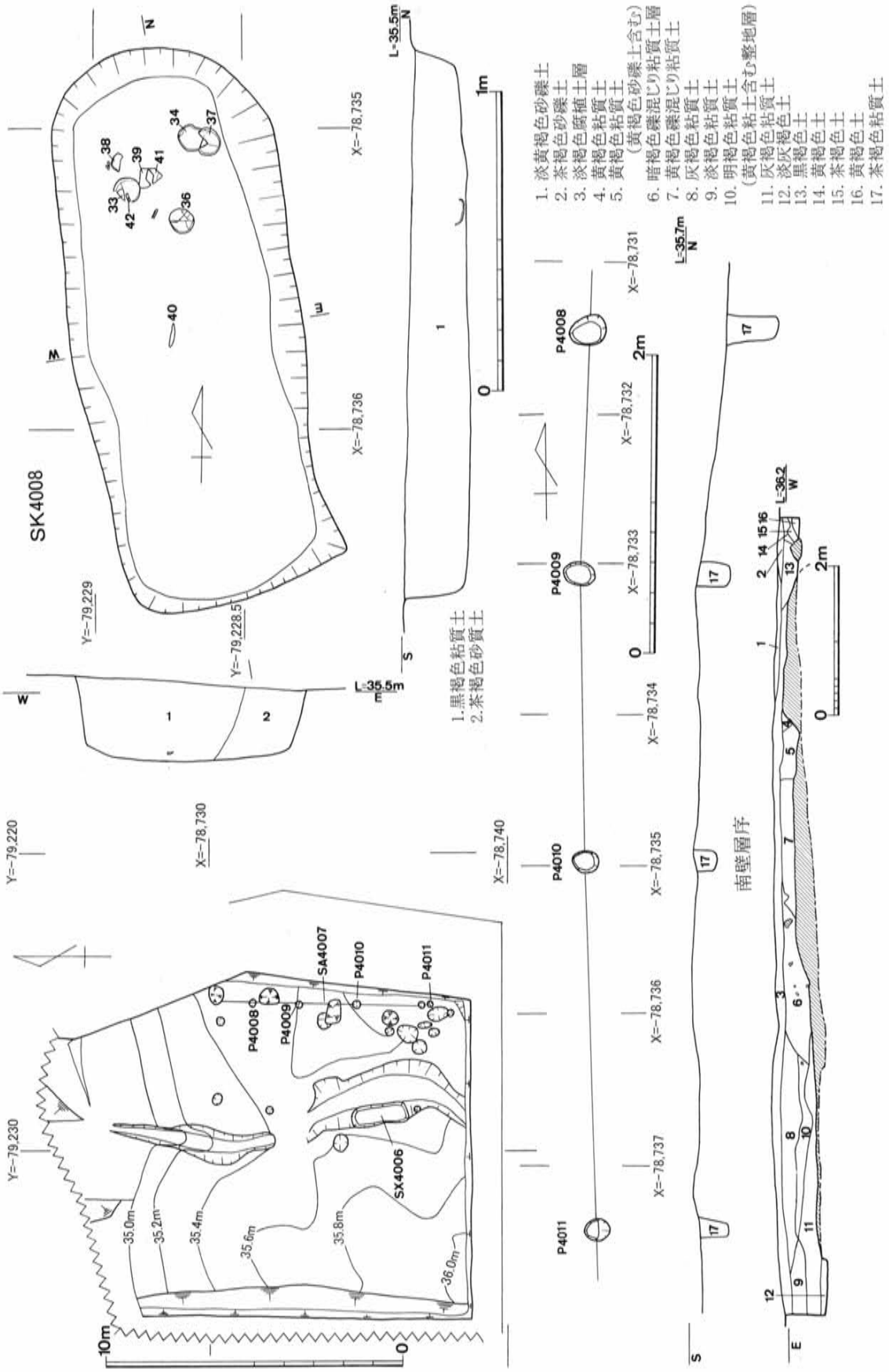
1. 灰白色砂礫土　2. 黄褐色礫混じり砂質土　3. 灰白色砂礫土
4. 淡黄褐色礫混じり砂質土　5. 灰色砂礫土　6. コンクリート
7. 淡黄褐色砂質土　8. 黄灰色砂礫土　9. 灰色砂質土
10. 黄白色粘土　11. 灰褐色粘質土　12. 濃灰色粘質土　13. 濃灰色粘性砂質土　14. 黄褐色砂質土　15. 茶褐色礫混じり砂質土　16. 暗灰色礫混じり砂質土　17. 淡茶褐色砂質土
18. 淡茶褐色砂質土　19. 明茶褐色砂質土　20. 黄褐色砂礫土　21. 黄白色粘土　22. 濃黒褐色砂質土　23. 淡褐色砂質土　24. 淡褐色砂質土　25. 暗黒褐色砂質土　26. 濃黒褐色砂質土
27. 黒褐色土

第41図　4・3－5地区遺構配置図・土層断面図



第42図　井戸ＳＥ4214、土坑ＳＫ4213、不明土坑ＳＸ4202実測図

せた調査区である。自衛隊福知山駐屯地の北端直下に位置し、南側の大部分が丘陵傾斜面を削平して、平坦地を造り出し、東端部が、観音堂と後述する４－６地区が北東に張り出し、旧地形を残している。調査地の地山面は南および西に向かって高くなり逆に北・東方向に下降する。そのことは西南方向の丘陵傾斜面を広区より低く削平されたことになる。そのため、調査地南半部および西側約25m域には遺物包含層である黒褐色土は全く堆積しておらず、国道９号線建設時での堆積土や構造物、また削平され平坦化した平地には現代の家屋が建築されたため、それに伴う土坑・ピット、攪乱坑が多く見つかった。それに反し北・東側に横たわる。黒褐色土の上面に薄茶



第43図　4－6地区遺構配置図・土坑ＳＫ4006・土層断面図

褐色土が0.2m堆積している。この土層は３－５地区での淡茶褐色土に対応し、出土遺物から見て江戸時代に形成されたと考えられる。

既述したとおり、黒褐色土層内での遺構検出は困難を極め、最終的には地山面で以降検出に到った。遺構としては、円形井戸、円形土坑、溝、風倒木坑、溝、ピットなどであるが、ピット以外は、江戸時代に掘削、構築されたものである。第３次調査においても同様、今次の調査でも弥生土器(第63図43)が出土した土坑があり奈良～平安時代の土師器片や須恵器片、鎌倉時代瓦器椀片を含むピットも多く認められるが、散在するに過ぎず、構造物を設定するには到らなかった。むしろ、主に淡茶褐色土を埋土とする遺構が顕著である。

井戸ＳＥ4214(第42図)　調査地の東方で検出された円形土坑で、直径約1.3mで、深さ1.8m以上を測る。二度にわたり掘削された後に放棄されたようである。放棄に当たっては、恐らくは木製井戸枠を抜き出した模様で、東南部の井戸壁が約0.7m×1.2mの傾斜面となっていた。埋土は、茶褐色土、淡黒褐色土、茶褐色混礫土、茶褐色混礫粘質土、茶褐色礫と、下位に向かって堆積していた。茶褐色礫より下位は危険防止のため掘削を中断したが、少なくともボーリング調査では１m以上礫層が続いている。土坑の真中には約0.1mの空洞を深く検出した。これは埋設時での抜き孔と思われる。出土遺物は茶褐色礫内から陶器片・磁器片の各1点があり、江戸時代の後期に属する。規模から見て井戸として機能していたと思われる。

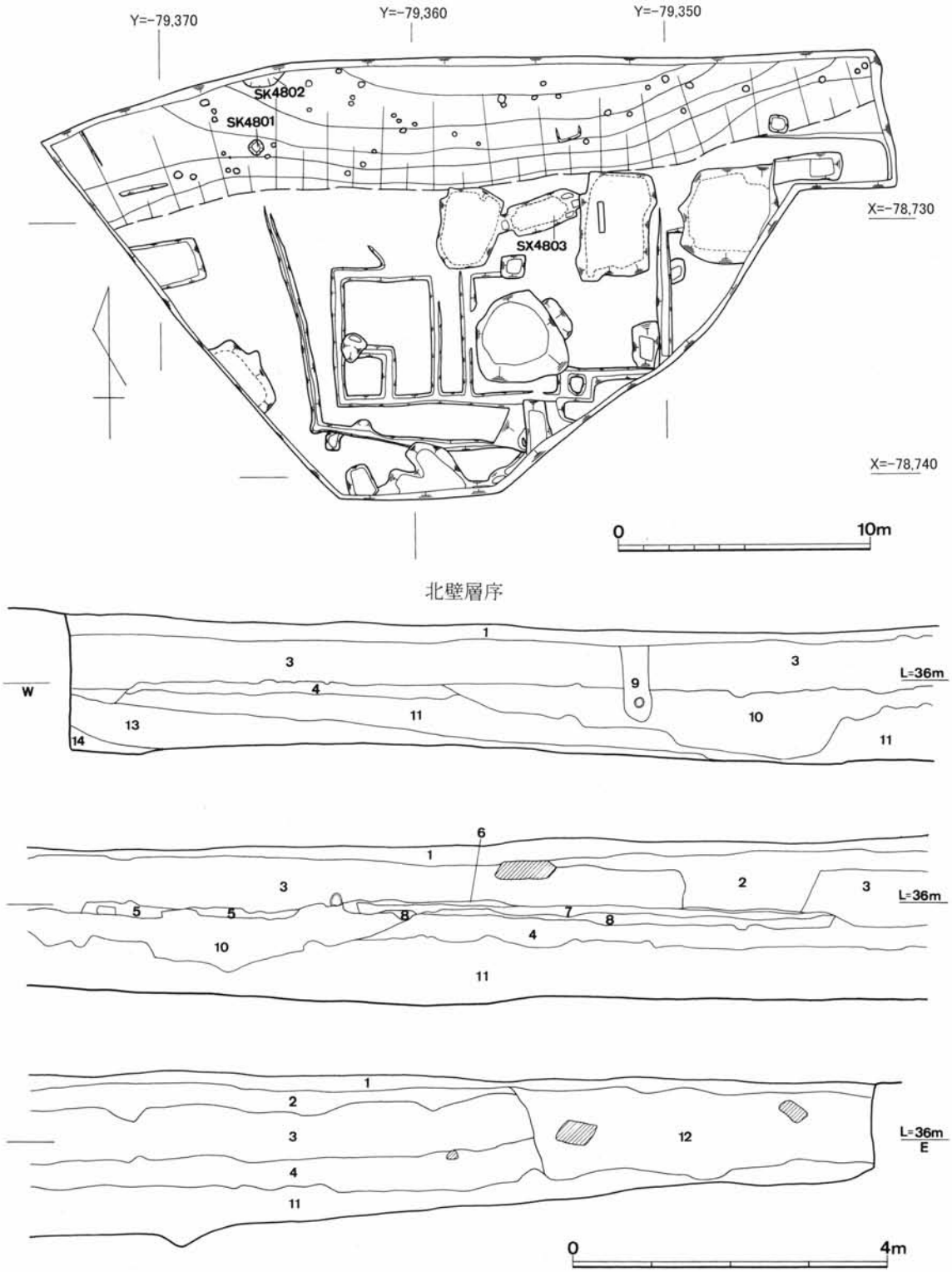
円形土坑ＳＫ4213(第42図)　調査地中央部で検出された隅丸方形土坑である。東西1.6m、南北1.4mで、深さ0.3mを測る。上面を薄茶褐色土が覆い、下位に黄緑色を有する。無遺物であるが、上面の埋土から、井戸ＳＥ4214と同時代に比定できる。

土坑ＳＫ4202(第42図)　調査地西端で検出した。南北長の不定形土坑である。南北２m、東西１mの長方形土坑で、北東隅に４段、南東隅に５段の階段を設ける。底面は平坦で0.4m×1.5mの広さで、土坑は二度掘りされていた。深さは1.5mを測る。埋土は淡黄褐色砂質土で、地山の再堆積土と思われる。無遺物である。近～現代の貯蔵穴か、防空壕かと思われる。

このほかに土坑ＳＫ4215や土坑ＳＫ4216があるが、いずれも円形を呈し、埋土は淡茶褐色土であり、井戸ＳＥ4214、円形土坑ＳＫ4213と同一時期と推定できる。こうした淡茶褐色土を埋土とする大小のピットが調査地内に点在し、南北方向に集中する４列を抽出できる。あるいは簡単な塀や垣根の痕跡とも解釈できる。江戸期における屋敷地割と関係するかもしれない。

４－６地区(第43図、図版第30・31)

第４調査区の東端南側に比高差約４mをもって高位置に設定された地区で、南側はさらに1.5m高くなって、近世の石仏群をも安置する観音堂がある。北・東西は石垣で囲まれ、一見神聖な場所かと想像させる。北方に向ってゆるやかに下降する地形で、元来の丘陵北端の傾斜面である。第３次調査時で、調査中央を南北走する溝状遺構を検出していた。平坦地を全体に拡張して発掘調査を行った結果、南西方に地山が高くなり、東側は低くなるが、東側とて、江戸時代に平坦地と化するために再堆積させて土層で被われていた。中央は南北走する溝状遺構が北方に水が流れるように徐々に低くなっている。遺構は、その溝状遺構の南端寄りで長方形土坑ＳＸ4006が、そ



1. 灰白色砂礫土　2. 明茶褐色砂礫土　3. 明黄褐色砂　4. 茶褐色砂質土　5. 茶褐色砂礫土　6. コンクリート
7. 黄白色礫　8. 黄灰褐色砂礫土　9. 黄褐色砂礫土　10. 茶褐色砂礫土　11. 黒褐色土　12. 茶褐色砂礫土
13. 茶褐色粘性砂礫土　14. 淡茶褐色粘質土

第44図　4－8地区遺構配置図・土層断面図

の東側3.5mをもって南北に点在するピット群を確認した。また東南隅でも円形～楕円形土坑を検出したが、いずれも江戸時代以降に属する。

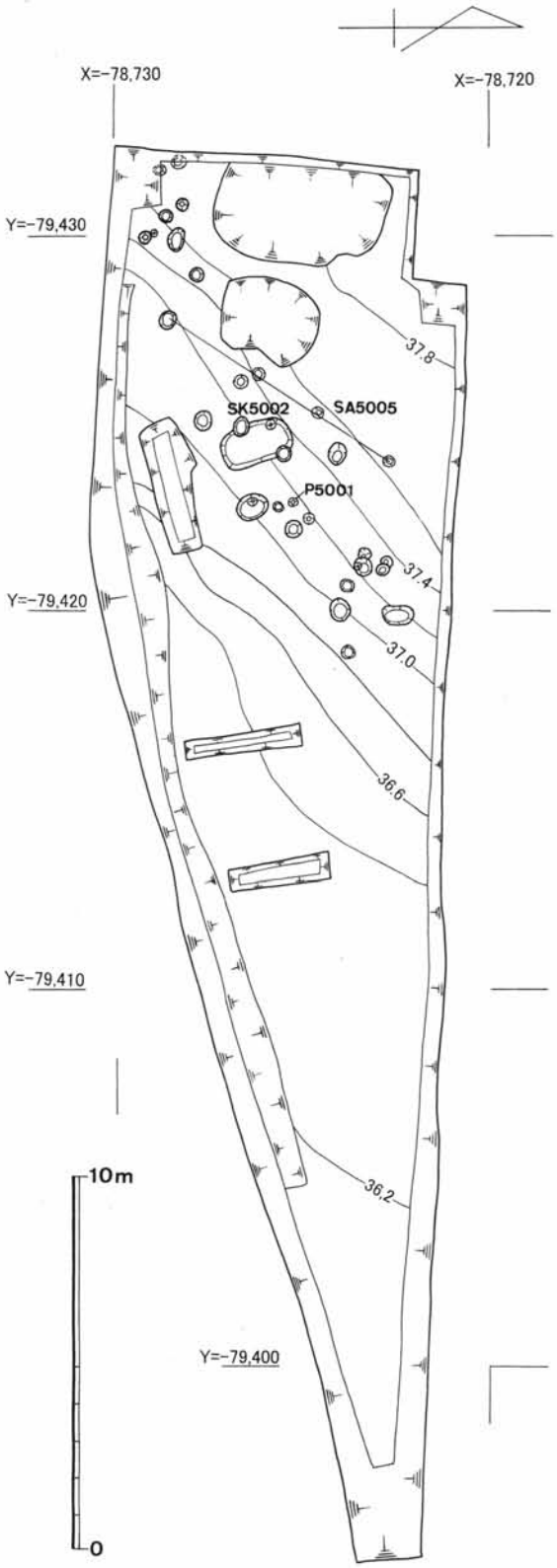
土坑ＳＫ4006(第43図、図版第31－(1)・(2)、同第46)　南北長上面で1.87m、同底面で1.75m東西長上面で0.8m同底面0.6mを測る。平面形は若干丸みを帯びた長方形である。底面は中央部が0.05m低くなるが、ほぼ平坦である。深さは0.2mを測る。埋土は、西方に偏して0.5m黒褐色粘質土で、更に東壁までの間隙は茶褐色粘質土である。これは西壁に沿って器物を埋置してその東側を埋土で補填したものと考えられる。木材などの痕跡は検出できなかったが、上記の様相から西側に何らかの構造物が存したものと推定できる。底面北側には、底面に張り付くかのように0.03～0.05mの空間をもって小形土師質皿が２枚北東側に、西側２枚、中央に１枚あり、その間に中国製陶磁器片が鉄製小形刀子１点とともに配されている。また西側の土師質皿には三分割になった「U」字形鉄製品があり、土坑中央部には南方に向けて鉄製小形刀子１点存していた。なお土師質皿１枚は西側のそれと下方の鉄製刀子との中間点付近から出土した。これらの遺物の配置状況や土坑の規模から、恐らくは墓坑と推考でき、土師質皿や中国製輸入陶磁器から鎌倉時代に造営された中世墓と推定できる。墓坑主軸は西方に10°偏し、北部付近に土師皿を中心とした遺物類を、腰部に鉄製刀子を配したものであろう。

柵跡ＳＡ4007(第43図下、図版第31－(3))　調査地の東片に沿って南北方向に検出したピットである。直径0.15～0.2mの円形ピットを４か所に穿ち、各々深さを異にし0.15～0.35mを測る。茶褐色粘質土が埋土である。南北方に一列を成すが、各ピット間の距離は一定していない。主軸は西方に２°偏す。埋土からの出土品はない。埋土から土坑ＳＸ4006と同時代に比定できる。

４－８地区(第44図、図版第32)

第４調査区の西端に位置し、その西側を南西方向に丘陵傾斜面を登る旧道が走る。現状は平坦地であるが、北・東側が石垣を1.0～1.5m積み上げて盛り上げ平坦化を計っている。標高は36.8mを数え、４－６地区より約１m以上高いが、遺構検出面は大差ない。第３次調査時に傾斜面でピットが確認され、谷状地形の一部に相当することが指摘されていた。出土した土師器・瓦器・須恵器の小破片から遅くとも中世段階で浅い谷状地形と化したとも考えられた。試掘トレンチを西・南両方に拡張して、上面より約１m下位まで重機による掘削を行った後、人力により徐々に掘り下げ精査を実施した。その結果、中位層である茶褐色土層より上位層はすべて現代の再堆積で、部分的に再堆積をさらに掘削して瓦礫を掘り込んだ痕跡もある。表面は家屋の立ち退き後に整地した灰褐色砂礫土が全面を被っていた。茶褐色土は４－３～５地区の淡茶褐色土に対応し、江戸時代に堆積したものである。調査区の南半部は平坦地で、径３～４mの方形や円形の攪乱土坑が1.0～1.5m穿ち、土坑内にコンクリートや木材片・礫などが遺棄されていた。また方形に区画された溝状遺構には塩化ビニール管がされ、旧宅家の何らかの配水管の敷設であろう。遺物包含層である黒褐色土層は北方に厚く堆積し、地山面上に河原石を埋置した直径0.8mの土坑ＳＫ4801・4802やピット群があるが、構築物や時代を特定する資料は得られなかった。谷状地形を再確認するに留まった。

(松井忠春)



第45図　５－１地区遺構配置図

(3) ５地区

遺跡の中央部に設定した調査区である。５地区は南北にのびる丘陵地形の丘陵頂部とその東側傾斜地に位置する。調査区は、東西２か所に分け、丘陵頂部に５－１地区を設定し、丘陵傾斜地に５－２地区を配した。

５－１地区(第45図、図版第33)

５－１地区は、北西から南東にかけて大きく傾斜し、約２ｍの比高差をなす。全体に、北西部では後世の削平が著しいが、東から南西にかけては、遺物包含層が残存している。調査区中央部では、近現代の盛土を除去すると、近世遺物を包含する約0.3～0.4ｍの厚さを測る黒褐色粘質土層があり、その下層で弥生時代後期後葉の土器や７世紀前半の須恵器を包含する約0.2ｍの厚さの茶褐色粘質土層を検出した。遺構は、西部の傾斜地から土坑および柱穴群を検出した。南東部は低湿地でシルト層が堆積していたが、断割調査を行い、表土下約1.7ｍでベース面を確認した。東端では湧水がみられ、有機物を多く含む堆積層を検出した。

柵列ＳＡ5005(第45図)　調査区西部の傾斜面で検出した柵列である。柱間は、約2.6～3.0ｍを測る。柱穴から土師器片が出土しているが、細片のため、時期は不明である。

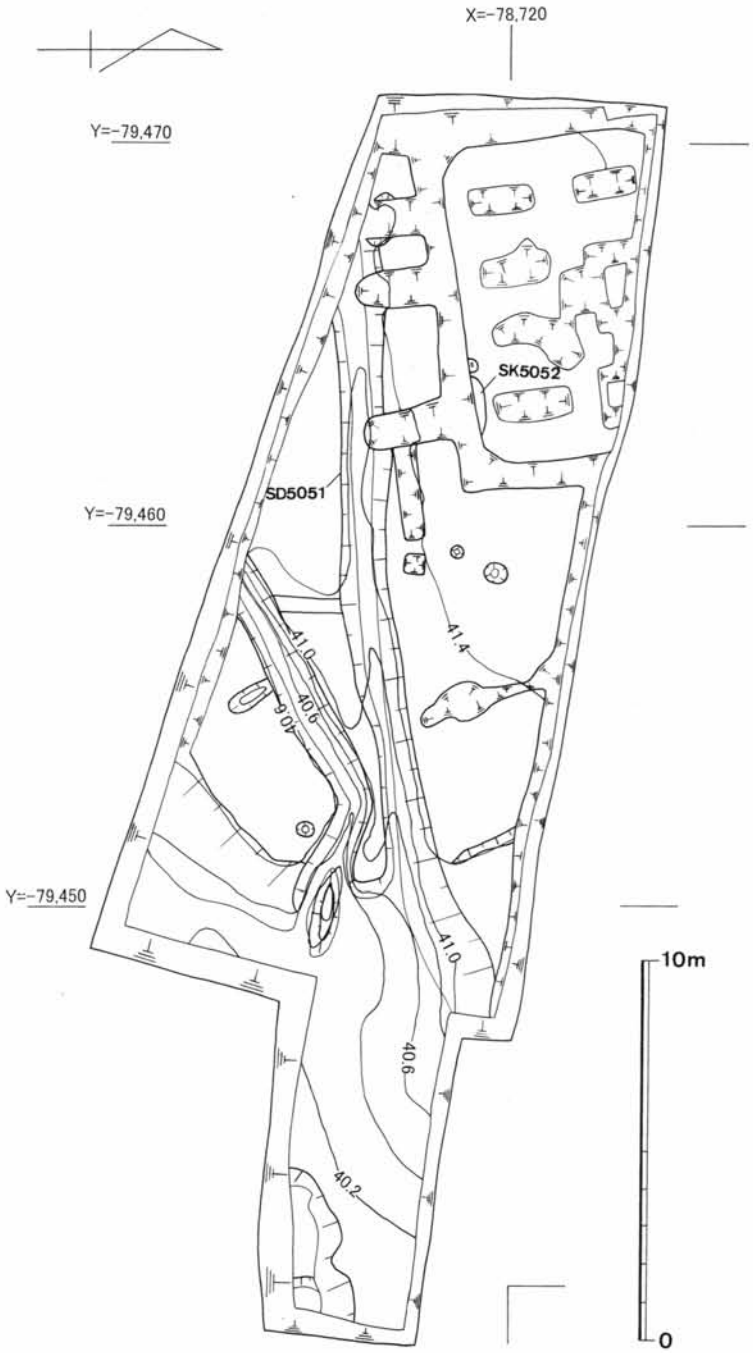
西部柱穴群(第45図)　地区西部の傾斜地で検出した柱穴群である。建物跡としてまとまりをもち、復原できるものはみられない。

土坑ＳＫ5002(第45図)　調査区中央

西寄りで検出した土坑である。平面形は方形を呈し、規模は、約2.0m×1.1m、深さ約20cmを測る。出土遺物はなく時期は不明である。

５－２地区（第46図、図版第33－(1)、同第34－(1)・(2)）

５－２地区は、５－１地区西側に隣接して設定した調査区である。調査区の東端は急な傾斜面をなすが、調査区西側は４地区南側の丘陵部へと続く安定した高台である。この一帯は明治時代には旧陸軍福知山連隊の駐屯地があり（現陸上自衛隊福知山駐屯地）、周辺の地形は大きく明治期の改変を受けている。調査区西部は、攪乱が多く認められるが、これらは旧陸軍関係の施設建設に伴うものである。遺構面は著しく削平を受けていたが、攪乱坑の間に遺構面を確認し、土坑、柱穴を検出した。柱穴からは土師器片が出土しているが、時期を確定できる資料ではない。また中央部では、江戸時代の溝状の遺構を検出した。

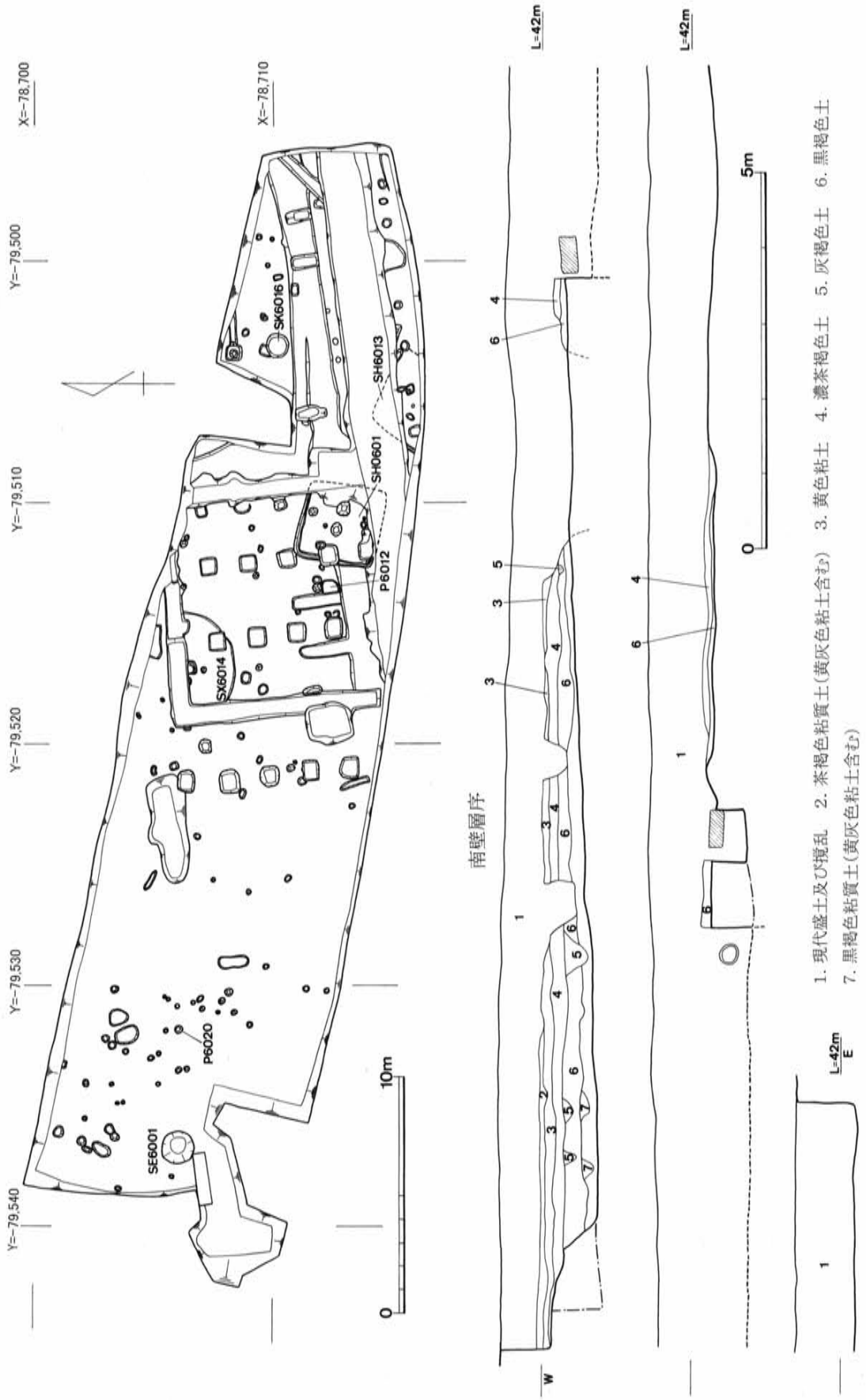


第46図　５－２地区遺構配置図

溝状遺構ＳＤ5051（第46図）

西から北東に向けて掘削された溝状の遺構である。幅1.2～1.4mを測り、長さ約17mにわたって検出した。遺物は、天目茶碗や染付などの土器片が出土し、江戸時代に帰属するものとみられる。江戸中期の福知山城下絵図では、この周辺に丘陵を北東に斜めに下り、福知山城へ至る道が描かれており、こうした溝状遺構が対応する可能性がある。

（高野陽子）



第47図　6地区遺構配置図・土層断面図

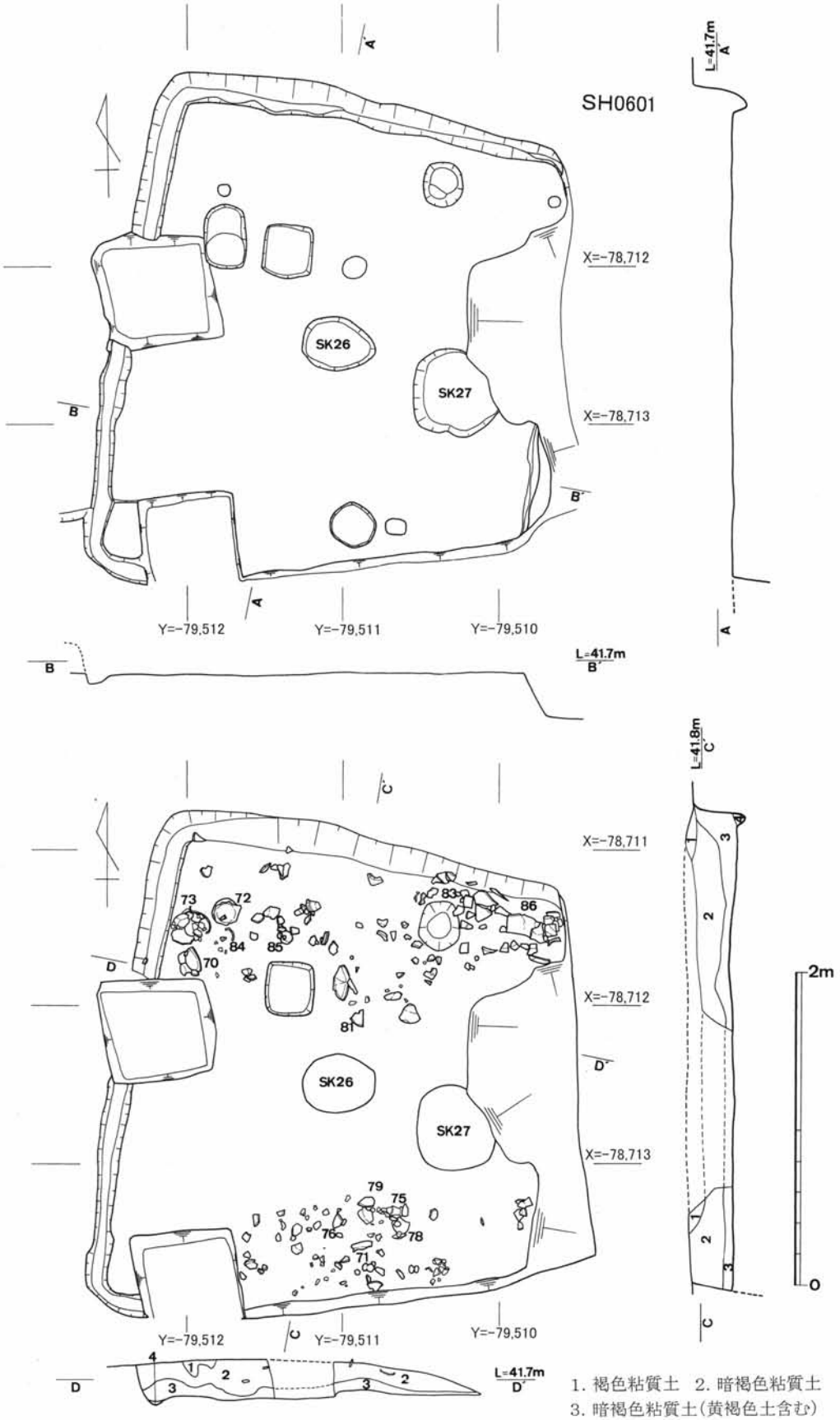
(4) **６地区**(第47図～14図、図版第35・36)

本遺跡が立地する丘陵の最高所に前述した５－２地区とともに位置する調査区で、標高43mである。国道９号線下り線から緑ヶ丘町に通ずる江戸時代の福知山城下絵図にも描写されている旧道を登り切ると、丘陵の頂部にでるが、現在は福知山市の市街地土地区画整理事業により区画された住宅街と化し、平坦地が広がる。また、調査区の西端域は、遺跡地図に記載されている岡ノ遺跡の西限域に該当する。発掘調査は、平成15・16年の２か年にわたり２か所の試掘トレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認した。平成15年度の第２調査では、コンクリートなどが地下深く存在し、地山直上で時期不明のピットを数か所検出するに止まった。しかし、平成16年度の第３次調査では、上層での近現代の構築物の基礎坑などで堆積土が大きく削平・攪乱を受けていたにもかかわらず、弥生時代後期の方形竪穴式住居跡１基やピットなどを検出した。その調査成果から推して、６地区には遺構・遺物がさらに展開しているものと推定された。

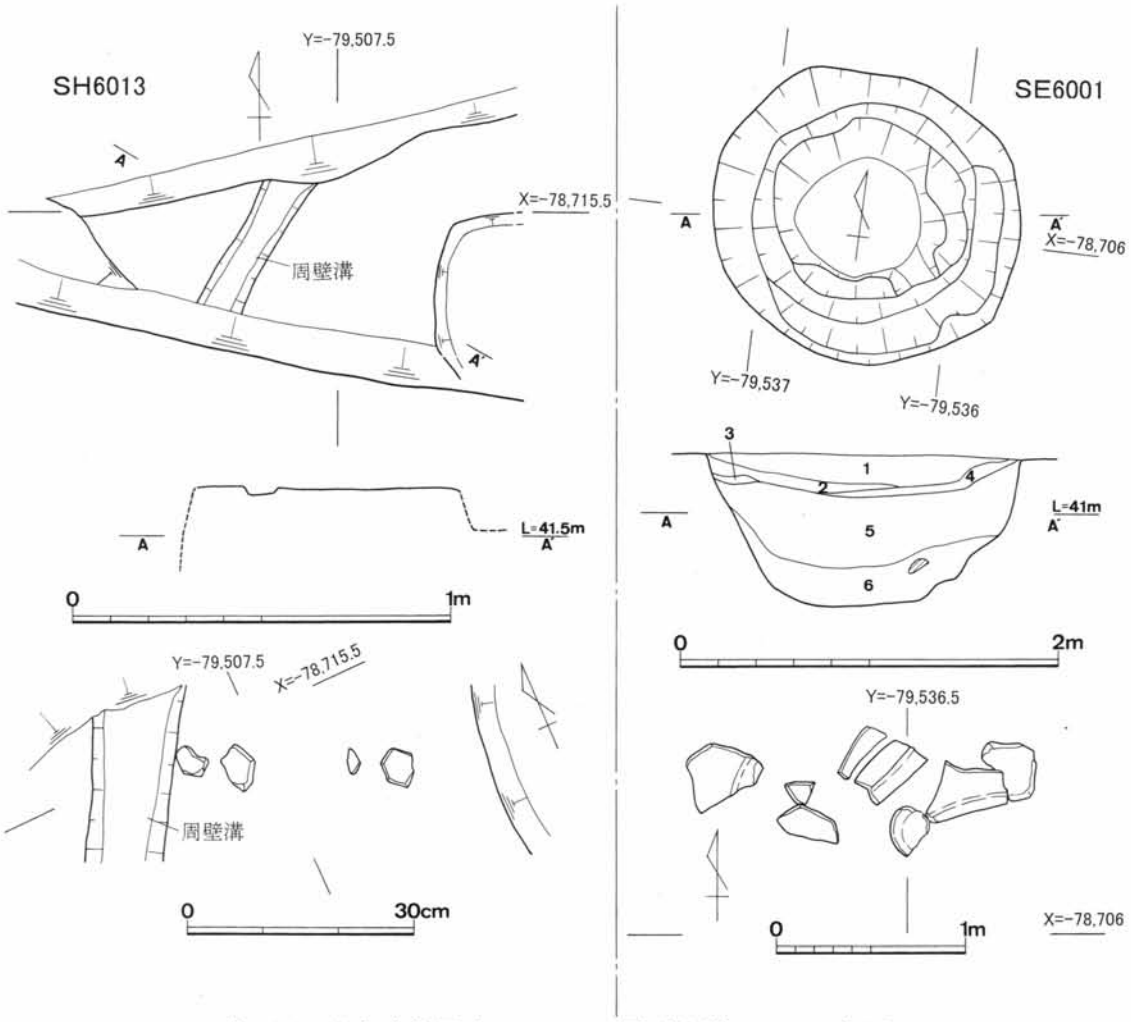
発掘調査は、２度の試掘結果に基づき、地表下約0.7mまでを重機で土砂の除去作業を行った。調査区の東側約30m域は地山の黄褐色粘土上面まで全ての堆積土が削平・除去されていた。同西側は、地山土の削平再堆積土である黄褐色粘土層以下、部分的に攪乱坑などがあったが、比較的地山直上は黒褐色土が西方に向かって徐々に厚さを増しつつ広がり、安定した層序を成していた。調査区中央を方形に廻る側溝があるが、東西９m×南北９m以上を測り、深さ約0.6cmである。側溝内は、河原の円礫を充填させ、暗渠としてその上面にコンクリートを盛って建物の基礎としていた。また、この方形側溝に先行して、東西４間×南北５間以上の建物が構築されていた。方形柱穴には、赤煉瓦と砂利を使用しており、攪乱坑などにも赤レンガが多く認められた。これらは、近代以降の陸軍歩兵福知山連隊時の建物跡と推定され、建て替えたことを裏付けている。隅丸方形柱穴の規模は0.3m四方で、深さ0.5mで、柱間は、約0.99mである。また調査区の東南側に幅約0.7mの側溝が東西方向に穿たれている。深さ１m以上で、４mにも達すると当時の工事関係者の言である。この地点が遺跡として認識される直前までの土木工事による側溝である。こうした近現代の構築物によって大きく攪乱された後に、福知山市営住宅が建造される際、平面的にコンクリート基礎が敷き詰められたようである(第47図層序参照)。

遺構は、調査区中央南側に偏して竪穴式住居跡(ＳＨ0601・6013)２基、調査区西方で円形土坑(ＳＥ6001)１基を検出した。そのほかにも多くのピット群を調査したが、いずれも何らの構築物を想定するには到らなかった。

竪穴式住居跡ＳＨ0601(第48図、図版第36－(1)・(2)、同第47)　調査区中央東南域で検出した一辺3.3mの方形竪穴式住居跡である、東辺は、近代の構築物建設時およびその後の攪乱行為、南辺は現代の大規模な埋設側溝により大きく破壊・消滅していた。周溝は北辺と西辺で検出した。北辺は東端部に南方に曲線を描くよう小さく屈曲し、また西辺南端部では、東方に隅丸状に湾曲していた。周溝の幅は0.1～0.2mを測る。深さは、0.05～0.1mである。住居内の堆積土は２層に２分できる。上層は、暗褐色土で、弥生土器の大多数は本層からの出土である。厚さ0.15～0.2mである。下層は黄色土混じり暗褐色土で、住居床面を被っていた。厚さは５～10cmを測る。



第48図　竪穴式住居跡ＳＨ0601土器出土状況実測図



第49図　竪穴式住居跡ＳＨ6013・円形土坑ＳＫ6001実測図

住居内には全面にわたり、弥生土器が埋没していたようであるが、住居内中央部を東西方向に幅0.8～1.0mの側溝が床面直上まで穿たれており、南・北２方向側に分離したかのような分布状況を示す。北側では甕類を、南側からは器台を検出した。また、サヌカイト製の石鏃１点も出土した。柱穴はなかった。

竪穴式住居跡ＳＨ6013(第49図左、図版第35－(3))　前述した竪穴式住居跡ＳＨ0601より東南２mに隣接し造出された竪穴式住居跡である。残存状況は極めて悪く、西辺周溝を地山面で検出したにすぎない。周溝は、幅0.2mで、深さ0.05mを測る。溝内は、暗褐色土が充填され、底面は平坦である。無遺物である。この側溝に近接して地山面上面に弥生土器片(甕の底部片)が貼り付いて出土した(第49図左下)。この側溝と土器の位置関係から、この住居跡は、東・南方側に広がっていたものと推定できる。

円形土坑ＳＥ6001(第49図右、図版第36－(3))　調査区の西方で検出した円形土坑で、直径上面で1.6m、底面で0.7mを測る。深さは検出面より約0.8mである。２～３回にわたり掘り返された結果、東・南側は段を成している。埋土は、暗褐色～黒褐色系の粘質土を中心に、焼け土や、炭、瓦質土器などを含んでいた。家屋焼失に伴い遺棄された井戸で、出土遺物から鎌倉時代に埋没したものと推定される。

(松井忠春)

(5) 7地区(第50図、図版第37・41)

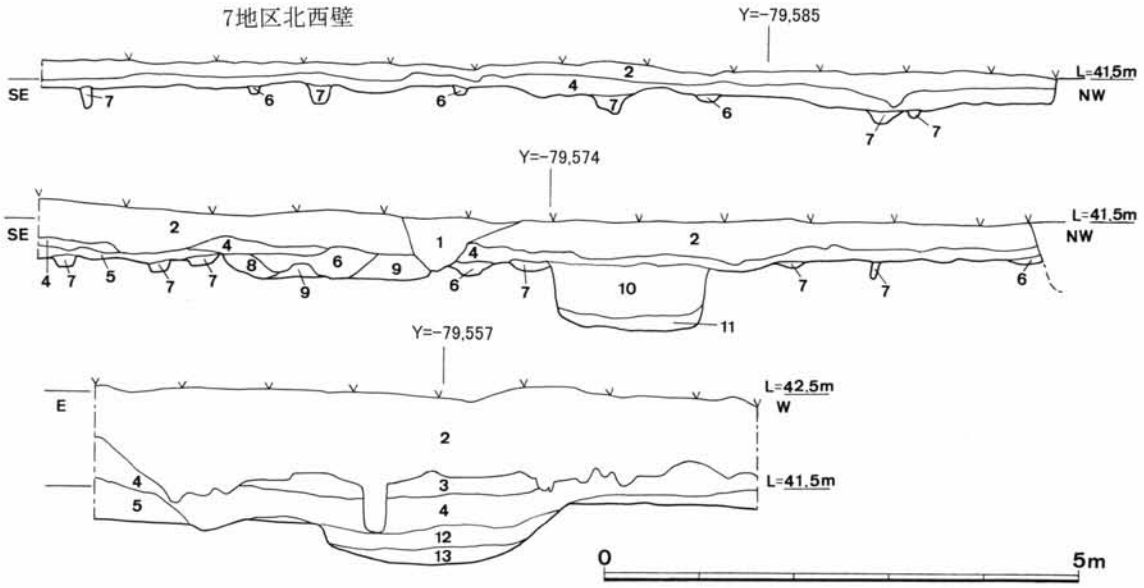
7地区は、調査対象地のなかで、西端に設定した地区である。周囲は、福知山盆地西部を一望することができる高台にある。

基本層序は、最上層に約0.2～0.5mの近現代の盛土層があり、その下層で厚さ約20cmの淡茶褐色粘質土を呈する近世遺物包含層を検出した(第50図)。調査区西部ではこの直下はベース面であるが、東部では中世遺物を包含する黒灰褐色粘質土層の広がりを一部検出した。

7地区では、平安時代から江戸時代初期に至る多数の遺構を検出した。弥生時代の遺構は認められないが、調査区西部の包含層中に弥生時代後期末の土器が含まれる。隣接する6地区で、同時期の遺構を検出していることから、集落は西側に広がるものと考えられる。平安時代の遺構としては、掘立柱建物跡2棟、井戸1基を検出した。鎌倉時代の遺構は、掘立柱建物跡1棟を確認したにとどまるが、建物跡としての復原が困難な柱穴群のなかにも、瓦器椀が出土したものがあり、さらに建物跡が存在したと考えられる。安土桃山～江戸時代初期の遺構は、調査区全域で確認され、掘立柱建物跡2棟、溝2条、柵列、井戸1基、土坑1基を検出した。

掘立柱建物跡SB7050(第52図、図版第38－(1))　調査区東部で検出した2間×1間の建物跡である。寸法は、桁行4.1m、梁間3.1mを測る。主軸は、N－64°－Eである。柱穴は、直径約0.5～0.6mを測り、一部は近世初期の遺構に削平される。柱穴埋土から、土師器が出土したが、時期を明確にするものではない。しかしながら、柱穴の形状や、埋土などから、平安時代の建物跡と推定される。柱の構造や規模から、櫓(矢倉)の可能性がある。

掘立柱建物跡SB7051(第52図、図版第38－(2))　調査区西部で検出した2間×1間の建物跡である。寸法は、桁行4.2m、梁間2.3mを測る。主軸は、N－69°－Eである。鎌倉時代の柵列



1.撹乱
2.近現代盛土層
3.茶灰色粘質土
4.淡茶褐色粘質土
5.黒灰褐色粘質土
6.暗黄灰色粘質土
7.黒褐色粘質土
8.黒灰色粘質土
9.淡黄灰色粘土
10.茶褐色粘質土(SE7052埋土)
11.黒灰色シルト混じり粘質土(SE7052埋土)
12.暗茶褐色シルト質粘質土(SD7021埋土)
13.茶灰褐色シルト質粘質土(SD7021埋土)

第50図　7地区北西壁・西壁土層断面図

に一部削平される。柱穴から遺物はほとんど出土していないが、規模や埋土などから平安時代の建物跡と推定される。

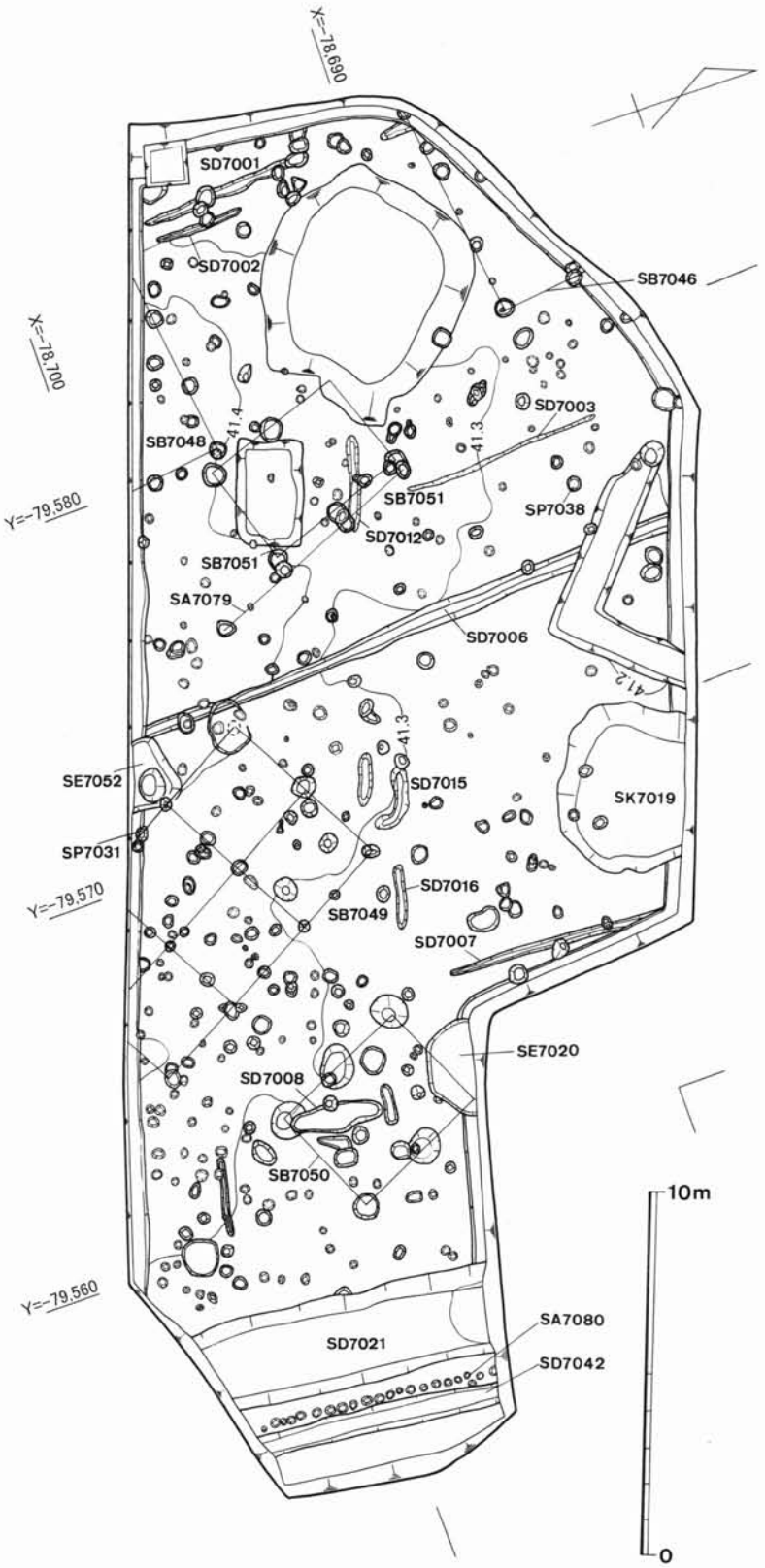
掘立柱建物跡ＳＢ7049（第53図、図版第37－(3)）　調査区中央南側で検出した３間×２間以上の建物跡である。柱間の寸法は、桁行2.7～2.9m、梁間2.4mを測る。柱穴から、瓦器片が出土し、鎌倉時代の建物跡と推定される。

井戸ＳＥ7052（第53図、図版第39－(1)）　中央部南側で一部を検出した。井戸の形状は、部分的な検出ながら、方形と推定される。掘形は二段掘りで、最大幅1.9mを測る。上層は大きく削平され、一段目の深さは0.7mを、２段目の深さは1.2mを測る。井戸の下層から須恵器壺の底部と人頭大の石材が出土した。出土遺物から９世紀頃の井戸とみられる。

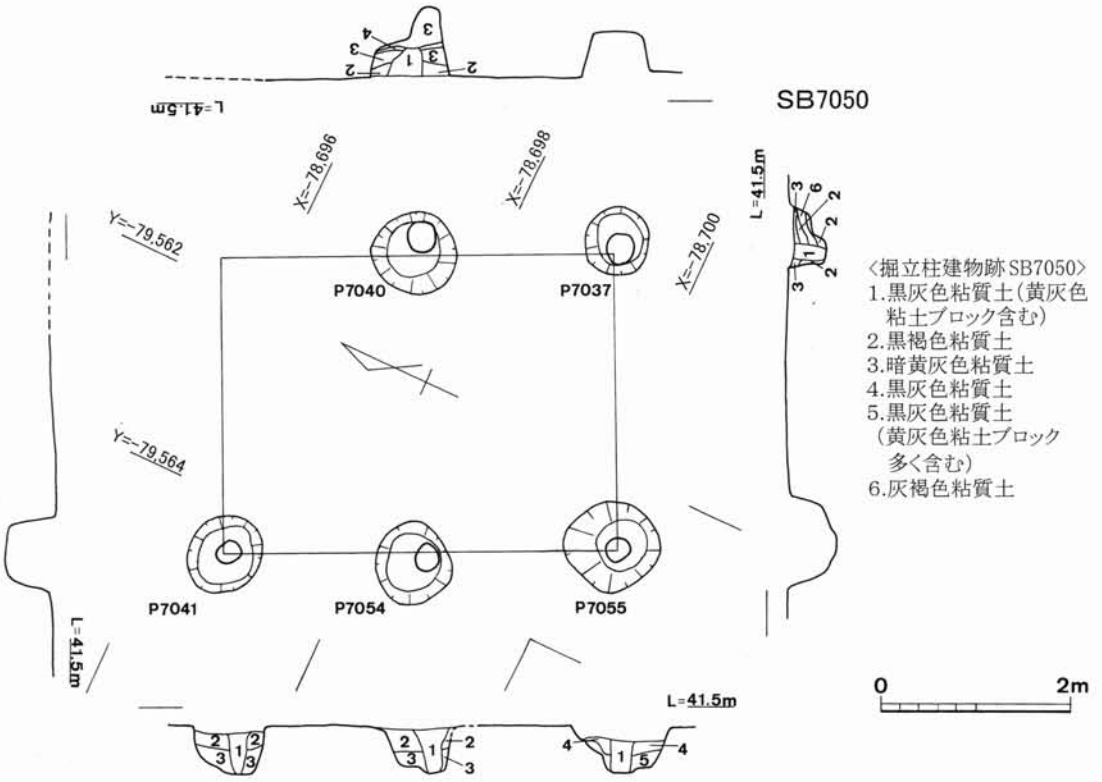
柵列ＳＡ7079（第51図）

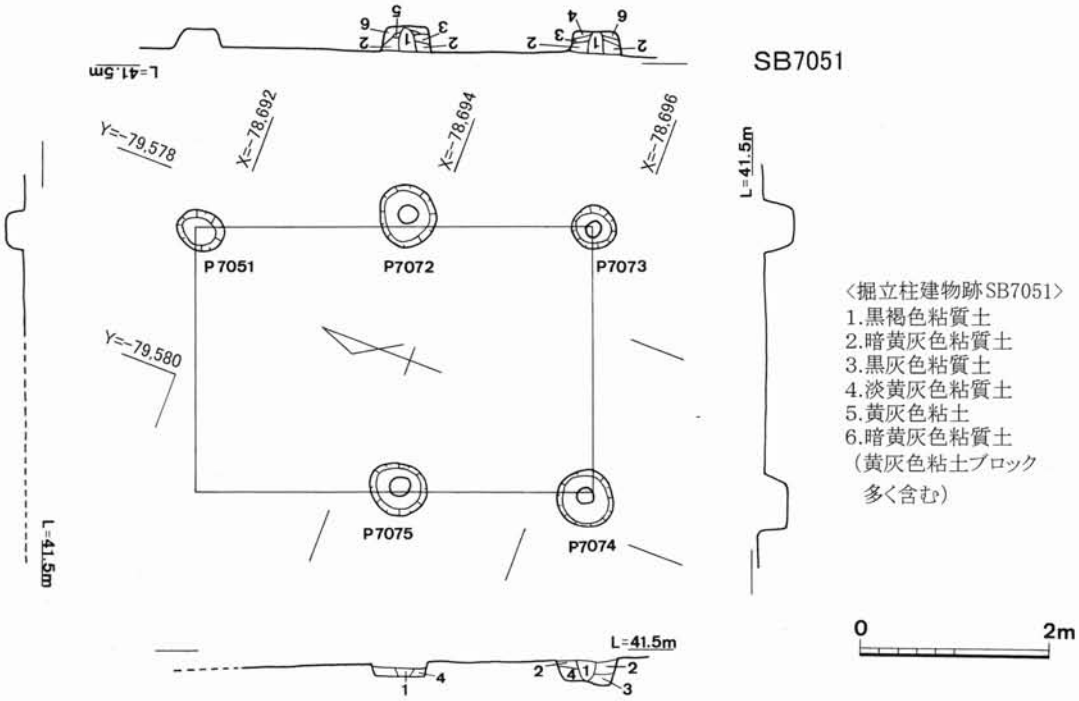
西部で検出した柱列である。４基の柱穴からなる柵列として、復原した。遺物は土師器片が出土しており、時期は平安～鎌倉時代の柵列と推定される。

掘立柱建物跡ＳＢ7048（第54図、図版第38－(3)）　南西部で検出した２間×１間以上の近世の建物跡である。柱間の距離は、約1.8～2.1mを測る。主軸は、Ｎ－

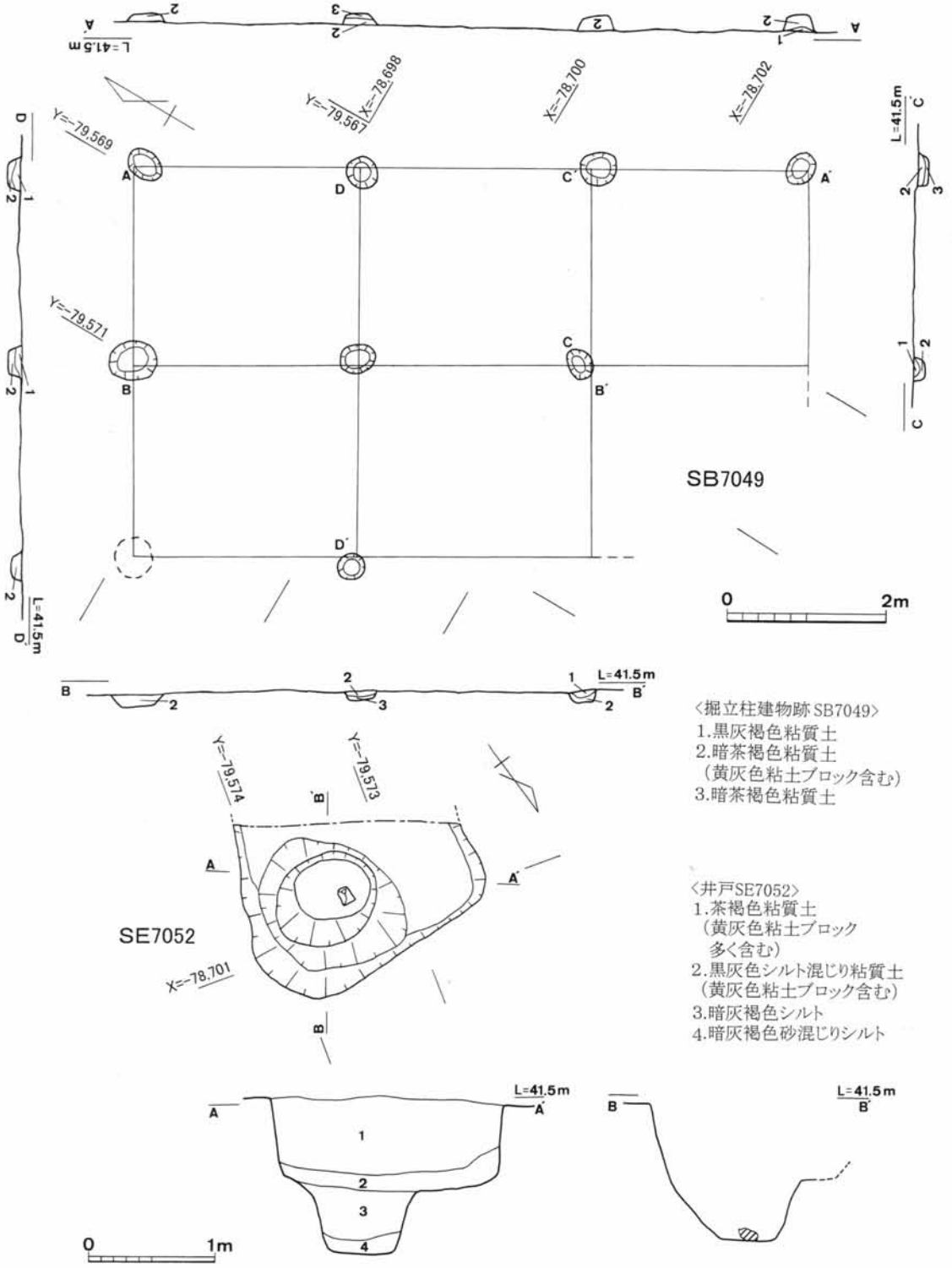


第51図　７地区遺構平面図





第52図　掘立柱建物跡ＳＢ7050・ＳＢ7051実測図



第53図　掘立柱建物跡ＳＢ7049・井戸ＳＥ7052実測図

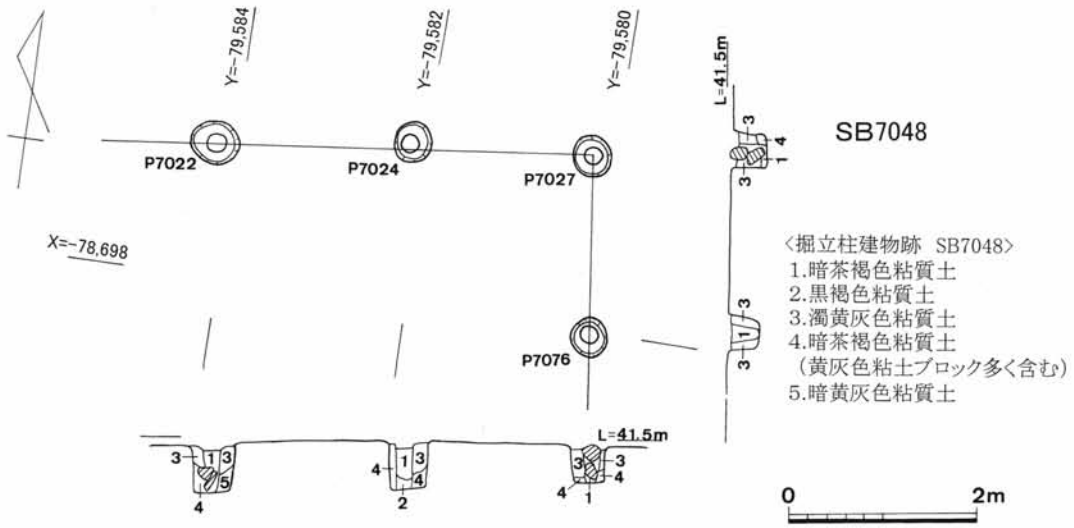
84°－Ｗである。柱穴内からは、拳大の根石が出土している。柱穴から、丹波焼擂鉢の一部が出土しており、時期は16世紀後葉～17世紀初頭と推定される。

掘立柱建物跡ＳＢ7046（第51図）　調査区北西隅で検出した３間×１間以上の建物跡である。柱間は、約1.8～2.0mを測る。主軸は、Ｎ－82°－Ｅである。遺物は出土していないが、層序や主

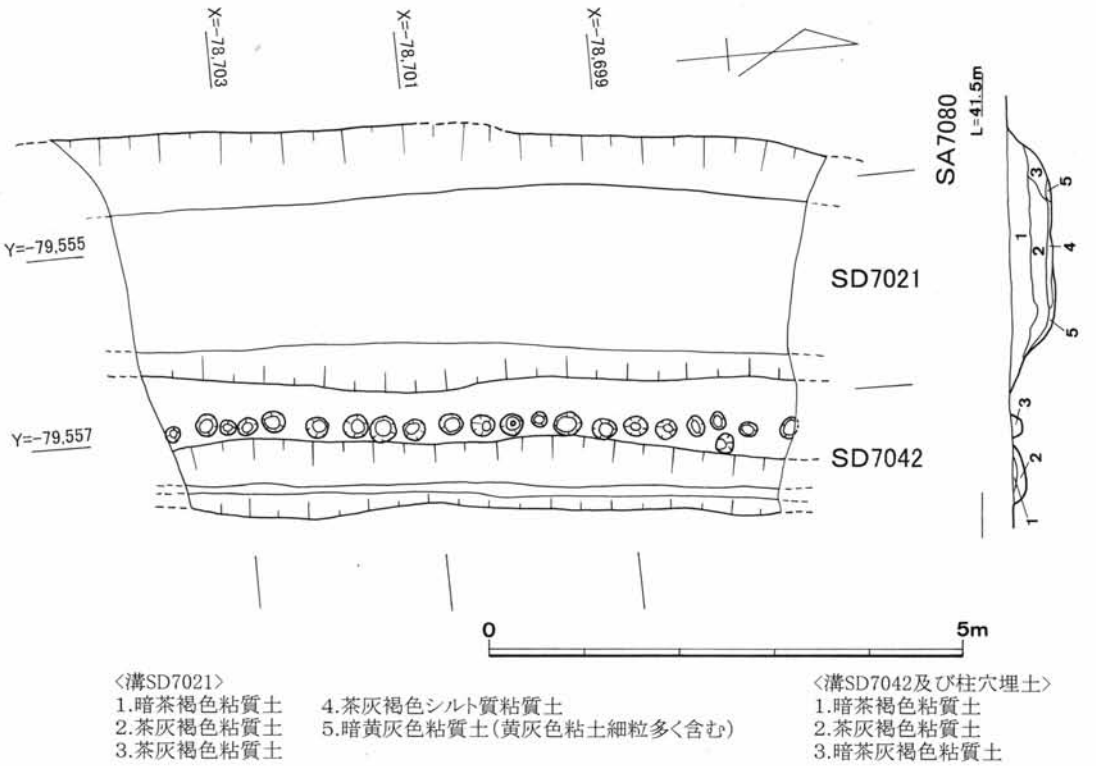
軸の方向から、ＳＢ7048と同時期の近世初期の建物跡とみられる。

溝ＳＤ7021（第55図、図版第40－(1)・(2)）　調査区東端で検出した近世の溝である。幅約2.6ｍ、深さ約0.5ｍを測る。断面は、ゆるやかな「Ｕ」字形を呈する。溝は、上層が大きく後世の削平を受けており、本来の深さは、約１ｍを超えるものであったと推定される。溝ＳＤ7042と、柵列ＳＡ7080とは同時期のものとみられ、ＳＤ7021は柵列の外側に掘削された溝と考えられる。出土遺物から、時期は16世紀後葉～17世紀初頭と推定される。

溝ＳＤ7042（第55図、図版第40－(1)・(2)）　溝ＳＤ7021の東側で検出した。幅約0.6ｍ、深さ



第54図　掘立柱建物跡ＳＢ7048実測図

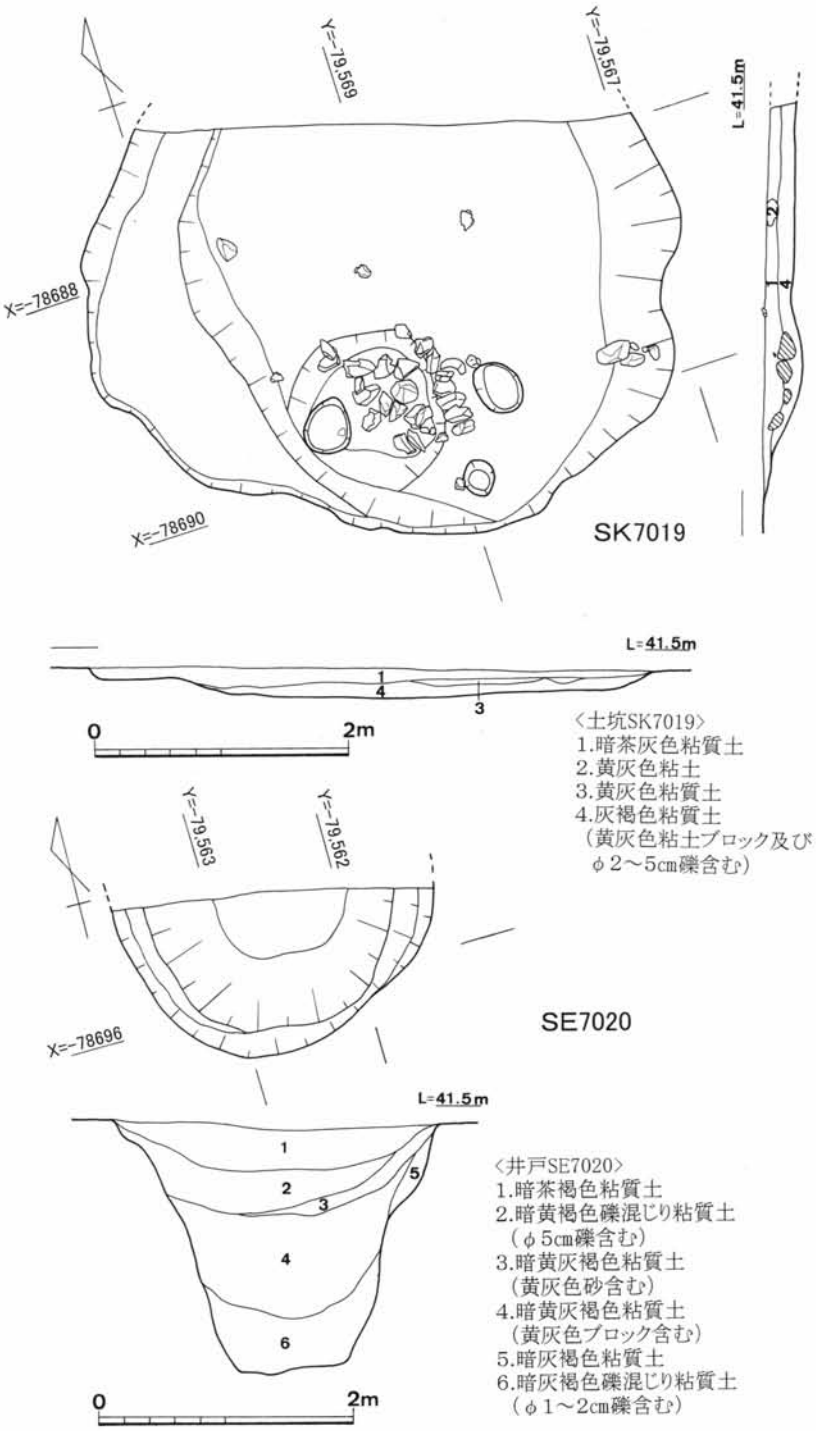


第55図　溝ＳＤ7021・7042実測図

約0.15mを測る。柵列ＳＡ7080に伴う排水溝とみられる。上層から、志野焼の向付が出土した。

柵列ＳＡ7080（第51図、図版第40－(1)・(2)）　溝ＳＤ7021と溝ＳＤ7042の間で検出した柵列である。0.2m前後の間隔で、連珠状に配されている。柱痕の掘形から木杭を打ち込んだ柵列とみられる。土層断面の観察から、溝ＳＤ7021・7042と同時期に築成されたと考えられる。

溝ＳＤ7001・7006・7007　調査区西端、中央、東部でそれぞれ検出した。上層は大きく削平されているが、幅は最もよく残っている部分で、0.3～0.4mの規模をもつ。埋土から、染付などが出土しており、江戸時代後半の耕作溝と推定される。

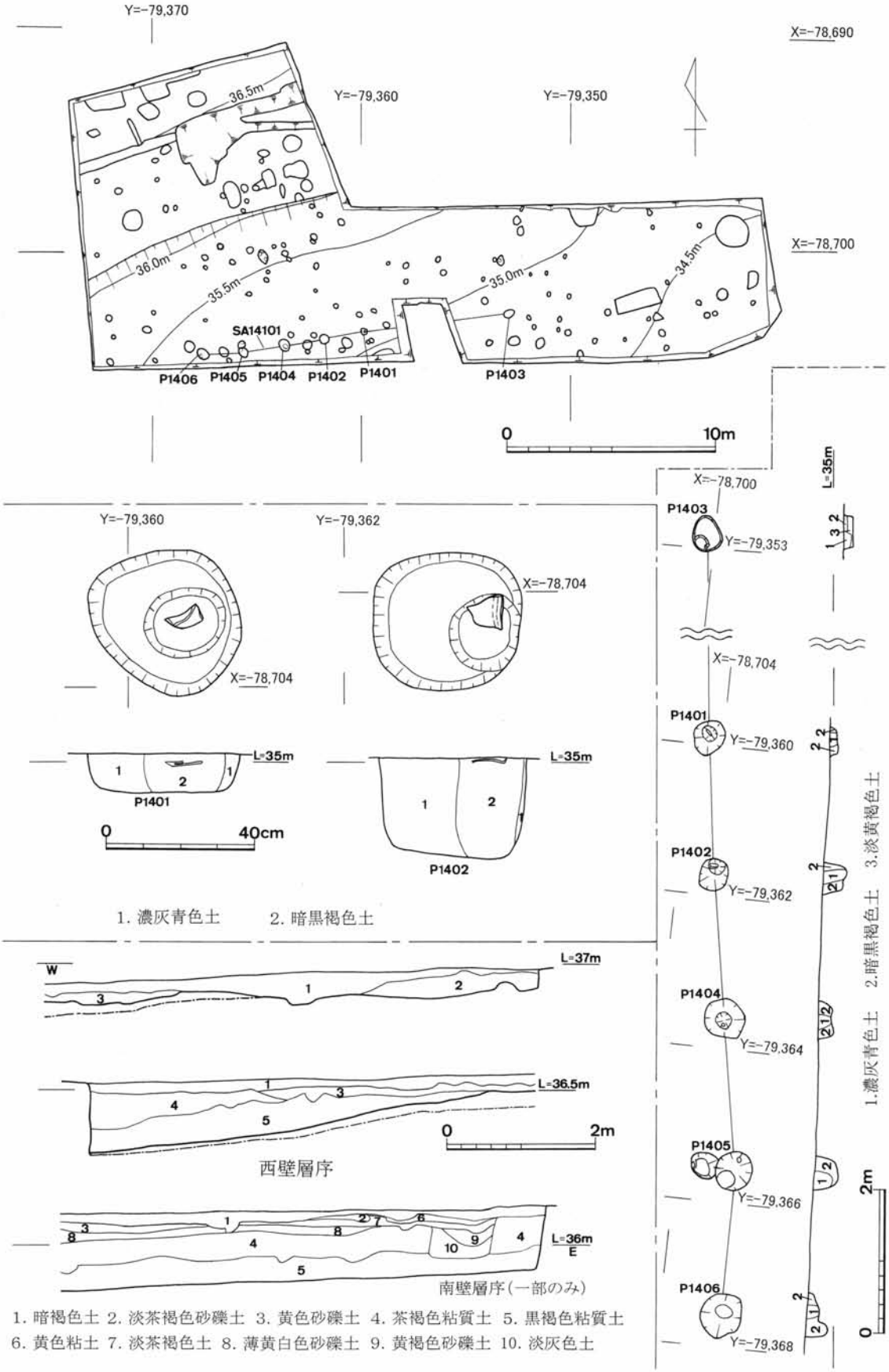


第56図　土坑ＳＫ7019・井戸ＳＥ7020実測図

井戸ＳＥ7020（第56図、図版第39－(2)）　直径約2.6m、深さ約1.9mを測る素掘りの井戸である。井戸中層から、唐津焼の徳利が出土した。時期は、16世紀末～17世紀初頭とみられる。

土坑ＳＫ7019（第56図、図版第39－(3)）　調査区中央北部で検出した楕円形状の土坑である。擂鉢状に落ち込み、中央部の底で被熱を受けた石材や土器片が出土しており、廃棄土坑とみられる。出土遺物から、時期は16世紀後半～末と推定される。

（高野陽子）



第57図　14地区遺構配置図、柵列柵ＳＡ1401実測図・土層断面図

(6) **14地区**(第57図、図版第42・43－(1))

国道９号線の北側に沿って設定した調査区である。調査区の南辺に沿って元来は旧道が走る。この旧道は６地区でも記述した江戸時代絵図に描写されている古道である。現地形は、南半部は現国道とほぼ同一面の平坦地で、北半部は地山を削り出して平坦地化を計っている。北東側は果樹園をもって約１ｍの段差で平坦地を造り、そのほかは東西走する旧道に沿って同一面を田畑と化し、13地区に向かって狭まって平地がなくなる。

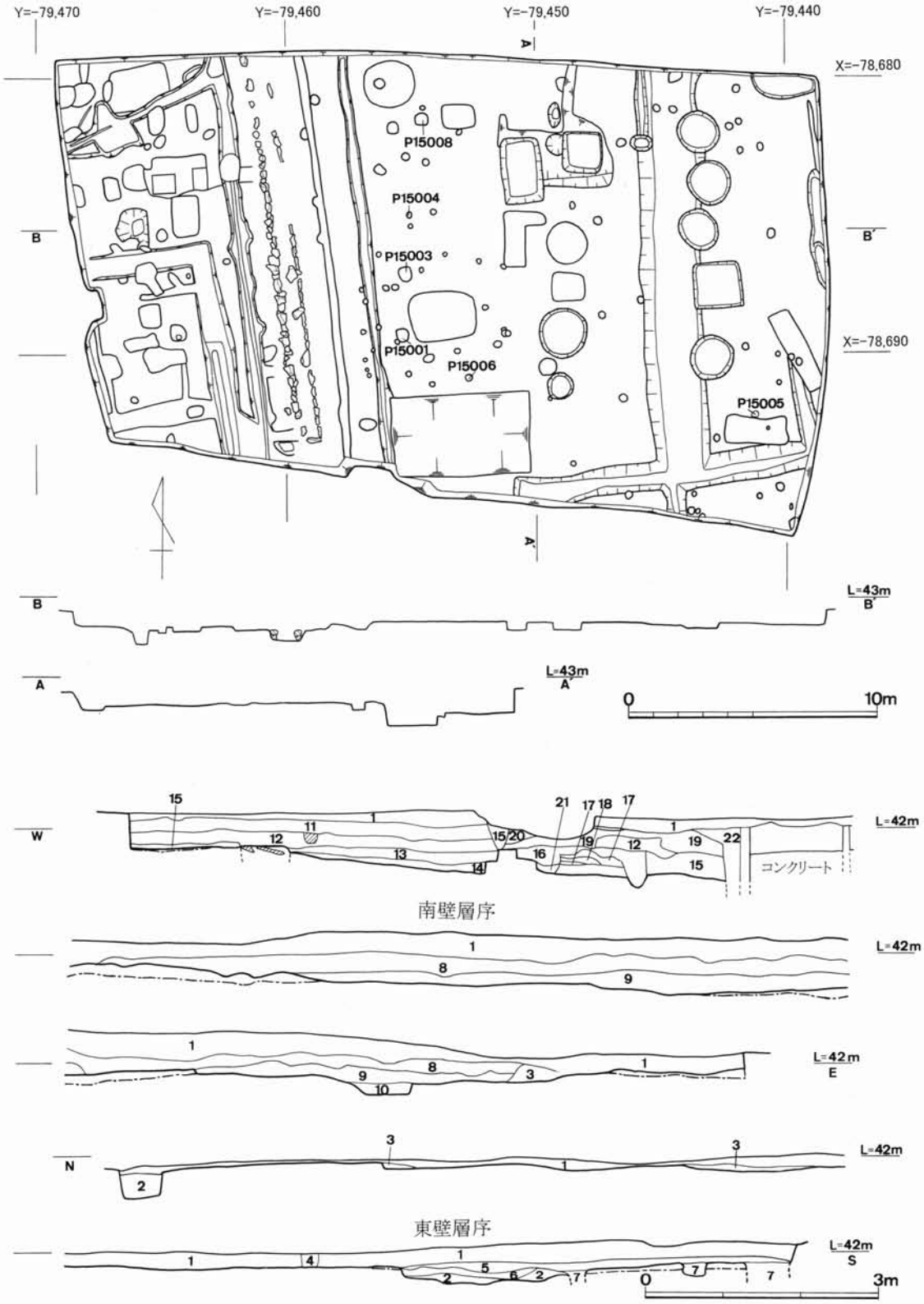
調査地の旧地形は、南側は傾斜面となって、現国道９号線下に潜り、同国道の南側で立ち上がる。幅狭い谷地形を形成し、５－１地区で谷最奥部となっていたと想像される。本調査区は東西に展開するこの谷地形の最奥部付近の北側傾斜面に相当する。調査地内の堆積層を観察すると、北側約７ｍ域は地山の黄褐色砂礫～粘土を削りだして平坦地を確保し家屋が築造されていた。この家屋は、後に４－８地区に移転し、その後、緑ヶ丘町の現地に移築されることになる。

発掘調査は、平成16年度の第３次調査の試掘トレンチ内で多数ピットを検出し、奈良・平安時代の土師器杯片を採取しており、このトレンチを南・北両側に拡張してさらなる遺構・遺物の検出に努めた。地表面下約30cmまでの民家屋建設時の堆積、攪乱土を重機で除去し、さらに次山面を被う黒褐色粘質土直上まで継続して掘り下げ、その後は、人力により精査を繰り返しながら徐々に次山面に接近した。北半部には全く黒褐色粘質土のみならず、その上層である茶褐色粘質土もなかった。南半部に向かって旧地形の地山面が浅くなるにつれ、両堆積土も厚くなっている。その結果、傾斜面での遺構・遺物の検出になり、試掘トレンチより南半部にその期待が寄せられた。地山面には黒褐色粘質土を埋土とするピットが多数検出したが、上層の茶褐色土を有するそれは小数であった。既述したように茶褐色土は、江戸時代の堆積土であり、この地での江戸時代での利用度が低かったことを意味しよう。遺構としては、円形状柱穴を東西方向に一列検出した以外は構築物を想定するには及ばなかった。

柵跡ＳＡ1401(第57図、図版第42－(3))　調査地の南壁に沿って、東西方向に一列を成す柱穴群で、６か所(Ｐ1401～1406)確認した。Ｐ1401～Ｐ1405間は1.8～2.1ｍと各間隔は不揃いであり、またＰ1401とＰ1406間は、電信柱支柱の関係上掘削が不可能であったため、柱穴は未確認である。堀形は隅丸方形～円形を呈する。深さは0.1～0.3ｍで、柱穴は直径0.16～0.2ｍを測る。堀形内は濃灰青色土で、柱穴のみ暗黒褐色土を有し、Ｐ1401・1402の柱穴内に土師器片(第66図118・119)を含んでいた。この土器片から平安時代中～後半期に比定できよう。

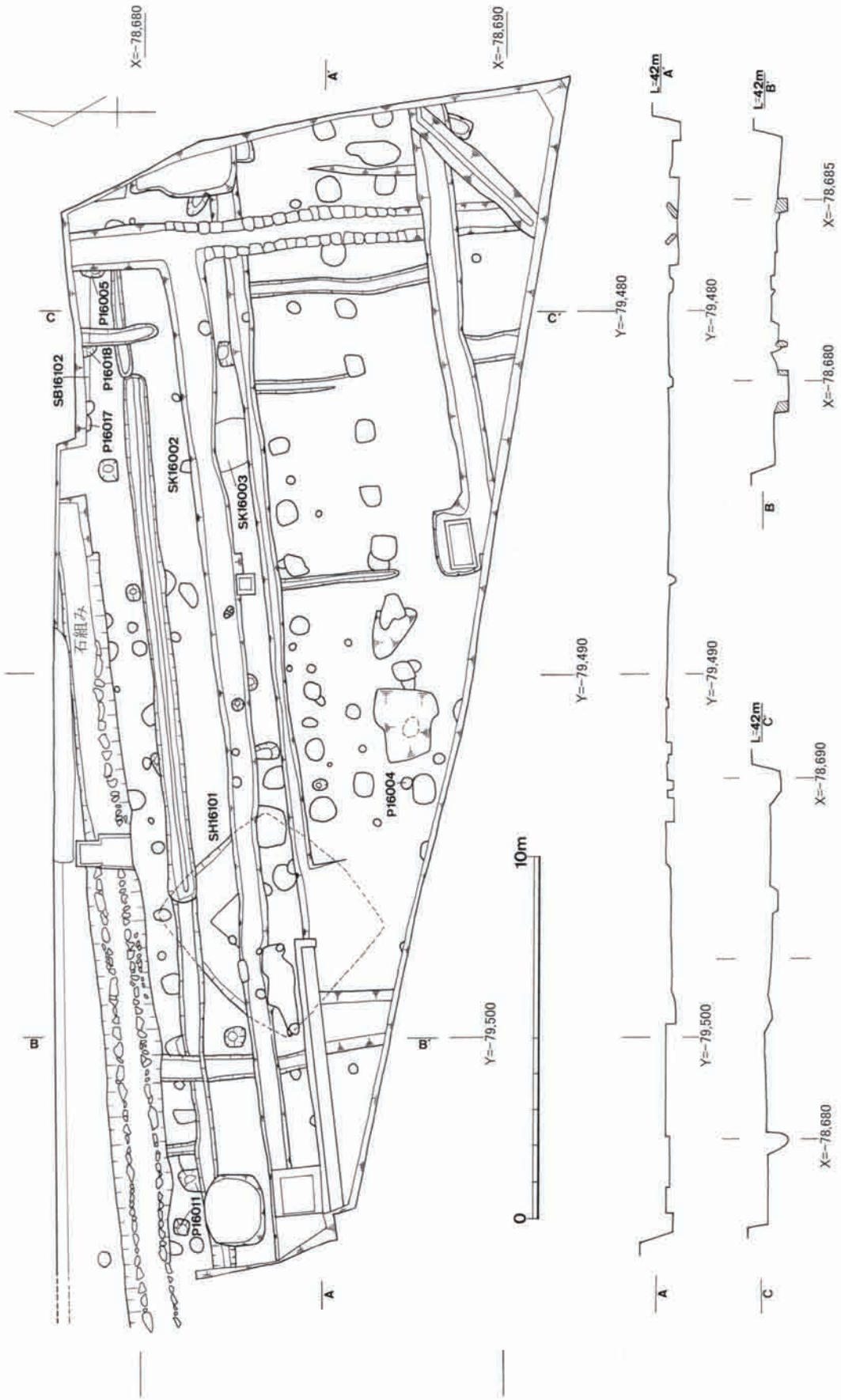
(7) **15地区**(第58図、図版第43)

５－２地区と対面する国道９号線の北側に位置する。丘陵の最高所にあって、福知山市内最古の陸橋(歩道橋)を挟んで16地区と接する。標高42ｍを数え東方に向かって若干下降はするものの、ほぼ平坦地となっている。平成16年度調査で東西2本、南北４本のトレンチを設定して近世以降の土坑や溝を検出したのみで、遺物も極少量で近世陶器が主を占めていた。その一方、西半部の試掘トレンチからは古墳時代以降のピットを数か所確認した。この地を中心にして遺構遺物が残存しているものと推定された。今次調査でもこの西半部全域を拡張して発掘調査を実施した。

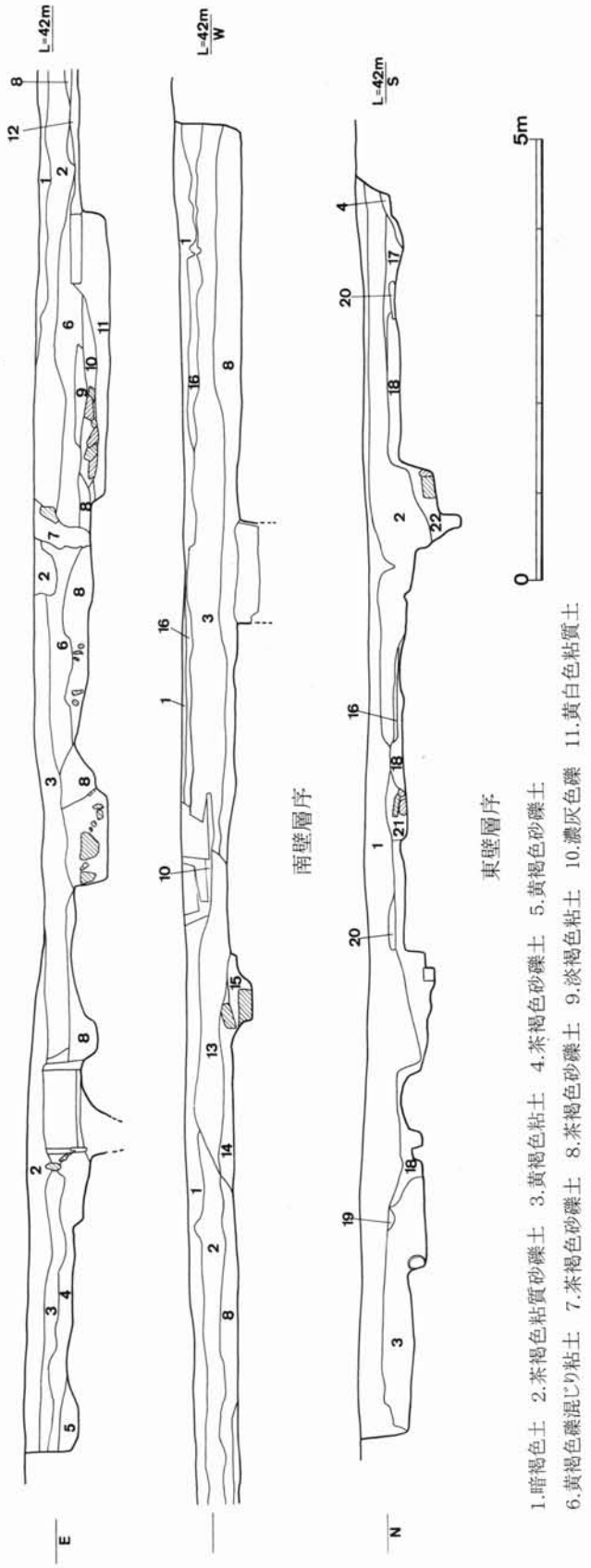


1. 濃灰色粘質土 2. 黄褐色粘質土 3. 灰色砂質土 4. 黄褐色粘質土(黄褐色粘土含む) 5. 黄灰色粘質土
6. 濃灰色粘質土(黄褐色粘土含む) 7. 濃灰色砂質土 8. 灰褐色砂質土 9. 黒灰色砂質土 10. 灰黄色粘質土
11. 淡灰褐色粘質土 12. 黄白色粘土 13. 淡褐色粘質土 14. 青灰色砂礫土 15. 茶褐色粘質土 16. 赤褐色粘土
17. 灰褐色粘質土 18. 黄褐色粘土 19. 灰褐色礫 20. 灰色砂礫土 21. 灰褐色礫混じり粘質土 22. 灰褐色砂礫土

第58図　15地区遺構配置図・土層断面図



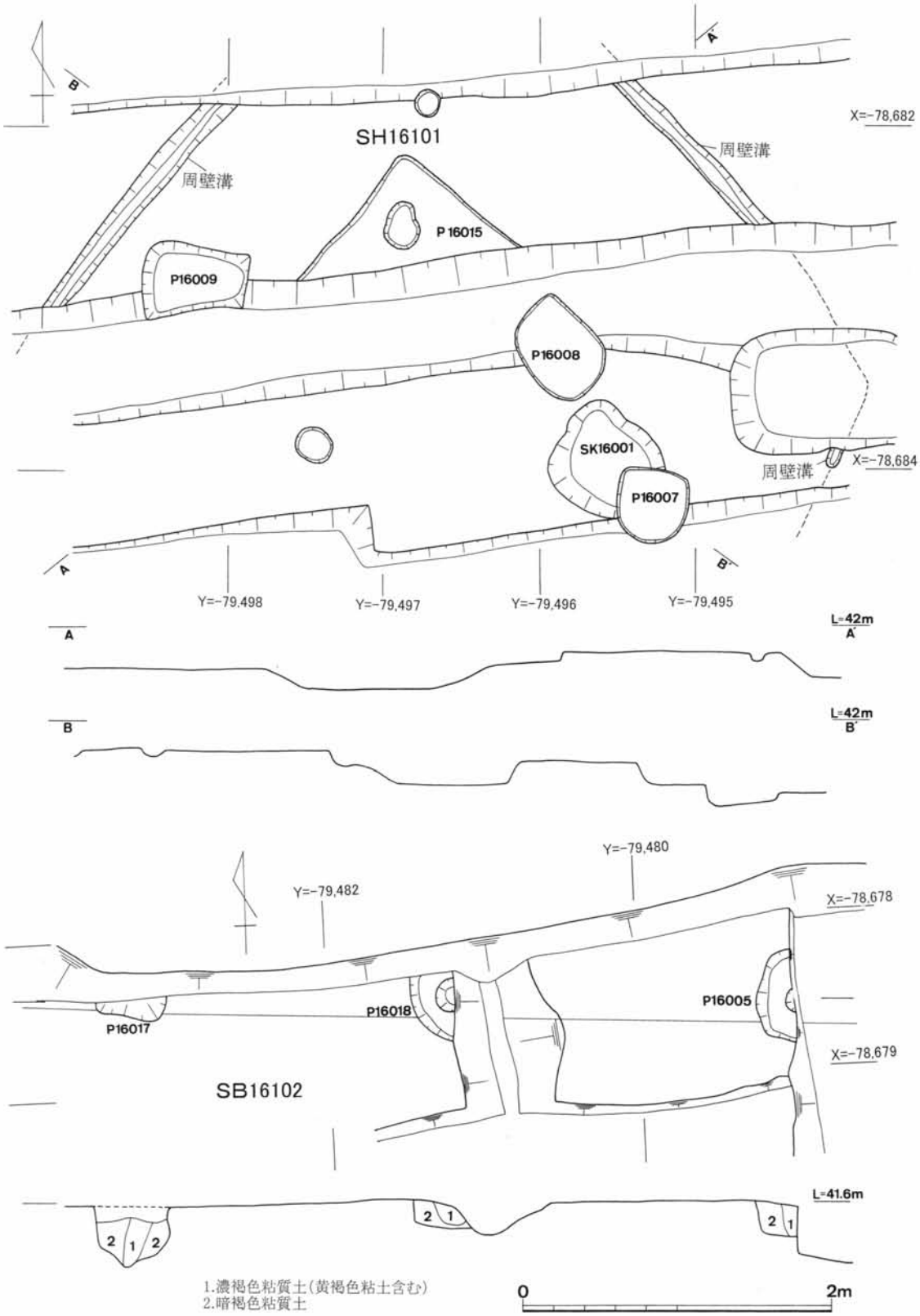
第59図　16地区遺構配置図



第60図　16地区土層断面図

発掘調査は、表土下0.1～0.3mの腐植土および現代の堆積土を除去しつつ、さらにコンクリートや廃材坑、赤レンガなどを重機で掘り下げ、以後人力による掘削を開始した。その結果、調査地全面にわたって腐植土や近現代の堆積土、再堆積土などで被われており、近代以前の茶褐色～黒褐色土の堆積は皆無であった。遺構は、円・方形の土坑、側溝ピットなどがあり、土坑群は、東半部に二列に南北方向に穿たれていた。

円形土坑は、直径２m内外を測り、深さは１～1.2mであり、黄色を呈した漆喰が円形に枠を形成していた。方形土坑も同様であった。土坑内から戦時中の陶磁器片が出土し、中には陸軍歩兵福知山連隊を表示したものも含まれていた。古老によると染織業が営まれており、染料などを貯蔵するための槽があったとのことから、この円・方形土坑は貯蔵坑と推定できる。また、西半部には方形基礎杭や側溝などが石積み側溝より西側に偏して確認した。コンクリートをはじめ漆喰・赤色レンガなどからこれらは、主に近現代の構築物の遺構で、伴う遺物は近現代の瓦・陶磁器片以外はみとめられなかった。13地区での近現代の建築遺構に類似することから、同一の性格を有するものであろう。近現代以前の遺構としては、数多のピットが調査地中央部に認められるが、いずれも埋土が黒褐色～茶褐色土であって、遺



第61図　竪穴式住居跡ＳＨ16101・掘立柱建物跡ＳＢ16102実測図

物も多くは包含しないため、時期は明確にできない。また、構築物を設定することにも到らなかった。しかし、弥生土器や土師器などの小破片が、堆積土中から検出されていることから、早い段階で遺構面が削平されたものと推定される。

(8) **16地区**(第59～61図、図版第44)

平成15年度調査で弥生時代末期の方形竪穴式住居跡や掘立柱建物跡を確認した東側隣接地で、第３次調査時にも、弥生時代後期の方形竪穴式住居跡・柱列・ピットなどを検出し、その広がりが注目された。第４次調査ではその試掘トレンチの南側を国道９号線沿い迄拡張して実施した。試掘調査結果からまず、表面下約0.7mまでを重機で掘り下げたが、近現代の堆積土、構築物・攪乱坑などが調査地全域に広がり、茶褐色土は無論のこと、黒褐色土の堆積は皆無であり、地山の黄褐色土層上面に深く穿たれた遺構のみ残存し、また、残存していても薄く存在しているに過ぎなかった。残存遺構の多くは、削平と攪乱により部分的な残存状況であるが、第３次調査時にすでに検出されていた竪穴式住居跡１基(ＳＨ16101)、掘立柱建物跡１棟(ＳＢ16102)、土坑やピット群を検出した。素掘り溝、石組み溝、あるいはそれに整然と並行する方形柱穴群は６・15地区で発掘した近現代の遺構の名残であり、古老の言葉を借りれば陸軍歩兵福知山連隊当時の厩舎跡となる。また上層にはその後のコンクリート基礎などは旧自治会館に伴うものである。

竪穴式住居跡ＳＨ16101(第61図、図版第44－(2))　調査地の西方で検出した方形の竪穴式住居跡である。東側に長さ1.3m、西側に長さ1.7mの浅い溝を持ち、その深さは0.04～0.05mに過ぎない。この溝の一部が東南側にも長さ0.13mをもって残存していた。この残存状況から方形にめぐる周溝と考えられ、0.1～0.15mの幅や深さから竪穴式住居跡に伴うものと考えられる。周溝よりさらに住居内側へ東側では1.2m幅、西側で1.0m幅で0.04m低くなり、北側は45°の平面直角形を成し、方形の堀形で、この幅帯は周庭帯で、内側には直径約20cmの柱穴が穿たれていた(Ｐ16015)。床面から土器が出土した。住居内遺構には、東南側に直径約0.6mの方形土坑ＳＫ16001があり、土器片が底面に浅く横たわっていた。周溝・周庭・土坑などの平面的位置関係から、一辺4.5mの方形竪穴式住居跡に復原できる。

掘立柱建物跡ＳＢ16102(第61図、図版第44－(3))　調査地東側北壁に沿って検出した。３個の隅丸方形堀形を有する柱穴で、決して残存状況は良好ではないが、心々間2.1m(７尺)等間で、配されていた。東・西へのひろがりは地山面の削平から柱穴は存在せず、また南側には同一面での柱穴の検出がない点から、この建物は東西２間以上の建物と推定される。柱穴内から３－５地区出土同様の土師器杯片が出土し、奈良～平安時代に比定できる。そのほかに土坑やピット群を確認したが、土坑は、弥生～古墳時代初期の土師器片を含み、ピットは殆どが遺物を有しないが、埋土から弥生～江戸時代の長期間に掘削されたものであろう。　(松井忠春)

４．出土遺物(第62～66図、図版第45～48)

11か所の調査区から出土した遺物は、試掘調査分を含めると、整理箱で約50箱に達する。遺物は、弥生～江戸時代までの各時期に及ぶ。弥生時代では、甕・高杯・器台・鉢・蓋などの土器類や石鏃、古墳時代後期の須恵器杯片や土師器壺片、奈良時代から平安時代の須恵器・土師器・黒色土器・緑釉陶器・土錘、鎌倉時代の瓦質土器、土師器・中国製陶磁器・鉄製品、近世の瀬戸・丹波・志野系などの陶器がある。以下、調査地順に従って記述する。

１～31までは、３－５地区からの出土である。１～４は、須恵器蓋で、鈕の有無で二分される。天井は、比較的平らで、中位から端部付近で下方に曲げられさらに外方に曲げられ端部に到る。口縁端部は、１・２が垂直に折れるが、３は丸みを帯び、４は反り返って外反する。１～３は、９世紀頃、４は10世紀前半頃に比定できる。６～12は、須恵器杯で、８～10・12は貼り付け高台で、11は、底面に糸切り痕を残す。14～20は土師器で、内面には稚拙な螺旋状の暗文を施す場合と施さないものに大別できる。ていねいな仕上げ調整ではあるが、外面に粘土接合痕を残すものもある。暗文を有する17～20は口径を0.15mに安定させ底部外面にはヘラ磨きを施す。９世紀頃の所産であろう。14・17～20は黒褐色土の下位から折り重なって出土した(図版第28－(3))。23は黒色土器椀で、器壁内外面にヘラ磨きを施し、底部には糸切り痕が認められる。平安時代中期頃である。24は、土師質で、円盤の中央に直径２～３㎜の底部よりの穿孔があり、堅緻である。25は小形の糸切り痕を持った皿である。26は、４の須恵器蓋とともに調査地南壁内で見いだした。土師質の甕で、表面は粗いハケ目を、胴部には縦方向に、底部は横方向に施す。27～31は土師質の土錘である。最大径1.0～2.5cmを測り、長さ・重さも多種である。32は、茶褐色の器壁で、内面は灰釉がかかる。おそらくは丹波系鉢であろう。これら３－５地区出土遺物は大概黒褐色土の上・中・下位から出土しており、時期的には下位は奈良～平安時代、上位は平安時代中期に、一部はその後の混入と把握して大過なかろう。

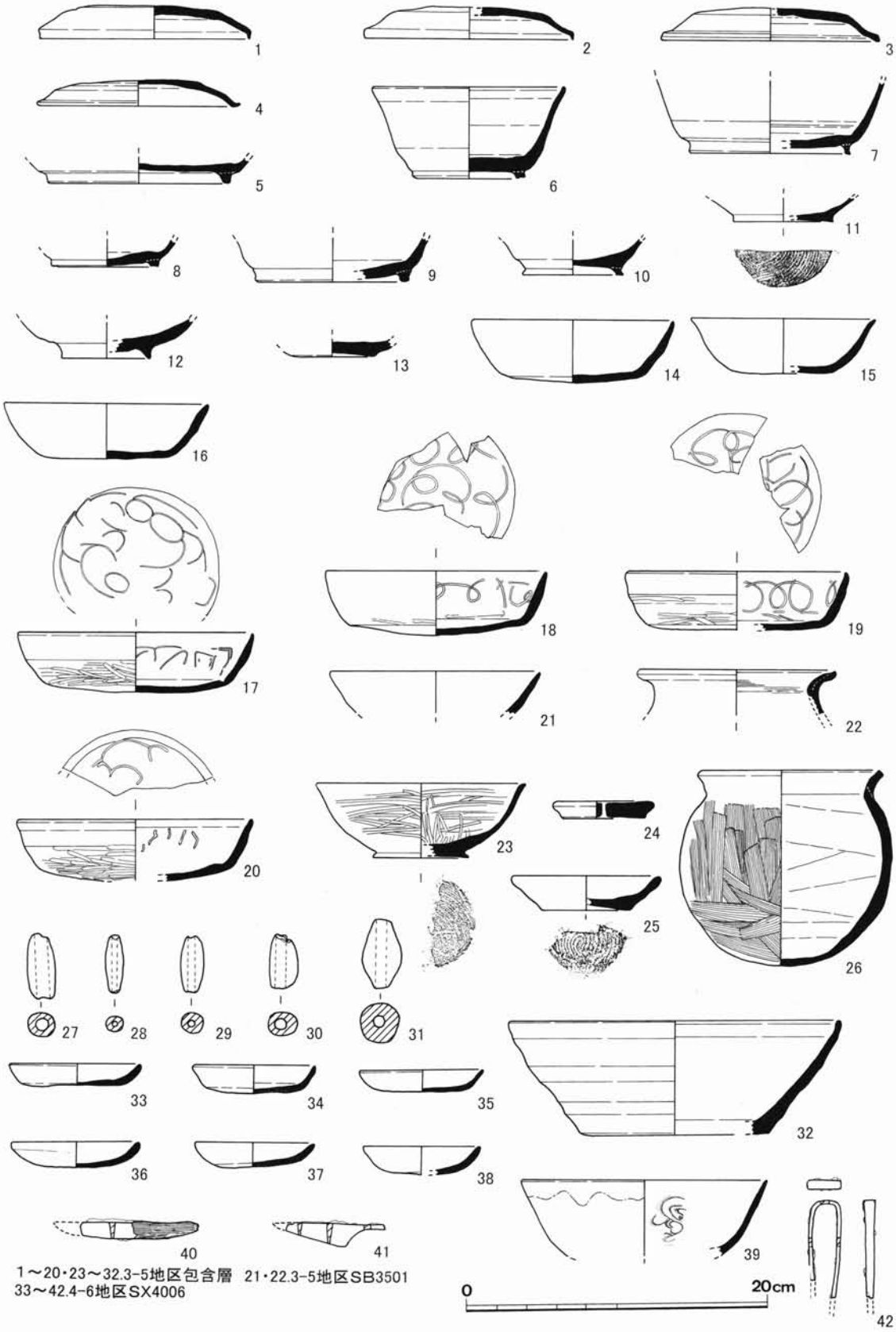
33～42は、４－６地区で検出した長方形土坑ＳＸ4006からの一括出土資料である。33～38は土師質皿で、口径8cmに整う。深さも1.5cmと同一である。手づくねのため、器壁厚不揃いや形状が歪である。34の底部剝離面には、糸切り痕が見られる(図版第46)。39は緑味を帯びた青色を呈する中国製輸入陶磁器で、龍泉窯系青磁椀片である。外面は無紋であるが内面に立ち登る雲文を片切彫りで描いている。40・41は鉄製刀子で、40には、木片を残す。出土位置から両者の使途に差異があるものと思われる。42は「Ｕ」字形を呈した鉄製品で、断面方形である。釵子の可能性がある。土師質皿や青磁椀片から推して12世紀後半～13世紀前半に年代比定できる。

43・44は、４－３～５地区の包含層やピットからの出土である。43は土坑ＳＫ4208から出土した、弥生土器の吉備系甕の口縁部である、44は鎌倉時代の土師質皿である。

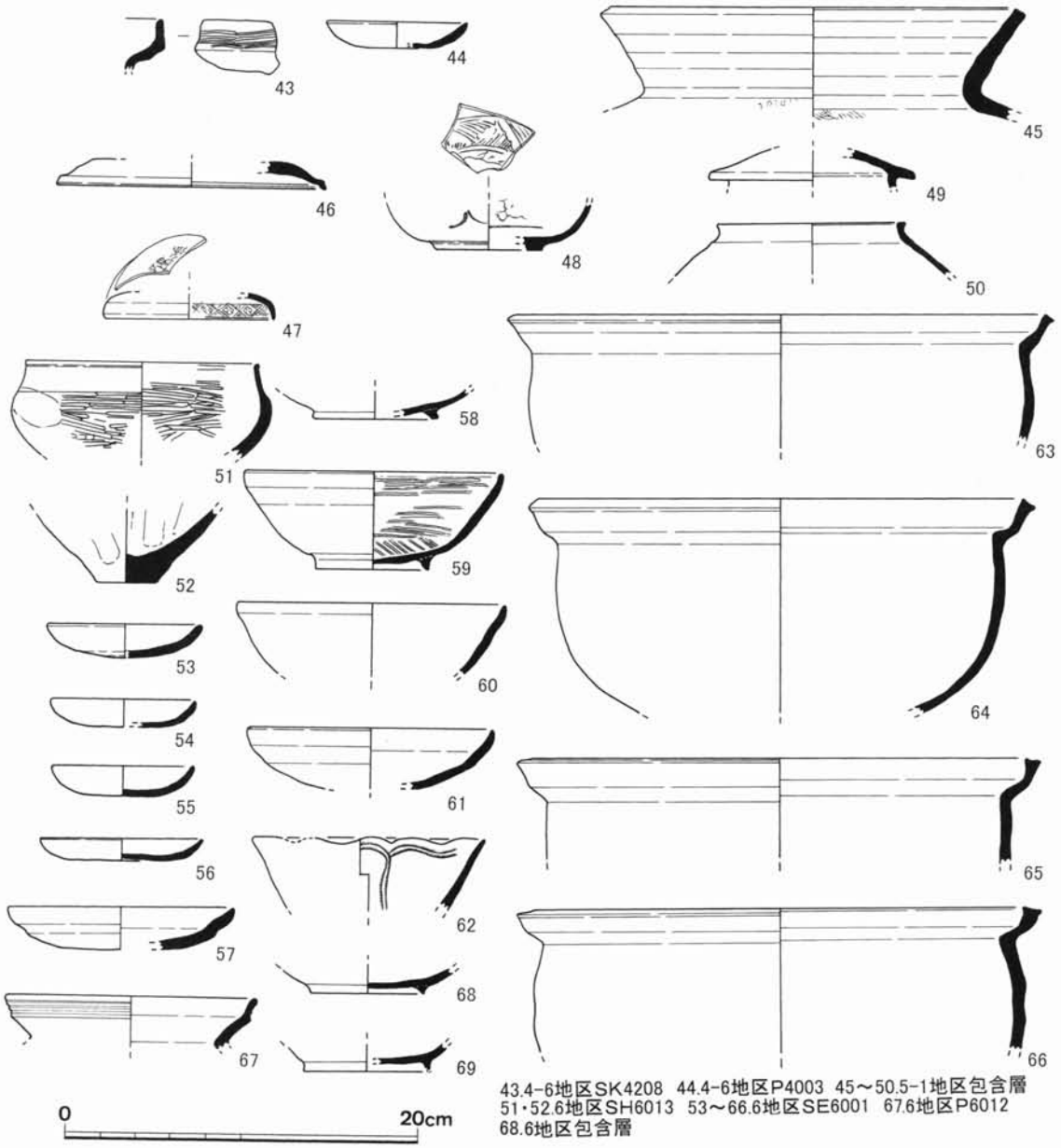
45は、５－１地区から出土した。須恵器壺の口縁部片で、第３次調査時で出土した11と同型式の須恵器椀があり、平安時代中期頃のものであろう。

46～50は５－２地区から出土した。46は須恵器蓋で、47～50は近世～近代の陶磁器片である。51～66は６地区からの出土である。51・52は、竪穴式住居跡ＳＨ6013から出土した。いずれも弥生時代後期の土器で、51は高杯小形の精製壺、52は甕の底部と推定できる。53～66は円形土坑ＳＸ6001から出土した。53～57は、土師質皿で、58は、土師器椀、59～61は、丹波系瓦器である。62は中国製輸入陶磁器片で、龍泉窯系小椀である。輪花口縁で、内面に画花文を片切彫する。63～66は瓦質鍋で、口縁部が屈曲して立ち上がることを特徴とする。この一括遺物は12世紀後半～13世紀前半頃の年代が与えられる。67は、ピットＰ6032出土の弥生土器甕の口縁部片である。68・69は、瓦器椀底部片である。

(松井忠春)

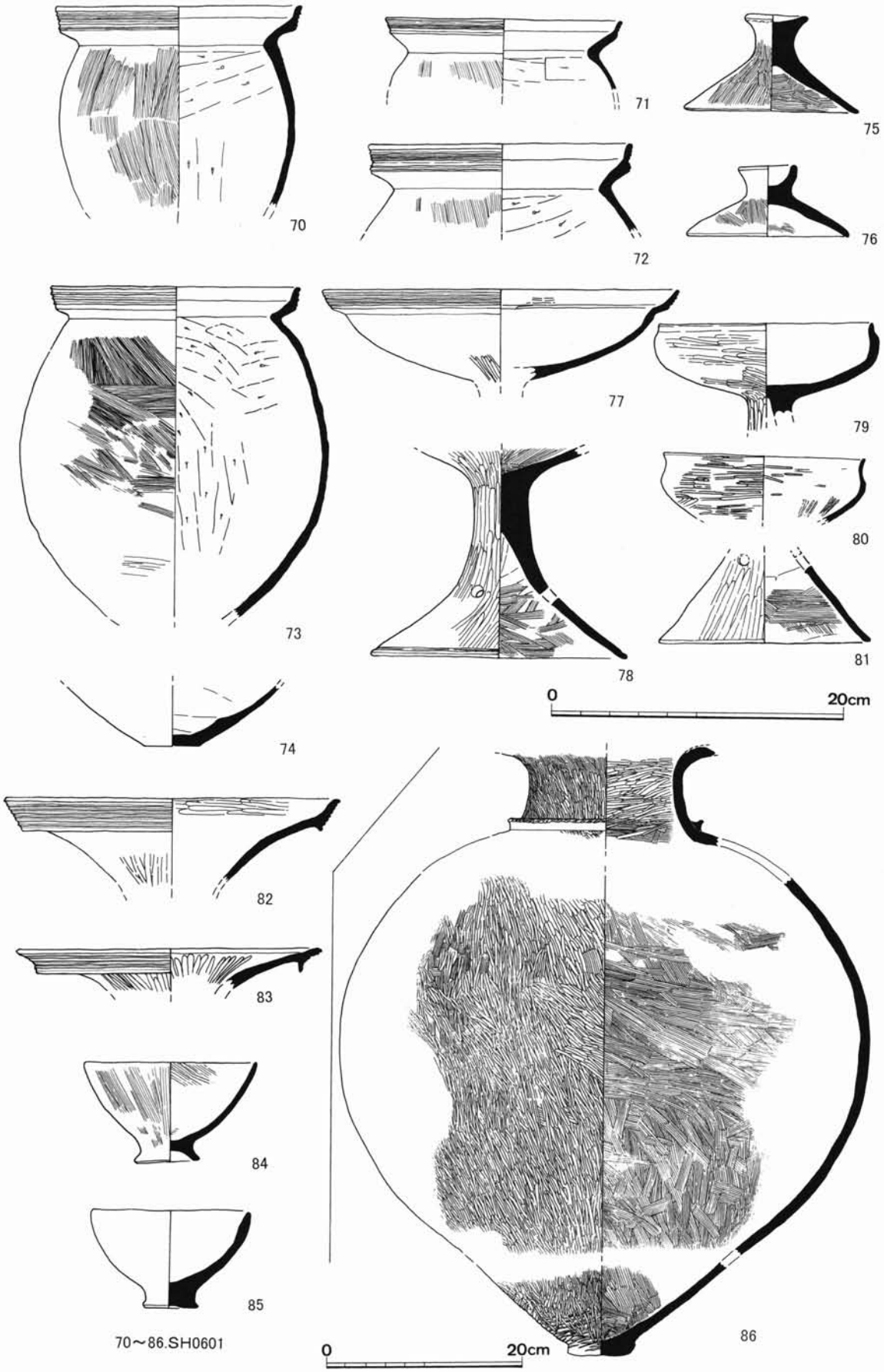


第62図　出土遺物実測図(1)



第63図　出土遺物実測図(2)

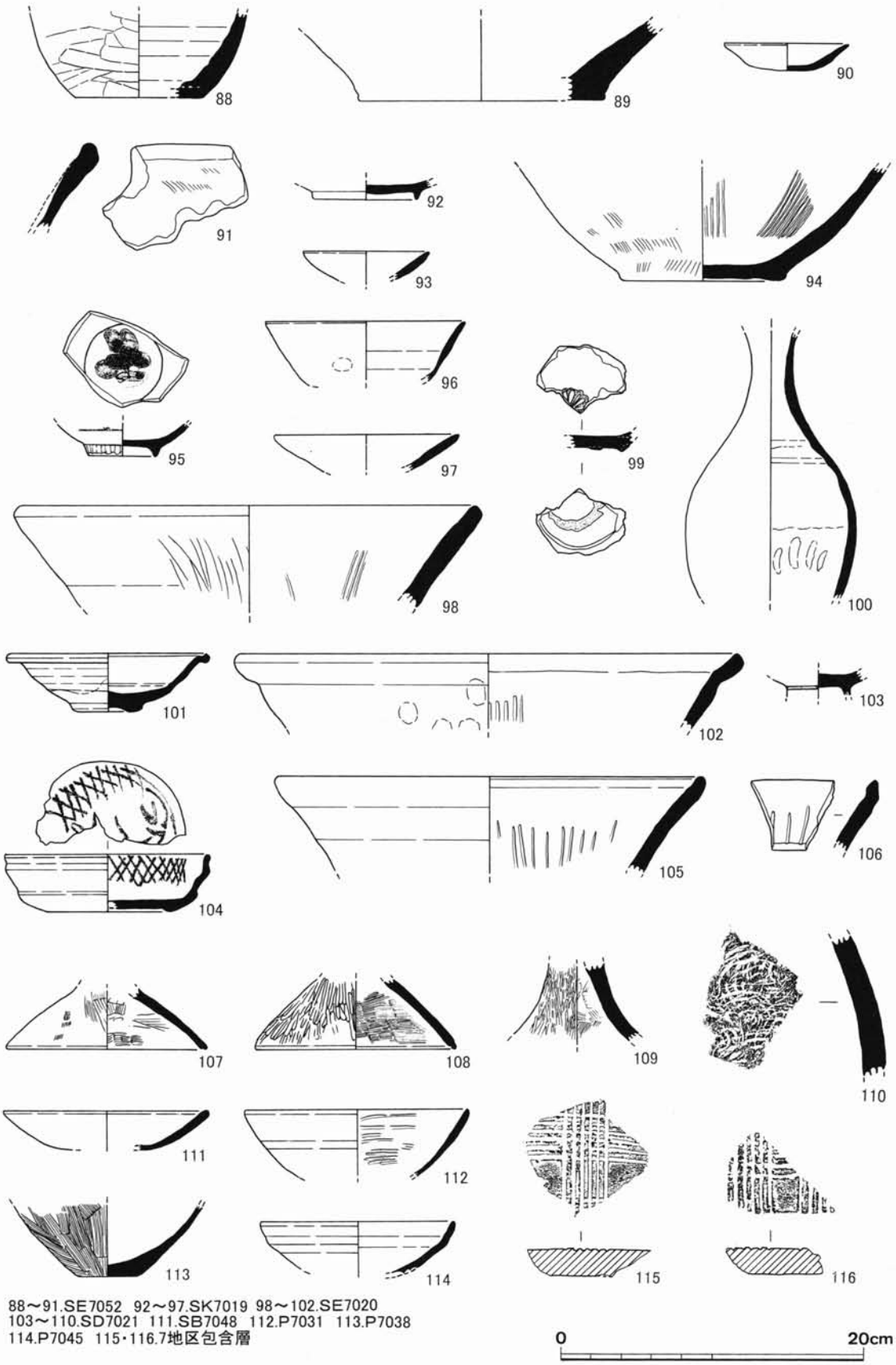
70～87(第64図)の弥生土器は、６調査区竪穴式住居跡ＳＨ0601から出土した。70～73は、有段口縁の甕である。70は、直立気味に立ち上がる口縁部をなし、外面に５条の擬凹線文を施す。体部外面は、縦ハケ調整を施し、内面は口頸部内側までケズリを施す。ケズリの方向は、下半部は下から上へ、また上半部は斜め方向に施される。色調は淡橙褐色を呈し、口径は16.8cmを測る。71は、短く斜め上方に拡張する口縁部をなす。外面の擬凹線文は浅く不明瞭だが、一部に３条の条線が認められる。体部外面には、縦方向のハケ、頸部内面に横方向のケズリが認められる。色調は淡褐色を呈し、口径は16.3cmを測る。72は、有段口縁外面に、擬口縁接合部の屈曲を明瞭に残す甕である。口縁部外面には、５～６条の擬凹線文を施す。体部外面調整は、縦方向のハケを施し、頸部には強いナデが施される。色調は淡橙褐色を呈し、口径は18.1cmを測る。73の甕は、体部中位下半に最大径をもつ。口縁部はほぼ全周し、残存率は高いが、全体に磨耗が著しく、口



第64図　出土遺物実測図(3)

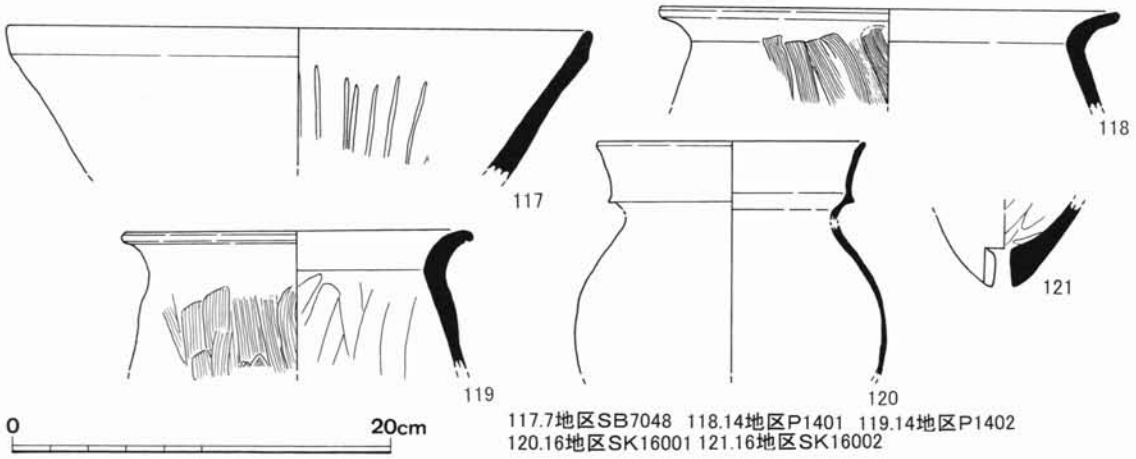
縁部外面の擬凹線文は、浅い４条を一部に認めるに過ぎない。口縁から体部下部まで、全面に炭化物が付着している。色調は暗赤褐色を呈し、口径は16.8cmを測る。74は、壺の底部とみられる。75・76は、甕の蓋とみられる。75は口径11.7cmを、76は10.9cmを測る。口径から、共搬の甕との対応をあえて求めれば、70、71をあげることができる。77は、有段口縁の高杯である。口縁部外面に５条の擬凹線文を施す。色調は淡橙褐色を呈し、口径は24.7cmを測る。78の高杯は、杯中央部がゆるやかに窪むことから、杯部が有段口縁をなすタイプではなく、「く」の字に外反する形式とみられる。79・80は、長脚高杯の浅い椀状の杯部である。口縁端部は、外面に強いナデが施され、わずかに外反することを特徴とする。81は、高杯脚部とみられる。82・83は、有段口縁をなす器台の受部である。82は、口縁に７条の擬凹線文を施す。色調は淡褐色を呈し、口径は22.8cmを測る。83は、強く外反する口縁に６条の擬凹線文が認められる。色調は橙褐色を呈し、口径は20.6cmを測る。84・85は、台付鉢である。84は、外面に荒いハケ調整を施すが、85には、ナデ調整が施される。86は、頸部に突帯を付す大形の壺である。体部外面にていねいなミガキを施す。推定復原によるが、残存高は約62cmで、体部最大径は54cmを測る。色調は、淡褐色を呈する。以上、図示した資料の胎土には、いずれもチャート・堆積岩類などの砂粒が多く含まれ、由良川流域の主たる岩石分布と大きな矛盾はない。

88～116(第65図)・117(第66図)は、７地区の出土遺物である。88～91は、井戸ＳＥ7052から出土した。88は、須恵器壺の底部である。89は、瓦質の鉢の口縁部である。細片であるが９世紀頃の資料である。90・91は、井戸上層の包含層資料であり、90は丹波焼壺の底部、91は土師器皿である。92～97は、土坑ＳＫ7019から出土した。92は、淡灰色を呈する中国製の白磁である。93・97は土師器皿で、95は土師器杯である。94は、灰白色を呈する瓦質の擂鉢である。95は、中国製輸入陶磁器の椀である。時期は、いずれも16世紀後半頃とみられる。98～101は、井戸ＳＥ7020から出土した。98は、暗灰色を呈する瓦質の擂鉢である。口径は30.0cmを測る。99は、灰釉の丸皿底部である。内面に印花文が刻まれ、底部に重ね焼きの砂目が認められる。100は、下層から出土した唐津焼の徳利である。器表の釉薬は、二次的な被熱によって白化し、施釉部分に細かな気泡が認められる。101は、唐津焼の皿である。口径は13.0cm、器高は3.8cmを測る。102は、瓦質の擂鉢である。103・105～110は、溝ＳＤ7021から出土した。104は、溝ＳＤ7021の肩部上層から出土した。103は、染付椀の底部である。104は、志野の向付である。内面に格子状の文様がみられる。105・106は、丹波焼の擂鉢である。いずれも内面に、一本引きの沈線が放射状に刻まれる。105は明茶褐色を、また106は暗褐色を呈する。107・108は、包含層から出土した弥生土器の高杯裾部で、109は同脚部である。111は、掘立柱建物跡ＳＢ7048から出土した。柱穴Ｐ7022から出土した土師器皿である。16世紀後半～17世紀初頭のものである。112は、柱穴Ｐ7031から出土した瓦器椀である。113は、柱穴Ｐ7038から出土した土師器甕の底部である。おおよそ９世紀頃の資料とみられる。114は、柱穴Ｐ7045から出土した土師器椀である。９世紀後半に帰属する。115・116は、包含層中から出土した格子状の沈線を施す平瓦の一部である。117(第66図)は、７地区の掘立柱建物跡ＳＢ7048から出土した。丹波焼の擂鉢である。内面には一本引きの沈線を施



88～91.SE7052　92～97.SK7019　98～102.SE7020
103～110.SD7021　111.SB7048　112.P7031　113.P7038
114.P7045　115・116.7地区包含層

第65図　出土遺物実測図(4)



第66図　出土遺物実測図(5)

す。時期は、16世紀後半～17世紀初頭とみられる。

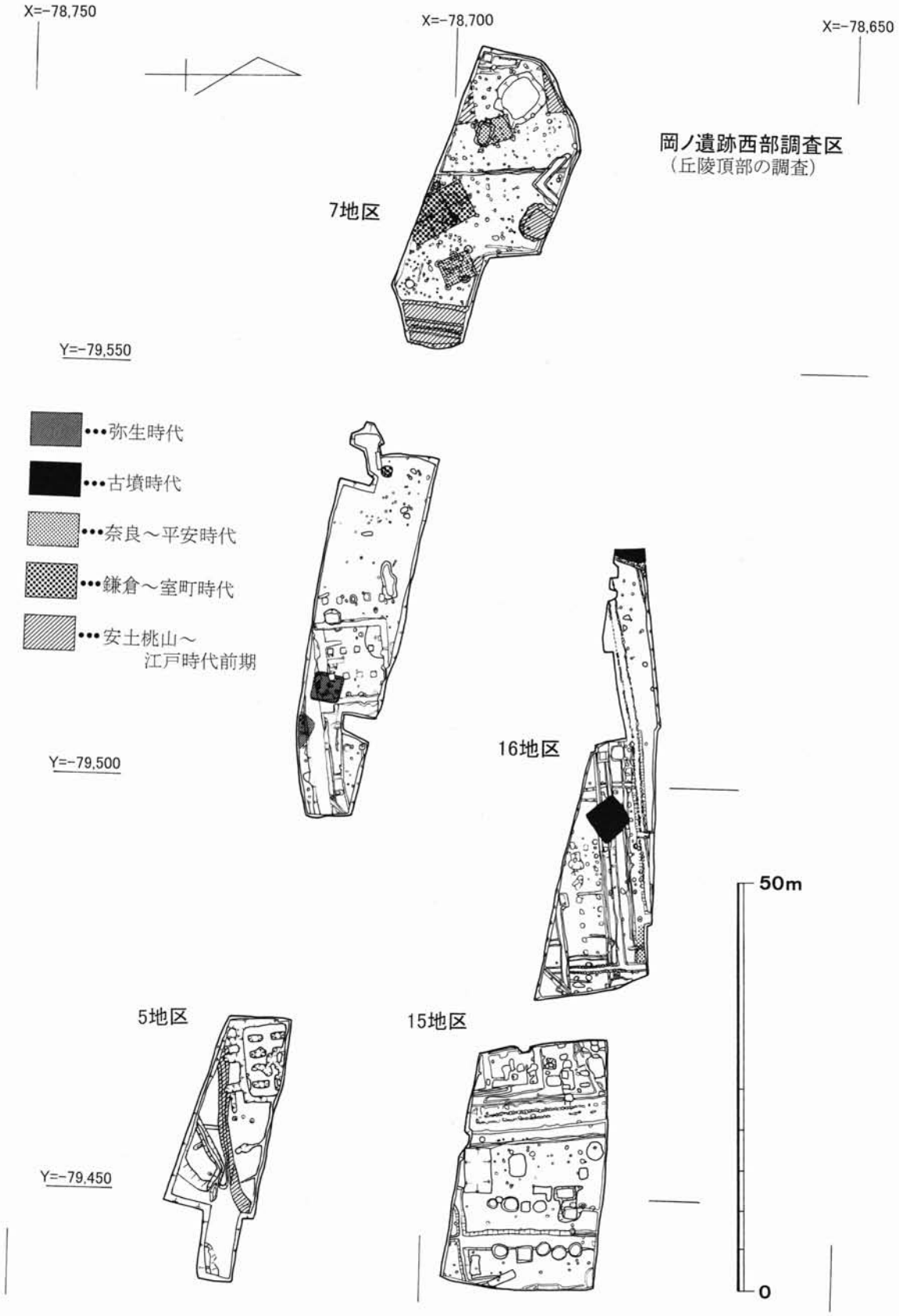
118・119は、14地区の柱穴群から出土した土師器甕である。口縁部は、ゆるやかに外反し、体部外面にハケ調整を、内面にケズリを施す。118は、柱穴Ｐ1401から出土した。口径は23.8cmを測る。119は、柱穴Ｐ1402から出土した。口径は17.6cmを測る。120は、16地区の土坑ＳＫ16001上部から出土した山陰系複合口縁甕である。口径14.0cmを測る。時期は、古墳時代初頭に帰属する。121は、16地区の土坑ＳＫ16002から出土した甑底部である。外面はナデ調整を、内面にケズリを施す。時期は、古墳時代初頭とみられる。　（高野陽子）

５．ま と め

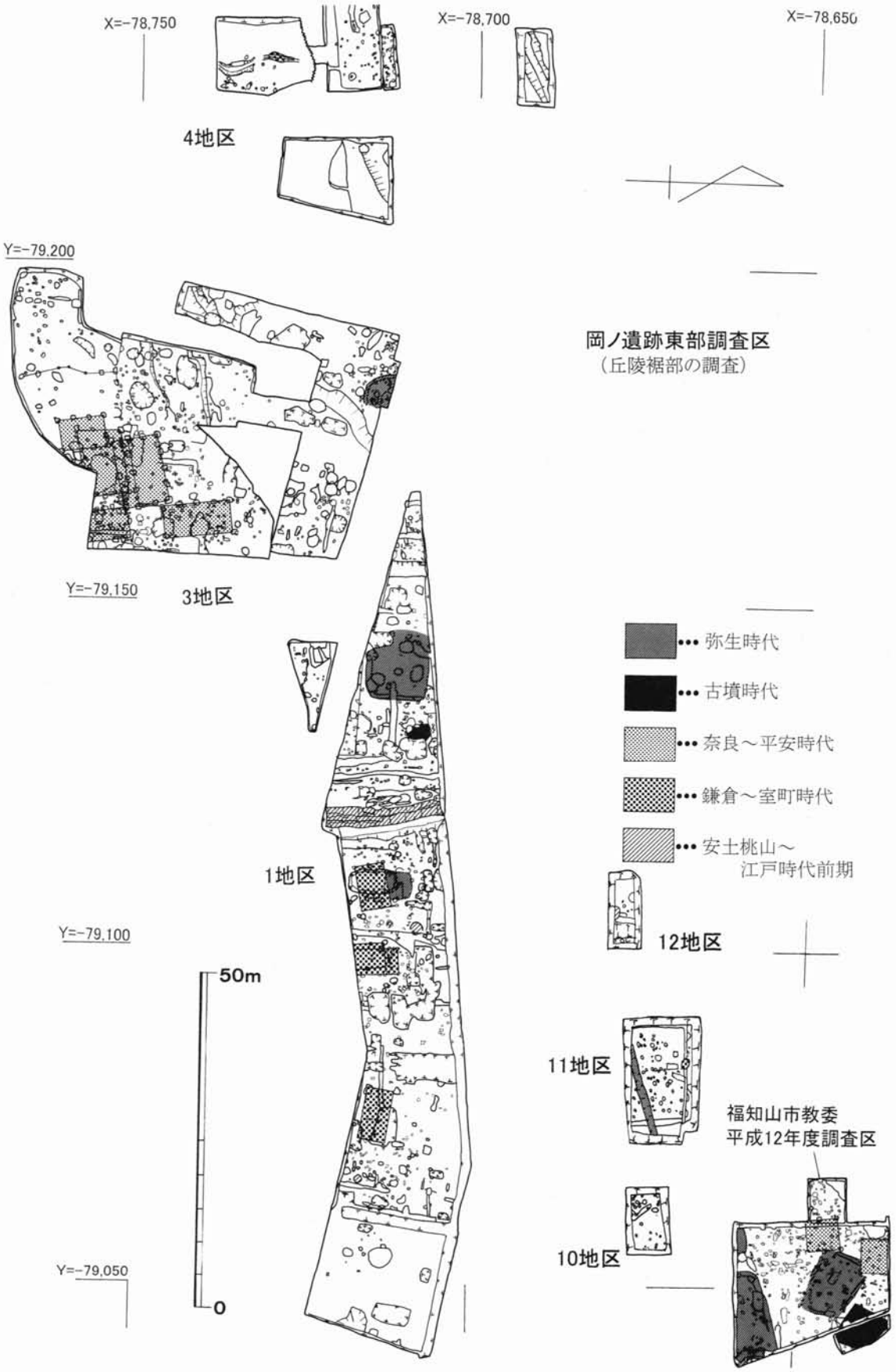
岡ノ遺跡は、福知山盆地南部の山塊から、由良川南岸に向けて舌状に張り出す丘陵を中心に大きく広がる遺跡である。遺跡周辺は盆地を一望できる良好な立地を示すが、これまで丘陵裾部が部分的に調査されたに留まり、遺跡の内容は充分明らかにされていない。今回の３か年にわたる調査では、東西約500ｍにわたって丘陵上や裾部を含む各所に調査区を設定し、弥生時代後期～江戸時代に至る多くの遺構を検出し、遺跡の実態を解明する貴重な資料を得た。以下、時代を追って一連の調査で得られた遺跡の変遷を明らかにし、まとめとしたい。

弥生時代の遺構としては、遺跡東部では、１地区で弥生時代の方形周溝墓を検出している。１地区の北東約50ｍの地点で福知山市教委により過去に実施された調査においても、弥生時代中期の方形周溝墓群が検出されており、この周辺の低地では広く墓域を形成していた可能性が高い。１地区ではこのほか、後期中葉の住居跡や後葉～末の土坑を検出している。調査地西部では、福知山盆地西部を見下ろす高台にある６地区で、弥生時代後期末の遺構群を検出した。２基の住居跡を検出しているが、７地区や15地区の包含層中にも同時期の資料が含まれることから、集落は周辺に広く拡大していたものと考えられる。

古墳時代の遺構は、調査地西部の16地区で前期初頭の土坑を検出し、中央の４地区でも前期初頭の竪穴式住居跡跡を検出した。遺跡の立地する丘陵は、景初14年銘鏡を出土した広峯15号墳の立地する丘陵と至近の距離にあり、同時期の遺構として注目される。丘陵上の調査では、古墳時



第67図　西部調査地遺構変遷図



第68図　東部調査地遺構変遷図

代中期～後期の遺構は認められなかったが東部の丘陵裾部の調査では、１地区で古墳時代後期の竪穴式住居跡や土坑を検出した。また、福知山市教育委員会による調査区でも、中期の竪穴式住居跡が確認されており、中期から後期の集落が丘陵裾部に展開するとみられる。

奈良～平安時代にかけての遺構は、遺跡西部と東部においてそれぞれ確認した。東部の３地区では、丘陵裾部の傾斜地を大きく断面「L」字状に切り崩し、平坦地を造成して形成された奈良～平安時代の大形掘立柱建物跡群を検出した。主軸はいずれも正方位にのり、庇を付すものを含む。建物群の西側では、これらを囲む柵列を確認している。周囲では、緑釉陶器や石帯などが出土しており、有力者の居宅かあるいは官衙的な性格をもつ建物群と考えられる。一方、遺跡西部の高台では、７地区でも平安時代の建物跡や井戸を検出した。建物跡は、柱穴の規模や構造から、櫓(矢倉)の可能性がある。この地点は、交通の要衝である盆地西部の低地部を遠望できる位置にあり、防御的な性格をもつ建物の立地として適したものである。

鎌倉～室町時代にかけての中世の遺構は、丘陵頂部から裾部に至る各所で確認された。１地区では、鎌倉時代とみられる掘立柱建物跡群を検出し、中央の４地区では、丘陵上に中世墓１基を確認した。また６～７地区では、６地区で鎌倉時代の井戸を７地区では同時期の掘立柱建物跡や柵列を検出している。両地区では、中世土器を出土する柱穴も多く検出されていることから、中世の集落が形成されたと考えられる。

安土桃山～江戸時代前期の遺構は、丘陵裾部の１地区で南北方向に掘削された断面「V」字形の大溝を検出した。また丘陵頂部の７地区では、建物跡や井戸、溝、柵列などを検出し、安土桃山時代から江戸時代初期の遺構の大きな広がりを確認した。明智光秀により開城された近世城郭として知られる福知山城は、岡ノ遺跡の立地する丘陵と続いており、北東に向けて舌状にのびた先端部に位置する。これまで、江戸時代中期の絵図によって、４地区周辺まで城下が及び、武家屋敷が建てられていたことは知られていたが、４地区の周辺調査では実際に江戸時代の柱穴群を検出し、絵図の状況を裏付ける資料が得られた。中期以前の状況はほとんど不明であったが、今回の調査で安土桃山時代から江戸時代初期の遺構群を丘陵頂部や裾部で検出したことは、福知山城形成期の問題を検討する上で、大きな成果となった。

(松井忠春・高野陽子)

注　調査参加者は以下のとおりである。

調査補助員　八瀬由香里・岡崎志保・小島健之介・高井亮平・宮川拓・黒田洋一郎

整理員　三好ひとみ・渡邊節子・坂本由美・寺尾貴美子・春日満子・荻野富紗子・藤井矢壽子

参考文献

永谷隆夫「岡ノ遺跡発掘調査」(『福知山市文化財調査報告書　第42集』　福知山市教育委員会)　2002

戸原和人「岡ノ遺跡第２次発掘調査概報」(『京都府遺跡調査概報　第111冊』　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2004

伊野近富「岡ノ遺跡第２・３次発掘調査概報」(『京都府遺跡調査概報　第113冊』　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2005

戸原和人・伊野近富「岡ノ遺跡第３次発掘調査概報」(『京都府遺跡調査概報　第118冊』　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2006

3．美濃山（みのやま）遺跡発掘調査概要

1．はじめに

今回の調査は、八幡市内里柿谷16－1番地に所在する京都府立南八幡高等学校の敷地内での学校関連施設の新設に伴う発掘調査であり、京都府教育委員会の依頼を受けて実施した。

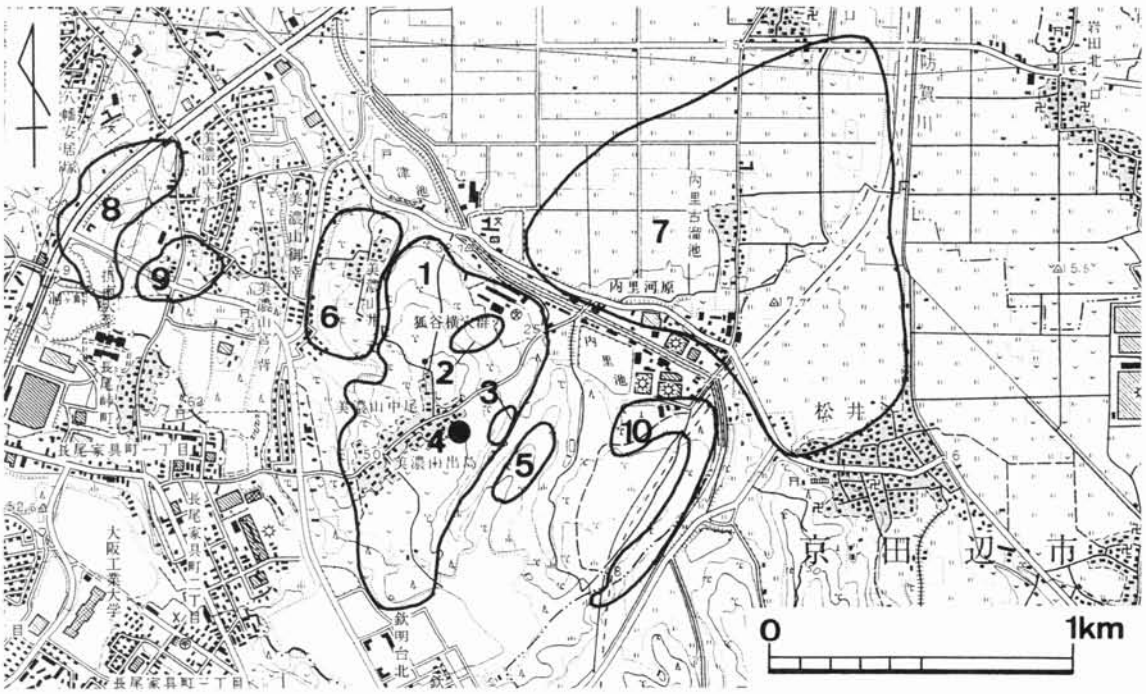
調査は、グランドでの有効利用を考えて2棟の建物予定地のうち、北側の建物予定地の1トレンチの発掘調査を先行して行った。1トレンチの調査終了ののちトレンチの埋め戻し作業を行った後、続いて南側の建物予定地の2トレンチの調査を行った。2トレンチの調査終了後にグランド活用のために埋め戻し作業を行った。

現地調査期間は、平成18年6月1日～8月18日を要した。調査面積は合計1,200㎡で、1トレンチは600㎡、2トレンチは600㎡である。

現地調査に当たっては、八幡市教育委員会をはじめとする関係諸機関からご協力をいただいた。発掘調査・整理作業には、地元有志の方々の参加があった。記して感謝したい。(注)

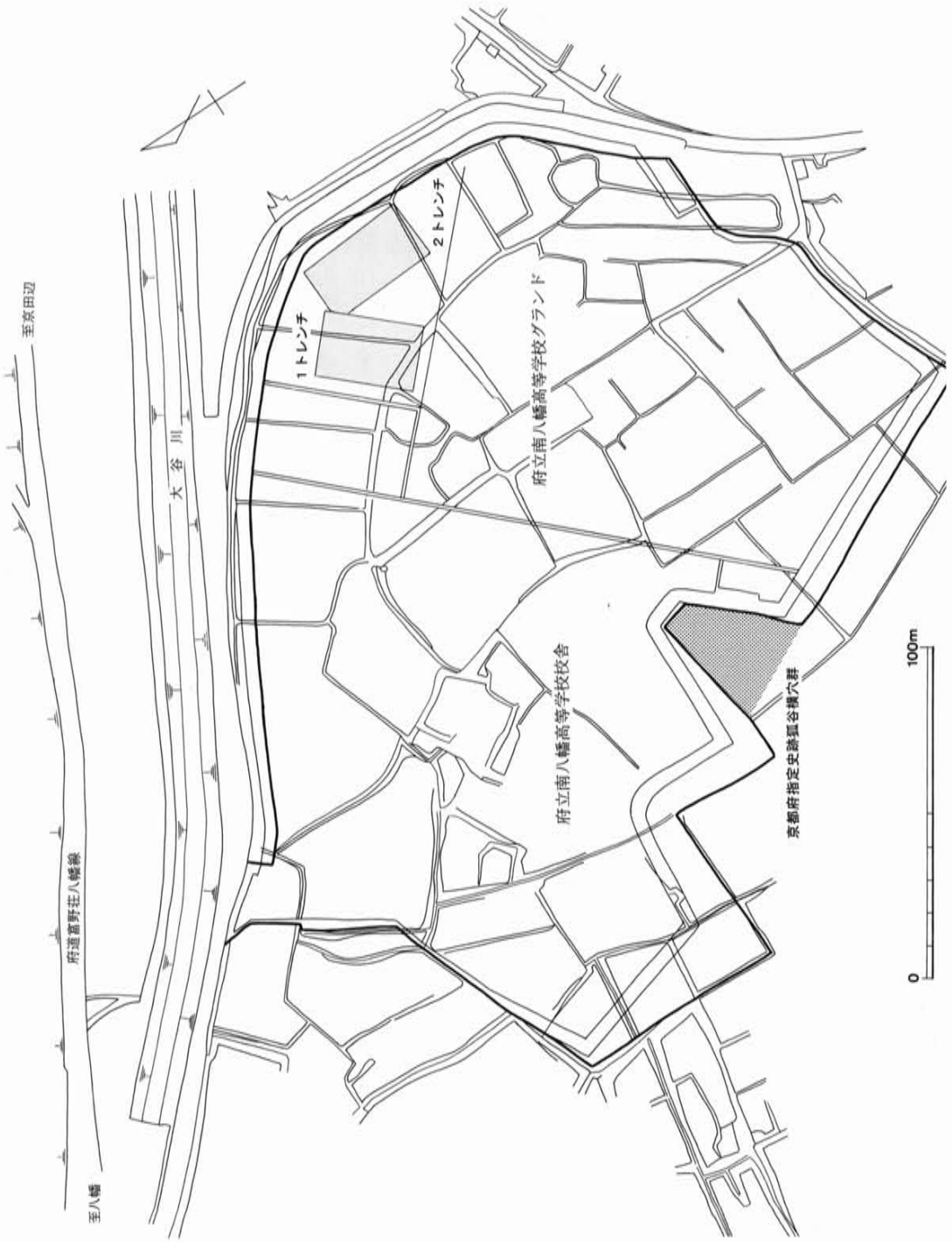
現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長石井清司、同主任調査員引原茂治、同専門調査員石尾政信が担当した。

なお、発掘調査にかかる経費は、全額、京都府教育委員会が負担した。



第69図　調査地および周辺遺跡分布図(国土地理院1/25,000淀)

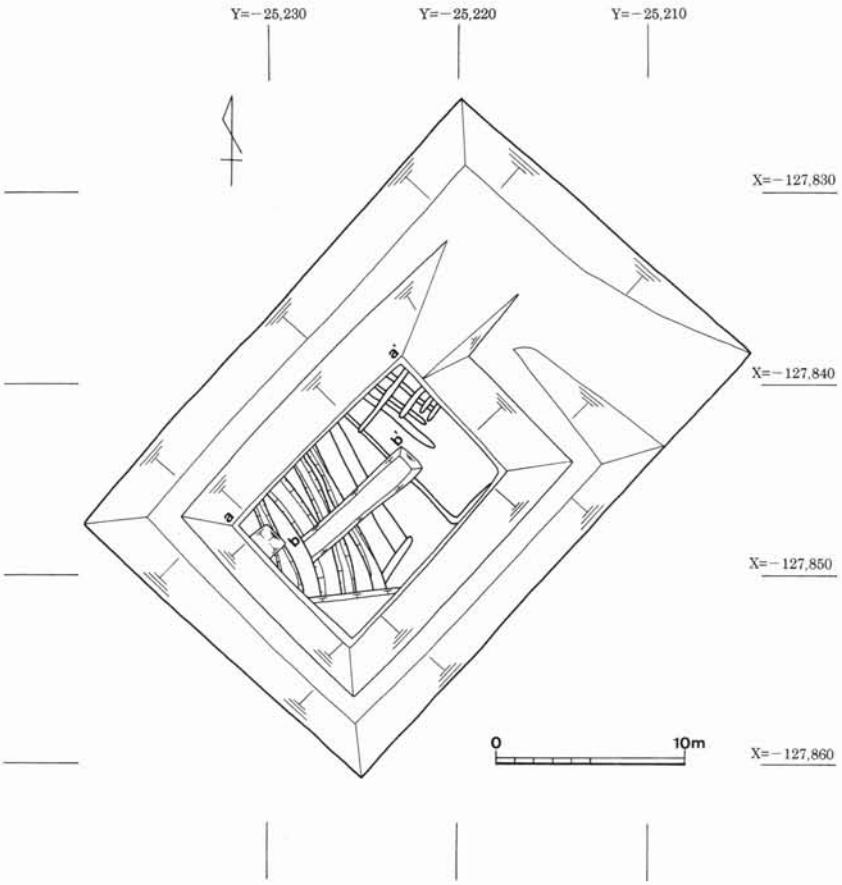
1．美濃山遺跡　2．狐谷横穴群　3．美濃山横穴群　4．美濃山王塚　5．美濃山廃寺
6．金右衛門垣内遺跡　7．新田遺跡　8．備前遺跡　9．西ノ口遺跡　10．女谷・荒坂横穴群



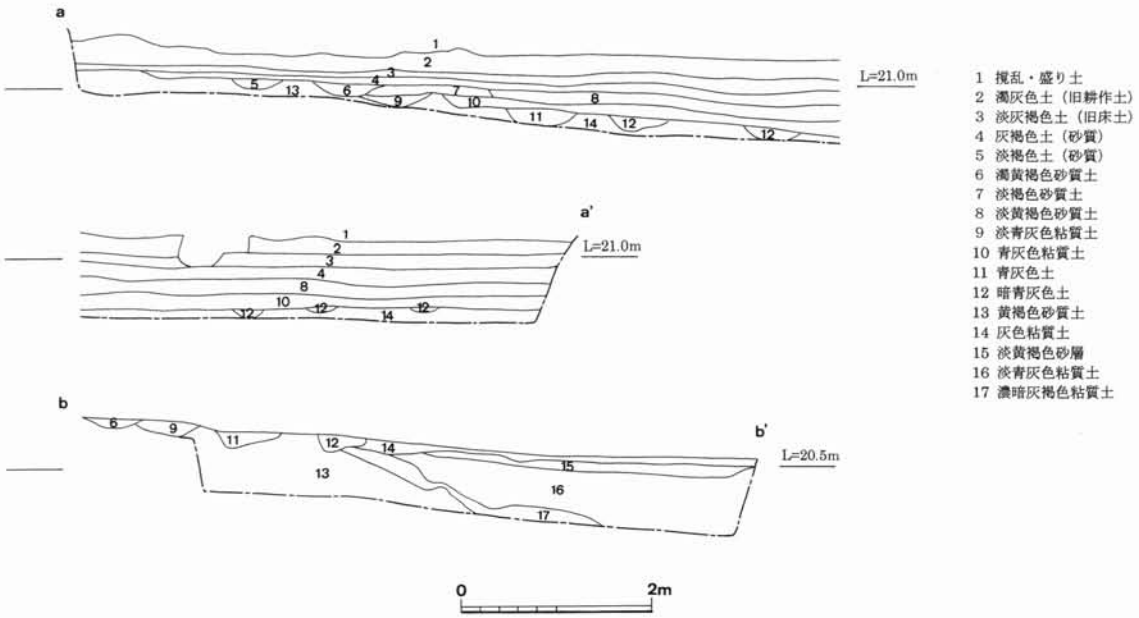
第70図　調査地周辺旧地形およびトレンチ配置図

2．周辺遺跡の概要

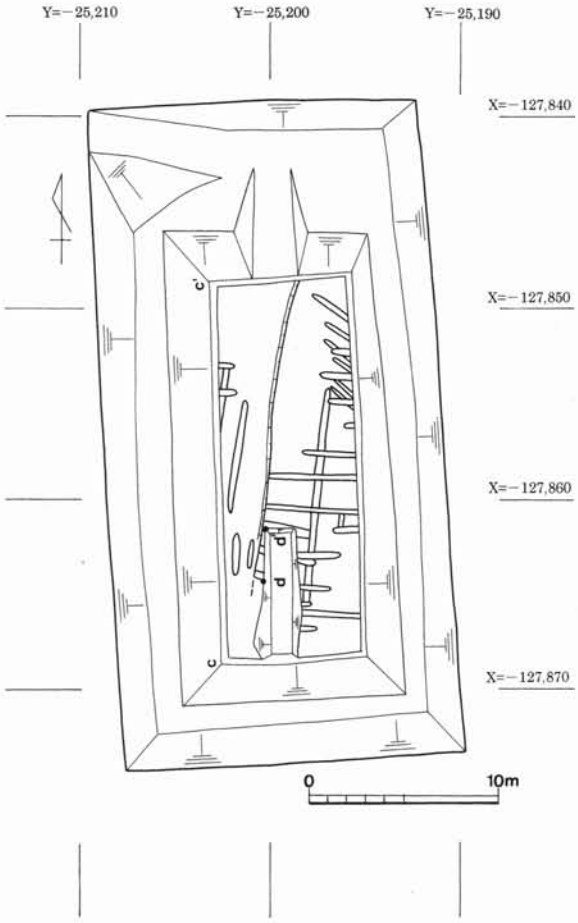
美濃山遺跡は、東西0.5km、南北1.25kmの広範囲に広がる遺跡であり、これまでの調査成果から、弥生時代後期から奈良時代にかけての複合遺跡であることが知られており、今回の調査地は、美濃山遺跡の北端部の丘陵先端部および丘陵裾部に位置する。この美濃山遺跡内には古墳時代中期の直径60m、高さ9mを測る円墳で、埋葬施設は粘土槨、出土遺物として内行花文鏡を含む多くの鏡が出土した美濃山王塚古墳、古墳時代後期後半の6基の横穴からなる美濃山横穴が含まれる。美濃山横穴に隣接して美濃山廃寺があり、丘陵の東方の京田辺市との境界に女谷・荒坂横穴群がある。丘陵の西方には弥生時代の集落遺跡である金右衛門遺跡・備前遺跡などがある。



第71図　1トレンチ平面図



第72図　1トレンチ西壁および下層断面図



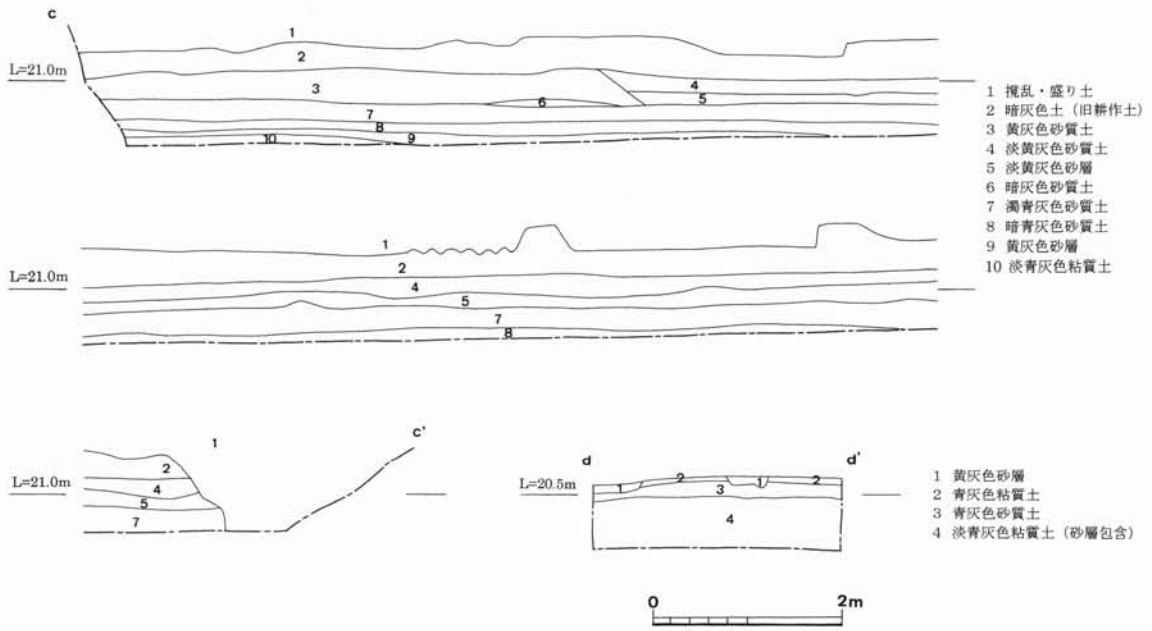
第73図　2トレンチ平面図

また、平野部には弥生時代から中世にかけての集落遺跡である新田遺跡がある。

今回調査した京都府立南八幡高等学校でも、校舎新設に伴う昭和57年度の事前調査に際して、弥生時代中期の土器を含む溝や、土器は含まれず時期決定の資料を欠くが方形に溝がめぐる方形周溝遺構などを検出した。また、校舎敷地の西端の丘陵南側斜面では、古墳時代後期から飛鳥時代（6世紀後葉～7世紀前葉）にかけての8基からなる横穴群を検出した。横穴群からは多数の土器とともに鉄刀、金環などが出土し、その重要性から保存協議がなされ、関係機関の努力の結果、現状保存され、京都府指定史跡狐谷横穴群として校内に保存されている。

3．調査概要

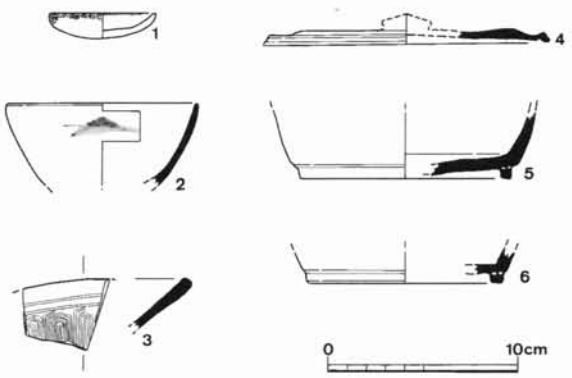
今回調査を実施した場所は、校舎敷地内の北端でテニスコート・バレーコートとして使用されていたグランド部分である。造成前の地形は丘陵先端および丘陵裾部で、前述の昭和57年度の発掘調査以降、校舎新設に際して造成工事が行われた地点で、造成以前は水田として利用され



第74図　2トレンチ西壁および下層断面図

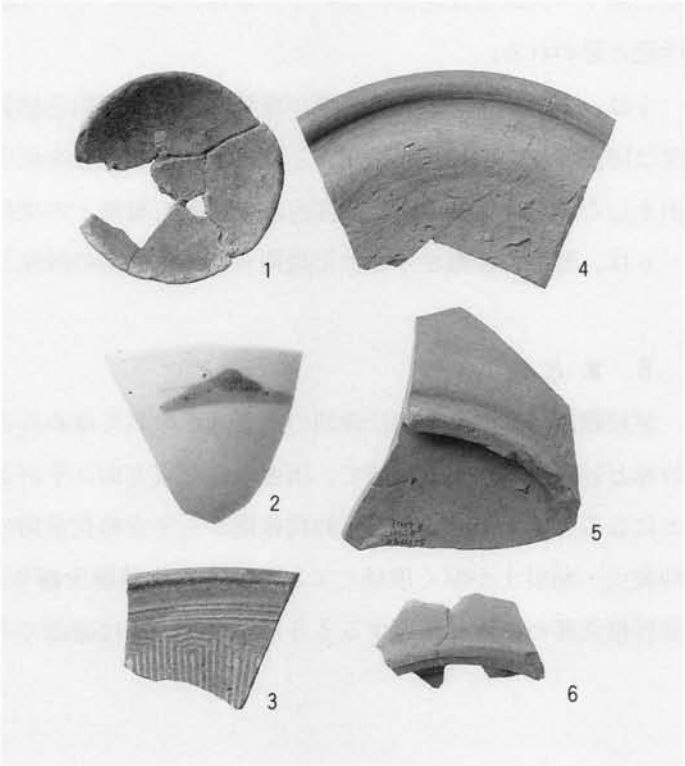
ており、グランドの造成および整備に際して、4m以上の盛土を行っている。

調査は2棟の建物予定地部分で、600m²のトレンチを2か所設定して調査を行った。2か所のトレンチともに、学校建設に伴う造成工事により4m前後の盛土があった。壁面の崩落を防ぐため、二段掘りにしたため、旧地形より下層で調査を行った範囲は狭いものとなった。



第75図　出土遺物実測図

1・2トレンチともグランド造成に伴う盛土層が厚く堆積しており、グランド造成以前の旧耕作土を標高20.4m前後で確認した。



第76図　出土遺物

4．検出遺構

(1) 1トレンチ

1トレンチでは耕作土の下に淡灰褐色の旧床土があり、その下に灰褐色土(砂質)、淡褐色砂質土、淡黄褐色砂質土、青灰色粘質土などが堆積していた。この堆積層に溝が掘り込まれており、掘り込まれた層の違いから時期差が確認できた。上層で検出された溝は幅0.5～0.7m、深さ0.1～0.15m、中層の溝は幅0.7m、深さ約0.15m、下層の溝は幅0.3～0.7m、深さ0.1～0.2mを測る。これは水田部分が丘陵からの流出層で埋まる度に整地を行ったことを示している。1トレンチの西端で丘陵先端部分の大阪層群と考えられる黄褐色砂質土層を確認した。下層の調査で、流出した大阪層群が堆積した濃暗灰褐色粘質土から奈良時代後期～平安時代前期の須恵器が出土した。先に記述した青灰色粘質土には奈良時代後期～平安時代初頭の須恵器や、江戸時代(17・18世紀)の土師器皿、陶器片が含まれていた。江戸時代の堆積層である青灰色粘質土を掘り込んだ溝群は、耕作に関連するものと思われる。

(2) 2トレンチ

2トレンチでは、丘陵先端部は確認できず、旧耕作土の下層は青灰色系の砂質土・粘質土・砂層が堆積していた。この堆積層から1トレンチ同様に江戸時代の陶器片が出土し、堆積層を掘り

込んだ耕作に関連する溝群を検出した。溝は幅0.2～0.4m、深さ5cm前後を測る。溝の方位から3時期あることが確認できた。

5．出土遺物

出土遺物には流出した大阪層群の再堆積層である濃暗灰褐色粘質土、青灰色系の粘質土・砂質土などの江戸時代堆積層から若干の遺物が出土している。以下に簡単に記述する。

1は、口径5.5cm、高さ1.4cmを測る小形の土師器皿である。口縁部にススが付着しているので灯明皿に使用されていたことがわかる。2は、肥前系の染付磁器椀で、外面に山水文を描いているものとみられる。3は、肥前系の陶器で、内面口縁端部には白土象嵌で蓮弁文を施す。いわゆる三島手の大皿と推定される。1～3は、2トレンチの堆積層から出土したもので17～18世紀の所産と思われる。

4は、1トレンチの大阪層群が堆積した濃暗灰褐色粘質土から出土した須恵器蓋である。口縁部は屈曲する。口径15cmを測り、焼成が良好で灰色を呈す。5・6は、1トレンチの堆積層から出土した須恵器杯Bである。高台が底部と口縁部との境界に付く。5は高台径10.9cmを測る。4～6は、形態の特徴から8世紀後期～9世紀前期の所産と考えられる。

6．まとめ

学校建設以前の地形図に今回の調査地点を当てはめると、1トレンチが丘陵先端部の畑または竹林と谷水田にかかる地域で、南西から北東方向に下がる丘陵先端部と水田の境界を検出したことになる。水田部分では奈良時代後期から平安時代前期の須恵器、江戸時代の陶磁器などを含む砂質土・粘質土が厚く堆積しており、この堆積層を掘り込んだ耕作に関連する溝群を検出した。狐谷横穴群や集落に関連するような顕著な遺構は確認できなかった。

（石尾政信）

注　**調査補助員**　木村涼子・黒慶子　**整理員**　寺尾貴美子

4．薪（たきぎ）遺跡第7次発掘調査概要

1．はじめに

この調査は、主要地方道八幡木津線道路整備促進事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

薪遺跡は、京都府京田辺市大字薪小字巽・泥々・狭道に所在する。本整備促進事業に伴う試掘調査は、当調査研究センターが平成13年度（第3次調査）から開始し、平成15年度（第5次調査）までに15か所（調査面積1,480㎡）の試掘トレンチ調査と、それに基づく本調査（第6次調査）を1か所実施している（750㎡）。

調査地は、3か所に分かれており、南から北へ順にA・B・C地区とした。各地区とも試掘調査が行なわれており、その結果を受けて本調査を実施したものである。

なお、平成13年度（第3次調査）から平成16年度（第6次調査）までに実施した調査成果については、日本測地系（旧座標）で表示していたが、今回の調査成果と合わせて世界測地系（新座標）に表示方法を改めた。

各地区における試掘の結果は、A地区では、平成15年度第5次調査（第6トレンチ）が実施され、遺物が出土しなかったため時期は不明であるが、柱跡の可能性も考えられるが規模が大きいため土坑として4基が報告されている。(注1)

B地区では、西端で平成13年度第3次調査（第3トレンチ）が実施され、中世の土坑が1基検出されている。(注2) また、道路を挟んだ南東側では、平成16年度第6次調査において、縄文時代中期末の竪穴式住居跡2基、土坑11基、平安時代の溝1条、柱穴などが検出されている。(注3)

C地区では、調査地中央部分にあたる平成13年度第3次調査（第1トレンチ）で、平安～鎌倉時代、縄文時代後期前半と判断される遺物包含層が確認された。地山面上においては、流路2、土坑4、柱穴10か所が検出されている。その後、北端で行なわれた平成14年度第4次調査（第5トレンチ）では、縄文・古墳・平安・中世の包含層を確認し、平安時代～中世と考えられる柱穴3か所、土坑2基、溝1条が検出されている。(注4)

各地区における試掘結果では、いずれも遺構・包含層が確認されており、良好な遺構の検出が期待され、A・C地区では過去の試掘トレンチを含め、調査を実施した。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長石井清司、同主任調査員戸原和人・増田孝彦、同主査調査員柴暁彦が担当した。調査期間は、平成17年9月26日～平成18年2月27日まで実施した。調査面積はA地区1,200㎡、B地区300㎡、C地区1,000㎡の合計2,500㎡である。

本概要報告は増田・柴が分担して執筆した。

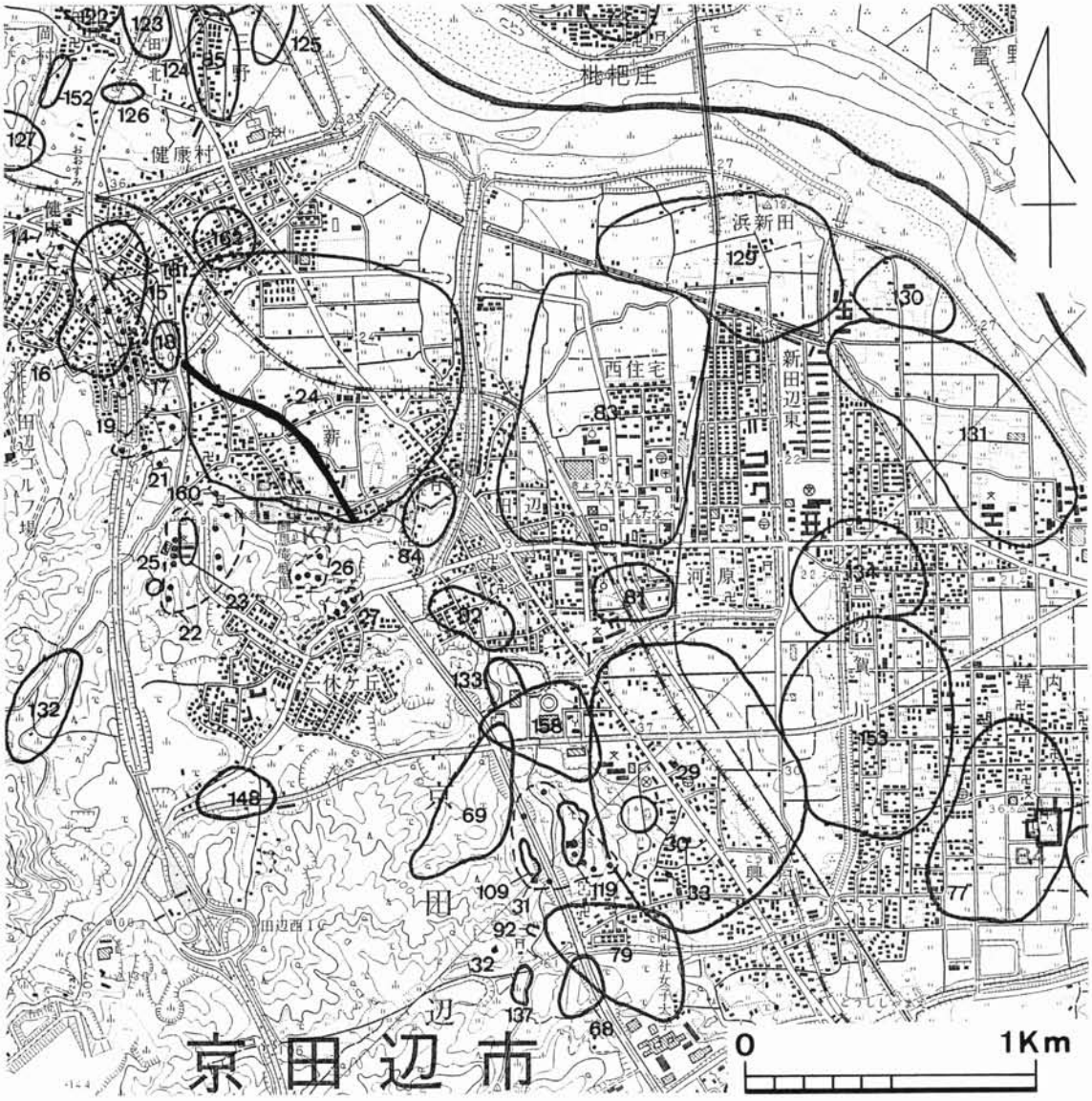
調査に際しては、京田辺市教育委員会・京都府教育委員会・京都府山城北土木事務所・地元自

治会をはじめとする関係諸機関からご指導・ご協力をいただいた。また、現地調査・整理作業については、補助員・整理員の参加、協力を得た。(注5) 記して感謝したい。

なお、調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

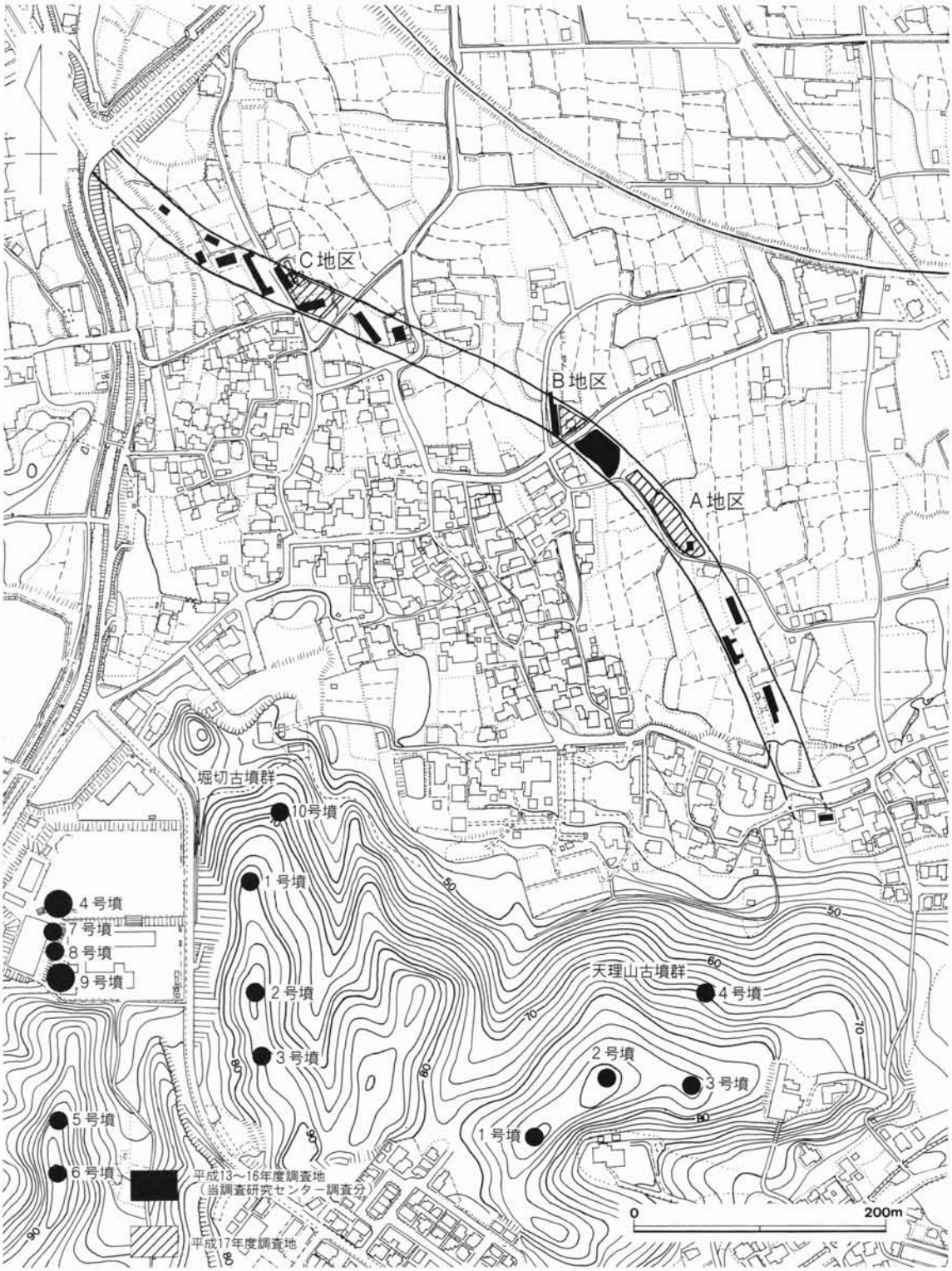
2．位置と環境

薪遺跡は、京田辺市の中心部の北西側、木津川左岸の丘陵裾部に位置する。西側に木津川支流の甘南備山に源を発する手原川、東側に天津神川、南側を天理山丘陵に囲まれた位置にあたり、手原川により形成された扇状地上に立地する。過去の調査成果などから、縄文時代から近世にか

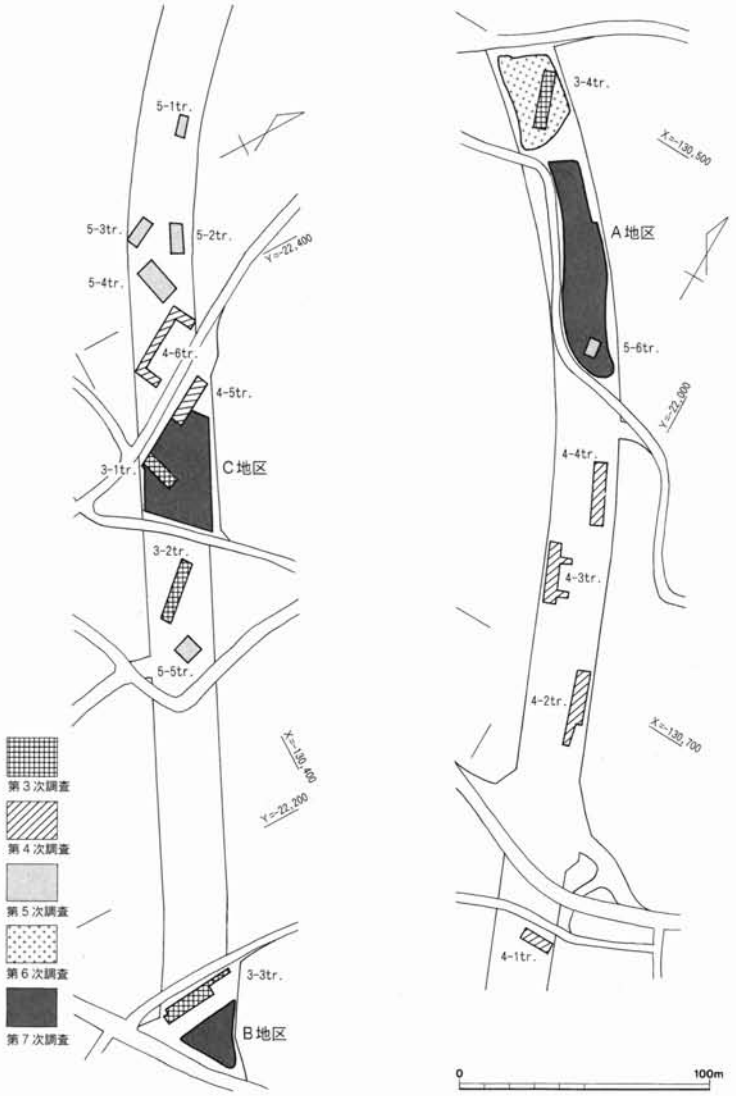


第77図　調査地および周辺の主要遺跡（『京都府遺跡地図』［第３版］第３分冊から転載）

A．調査対象地　5．大住車塚古墳　6．大住南塚古墳　7．姫塚古墳　15．大欠１号墳
16．狼谷遺跡　17．畑山古墳群　18．畑山遺跡　19．西山古墳群　22．堀切古墳群
23．堀切横穴群　24．薪遺跡　25．西薪遺跡　26．天理山古墳群　27．小欠古墳群
29．興戸遺跡　30．興戸廃寺　31．興戸古墳群　69．田辺城跡　72．宮ノ口遺跡
79．興戸宮ノ前遺跡　84．棚倉孫神社遺跡　85．三野遺跡　109．興戸丘陵東遺跡
122．奥村遺跡　158．田辺遺跡　162．薪城跡



第78図　調査地位置図(1)



第79図　調査地位置図(2)

けての大規模な複合遺跡として知られ、遺跡は東西南北方向とも約900m四方の広範囲におよぶ。

薪遺跡周辺の縄文時代の遺跡としては、三山木遺跡(縄文時代晩期～鎌倉時代)が知られている。

弥生時代前期の遺跡には、宮ノ口遺跡・宮ノ下遺跡・三山木遺跡が知られ、中期には、薪遺跡背後の丘陵部から土器・石器が出土した狼谷(小谷)遺跡がある。

古墳時代では、前期の著名な古墳として飯岡車塚古墳(全長90m)や、中期では薪遺跡北方に大住車塚古墳、大住南車塚古墳などの前方後円墳が知られている。薪遺跡周辺の丘陵部にも、中期から後期にかけて多くの古墳が築かれる。西側の丘陵には、郷士塚古墳群(6基)、畑山古墳群(4基)、西山古墳群(3基)、南側には堀切古墳群(10基)、天理山古墳群(4基)、小欠古墳群(3基)が築造されている。

このうち、郷士塚古墳群は前期から後期にかけて築造され、郷士塚2号墳(中期)では鉄鉾・鉄斧・鉄鏃など多数の鉄器とともに家形埴輪・鳥形埴輪などが出土している。また、郷士塚4号墳(後期)は横穴式石室を内部主体とし、鉄鉗・鉄鎚の鍛冶具が多くの土器とともに出土した。

天理山古墳群(1号墳)でも粘土槨が露出し、中期古墳が存在することが明らかとなっている。

堀切7号墳(後期前半)では、人物埴輪・船形埴輪・靫形埴輪などが出土している。

薪遺跡内の試掘調査では、第5次調査第5トレンチからは古墳時代前期末から中期初頭に比定される円筒埴輪が、また、第3次調査第2トレンチからは、古墳時代後期初頭に比定される同様の埴輪が出土している。これまで古墳は丘陵上に展開し、平地には存在しないとみられていたが、薪遺跡内には複数以上の古墳が埋もれていることが明らかになった。

古墳時代末には、丘陵斜面に横穴墓も築かれるようになり、松井横穴群・飯岡横穴群、薪遺跡南側には堀切横穴が存在する。

飛鳥・奈良時代については、特に奈良時代前半～後半には、薪遺跡内でも多くの遺物が出土しており、活発な生活痕跡が認められるが、今回の調査により遺構が確認され、ようやくその一端が明らかになりつつある。

平安時代になると、平安京造営の南目印とされた甘南備山に神奈比寺が建立される。薪遺跡内においても、全期間の遺物が出土することから、今後の調査に期待される。

平安時代後期末から鎌倉時代にかけて、薪集落は「薪荘」と呼ばれる石清水八幡宮の荘園となっていたようである。

３．調 査 概 要

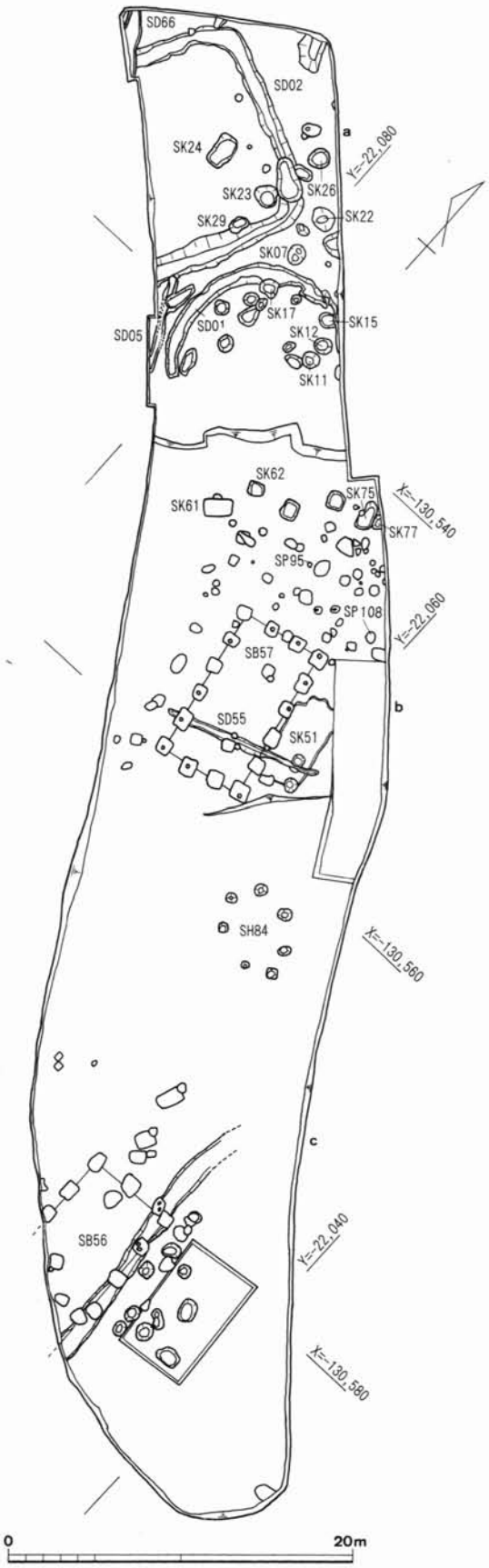
各地区とも重機により表土を除去し、遺物包含層を確認した後、人力掘削を行った。調査地は、Ａ地区は水田、Ｂ・Ｃ地区の一部は住宅地跡であり多量の盛土が施され、部分的ではあるが現代の攪乱・削平を受けていた。Ｂ・Ｃ地区では、遺構の残存状況は良好とは言えない部分も認められた。また、掘削にあたっては、Ｂ・Ｃ地区では、掘削土砂とコンクリート、アスファルトなど産業廃棄物の分別を行って掘削を実施した。各地区の検出された主要遺構について以下に概要を述べる。

（増田孝彦）

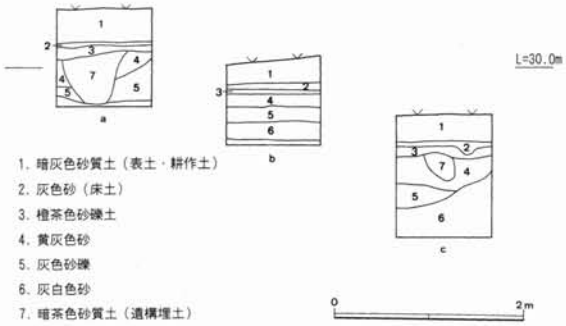
(1) Ａ地区

1） 基本層序（第81図）

現況では水田や畑地であり、平成16年度の調査地から南側に向かって耕作地が段状



第80図　Ａ地区平面図



第81図　A地区土層柱状図（a～cは第4図に対応）

に下がる段地形をなしている。表土および耕作土層が約0.3mの厚さで堆積し、その下に灰色砂からなる床土層が約5cm見られた。その下層には3層としたマンガン分が沈着したやや硬い橙褐色砂礫土からなる層があり、調査地の北側を中心に奈良・平安時代や縄文時代の土器などを含む遺物包含層となっている。調査地北側では、この3層の下層にあたる4層の上面である黄灰色砂層が平安時代の遺構検出面となる。調査地の北側での遺構検出面の標高（第81図a）は約30mである。縄文時代の遺構検出面はこれより約10cm下がる黄褐色砂質土層である。しかし、調査地南側に行くにしたがって同様の橙褐色砂礫土中に遺物は見られなくなるが、遺構検出面はこの下層の4層上面であり一致している。遺構検出面は調査地中央付近（第81図b）では29.9m、調査地南側（第81図c）では29.6mと緩やかに南側に向かって傾斜している。4層以下は、砂および砂礫層となり河川の流入による堆積状況と考えられる。

2）**検出遺構**（第80図）

遺構の分布状況として調査地の北側から中央付近にかけて遺構が密集しており、南側は遺構が少ない状況にある。検出した遺構は平安時代の土坑、溝、主軸方位の異なる奈良時代の掘立柱建物跡2棟、溝や縄文時代中期の土坑群などがある。また、一辺11mを測る方形の溝や弧状の溝を検出し当初古墳の周溝と考えたが、古墳と断定できる遺物の出土が見られなかったため時期不明の遺構として報告する。

①平安時代の遺構

長方形土坑ＳＫ51（第82図）　調査地の中央部分の掘立柱建物跡ＳＢ57の東側で検出した。東西約3m、南北約5m、深さ0.1mを測る隅丸長方形の土坑である。土坑の底面はほぼ平坦である。床面ではこの土坑に伴うと考えられる柱穴などは確認できなかった。主軸方向は掘立柱建物跡ＳＢ57とほぼ平行するが、この建物跡の柱穴を切っており建物跡が廃絶後の遺構と考えられる。埋土は暗茶色砂質土である。埋土中から須恵器（杯蓋・杯身）・土師器（杯蓋・杯身・甕・高杯）、製塩土器、凸面に縄目タタキを施す瓦片・フイゴの羽口片などが出土した（第98図）。特に須恵器・土師器は多量に出土した。出土した須恵器の杯蓋は完形品も見られた。また、杯身には墨痕の付着したものも見られた。土坑の性格は多様な遺物の出土から廃棄土坑と思われる。出土遺物から土坑の時期は8世紀後半と考えられる。

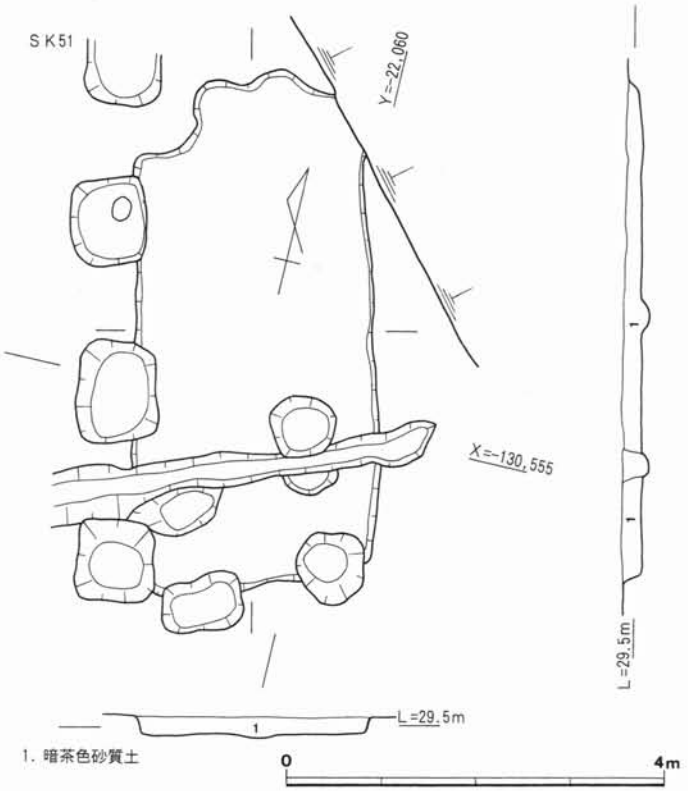
溝ＳＤ66（第82図）　調査地の北西角で検出した。溝の幅は約0.9m、深さは遺構検出面から約0.3mを測る。溝を検出した長さは約4mである。方形溝ＳＤ01を切っている。埋土は暗茶灰色粘質土である。埋土中から須恵器杯や土師器甕、鍋などの破片（第97図1～4）とともに拳大の礫が混じる状態で出土した。遺物の出土状況から溝の底面に接する遺物などが見られないことから、溝がある程度埋まった段階で投棄されたと判断できる。昨年度の調査地では流路により途中で溝

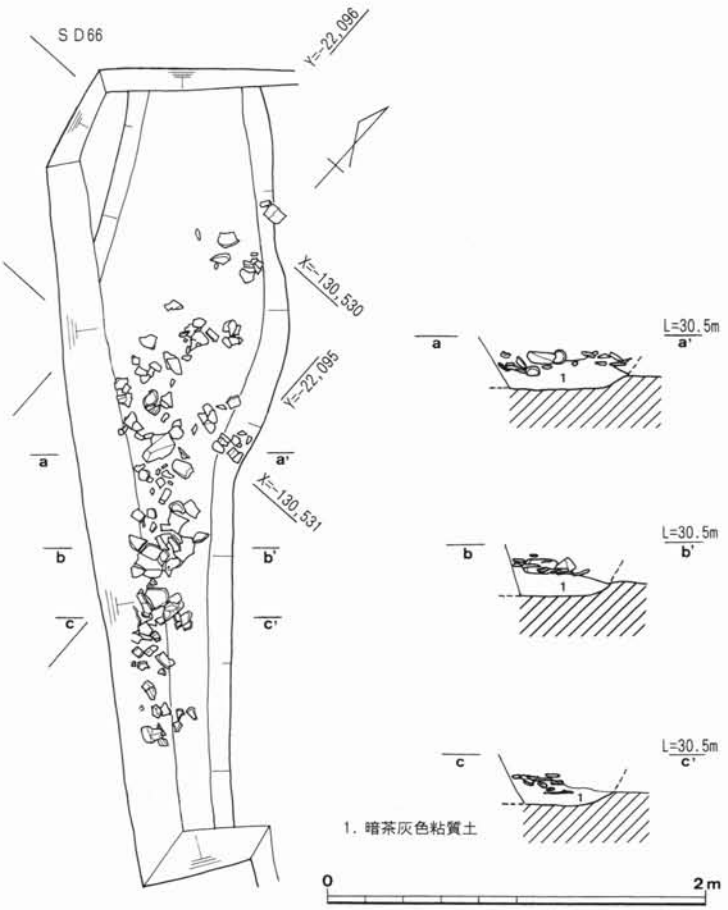
が消失していたが国土座標で位置関係を見ると第６次調査で検出した南側の延長部と一致しており同一の溝であると判断した。

溝ＳＤ05　方形区画の溝ＳＤ02の南西側で検出した。幅約0.5m、深さ約0.2mを測る。検出した長さは約６ｍである。埋土は暗茶灰色粘質土である。埋土中から須恵器の甕体部片が出土した。前述の溝ＳＤ66と溝心々の距離約４ｍで平行しており道路側溝の可能性もある。

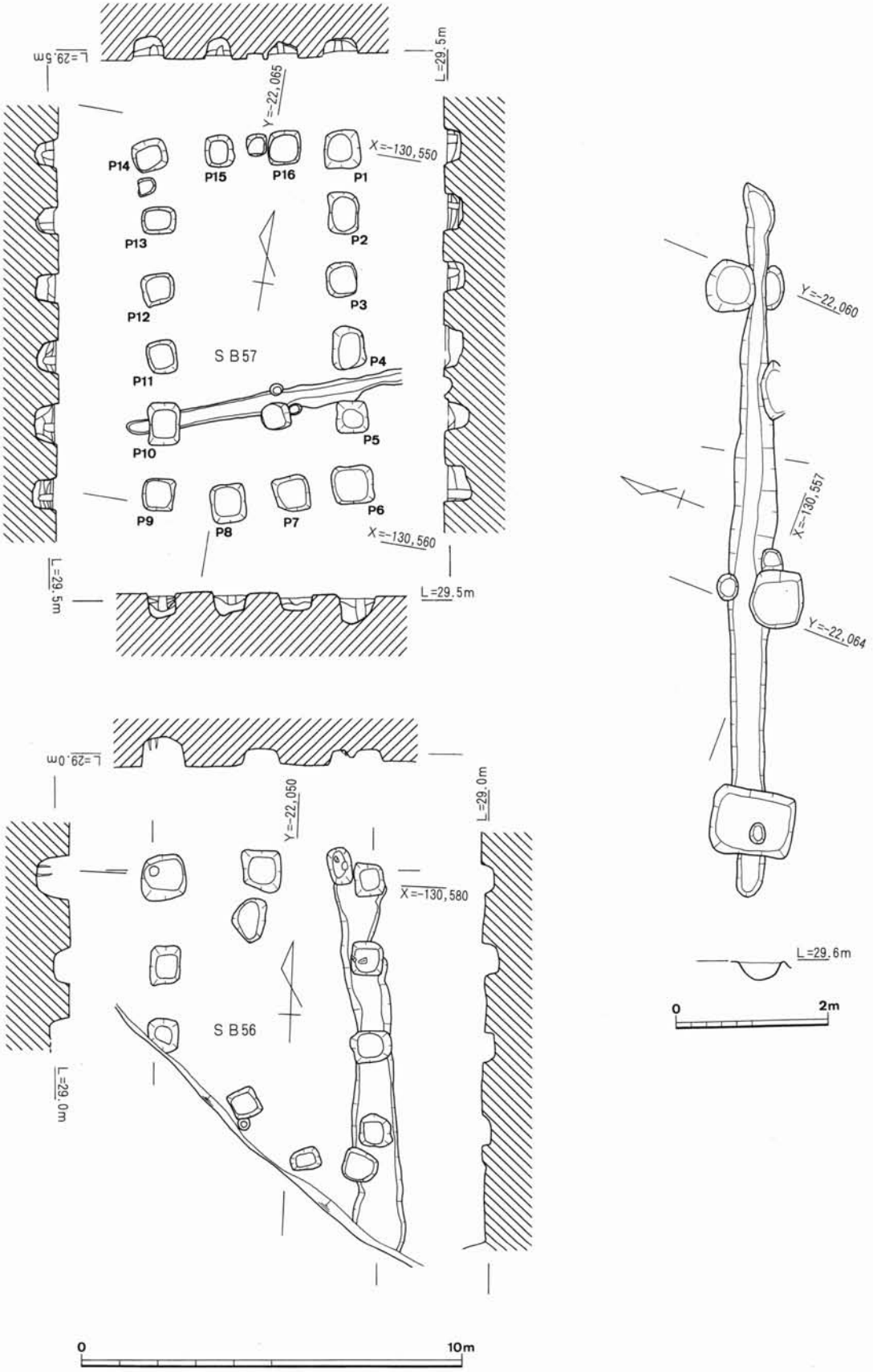
②奈良時代の遺構

掘立柱建物跡ＳＢ56（第83図、　図版第54－(2)・55－(2))　調査地の南端で検出した。東側の柱穴は近世の水路と考えられる溝と重なり合っていた。建物の規模は東西２間（約5.1m）、南北３間（約6.3m）以上の南北棟建物である。柱掘形は隅丸方形で、一辺が約0.7mあり、深さは約0.4mを測る。柱間寸法は梁間が2.55m（8.5尺）、桁行が2.1m（７尺）の等間隔である。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土ないしは暗茶褐色砂礫土である。北西隅の柱穴に遺存していた柱痕の直径は約0.3mを測る（図版第56－(2)）。建物の主軸はほぼ真北を示している。

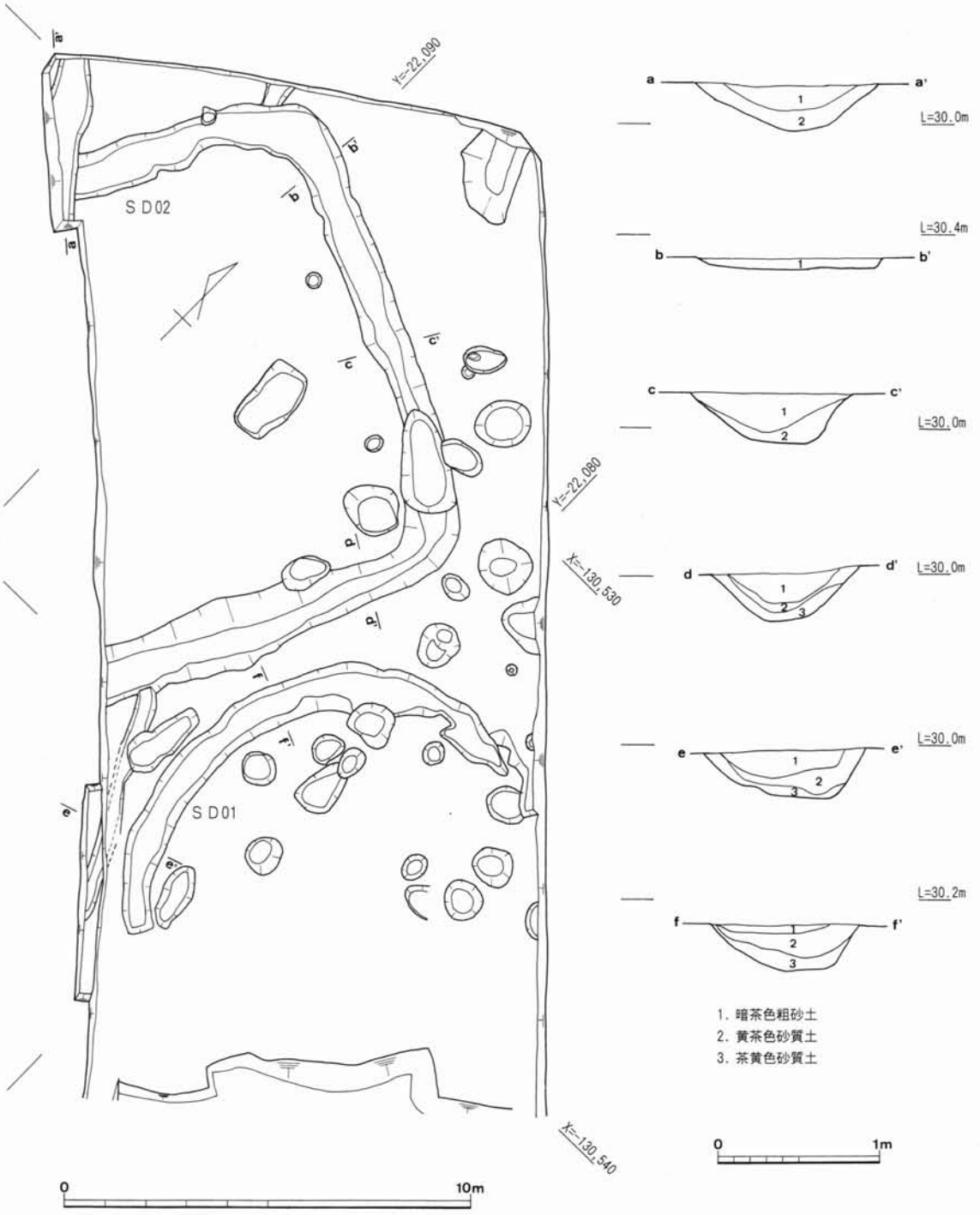




第82図　土坑ＳＫ51・溝ＳＤ66実測図

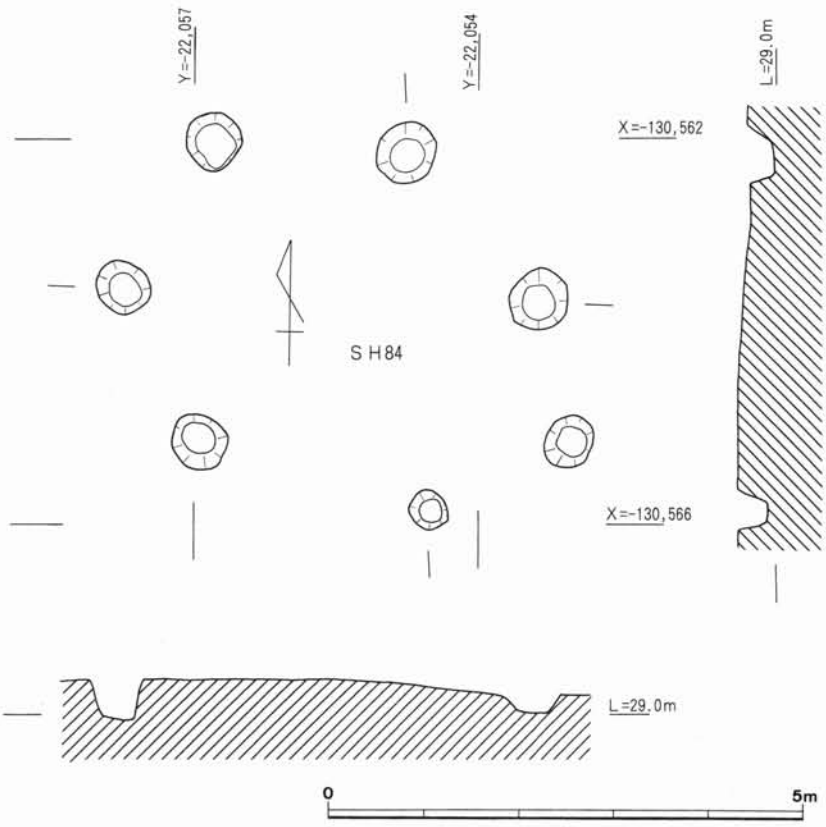


第83図　掘立柱建物跡ＳＢ56・57、溝ＳＤ55実測図



第84図　溝ＳＤ01・02実測図

掘立柱建物跡ＳＢ57(第83図、　図版第54－(1)・55－(1))　調査地の中央付近で検出した。東西３間(約５ｍ)、南北５間(約９ｍ)の南北棟建物である。柱掘形は隅丸方形で一辺が約0.8ｍあり、柱穴の深さは約0.5ｍを測る。柱間寸法は梁間が1.65ｍ(5.5尺)、桁行が1.8ｍ(６尺)の等間隔である。柱穴の埋土は暗茶褐色粘質土である。柱穴の検出面から約５cm掘削すると平面において柱当たりを確認することができた。柱穴の埋土を半截すると柱痕の断面を確認できた。柱痕の直径は柱掘形に対して約20cm前後と意外に細かったが、最終的に柱穴を完全に掘り抜くと北西隅



第85図　竪穴式住居跡ＳＨ84実測図

の柱穴から遺存する柱根が出土した(図版第56－(1))。その直径は約20cmであり、断面観察で確認できた柱の直径とほぼ一致した。建物の主軸は真北から西へ約15°振れている。柱穴の一部が平安時代前期の長方形土坑ＳＫ51に切られており奈良時代の建物と判断した。なお、この建物跡の周囲でも隅丸方形の同様の規模をもつピットを検出したが建物跡や柵列として復原することはできなかった。

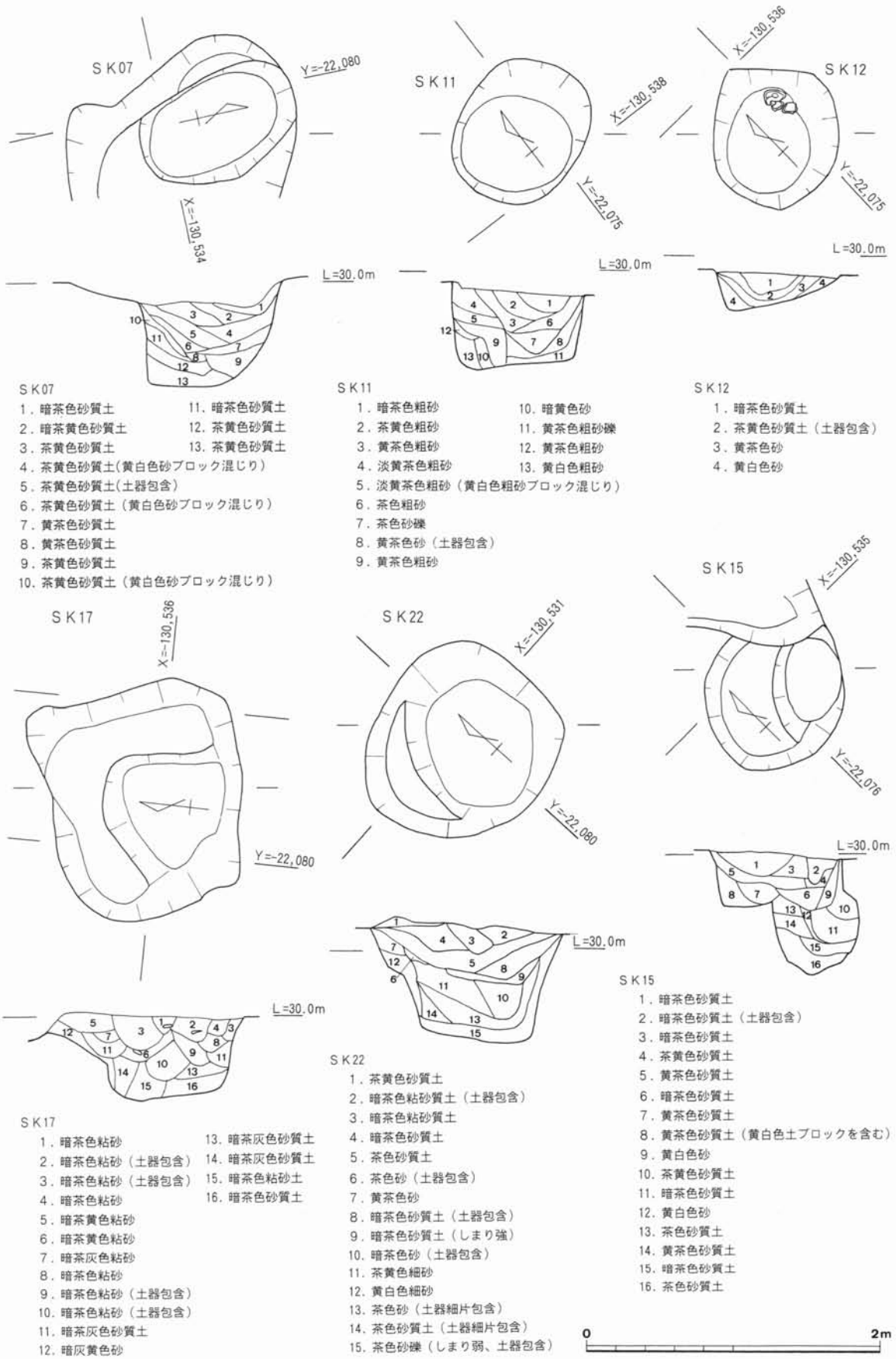
溝ＳＤ55(第83図)　掘立柱建物跡ＳＢ57の柱穴に切られているためＳＢ57に先行する東西方向の溝である。溝の長さは約9.2m、幅は0.3～0.4m、深さは約0.2mを測る。溝の勾配は西側から東側に向かって傾斜している。埋土は暗茶褐色粘質土である。埋土中から須恵器蓋、土師器皿などが出土した(第97図5～7)。

③時期不明の遺構(第84・85図、図版第59・60)

溝ＳＤ01　方形にめぐる溝ＳＤ02の東側に隣接する西側に向かってカーブを描く円弧状の溝である。溝幅は約１mを測る。深さは約0.3mを測る。溝の埋土中から縄文土器片が出土した。溝の埋土は３層に分層できた。溝の平面形状と規模から直径が約10mを測る円墳の周溝の一部の可能性もあるが古墳時代の遺物の出土は見られなかった。また、調査の最終段階で主体部の痕跡を確認するため断ち割りを行ったが主体部は確認できなかった。

溝ＳＤ02　調査地の北西部分で検出した。一辺約11mを測る方形にめぐる溝である。幅約1～1.5m、深さ約0.1～0.3mを測る。方墳の周溝の可能性も捨て切れないが、溝の埋土中からは縄文時代の土器・石器が出土した。この遺構は溝ＳＤ66に切られているため平安時代以前の遺構であり、縄文時代の遺構検出面より上部で検出したためこの間に収まる時期の遺構と考えられる。溝ＳＤ01同様最終段階で溝に区画される内部を主体部確認のため断ち割りを行ったが何も見つからなかった。

竪穴式住居跡ＳＨ84　掘立柱建物跡ＳＢ57の南東側で検出した。７つの円形ピットが北西－南



SK07
1．暗茶色砂質土
2．暗茶黄色砂質土
3．茶黄色砂質土
4．茶黄色砂質土(黄白色砂ブロック混じり)
5．茶黄色砂質土(土器包含)
6．茶黄色砂質土（黄白色砂ブロック混じり）
7．黄茶色砂質土
8．黄茶色砂質土
9．茶黄色砂質土
10．茶黄色砂質土（黄白色砂ブロック混じり）
11．暗茶色砂質土
12．茶黄色砂質土
13．茶黄色砂質土

SK11
1．暗茶色粗砂
2．茶黄色粗砂
3．黄茶色粗砂
4．淡黄茶色粗砂
5．淡黄茶色粗砂（黄白色粗砂ブロック混じり）
6．茶色粗砂
7．茶色砂礫
8．黄茶色砂（土器包含）
9．黄茶色粗砂
10．暗黄色砂
11．黄茶色粗砂礫
12．黄茶色粗砂
13．黄白色粗砂

SK12
1．暗茶色砂質土
2．茶黄色砂質土（土器包含）
3．黄茶色砂
4．黄白色砂

SK17
1．暗茶色粘砂
2．暗茶色粘砂（土器包含）
3．暗茶色粘砂（土器包含）
4．暗茶色粘砂
5．暗茶黄色粘砂
6．暗茶黄色粘砂
7．暗茶灰色粘砂
8．暗茶色粘砂
9．暗茶色粘砂（土器包含）
10．暗茶色粘砂（土器包含）
11．暗茶灰色砂質土
12．暗灰黄色砂
13．暗茶灰色砂質土
14．暗茶灰色砂質土
15．暗茶色粘砂土
16．暗茶色砂質土

SK22
1．茶黄色砂質土
2．暗茶色粘砂質土（土器包含）
3．暗茶色粘砂質土
4．暗茶色砂質土
5．茶色砂質土
6．茶色砂（土器包含）
7．黄茶色砂
8．暗茶色砂質土（土器包含）
9．暗茶色砂質土（しまり強）
10．暗茶色砂（土器包含）
11．茶黄色細砂
12．黄白色細砂
13．茶色砂（土器細片包含）
14．茶色砂質土（土器細片包含）
15．茶色砂礫（しまり弱、土器包含）

SK15
1．暗茶色砂質土
2．暗茶色砂質土（土器包含）
3．暗茶色砂質土
4．茶黄色砂質土
5．黄茶色砂質土
6．暗茶色砂質土
7．黄茶色砂質土
8．黄茶色砂質土（黄白色土ブロックを含む）
9．黄白色砂
10．茶黄色砂質土
11．暗茶色砂質土
12．黄白色砂
13．茶色砂質土
14．黄茶色砂質土
15．暗茶色砂質土
16．茶色砂質土

第86図　A地区土坑実測図(1)

東方向に主軸をもって長楕円形に並ぶ。長軸約５ｍ、短軸約４ｍを測る。ピットは約２ｍ間隔で並ぶが南側のピットのみ約2.6ｍの間隔がある。ピットの直径は約0.4～0.6ｍ、深さは約0.3～0.4ｍを測る。埋土は暗茶褐色粘質土である。埋土中から土師質の土器の細片が出土したが時期の特定はできない。竪穴式住居跡として扱っているが周壁溝は検出していない。

④縄文時代の遺構（第86～88図、図版第61～66）

主に調査地の北側を中心に検出した。平成16年度に縄文時代中期の竪穴式住居跡の南側で検出した土坑群がさらに南側に分布が広がっているものと考えられる。土坑の平面形は大まかに円形と長方形を呈するものの２つに分類することができる。

土坑ＳＫ07（第86図）　長軸は約1.1ｍ、短軸は約0.7ｍを測る楕円形の土坑である。深さは約0.75ｍを測り、土坑底面はほぼ平坦となる。埋土の堆積状況は、土砂の流入による自然な堆積を呈している。埋土中から縄文土器片が出土しているが、５層とした茶黄色砂質土中から主に出土した。

土坑ＳＫ11（第86図）　１ｍ×0.8ｍの規模を測る楕円形の土坑である。深さは約0.6ｍを測る。土坑底面はほぼ平坦となっている。埋土の堆積状況は自然堆積による埋没と考えられる。埋土は基本的に砂、粒子の粗い砂および砂礫である。８層とした黄茶色砂から縄文土器片がまとまって出土した。

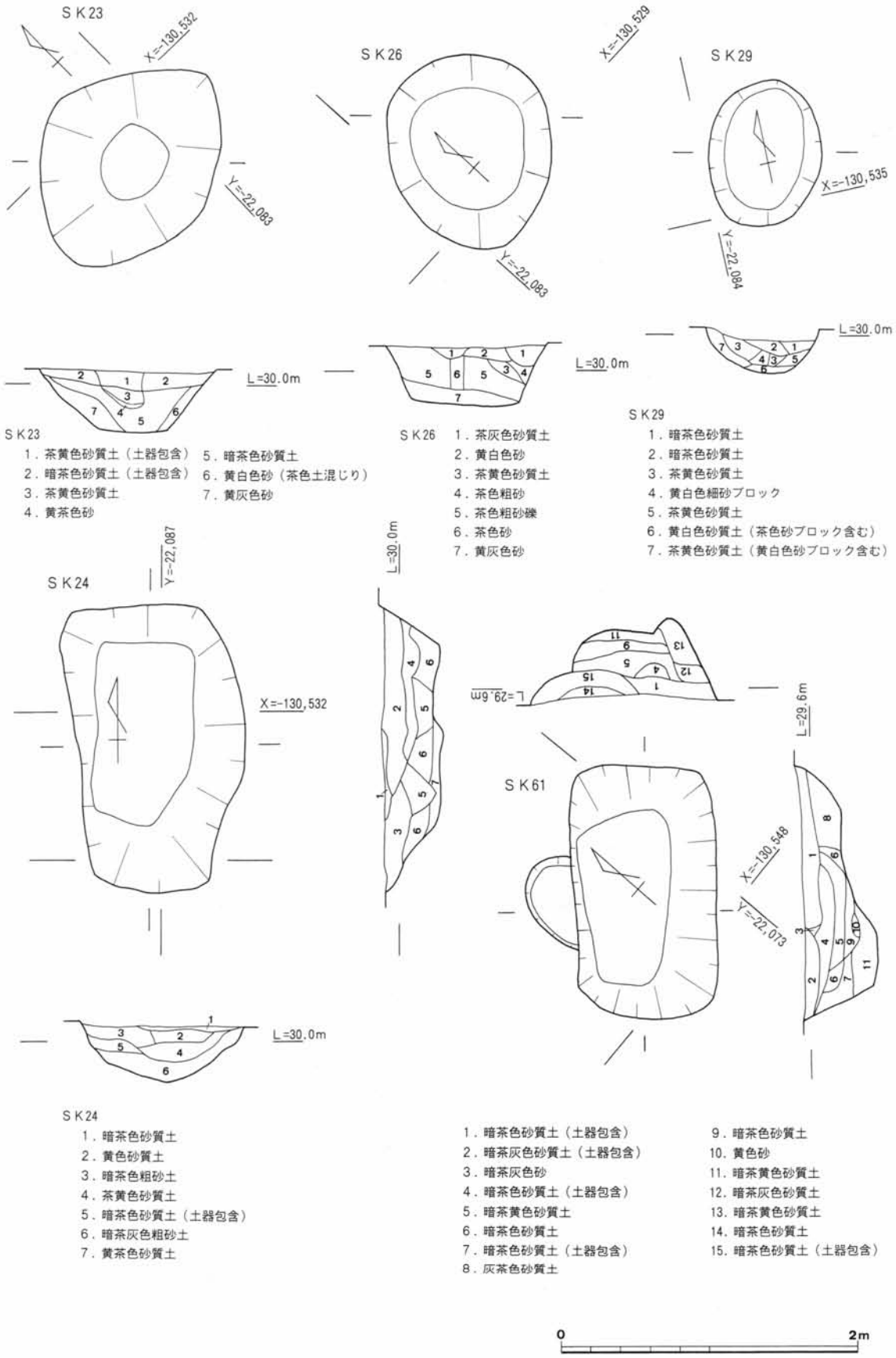
土坑ＳＫ12（第86図）　1.0ｍ×0.8ｍの楕円形の土坑である。断面の形状は浅い皿状をなす。深さは遺構検出面から約0.25ｍを測る。埋土は４層に分層ができ、自然堆積の状況を呈している。２層とした茶黄色砂質土中から土坑の北東隅にまとまって縄文土器の深鉢底部片（第99図78）やそのほかの体部片が出土した。この底部片は今回の調査で出土した土器の中では破片が目立つ中で比較的残存状況が良好なものである。

土坑ＳＫ15（第86図）　直径約１ｍの円形を呈する。土坑底面は２段になっており、もとあった土坑の深さを掘り足したような状況を呈する。西側の深さは約0.3ｍと浅く平坦面をもつのに対し、東側の深い部分は約0.8ｍを測る。土坑の断面形状は東側では袋状を呈する。この袋状に壁面が広がる断面形状は人為的なものか、土坑を掘り込んだ基盤層が砂層のため使用中に壁面が崩壊したものか判断はできない。２層とした暗茶色砂質土の埋土中から縄文土器片が出土した。

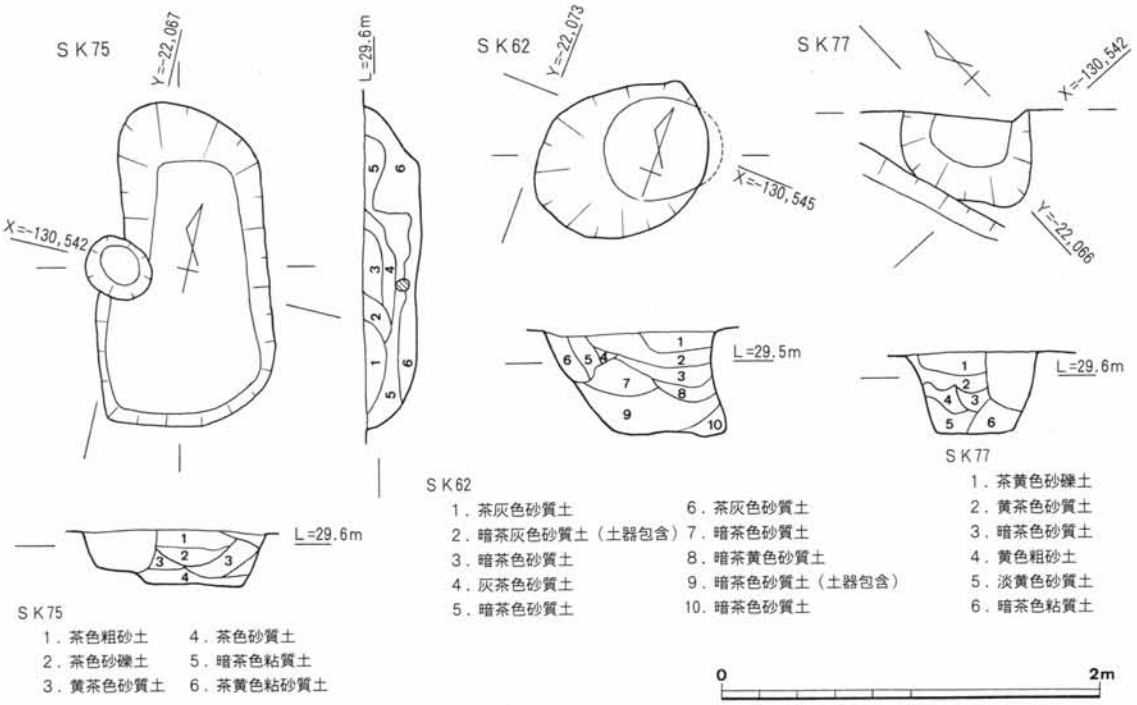
土坑ＳＫ17（第86図）　短軸約1.3ｍ、長軸約1.5ｍを測る平面形が方形を呈する土坑である。北側と東側は浅く、深さは南側の深い部分で約0.6ｍを測る。埋土の状況は細かく16層に分層しているが、ある単位が認められ人為的に埋め戻されたものと考えられる。埋土中から縄文土器片が出土した。出土した土器は上層および中層にまとまっていた。

土坑ＳＫ22（第86図）　直径約1.3ｍを測る円形の土坑である。深さは遺構検出面から約0.8ｍを測る。土坑底面はほぼ平坦である。土坑の断面形は逆台形状を呈する。この土坑で特徴的なのは埋土の上層（１～８層）、中層（10・11層）および下層（12～15層）の各層から縄文土器片が比較的まとまって出土した。下層から遺物の出土が見られることから廃棄土坑と考えられる。

土坑ＳＫ23（第87図）　直径約1.2ｍを測る不整円形の土坑である。土坑の断面形状はボウル状



第87図　A地区土坑実測図(2)



第88図　A地区土坑実測図(3)

をなす。深さは遺構検出面から約0.4mを測る。断面図の6・7層は基盤層の砂・砂礫が流れ込んだものと判断できる。埋土中(1・2層)から縄文土器片が出土した。

土坑SK24(第87図)　長軸(南北)約1.9m、短軸(東西)約1.1mを測る隅丸長方形の土坑である。深さは遺構検出面から約0.4mを測る。5層とした暗茶色砂質土の埋土中から縄文土器片が出土した。土器以外には長方形土坑の性格を示すような遺物は出土しなかった。

土坑SK26(第87図)　直径約1.2mを測る平面形が円形を呈する土坑である。深さは遺構検出面から約0.4mを測る。土坑底面はほぼ平坦である。土坑の断面形状は逆台形状をなしている。埋土の堆積状況は流れ込みによる自然堆積と考えられる。埋土中から縄文土器片が出土した。

土坑SK29(第87図)　長軸約1m、短軸約0.8mを測り、平面形は南北に長い楕円形をなす。深さは遺構検出面から約0.3mを測る。土坑の断面形はボウル状を呈する。埋土の堆積状況は自然の流れ込みによるものと判断した。埋土中から縄文土器片が出土した。

土坑SK61(第87図)　長軸1.6m、短軸1mを測る隅丸長方形の土坑である。北西側の中央部分を浅いピットに切られている。土坑の深さは北東側が浅く、南西側が深くなる。深さは北東側の浅い部分で約0.3m、南西側の深い部分で0.5mを測る。埋土中(1・2層、4・7層)を中心に縄文土器片が出土した。そのほか変成岩質の粘板岩を使用した切目石錘が出土した(第100図91)。

土坑SK62(第88図)　0.8m×0.9m規模を測る楕円形の土坑である。深さは遺構検出面から約0.5mを測る。土層の堆積状況からも分かるように鉛直方向に掘削せずに斜めを意識して掘削しているように思われる。断面図でも5～10層は斜め堆積しており、その上に乗るように1～3層が堆積している。埋土中(2・9層)を中心に縄文土器片が出土した。

土坑SK75(第88図)　長軸(南北)は約1.6m、短軸(東西)は約0.8mを測る平面形が長方形を呈

する土坑である。深さは、遺構検出面から約0.3mを測る。掘形の西側中央部分をピットに切られている。埋土中から縄文土器片が出土した。

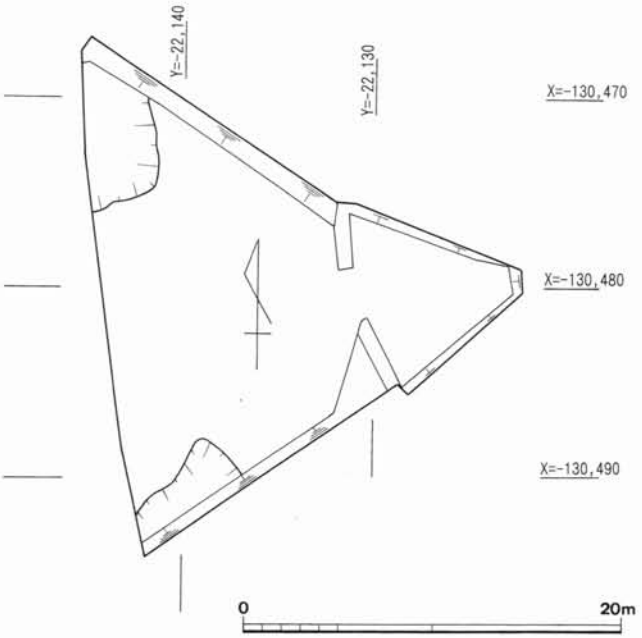
土坑ＳＫ77(第88図)　土坑ＳＫ75と切り合い関係があり掘形の一部が切られている。調査地外へのびるため平面形は不明である。幅は約0.7m、深さは約0.5mを測る。土坑の底面は平坦である。埋土中から縄文土器片が出土した。

（柴　暁彦）

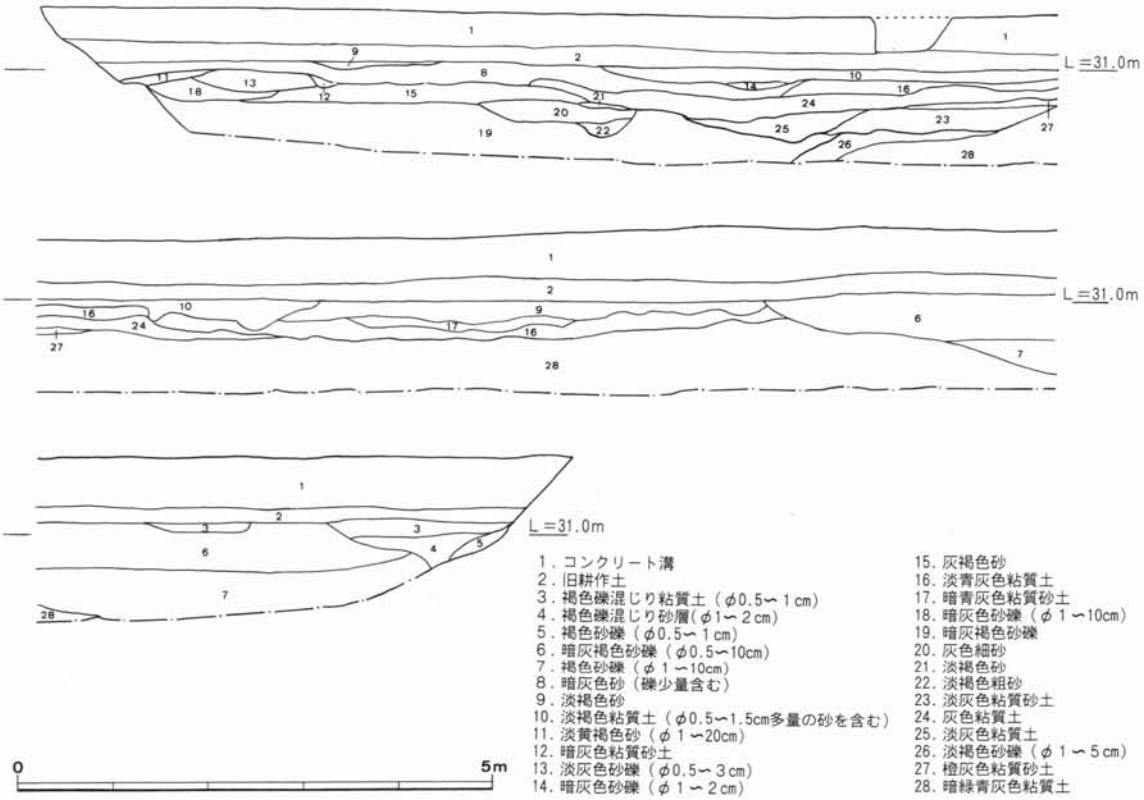
(2) Ｂ地区

1) 基本層序

Ｂ地区の大半が住宅跡地であり、住宅建設に伴う盛土が約１ｍ施されており、その下に耕作土・床土が約0.4ｍあり、その下層に褐色・灰色系の砂礫・砂質土が堆積し、基盤層と考えられる暗緑青灰色粘質土となる。この基盤層は、調査地東端では水田造成により削平され、一段低くなっている。基盤層検出面は、西側で標高約30.7m、東側で標高約30.4mであり西から東に向かって緩やかな傾斜を



第89図　Ｂ地区平面図



第90図　Ｂ地区南西壁断面図

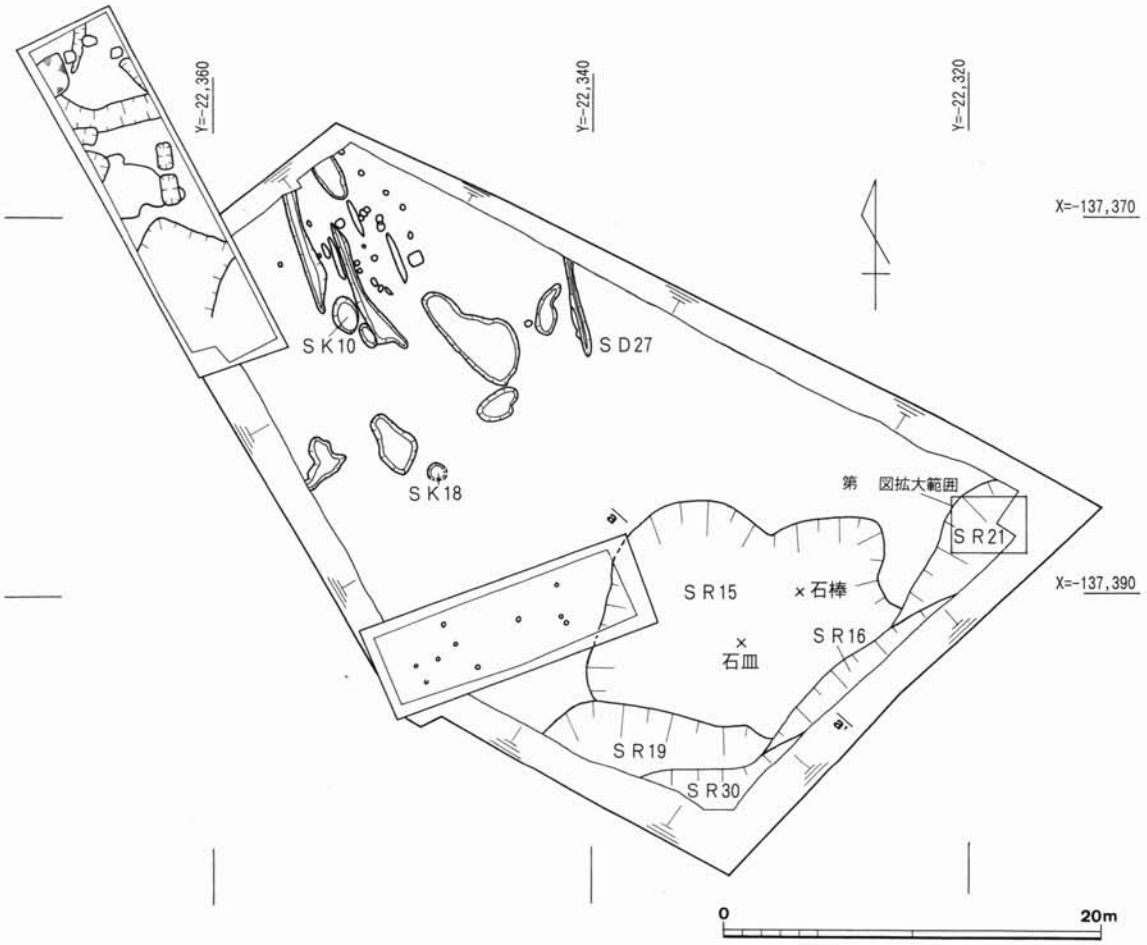
なす。平成13年度第３次調査第３トレンチで土坑ＳＫ01の遺構検出面となった緑灰色微砂層や、平成17年度第６次調査で竪穴式住居跡ＳＨ31の遺構検出面となった標高31.1m付近に広がる灰色砂礫土は認められなかった。

2）**検出遺構**（第89図、図版第67）

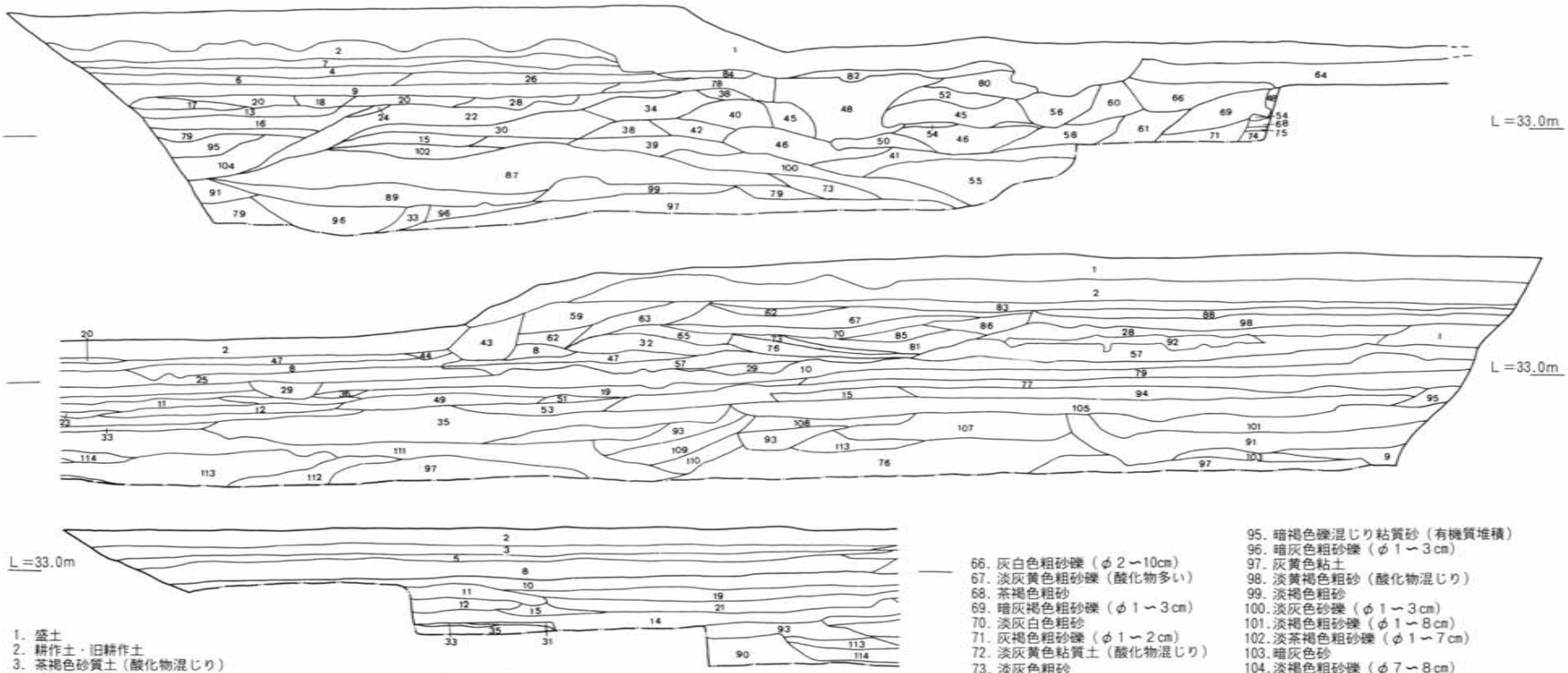
住宅跡地であることから調査地内には攪乱が認められ、遺構は確認できなかった。代わって調査地北西・南西角付近で砂礫の堆積した流路跡の一部を検出した。いずれも流路の東側肩部で一連のものと考えられる。第３・６次調査地では検出されていないことから、本調査地との間を蛇行して北西か南東方向に流れていたものと思われる。

検出面から約１ｍを掘削したが、湧水が著しく地区が崩壊する危険性が生じたため、掘削を中止した。遺物は出土しなかった。

第３・６次調査地の遺構検出面となった灰色砂礫土の基盤層が存在しないことや、西側の農道を挟んだ水田面との比高差が１ｍほど認められることから、開墾などにより遺構面が削平された可能性がある。Ｃ地区の調査結果を踏まえると、この基盤層である暗緑青灰色粘質土の上が縄文時代遺物包含層となっている。



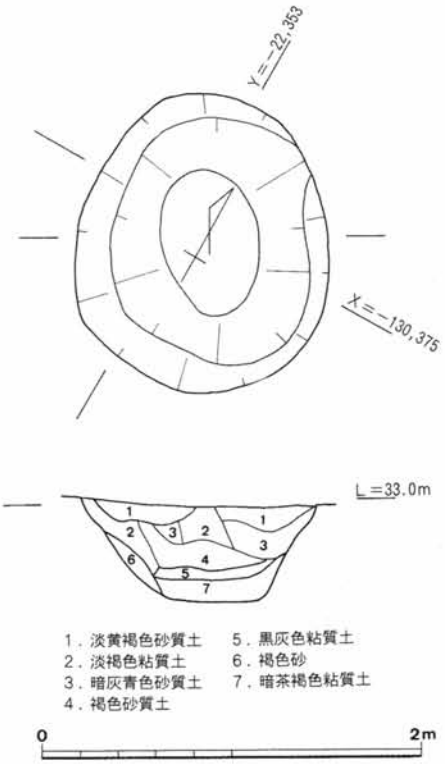
第91図　Ｃ地区平面図



1. 盛土
2. 耕作土・旧耕作土
3. 茶褐色砂質土（酸化物混じり）
4. 暗褐色粘質粗砂
5. 淡黒灰色砂質土（酸化物混じり、旧耕作土）
6. 淡黄褐色粗（酸化物混じり）
7. 淡灰黄色粗礫（φ3～5cm）
8. 淡黒灰色砂質土（酸化物混じり）
9. 淡黒灰色礫混じり（旧耕作土φ1～3cm）
10. 暗灰褐色砂混じり（旧耕作土φ1～3cm）
11. 灰白色粗砂
12. 淡灰褐色粗砂
13. 暗灰褐色礫混じり砂質土（旧耕作土φ1～3cm）
14. 灰色粗砂礫（φ1～2cm）
15. 灰褐色粗砂
16. 淡黒灰色粗砂
17. 明黄褐色粗砂
18. 淡黒灰褐色砂質土
19. 灰褐色礫混じり砂質土（旧耕作土φ1～3cm）
20. 灰褐色礫混じり砂質土
21. 淡黒灰褐色礫混じり砂質土（中世遺物包含層）
22. 淡灰青色粘質細砂
23. 暗灰色粘質砂
24. 灰褐色礫混じり粗砂
25. 暗褐色礫混じり砂質土
26. 淡灰黄色粗砂
27. 暗黒灰色中砂
28. 淡黒灰色砂質土
29. 褐色礫混じり砂質土
30. 淡茶褐色砂・粗砂
31. 暗緑灰褐色粘質細砂
32. 淡褐色粗砂
33. 黒褐色細砂（有機質堆積）
34. 淡灰黄色細砂
35. 淡黒灰褐色粗砂礫（φ1cm）
36. 淡茶褐色粗砂
37. 暗茶褐色粗砂
38. 暗褐色粗砂礫（φ1～3cm）
39. 暗灰褐色礫混じり粗砂（φ1～3cm）
40. 灰白色細・粗砂
41. 淡灰褐色粗砂礫
42. 暗灰褐色粗砂礫（φ3cm）
43. コンクリート基礎
44. 淡黒褐色礫混じり粘質土
45. 暗褐色砂礫
46. 暗灰褐色砂礫
47. 暗茶褐色砂質土
48. 淡灰青色粘質細砂
49. 灰色粗砂粘質細砂
50. 灰褐色粗砂礫
51. 灰褐色粗砂・粘質細砂
52. 淡灰緑色粗砂
53. 淡黒灰色細・粗砂
54. 灰色細砂
55. 灰褐色細砂・粗砂
56. 褐色砂礫
57. 淡黒灰褐色砂質土
58. 暗褐色粗砂礫（φ1～7cm灰色粘質細砂含む）
59. 淡灰褐色細砂
60. 淡灰色粗砂
61. 淡灰褐色砂礫（φ1～5cm）
62. 褐色細砂礫（φ3cm少ない）
63. 淡灰黄色粗砂礫（φ1～3cm）
64. 淡茶褐色粗砂礫（φ1～2cm）
65. 淡灰黄色粗砂礫（φ1～8cm）
66. 灰白色粗砂礫（φ2～10cm）
67. 淡灰黄色粗砂礫（酸化物多い）
68. 茶褐色粗砂
69. 暗灰褐色粗砂礫（φ1～3cm）
70. 淡灰白色粗砂
71. 灰褐色粗砂礫（φ1～2cm）
72. 淡灰黄色粘質土（酸化物混じり）
73. 淡灰色粗砂
74. 灰褐色細砂
75. 黒灰色細砂（有機質堆積）
76. 淡黒灰色粘質土
77. 暗灰色粗砂
78. 淡灰褐色礫混じり粘質土
79. 灰色細砂・粗砂
80. 淡灰褐色礫混じり粘質細砂
81. 淡灰色粘質細砂粗砂
82. 淡黄灰色砂質土
83. 淡黄灰色粗砂礫（φ3～8cm）
84. 淡黄褐色粗砂
85. 淡白色粗砂
86. 暗茶褐色粗砂礫（φ3～5cm灰色粗砂混じり）
87. 灰褐色砂礫層（φ1～4cm）
88. 暗灰白粘質粗砂
89. 淡灰褐色砂礫層（φ1～7cm）
90. 暗緑青灰色粘質土
91. 灰褐色砂礫（φ1～7cm）
92. 黄褐色粗砂
93. 淡灰青色細砂
94. 暗灰褐色粗砂・粘質細砂
95. 暗褐色礫混じり粘質砂（有機質堆積）
96. 暗灰色粗砂礫（φ1～3cm）
97. 灰黄色粘土
98. 淡黄褐色粗砂（酸化物混じり）
99. 淡褐色粗砂
100. 淡灰色砂礫（φ1～3cm）
101. 淡褐色粗砂礫（φ1～8cm）
102. 淡茶褐色粗砂礫（φ1～7cm）
103. 暗灰色砂
104. 淡褐色粗砂礫（φ7～8cm）
105. 淡褐色礫混じり粗砂（φ1～7cm）
106. 褐色粘砂
107. 灰褐色礫混じり砂（φ1～7cm、酸化物混）
108. 明灰褐色砂
109. 淡褐色礫混じり粗砂（φ2～5cm）
110. 淡黄灰色粗砂
111. 灰褐色礫混じり粗砂（φ1～10cm）
112. 灰褐色粗砂礫（φ1～8cm）
113. 暗茶褐色砂質土（有機質含む）
114. 灰褐色礫混じり粗砂（φ1～5cm）

0　4m

第92図　C地区南西壁断面図



第93図　土坑ＳＫ10実測図

(3) Ｃ地区

1) 基本層序(第92図)

Ｂ地区同様北半分は住宅跡地、南半分は水田であり、住宅建設に伴う盛土が約0.5m施されており、その下に耕作土・床土が約0.3mあり、その下層に灰色系の砂礫層が堆積している。調査地中央部より北側半分では、旧耕作土が２～３面ほど認められ、その間は灰色系の細砂・粗砂が薄く堆積し、手原川の氾濫に伴い水田が流出、その都度、水田復旧がなされた痕跡が確認できた。トレンチ中央より南側での最下層水田面の検出高は、標高32.9mである。上層遺構検出面は、奈良時代前半～中世の遺物包含層である暗褐色粘質砂質土や褐色・淡褐色系の砂質土より掘り込まれている。この面の下層0.4mには暗褐色粘質砂土の縄文時代の遺物包含層が続き、基盤層である暗緑青灰色粘質土となる。この基盤層は、調査地東端では水田造成により削平され、南側では流路により大きく削平を受け存在せず、西側では部分的に氾濫に伴う砂礫が堆積した暗褐色砂礫土が基盤層となっている。上層遺構検出面は、北端で標高33.2m、下層遺構検出面は、北端で32.9mであり、いずれの検出面も北西から南東に向かって緩やかな傾斜をなす。

2) 検出遺構

上層遺構については、住宅跡地であり、住宅建設に伴う攪乱が認められたことや、開墾に伴う削平などにより調査地西側の第４次調査で認められたような良好な土層の堆積、遺構の残存状況ではなかった。検出された主な遺構としては、柱穴・土坑・溝・流路がある。下層遺構は、地区中央部よりやや西寄りで検出した土坑がある。南端では、古墳時代の遺物を含む奈良時代前半～中世、縄文時代の遺物が出土した流路跡を検出した。

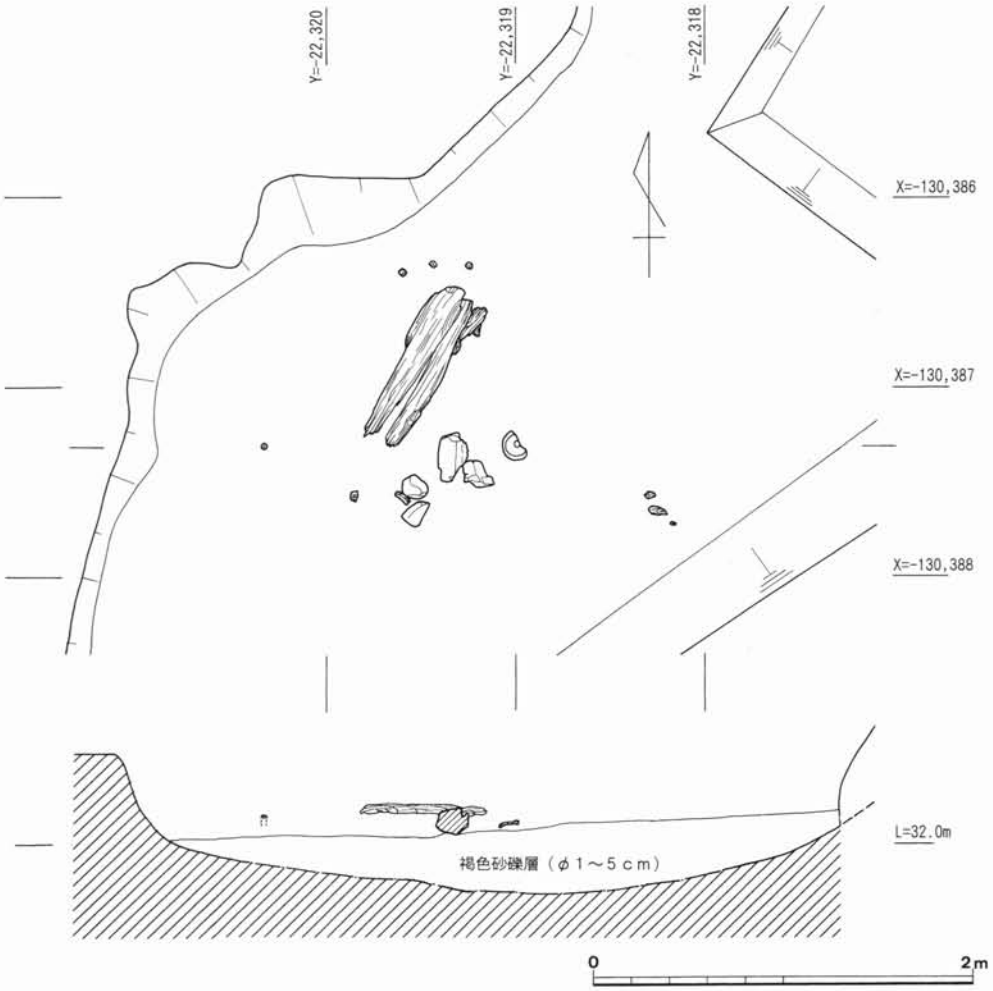
①上層遺構(第91図、図版第72－(1))

上層遺構は、調査地中央部より北東半分で検出したものである。調査地中央部分には、ほぼ南北方向にのびる近世遺構と考えられる溝ＳＤ27があり、これより東側では、遺構は検出できなかった。

柱穴　柱穴は21か所を検出したが、建物跡を特定することはできなかった。いずれも直径20～50cm、深さ10～20cmのものである。

溝　東側の水田畦畔に平行するもので、部分的に残存するものも含めて７条検出した。耕作に伴うものと考えられる。

土坑ＳＫ10(第94図)は１基検出した。直径約1.6m、短径1.3mの楕円形土坑で、深さ0.5mを測る。埋土中から少量の土師器細片が出土した。

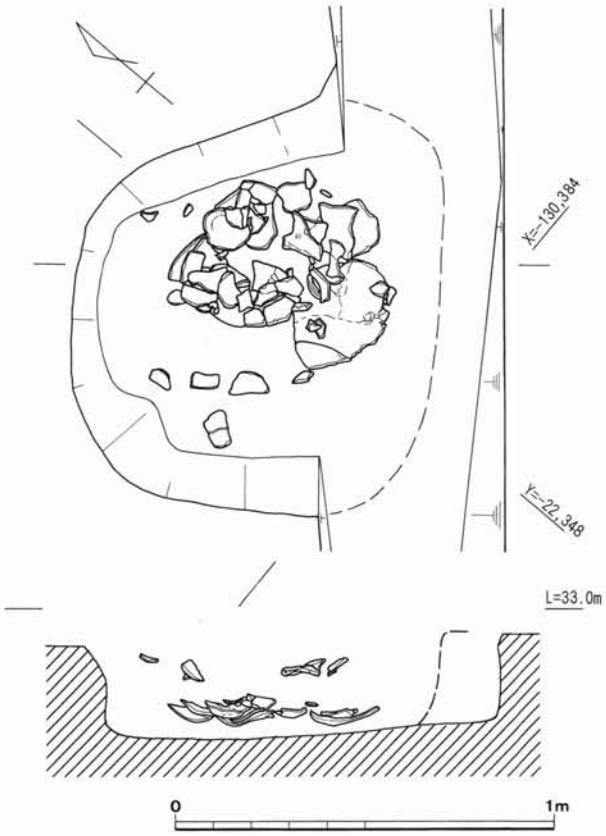


第94図　流路跡ＳＲ21実測図

これらの検出した遺構からは、遺物が出土しないため時期を確定することはできないが、過去の調査や堆積状況から判断すると奈良時代前半～中世にかけての遺構と考えられる。

流路跡ＳＲ16（第91・92図）　調査地南東端で検出したもので、調査地壁面に平行して流れる流路跡で、北東側の肩部のみ検出した。流路跡ＳＲ20とは明確な切り合い関係が認められるが、流路跡ＳＲ30は平面的には確認できない。断面観察では、流路跡ＳＲ16の上に流路跡ＳＲ30の砂礫層が堆積しており、水流の変化によるものと思われ、同一の流路跡と考えられる。両流路内から、奈良時代前半の遺物を含む平安時代前期を中心とした須恵器・土師器・黒色土器が出土した。

流路跡ＳＲ21　（第91・92・94図、図版第72－(2)）　流路跡ＳＲ16・30同様、調査地南東端で検出した調査地壁面に平行して流れる流路跡である。南西から東に向かって流れるもので、上流側にあたる南西側は、流路跡ＳＲ16に切られていたり、氾濫に伴う再堆積した砂礫が認められる。流路跡ＳＲ15と切り合う付近から東側は、底面が基盤層である暗緑青灰色粘質土である。北東側肩部付近では、護岸状の杭列と堰状の施設を検出した。護岸状の杭列は、調査地北東壁から流路北西肩部に沿って南西側に２ｍを確認した。直径５cmの杭が不規則に打ち込まれている。堰状の施設は流路に対して直交して、直径５cmの杭が不規則に打ち込まれており、この杭列に沿って自然木の丸太が平行して置かれ、石材により固定されていたと思われる。この堰部分には、須恵器



第95図　土坑ＳＫ18実測図

蓋(第101図107)が共伴している。

②下層遺構(第91図)

下層遺構としては、土坑・流路跡がある。縄文時代の遺物包含層となる暗褐色粘質砂土は土坑より西・北側の基盤層高位側では認められないが、低位側となる北東・東側では多くの縄文土器片が採集された。

土坑ＳＫ18(第95図、図版第73－(2)・(3))　調査地中央部付近の基盤層である暗褐色砂礫土から検出したが、土層確認試掘溝により南東側の掘形に約1/3を欠く。土坑は、長辺約１ｍ、短辺約0.7ｍを測る隅丸長方形に近い平面形をなし、深さ0.28ｍを測る。土坑内に破片を重ねたような状態で、縄文土器深鉢が出土した。深鉢は４個体分含まれており、いずれも部分のみで完全に揃うものはなかった。廃棄土坑であろうか。

流路跡ＳＲ19(第91図、図版第70)　調査地南側角付近で検出したもので、流路跡ＳＲ15と重なる。流路跡ＳＲ15の上面を流れ、底面は基盤層である暗緑青灰色粘質土に砂礫が混じる土層となっている。上面ではほとんど遺物が出土しないが、底面近くでは磨滅をほとんど受けていない縄文土器深鉢を中心とした土器片が多数出土している。

流路跡ＳＲ15(第91・92・96図、図版第71－(2))　流路跡ＳＲ19の北側に大きく広がる流路跡で、流路と呼ぶよりも、氾濫した土砂を含んだ水流が押し寄せ、基盤層である暗緑青灰色粘質土を侵食しながら堆積した跡と見られる。肩部付近では、内側に「く」字状に侵食された跡が残る。南西方向から北西方向の土砂の堆積が認められ、侵食されるに従って基盤層およびその上層に堆積していた有機質(包含層)の堆積が落ち込んでおり、これらとともにほとんど磨滅を受けていない縄文土器片が多量に出土した。また、中央部付近では石皿・北東側では石棒が出土した。いずれも、重量がありこれらの石材に近い重量の礫などが堆積しておらず、押し流されてきたものとはとは考えがたく、水流により基盤層が侵食されたときに土器とともに落ち込んだものと考えられる。

(増田孝彦)

３．出土遺物

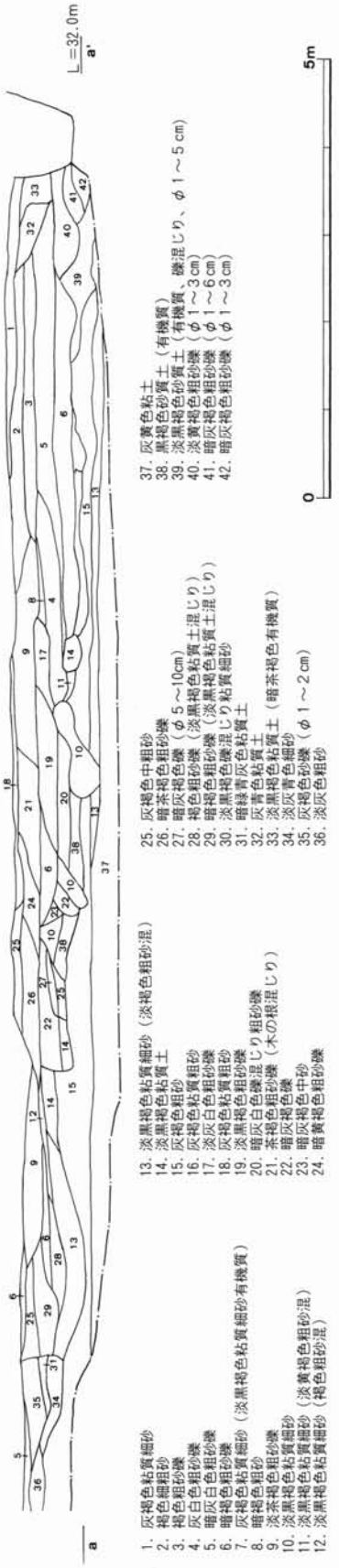
(1) Ａ地区

1) 平安時代の土器(第97図1～9)

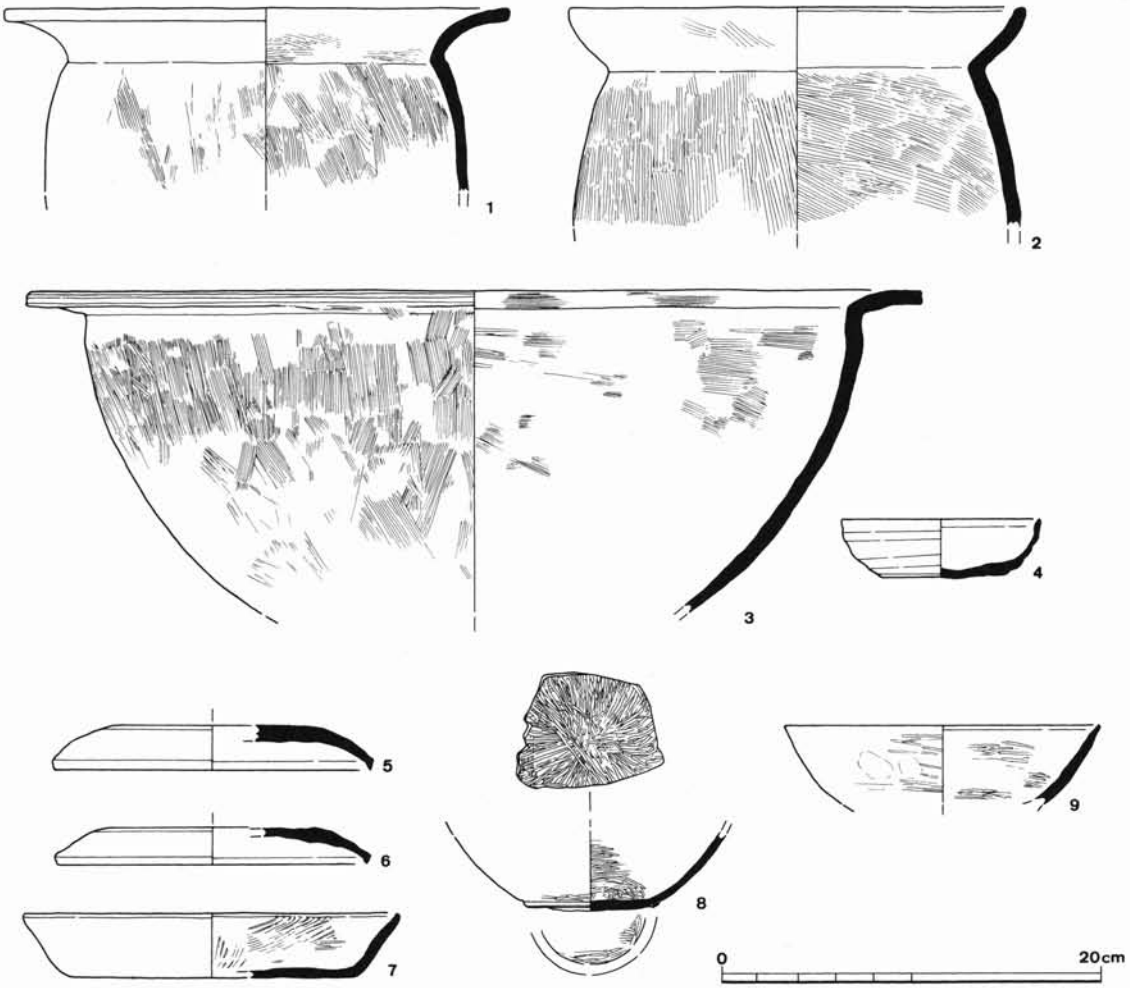
溝ＳＤ66出土土器(1～4)　１・２は土師器甕である。１は口縁部が外反し口縁端部は面をもつ。２は頸部から内湾気味に立ち上がり口縁端部は丸くおさめる。２は復原口径24.5cmを測る。いずれの個体も調整は内外面ともハケ調整である。３は土師器鍋である。復原口径は48cmを測る。４は須恵器杯である。口径は10.5cm、高さ3.5cmを測る。

ピットＳＰ108出土土器(8・9)　黒色土器椀である。いずれも内面のみを黒色化させるＡ類である。８は高台が貼り付けられているが底部が突出している。内面は放射状に密なミガキ調整が施される。９は復原口径16.6cmを測る。内外面ともミガキ調整が施される。

土坑ＳＫ51出土土器(第98図10～41)　10～14、16～24は須恵器、25～36は土師器、37～41は製塩土器である。10～14は須恵器蓋である。10・11は宝珠形つまみが貼り付く。10は口径14cm、器高1.6cmを測る。完形品である。11は口径17.4cm、器高3.3cmを測る。15は外面に淡緑色の釉薬が掛かっており灰釉陶器の可能性がある。16～18は須恵器杯Ａ、19～22は須恵器杯Ｂである。19は口径16.2cm、底径11.6cm、器高5.1cmを測る。内面には墨痕が見られる。22の底部には調整時に付いたと思われる爪形の圧痕が見られる。23は須恵器椀である。24は須恵器広口甕である。復原口径は20.8cmを測る。25は土師器蓋である。口径17.8cm、器高2.8cmを測る。外面にはミガキ調整が施される。26～30は土師器杯、29は口径15cm、器高3.6cmを測る。31は土師器皿である。口径は15cm、器高3.6cmを測る。32は土師器甕である。復原口径14.5cmを測る。33・34は土師器長胴甕である。33は復原口径18.8cmを測る。35・36は土師器高杯である。製塩土器には口径が12cm前後のもの(37～39)と17cm前後のもの(40・41)が見られる。口縁部の形状は口縁端部がわずかに内湾するもの(37～40)と外反するもの(41)がある。



第96図　Ｃ地区南西断ち割り断面図



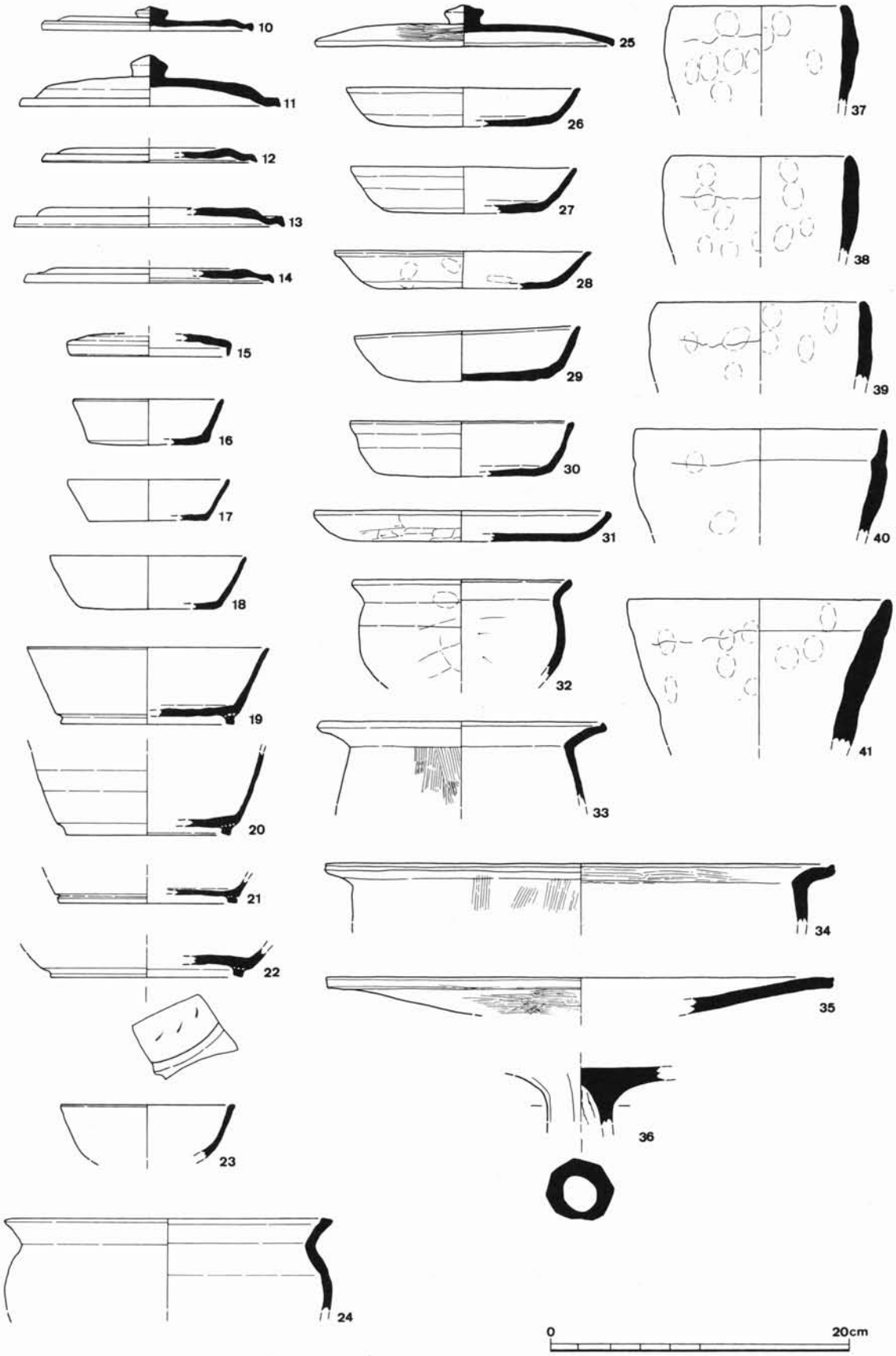
第97図　A地区出土遺物実測図(1)

溝ＳＤ55出土土器(第97図5～7)　５・６は須恵器の蓋である。７は土師器皿である。復原口径19.6cm、器高3.4cmを測る。内面にはミガキ調整が施される。

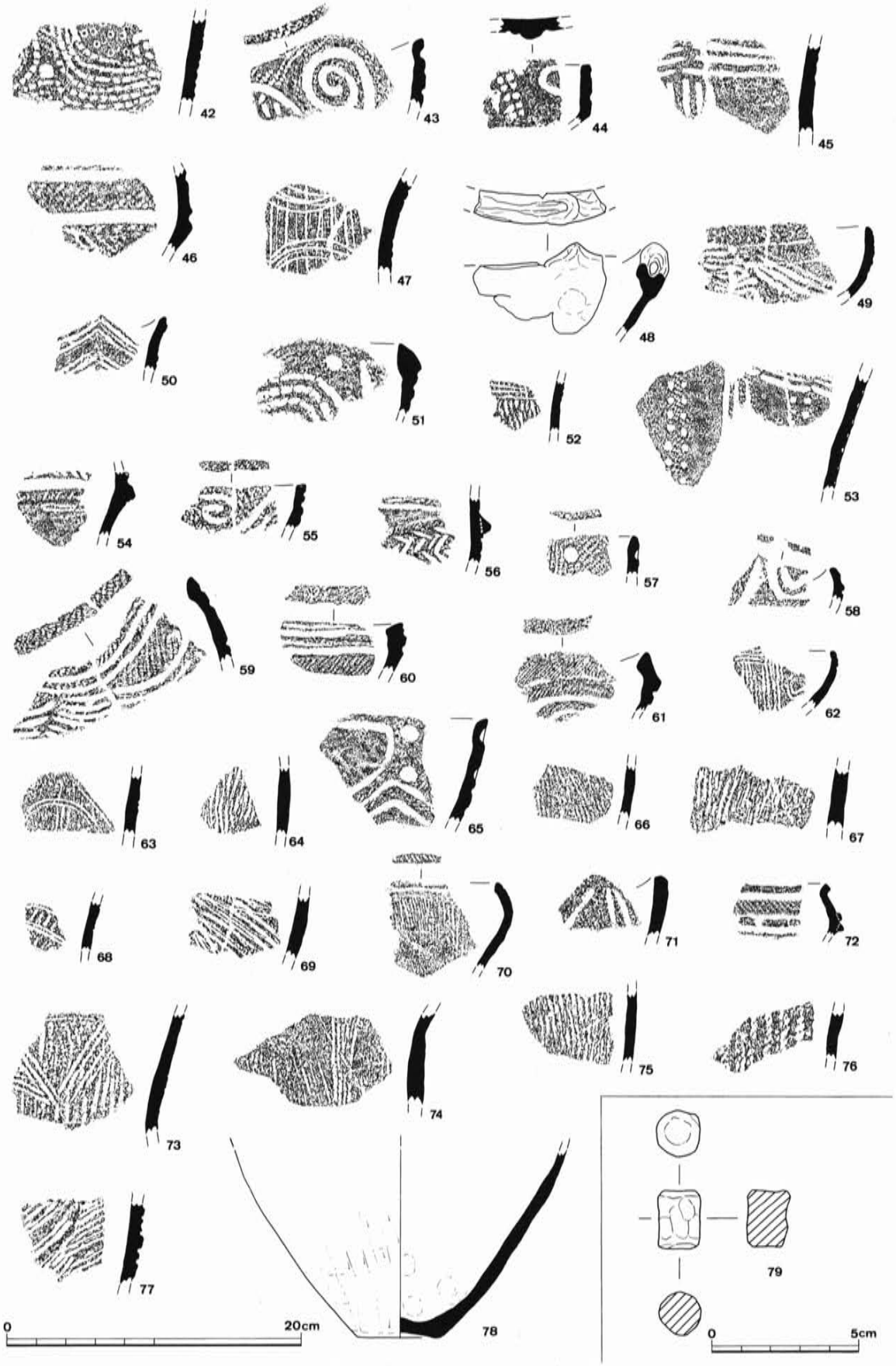
2) **縄文土器**

①縄文時代中期後半の土器(第99図42～78、図版第76－(1))

42は土坑ＳＫ07から出土した。ＬＲの縄文施文後、ヘラ状工具による多重の押し引き沈線の区画内に竹管状工具の先端刺突が施す。星田式の土器である。43～48は土坑ＳＫ11から出土した。43はＬＲの縄文を地文とし、口縁の波頂部外面に時計回りの渦巻沈線を施す。その左側に沈線に囲まれた区画内に押し引きを施す。口縁端部にも体部と同様の原体による縄文を施される。深鉢Ａ１類である(注6)。44は口縁端部外面に縦方向の粘土塊を貼り付け瘤状突起とし、その右側に沈線、左側に縦方向の２列の刺突を施す。45は横および縦方向の沈線を施す深鉢の胴部片である。46は羽状縄文の地文に横方向の沈線を施す。外面には赤色顔料が彩色されている。47は縦方向の細密沈線を施したのち弧状の沈線を施す土器である。48は口縁端部を拡張し環状の把手をもつ土器である。49は沈線文土器である。口縁部外面に連続する爪形文を施文する。50は波状口縁に沿って沈線により突帯状の山形の文様を作り出している。51・52は土坑ＳＫ17から出土した。51は口縁端部外面に刺突を施しその下に弧状の多重押し引きを施す土器である。53は土坑ＳＫ20から出土



第98図　Ａ地区出土遺物実測図(2)



第99図　縄文土器および土製品実測図

した。ＬＲの縄文地に斜めおよび縦方向の３本沈線の区画内に２列の刺突を施す。54は楕円区画内に羽状沈線を施す深鉢口縁部付近の破片である。55～59は土坑ＳＫ22から出土した。55は縄文の地文を施したのち口縁部外面に反時計方向の渦巻沈線を施す。口縁端部にも縄文が施される。55・56は北白川Ｃ式の土器である。57はＬＲの縄文施文後、口縁部外面に円形刺突が施される。58はＬＲの縄文地文に沈線が施される。59は北白川Ｃ式土器Ｃ類に分類される口縁部片である。ＬＲの縄文地に多重の沈線を施す。61は土坑ＳＫ23から出土した。ＬＲの縄文地に沈線が施される。北白川Ｃ式土器である。62は土坑ＳＫ24から出土した里木式土器である。65・66は土坑ＳＫ62から出土した。65はＬＲの縄文地文に口縁端部外面に沈線による横方向の区画帯を施し、その下部に施された波状沈線との間に縦方向の刺突を施している。星田式の土器である。78は土坑ＳＫ12から出土した土器の下半部である。底径5.6cmを測る。外面はヘラ状工具によるケズリを施す。底部は上げ底状になっている。

②縄文時代中期前半～中葉の土器(第99図52・58・70～76)

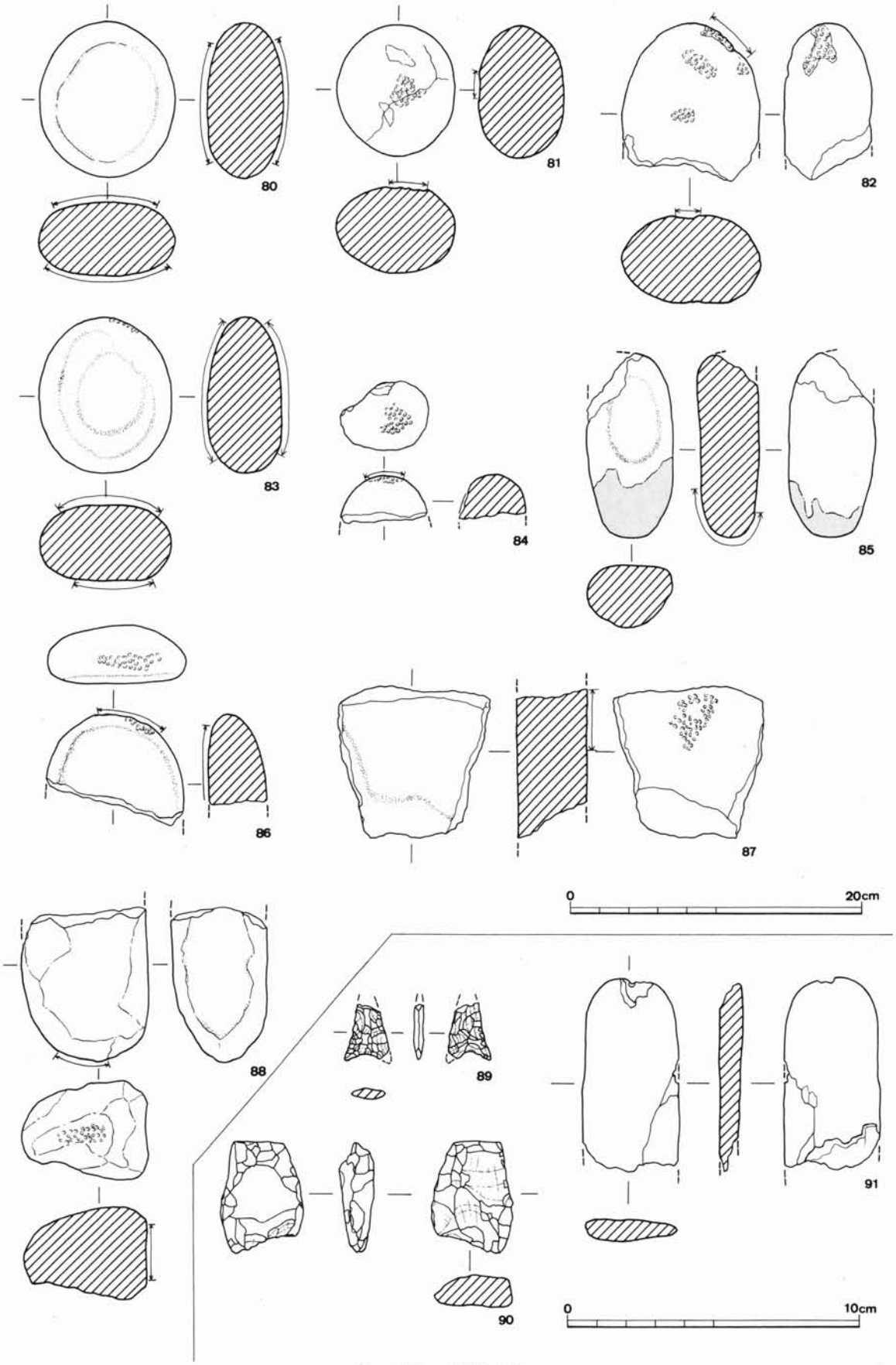
包含層から出土している。一部は遺構に伴って中期後半の土器に共伴して出土したものもある。52は里木Ⅲ式の土器である。58は船元Ⅲ式の土器である。70は船元Ⅳ式の土器である。口縁端部にも縄文が施文される。73は船元Ⅲ式の土器で、縄文地に縦方向および斜め方向の沈線を施す。

3) 土製品(第99図79、図版第75)

79は土製耳飾り(耳栓)である。長さ２cm、直径1.45cmを測る。形状は円筒形をなし、断面形は円形である。図示した上下端部がやや広がり、中央部はわずかに窪む鼓形をなす。上面に窪みが見られるほかは、装飾は見られない。色調は黄橙色を呈している。

4) 石器(第100図80～91、図版第75)

80は磨石である。Ａ地区溝ＳＤ01から出土した。長さ10.4cm、幅9.3cm、厚さ5.1cmを測る。重さは740ｇである。表裏に使用痕が認められる。石材は(室生)安山岩である。[注7] 81は敲石である。Ａ地区溝ＳＤ02から出土した。長さ8.8cm、幅8.1cm、厚さ5.4cmを測る。表面に敲打痕および磨り痕があり、裏面は磨った痕跡が認められる。石材は花崗岩(細粒)である。82は磨石である。Ａ地区溝ＳＤ05から出土した。残存長は10.5cm、幅9.4cm、厚さ６cmを測る。重さは785ｇである。表裏に磨った痕跡が認められる。花崗岩質の石材であり河川の円礫とも見られるが遺構の埋土中に含まれていたため磨石と判断した。83は磨石である。Ａ地区土坑ＳＫ04から出土した。長さ10.5cm、幅９cm、厚さ5.1cmを測る。重さは685ｇである。表裏面に使用痕が認められる。石材は花崗岩(細粒)である。84は敲石である。Ａ地区土坑ＳＫ17から出土した。残存長３cm、残存幅5.9cm、厚さ4.5cmを測る。重さは86.8ｇである。上端部に敲打痕が認められる。石材は(室生)安山岩である。85は磨石である。Ａ地区包含層から出土した。残存長は12.6cm、幅5.9cm、厚さ4.2cmを測る。重さは435ｇである。断面で面をなす３面に磨った痕跡が認められる。下端部には被熱による赤変部位が認められる。石材は花崗岩である。86はC地区の断ち割りから出土した敲石併用磨石である。残存長9.3cm、残存幅7.4cm、厚さ４cmを測る。重さは315ｇである。表裏面に磨り痕、上端部に敲打痕が認められる。石材は花崗岩である。87は石皿である。Ａ地区土坑Ｓ



第100図　石器実測図

Ｋ12から出土した。残存長10.2cm、残存幅10.3cm、厚さ4.8cmを測る。重さは785ｇである。表裏面とも滑らかである。石材は花崗岩(甘南備山系)である。88は砥石状石製品である。Ａ地区ＳＰ95から出土した。残存長10.5cm、幅8.5cm、厚さ6.4cmを測る。重さは785ｇである。右側面に研磨による使用痕が認められる。あまり明確ではないが、下端部に敲打痕状のアバタ痕跡が確認できる。石材は花崗岩である。89は打製石鏃である。Ａ地区包含層から出土した。凹基無茎鏃であるが、先端と基部の一方を欠損する。基部の抉りは浅く鈍角である。基部の先端は尖る。残存長1.8cm、残存幅1.5cm、厚さ0.35cmを測る。石材はサヌカイトである。重さは0.84ｇである。90は楔形石器である。長さ４cm、幅３cm、厚さ1.2cmを測る。重さは30.1ｇである。石材はサヌカイトである。全体的に表面が磨耗している。91は打ち欠き石錘である。Ａ地区土坑ＳＫ61から出土した。残存長6.5cm、幅3.3cm、厚さ0.8cmを測る。重さは20.8ｇである。長楕円形の扁平な自然礫を使用しており打ち欠いて紐掛け部を作り出している。石材は熱変なした粘板岩(甘南備山系)である。

(柴　暁彦)

(2) Ｃ地区

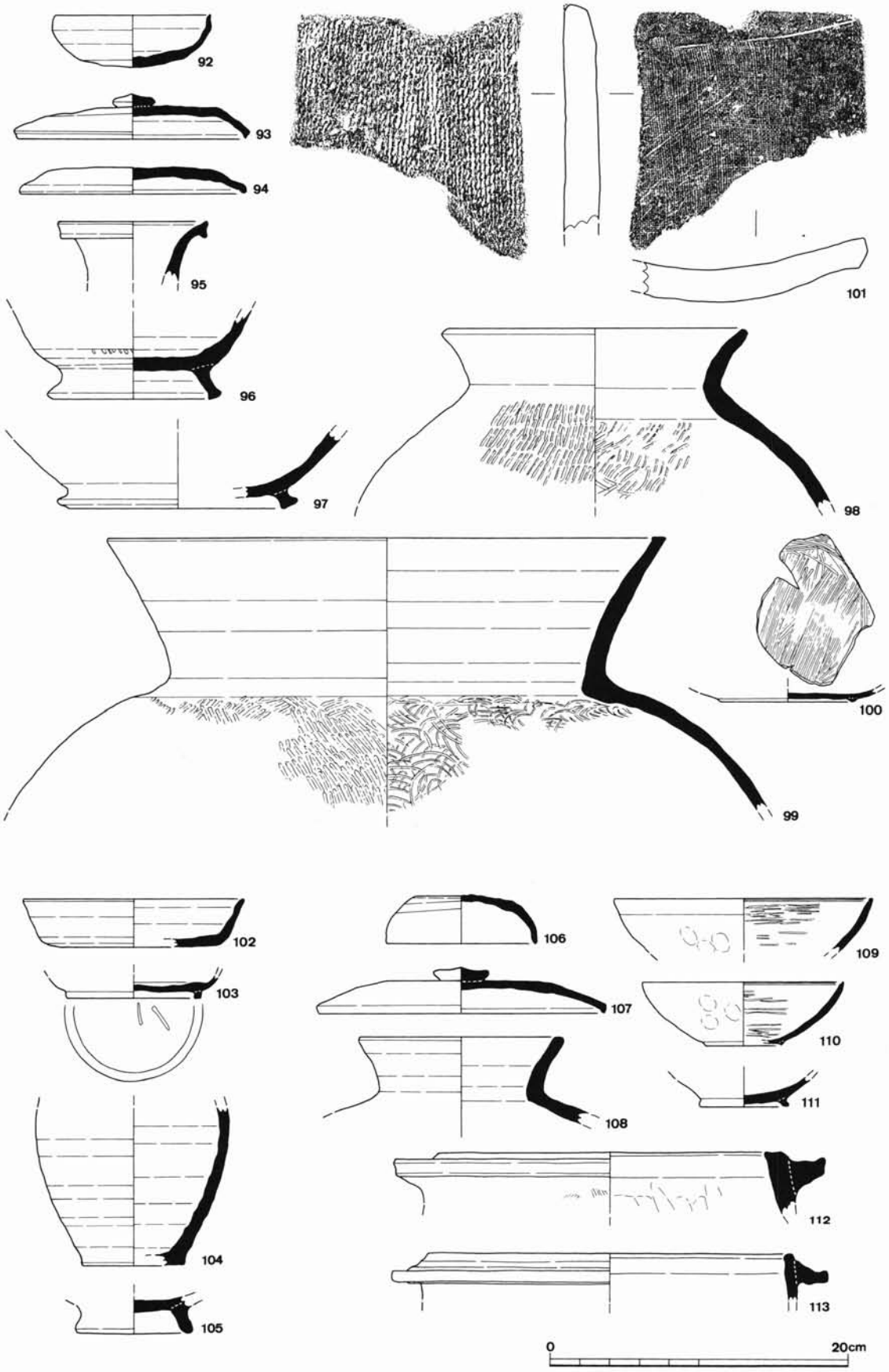
Ｃ地区から出土した遺物には、縄文土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・灰釉陶器・瓦・石器・石製品がある。大半のものが縄文時代後期の遺物、奈良時代後半、平安時代前期、中世のものにかぎられている。

1) 奈良・平安時代の遺物(92～101)

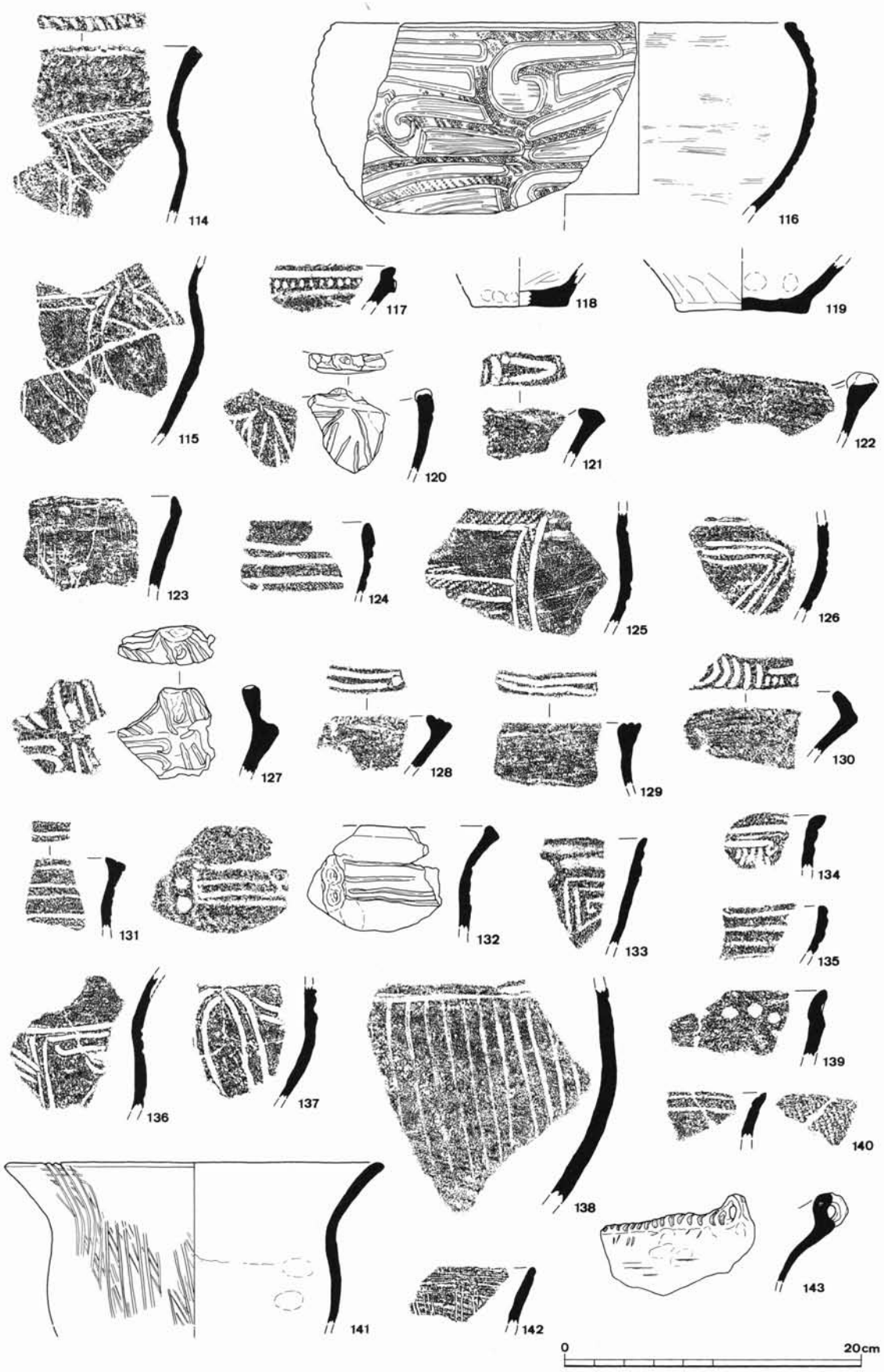
92～99は流路跡ＳＲ16・30から出土したものである。92は須恵器杯身、93・94は須恵器蓋である。92は色調は灰色で口径10.3cm、器高3.5cmである。93は扁平な宝珠形つまみをもつが、94はつまみを有しない。口縁端部を内側に巻き込む蓋Ａで８世紀前半と考えられる。93は流路跡ＳＲ21の堰状の施設から出土した。95は長頸壺である。96・97は須恵器壺である。貼り付け高台を付す。底径は96が11.6cm、97が14.4cm。９世紀後半から10世紀。98・99は須恵器甕である。98は口径19.95cm、99は口径37.2cm。体部外面は平行タタキ、内面には同心円文のタタキである。100は黒色土器で、内面だけ黒色処理する黒色土器Ａ類である。内面の見込みにヘラミガキが密に施されている。平安時代前期。101は平瓦である。凸面は縄タタキ、凹面は布目が残る。焼成は硬く、色調は褐色である。瓦端は一面が残っている。平安時代と考えられる。

2) 包含層出土の遺物

102～113は包含層中から出土したものである。102は須恵器杯で平らな底面に短く外反する口縁部を付けたものである。内外面とも回転ナデ、外底面はヘラ切り痕後ナデを施す。色調は灰色である。口径14.7cm、器高3.2cmである。103は須恵器杯Ｂである。高台が底部のやや内側にある。底部外面に線刻が認められる。８世紀後半の時期が推定される。104は須恵器壺である。大形の長頸壺と思われる。内外面とも回転ナデを施す。底部は糸切りである。平安時代前期。105は台付土師皿と思われる。106・107は須恵器蓋である。106は焼き歪みが著しい。色調は明青灰色で、器高3.25cmである。107は扁平な宝珠形つまみをもつ。口縁端部を内側に巻き込む蓋Ａで８世紀後半と考えられる。108は須恵器甕で「く」の字状の口縁をもつ。口径13.4cm、色調は灰色であ

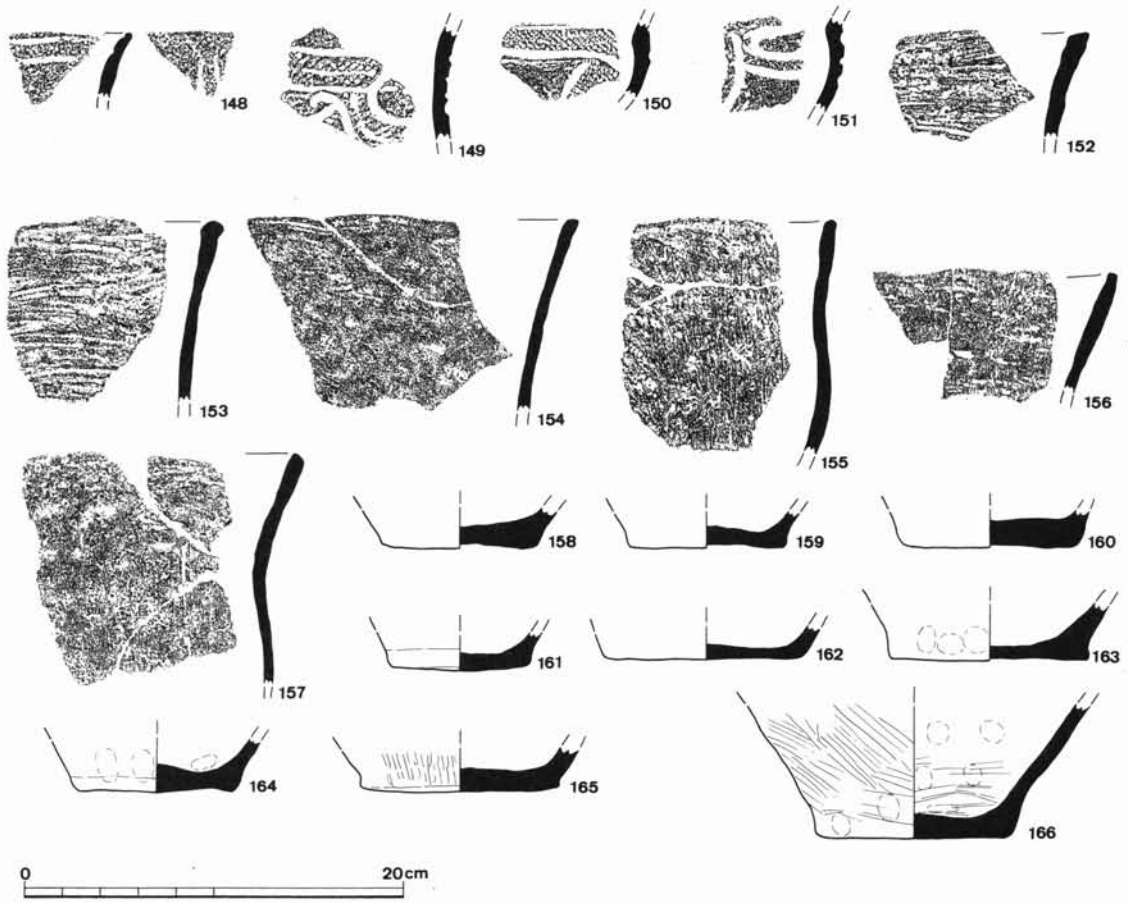


第101図　C地区出土遺物実測図



第102図　縄文土器実測図(1)

第103図　縄文土器実測図(2)

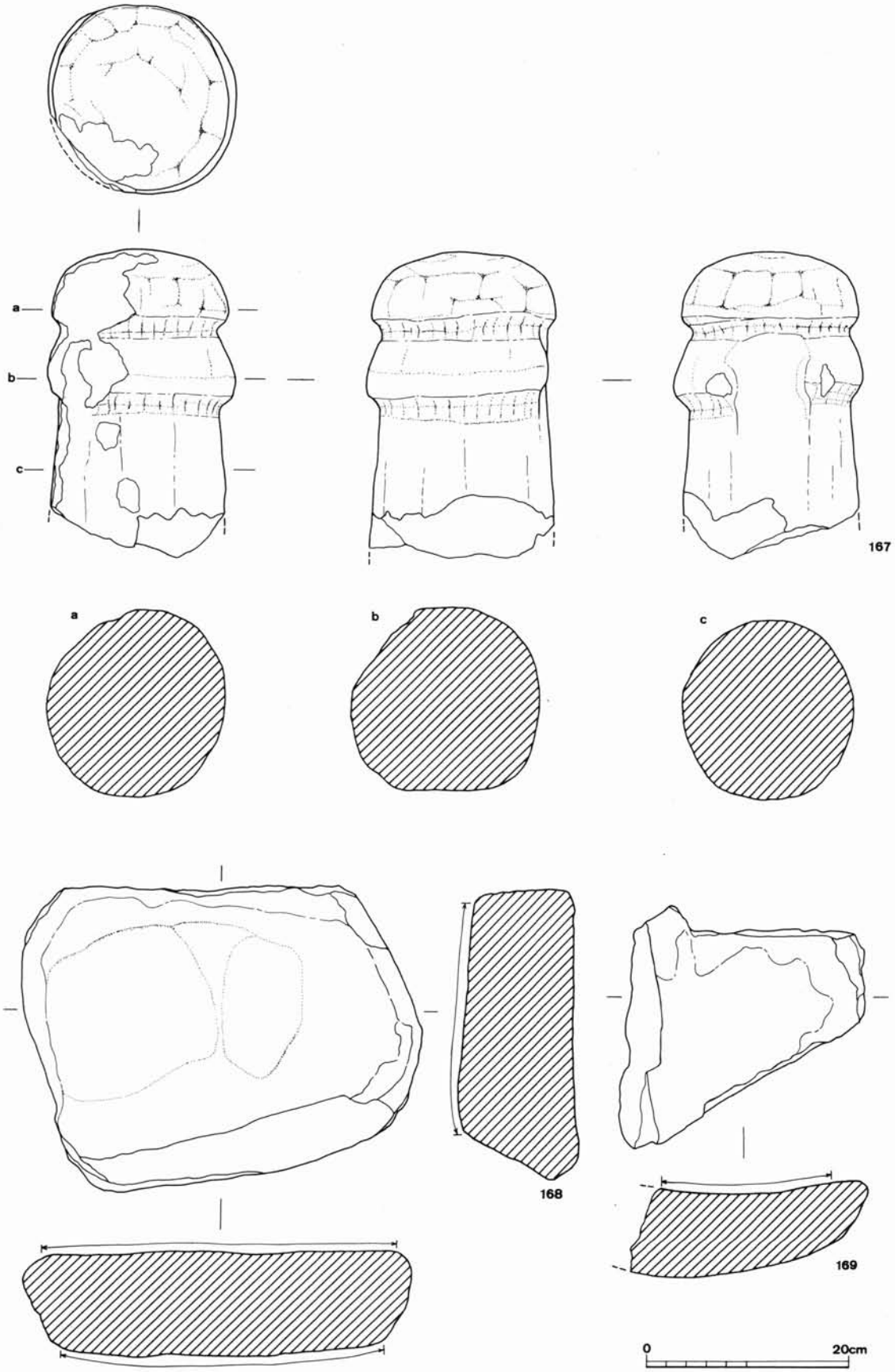


第104図　縄文土器実測図(3)

る。109・110は瓦器椀である。磨滅しているため内面はミガキがはっきりしない。口縁端部内面には一条の段をもつ。大和型である。12世紀後半と考えられる。109は口径17.2cm、110は口径13.4cm、器高4.3cm。高台は断面三角形で、貼り付けである。111は緑釉陶器椀である。高台は削り出し、内外面とも施釉、色調は暗灰黄色である。112・113は土師器羽釜である。焼成は良で、色調は褐色である。10世紀代と推定される。　(増田孝彦)

3) **縄文時代後期前半の土器**(114～166)

114～119・144～147は土坑ＳＫ18から出土した。114・115・125・149・150は磨消縄文の深鉢である。114は口縁端部に刻みを施し頸部以下に２本沈線による磨消縄文帯が描出されている。114・115は同一個体と思われる。116はＲＬ縄文を地文とする「Ｊ」字文の磨消縄文浅鉢である。外面は赤色顔料により彩色されている。中津式に比定できる。117は口縁部外面に突帯を貼り付け突帯の上面を強くナデつけている。突帯上にＤ字の刻みを施す。120～138・140～143は流路跡ＳＲ15から出土した。120・127は口縁端部に突起状の貼り付けをもつ沈線文土器である。121・128～130は縁帯文土器である。口縁端部を拡張し沈線文を施す。123・141・142は条痕文土器である。123は縦方向、141は口縁端部外面を横方向、頸部および体部を斜め方向の条痕を施したのち縦方向の条痕を施す。142は口縁端部外面を横方向の条痕を施したのち縦方向の条痕を施す。126は３本沈線を基調とする深鉢の体部片である。132は４本の横方向の沈線間を「８」字状の貼



第105図　石棒・石皿実測図

り付け浮文を施す。133～138は沈線文土器である。133は幾何学状の渦巻文が施文される。143は口縁端部に連続する爪形刺突が施され、環状の把手が貼り付けられている。144～147・153～157は粗製深鉢である。146・147は同一個体の可能性がある。158～166は底部片である。161・164は底部中心付近がやや突出する。158～160は上底気味になる。162・163・165・166は、ほぼ平坦な底部をもつものである。

4）石器（第95図）

167は石棒である。Ｃ地区流路跡ＳＲ15から出土した。残存長30.5cm、頭部の最大幅19.5cm、基部の幅17.5cmを測る。頭部は二段に作り出されている。裏面は二段目の頭部が平坦面をもつ。全体的に風化が進んでおり石材の表面には多数のひび割れが見られる。色調は黄褐色であるが割れ口の新鮮な面は緑灰色をなす。重さは14.6kgである。石材は（室生）安山岩の可能性がある。168は石皿である。長さ40.5cm、幅30.5cm、厚さ11.5cmを測る。重さは24.6kgである。石材は花崗岩（甘南備山系）である。169は石皿である。長さ25cm、幅24cm、厚さ９cmを測る。石材はホルンフェルス（甘南備山系）である。

石材の調達は磨石・敲石などの小型石材は木津川本流の円礫、石皿などの大型石材は遺跡の立地する背後の甘南備山系かこれに源を発する河川で採取している可能性がある。いずれにせよ遺跡周辺で採取できる石材を利用していたと考えられる。手原川はもと南山城特有の天井川となっていたようであり調査で明らかになった流路に堆積した岩石は本来の手原川から流されてきたものと言えるようである。

４．まとめ

（1）Ａ地区

1）平安時代

長方形土坑ＳＫ51と溝ＳＤ66、溝ＳＤ05を検出している。長方形土坑ＳＫ51は須恵器、土師器蓋・杯・皿などの土器や製塩土器、瓦片、フイゴの羽口片などの遺物が比較的まとまって出土した。須恵器杯には墨痕の認められるものが１点あり、日常的に文字を扱う役人が居住していた可能性が考えられる。また、溝ＳＤ66と溝ＳＤ05は約４ｍの幅で平行しており道路の側溝として機能していたと推測することもできる。

2）奈良時代

今回、３間×５間の南北棟建物跡ＳＢ57、２間×３間以上の南北棟建物跡ＳＢ56の２棟の掘立柱建物跡を検出した。主軸方位はＳＢ57がＮ－12°－Ｗ、ＳＢ56がほぼ主軸を北に向ける建物と方位が異なっていた。柱穴に１点ずつ遺存していた柱痕や柱穴の土層観察によると同じ奈良時代でも古い建物跡と考えられる掘立柱建物跡ＳＢ57は柱穴の直径は約20cm、掘立柱建物跡ＳＢ56は約30cmと柱の太さも異なっていた。これらの建物跡がどのような性格のものであるのか文献などに記述もなくその手掛かりとなる遺物も調査では出土していない。古代の官道の古山陰道と推定される場所から西側に約250ｍ離れていることから官衙的施設であるのか私的な建物跡であるの

か現段階では判断材料がない。この点については今後資料の蓄積を待って検討したい。ただ建物跡の柱穴を切っている８世紀前半の長方形土坑ＳＫ51から比較的まとまった土器資料が得られており、なんらかの判断材料となると考えられる。

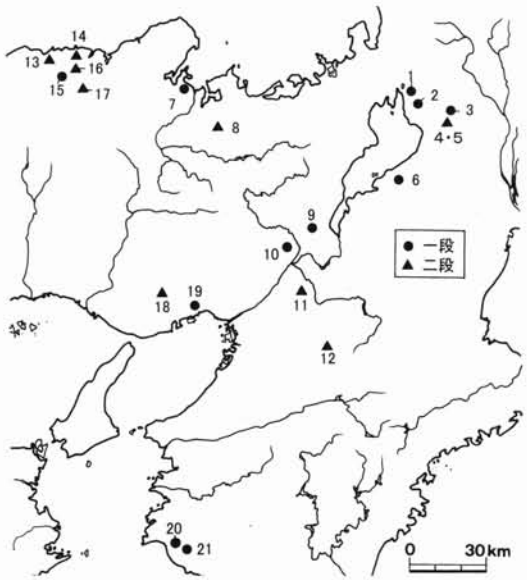
酬恩庵(一休寺)の近隣の調査では、中世段階になると石清水八幡宮の神人の居住地である新家が住んでいたという伝承があり発掘調査によって江戸時代ものではあるが、「新」と刻印された木製品が出土している。(注8)

3）縄文時代

今回の調査では縄文時代の中期後半のムラが昨年度の調査地を越えてさらに南側に広がっていることが明らかになった。しかし竪穴式住居跡などの主要な遺構は検出しておらず10基程度の土坑を検出したことにとどまったことから集落の中心からははずれていくものと思われる。また、土坑からの出土遺物についても昨年度の調査と比較して土器は器形を把握しうるような大きな破片の出土がないこと石器も敲石、磨石といった礫石器が中心ではあるが出土点数が少ないことからも集落の中心の縁辺部である可能性が高い。なお土坑の埋土をサンプリングして花粉分析を行ったが良好な分析結果は得られなかった。

(2) Ｂ地区

平成16年度に縄文時代中期の竪穴式住居跡を検出した地点から道路を隔てた北側で調査を行ったが顕著な遺構・遺物とも見られなかった。土層観察によると中世以降と考えられる流路を検出したに過ぎない。よって縄文時代中期の集落はおよんでいないと判断できる。



第106図　近畿地方の大型石棒分布図
(注12文献を改変・再トレース)
1．古橋　2．木尾　3．井の田　4．杉沢　5．大清水　6．林・石田　7．栗田　8．葛禮本神社　9．上賀茂・北白川追分町　10．南山　11．薪　12．布留　13．月岡　14．見蔵岡　15．尾呂　16．辻　17．伊府　18．淡河中村　19．篠原Ａ　20．鐘巻　21．芳野扒ノ本

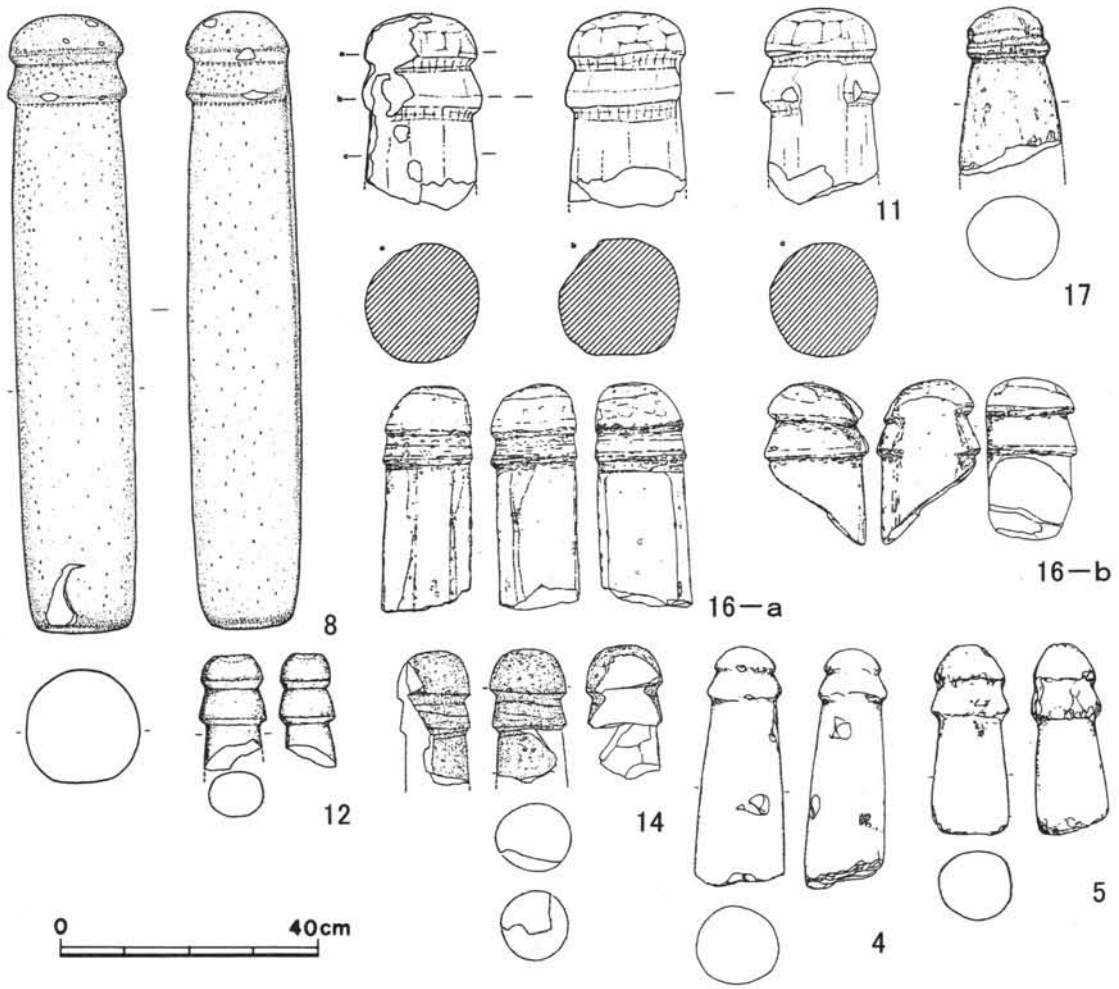
(3) Ｃ地区

1）奈良時代以降

流路に堆積する遺物はわずかであるが、緑釉陶器、黒色土器などが見られる。近世以降は染付椀が若干出土しているが流路が埋没してからの土地利用は耕作地となっていたことが考えられる。

2）縄文時代

後期前半と考えられる土坑ＳＫ18が１基と、同時期を中心とする遺物を含む流路跡ＳＲ15がある。流路跡からは比較的まとまった土器や石棒、石皿などの石器が見つかった。遺物の磨滅があまり認められないことからこの流路の近辺に集落の存在を考えることができる。ただ集落の時期は先に述べたＡ地区に継続する時期にあたるが、Ａ地区の中期後半の集落が後期前半になって生活域を北側へ移動した



第107図　笠状二段石棒集成図(番号は第106図遺跡名と対応。注12文献を改変)

かどうかは道路の路線帯のみの調査であり現段階では判断できない。

特に流路跡(ＳＲ15)から出土した石棒は薪遺跡の集落において石棒祭祀が行われていた証拠となる。石棒祭祀は精神生活に関わるものと言われているが、集落の広場に立てられていたものか出土状況からは不明であるが、おそらく祭祀に使用される役割を終えて河川へ投棄されたものと判断できる。

石棒の規模は、近畿地方でも最大級のものであり、そのような大型石棒は約20例が知られる(第106図)。その中で石棒の形態については、薪遺跡と同様に石棒の頭部が笠状二段に作り出されたものの類例は、近畿地方では、北から兵庫県城崎郡竹野町の見蔵岡遺跡、同豊岡市辻遺跡[注9]がある。見蔵岡遺跡は近畿地方では数少ない石棒製作遺跡として周知されている。遺跡から流紋岩質溶結凝灰岩製１点の頭部片が出土している。辻遺跡では表採資料であるが流紋岩質凝灰岩製の２点の頭部片が報告されている。京都府では綾部市の葛禮本神社に奉納されている石棒が１点ある。ほぼ完形品(安山岩質凝灰岩)である。この石棒の出土地は不明であるものの、丹後地域の遺跡で製作された可能性もあるとの指摘があり、薪遺跡の石棒は葛禮本神社のものに類似すると言われる[注10]。また、奈良県天理市の布留遺跡でも花崗岩製の頭部片１点が出土している[注11]。滋賀県では坂田郡伊吹町の杉沢遺跡(凝灰岩)、大清水遺跡(凝灰岩)の２例がある。近畿地方では９例目と

なる(第107図)。[注12]

石棒の祭祀形態については屋内と屋外で二分される。屋内祭祀は竪穴式住居跡の入り口やその対面にあたる奥壁部分などに安置され家族的な祭祀を司る遺物とされる。また、屋外祭祀の場合は配石遺構に伴って発見される例がある。ムラの構成員としての集団を意識したものであり安定した食物獲得への祈願に関わる象徴的な道具としての役割が考えられる。石棒は被熱したものが確認されているが、近畿地方で実際に使用された例が確認できるものはない。[注13]

(柴　暁彦)

注1　高野陽子「薪遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第113冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2005

注2　竹原一彦「薪遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第106冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2003

注3　柴暁彦「薪遺跡第6次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第117冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2006

注4　竹井治雄「薪遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第110冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2004

注5　**調査参加者**(順不同、敬称略)　杉江貴宏・大谷博則・河原智也・渡辺理気・田中拓史・山岡匠平・坂下実・井上聡・石井誠実・石井恵子・川嶋祐佳・川端美恵・徳田智恵子・栃木道代・丸谷はま子・村上優美子・清水友佳子・山本弥生・荒川仁佳子・藤井聖名子・吉岡美由紀・福島育代・岡野奈知子・水谷利恵

注6　泉拓良ほか「第3章　遺物」、「第1章　北白川追分町遺跡出土の縄文土器1　中期末縄文土器の分析」(『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ－北白川追分町縄文遺跡の調査－』　京都大学埋蔵文化財研究センター)　1985、泉拓良ほか「新修豊中市史」第4巻考古　2005、間壁忠彦・間壁葭子「里木貝塚」(『倉敷考古館研究集報　第7号』　倉敷考古館)　1971

注7　石材については、京都府立山城郷土資料館橋本清一氏に教示を得た。

注8　鷹野一太郎ほか「薪遺跡発掘調査概要」(『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』第30集　京田辺市教育委員会)　2000

注9　渡辺昇「兵庫県豊岡市辻遺跡の調査」(『半坂峠古墳群　辻遺跡』　兵庫県文化財調査報告書第18冊　兵庫県教育委員会)　1983

注10　薪遺跡の石棒については、雲雀丘学園中･高等学校教諭の大下明氏が実見しており教示を頂いた。

注11　末永雅雄「布留遺跡」(『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第10輯　奈良県教育委員会　1958

注12　大下明「近畿地方における大型石棒の受容と展開(上)(『縄文・弥生移行期の石製呪術具3』　考古学資料集18)　2001

注13　大阪府の向出遺跡では、基部が小型土坑に立てられた状態で出土している(立石土坑359)。時期については縄文時代後期後半(宮滝式か滋賀里式期)であり石材は結晶片岩である。山元建ほか「向出遺跡」一般国道26号(第2阪和国道)の建設に伴う発掘調査報告書(『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第55集』　(財)大阪府文化財調査研究センター)　2000

図　　版

図版第1　難波野条里制遺跡・難波野遺跡

(1)調査地全景(東から)

(2)調査地全景(西から)

図版第2　難波野条里制遺跡・難波野遺跡

(1)調査地全景(北から)

(2) 5トレンチ全景(上が北)

図版第3　難波野条里制遺跡・難波野遺跡

(1)第３トレンチ全景(東から)

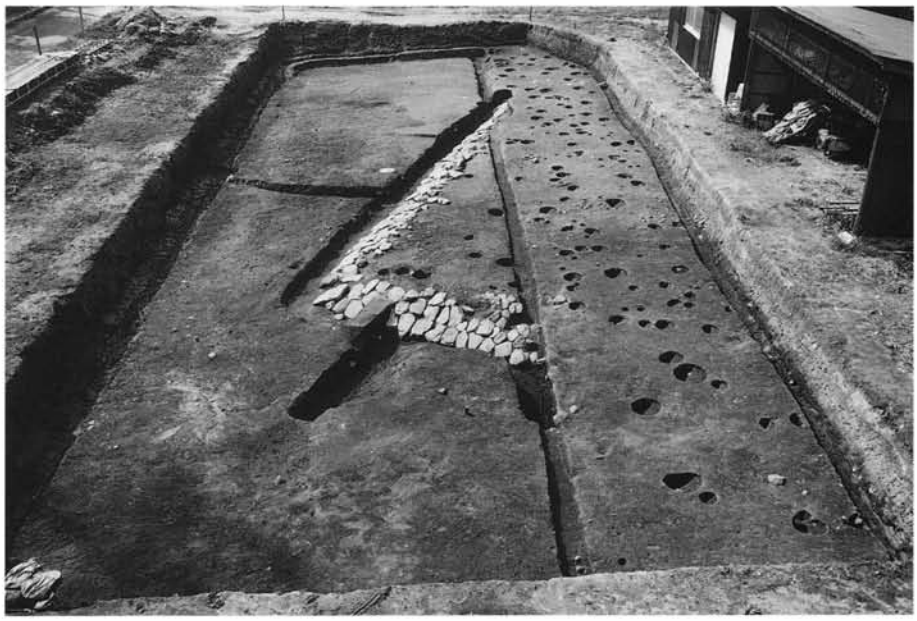
(2)第３トレンチ全景(上が北)

(1)方形貼石墓ＳＸ22(上が北)

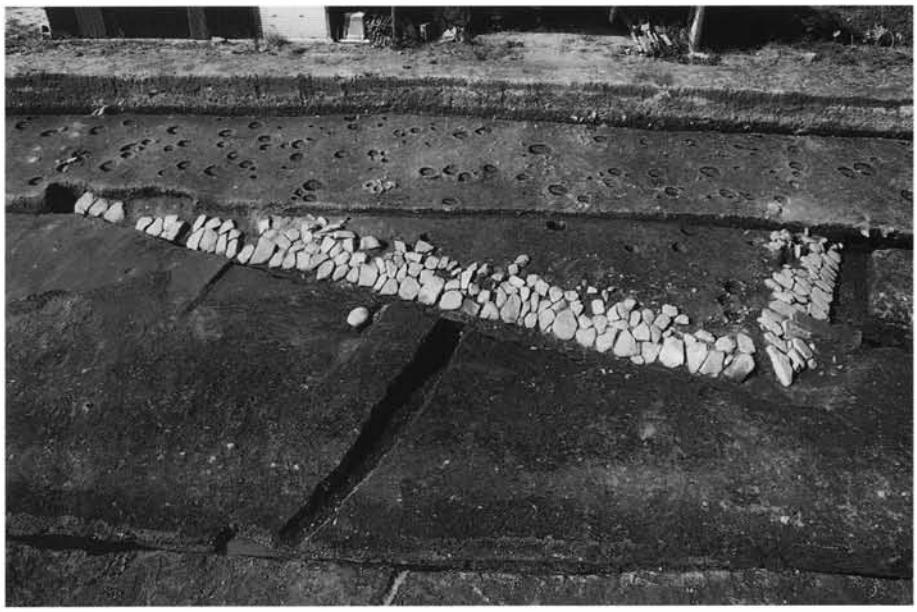
(2)方形貼石墓ＳＸ22・ＳＸ24(上が北)

図版第5　難波野条里制遺跡・難波野遺跡

(1)第３トレンチ上層遺構全景
（西から）



(2)第３トレンチ上層遺構全景
（東から）



(3)第３トレンチ上層遺構全景
（南から）

図版第6　難波野条里制遺跡・難波野遺跡

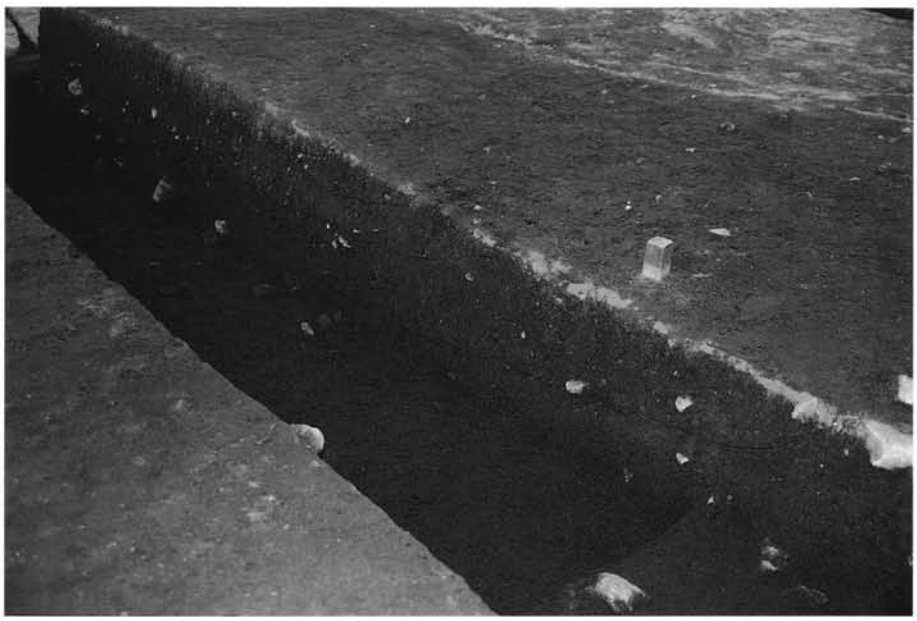
(1)第３トレンチ下層遺構全景
（西から）

(2)第３トレンチ下層遺構全景
（東から）

(3)第３トレンチ下層遺構全景
（南東から）

図版第7　難波野条里制遺跡・難波野遺跡

(1)方形貼石墓ＳＸ22東周溝断面
（北東から）



(2)方形貼石墓ＳＸ22南周溝断面
（南西から）

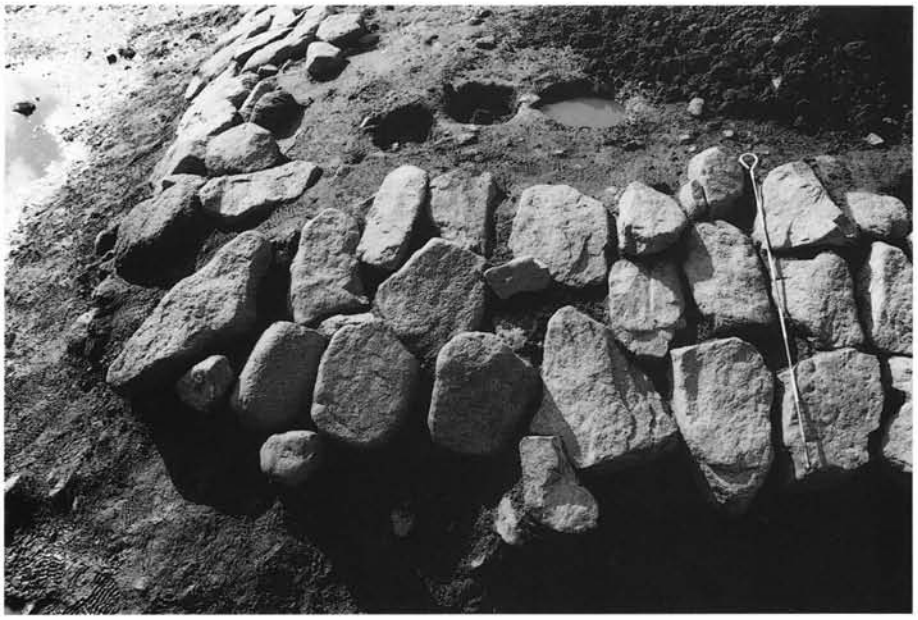
(3)竪穴式住居跡ＳＨ26（南から）

(1)方形貼石墓ＳＸ29(北西から)

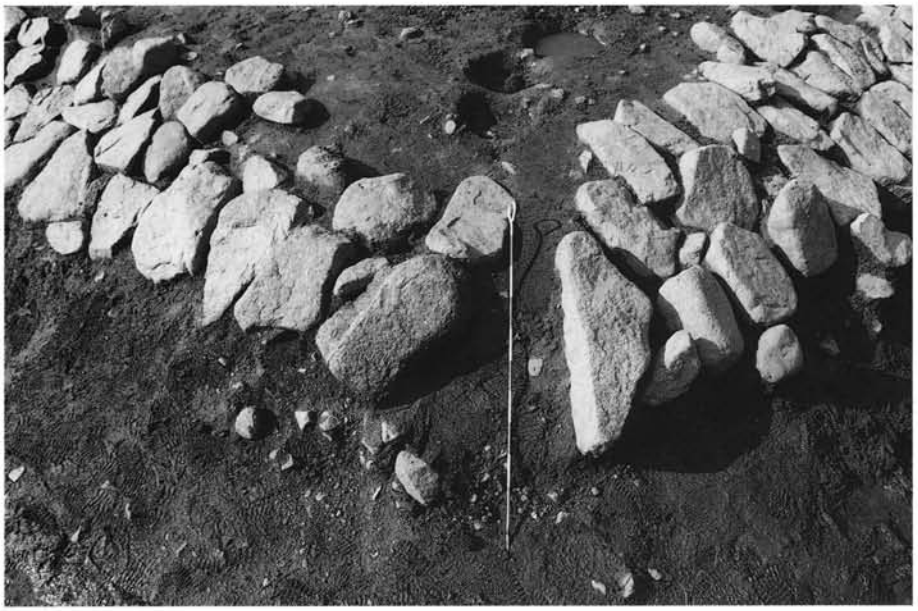
(2)方形貼石墓ＳＸ29北西隅
(北西から)

(3)方形貼石墓ＳＸ29
北側貼石中央部(北から)

(1)方形貼石墓ＳＸ22
東側貼石北部(北西から)



(2)方形貼石墓ＳＸ22
東側貼石南部(東から)



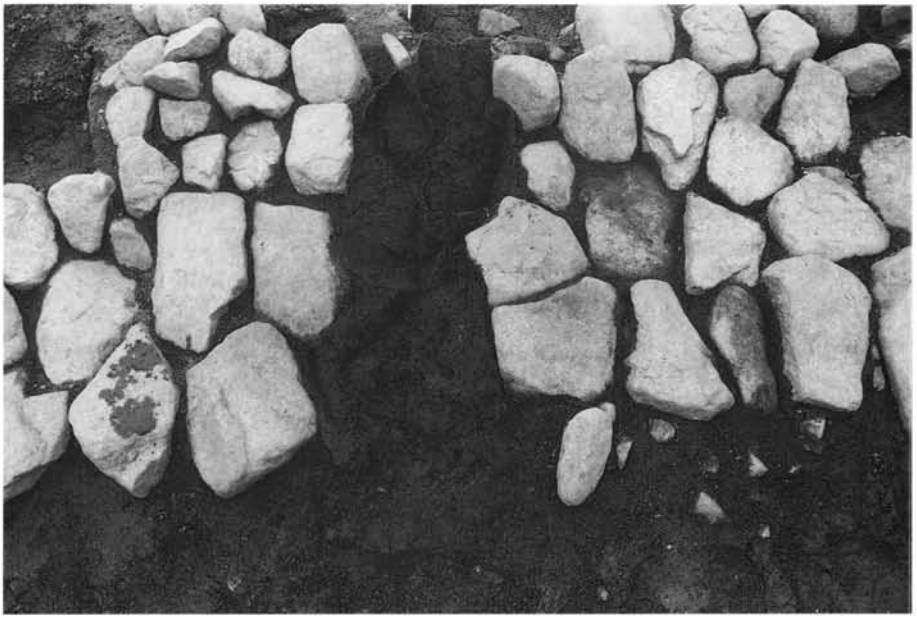
(3)方形貼石墓ＳＸ22
南東隅貼石(南東から)

(1)方形貼石墓ＳＸ22
東側貼石東部(南から)

(2)方形貼石墓ＳＸ22
南側貼石中央部(南から)

(3)方形貼石墓ＳＸ22
西側貼石(西から)

(1)方形貼石墓ＳＸ22
東側貼石除去前(東から)



(2)方形貼石墓ＳＸ22
東側貼石除去状況(東から)

(3)方形貼石墓ＳＸ22
東側貼石除去後の断面
(北西から)

(1)方形貼石墓ＳＸ22
南側貼石除去前(南から)

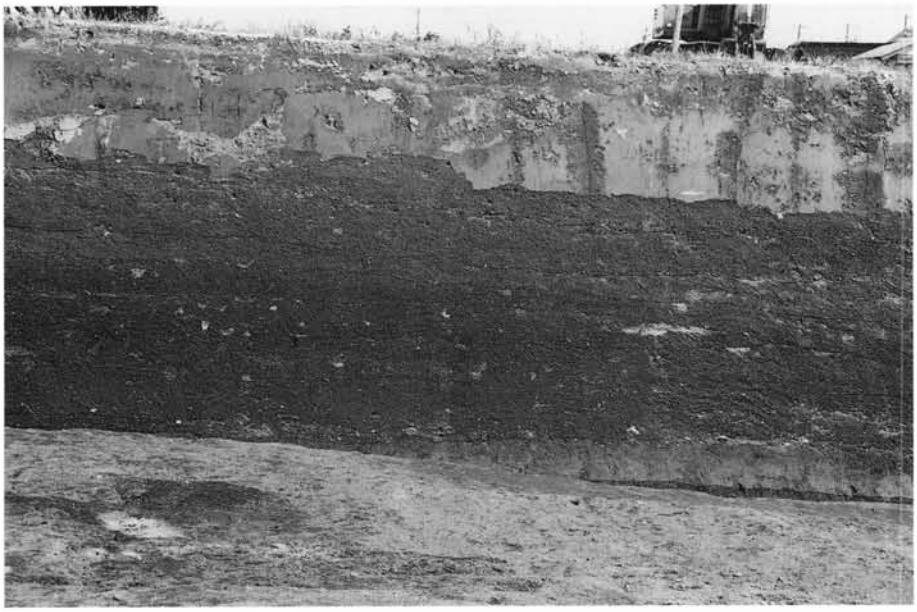
(2)方形貼石墓ＳＸ22
南側貼石除去後(南から)

(3)方形貼石墓ＳＸ22
南側貼石除去後の断面
(南西から)

図版第13　難波野条里制遺跡・難波野遺跡

(1)第５トレンチ全景(西から)

(2)第５トレンチ全景(東から)



(3)第５トレンチ東壁断面
(西から)

(1)第6トレンチ全景(南から)

(2)第6トレンチ全景(東から)

図版第15　難波野条里制遺跡・難波野遺跡

(1)第６トレンチ遺構検出状況
（東から）

(2)第６トレンチ遺構検出状況
（南東から）

(3)作業風景（北東から）

(1)井戸ＳＥ01、洗い場遺構ＳＸ77
全景(東から)

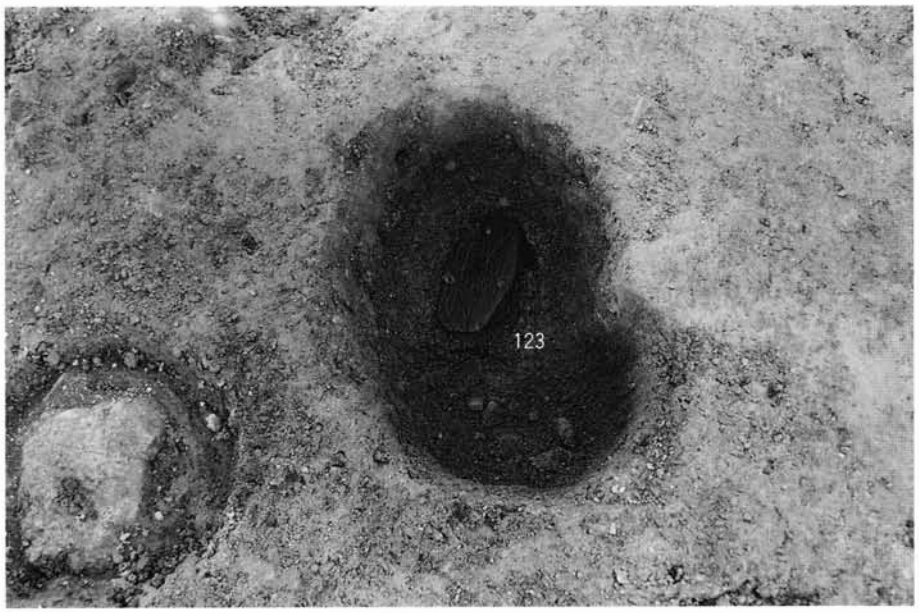
(2)洗い場遺構ＳＸ77
上層遺物出土状況(西から)

(3)洗い場遺構ＳＸ77
下層遺物出土状況(西から)

図版第17　難波野条里制遺跡・難波野遺跡

(1)洗い場遺構ＳＸ77
下層土器出土状況(北から)

(2)ピットＰ65土器出土状況
(西から)



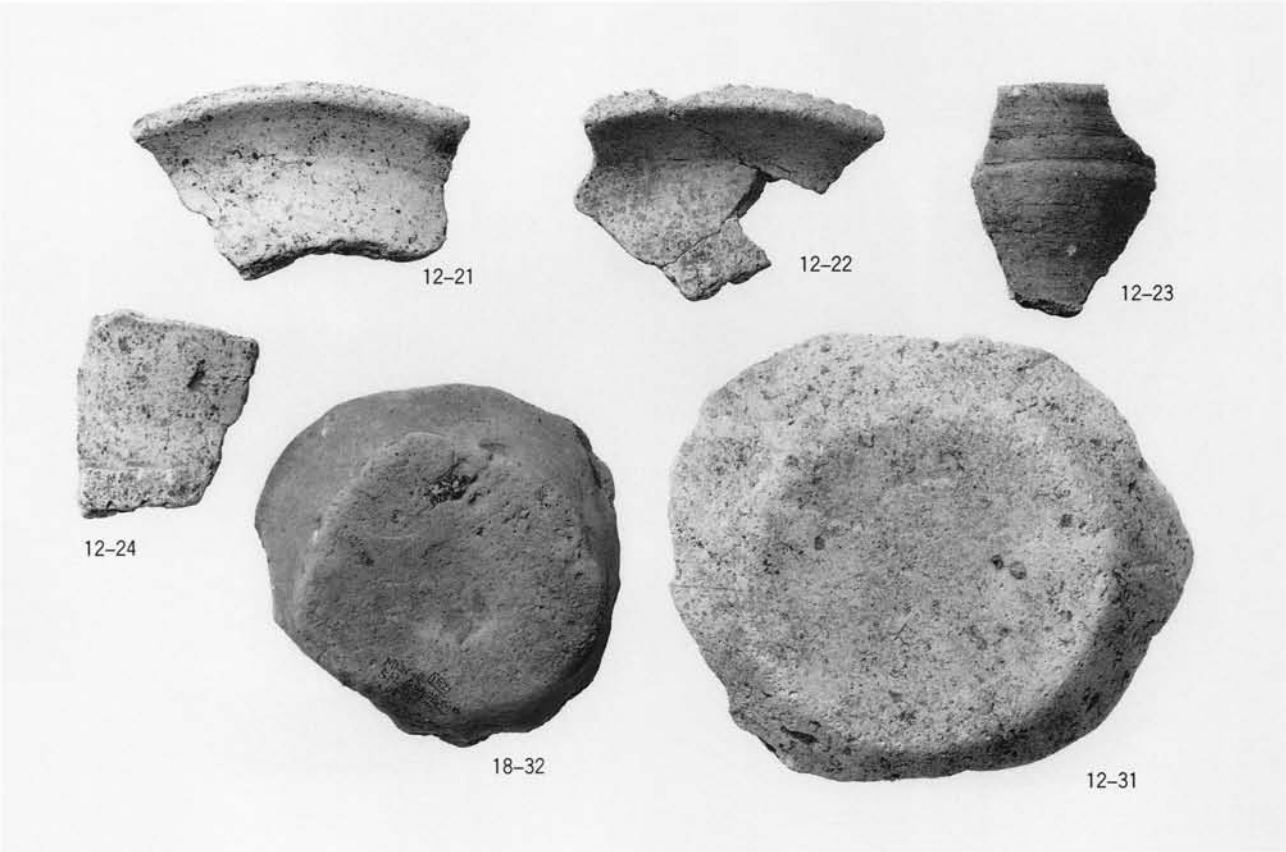
(3)ピットＰ49下駄出土状況
(東から)

(1)第７トレンチ全景(東から)

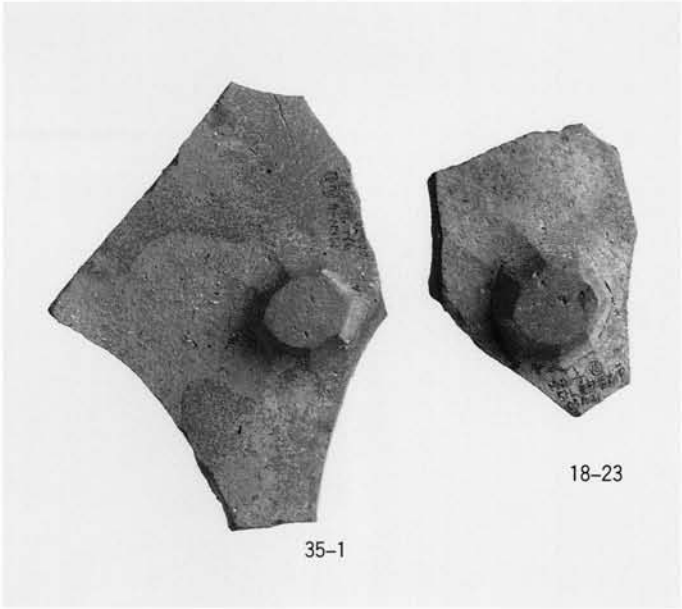
(2)第７トレンチ全景(西から)

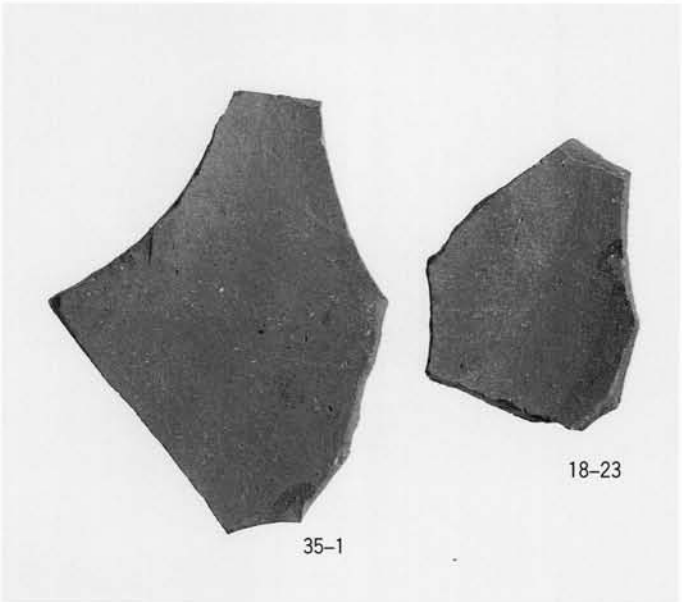
(3)第７トレンチ中央部自然流路跡(北から)

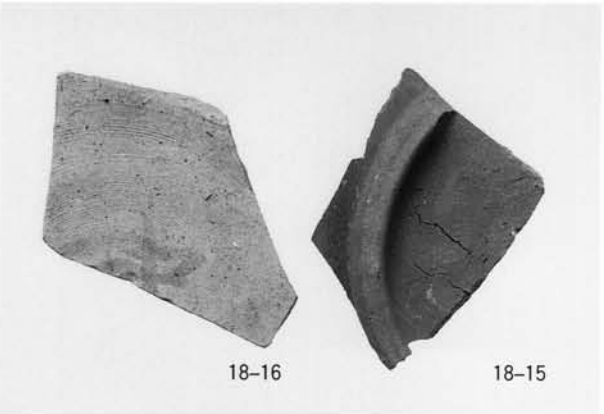
(1)方形貼石墓ＳＸ22南側周溝土器出土状況(南から)



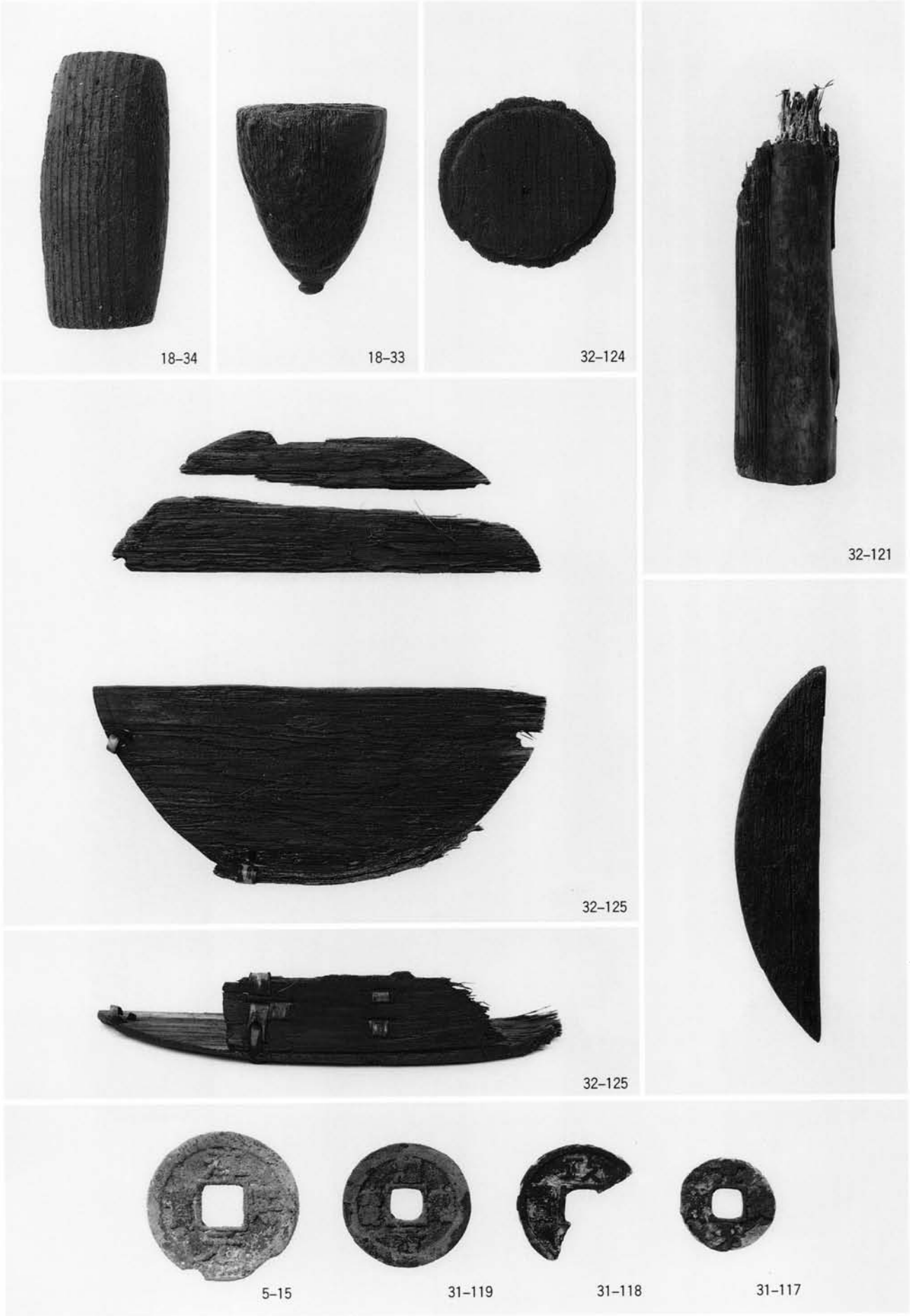
(2)方形貼石墓ＳＸ22周溝ほか出土遺物



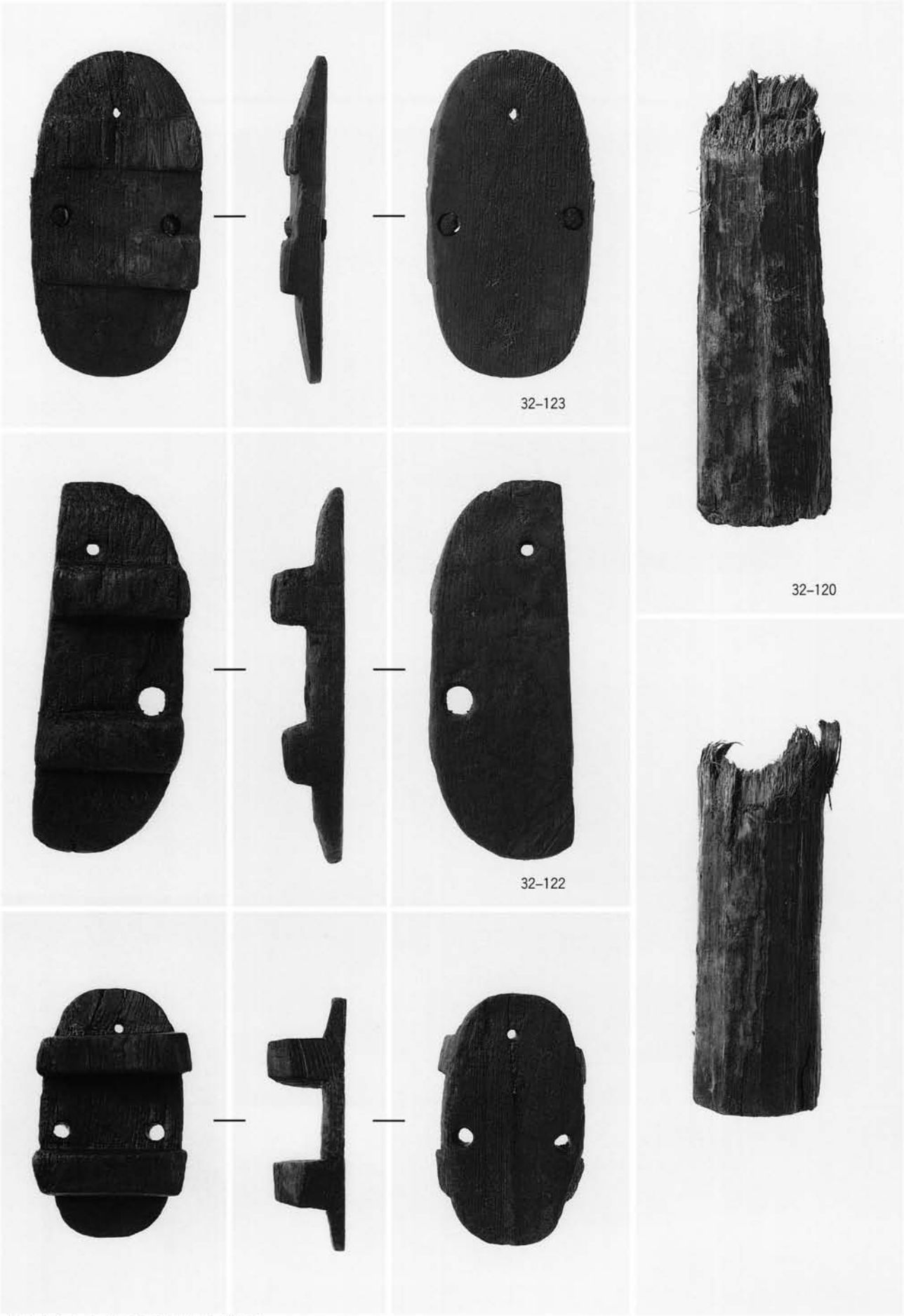




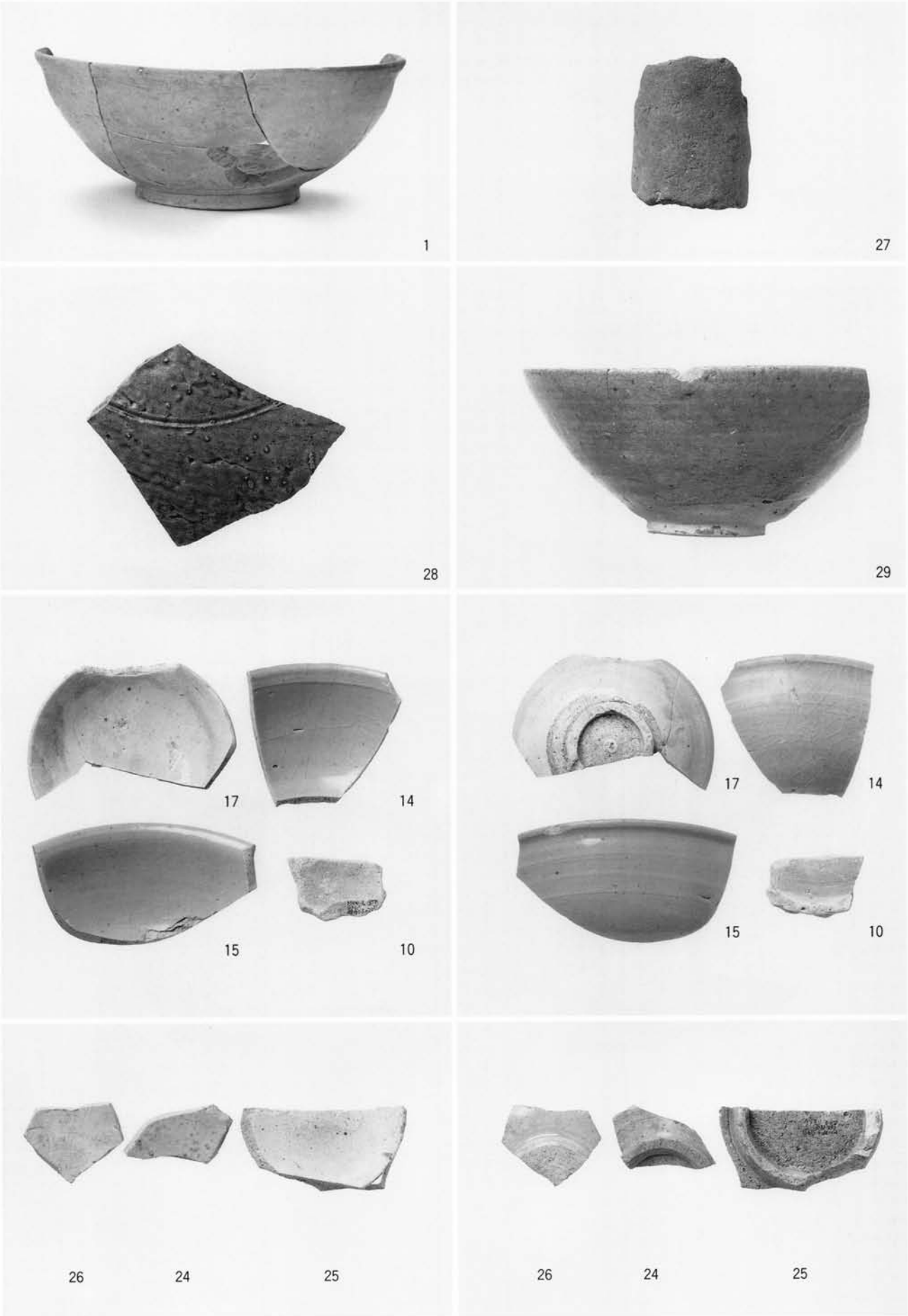
第３・５・７トレンチ出土遺物



第３・５・６トレンチ出土遺物(木製品・銭貨)



第6トレンチ出土遺物(1)(木製品)

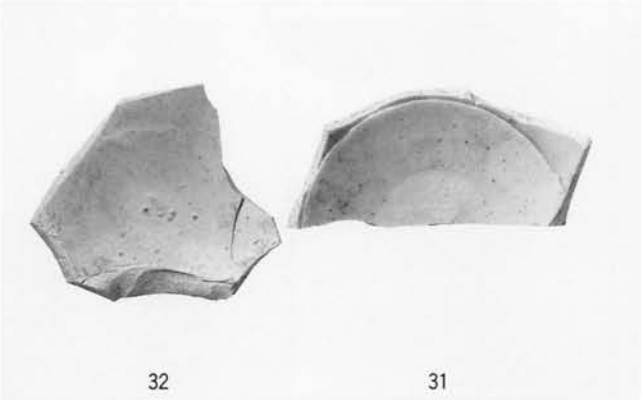


第６トレンチ出土遺物(2)

第６トレンチ出土遺物(3)

33

39


32　31

32　31

43

43

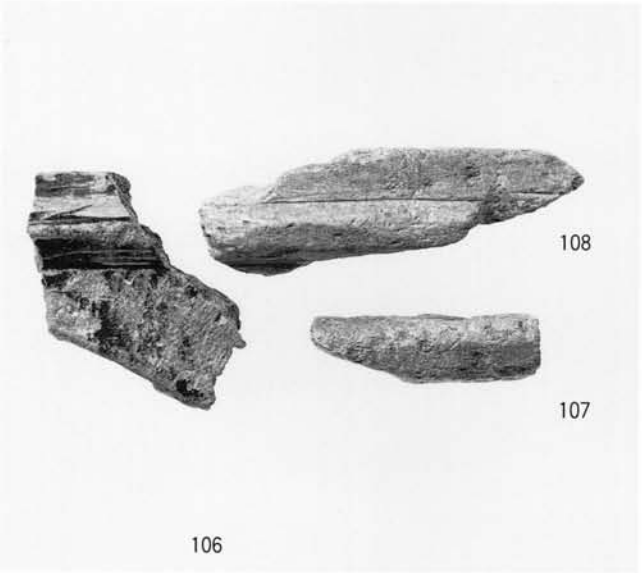
44

46

49

50

第６トレンチ出土遺物(4)



第６トレンチ出土遺物(5)

図版第27　岡ノ遺跡第４次

(1)調査地全景航空写真(上が西)

(2) ３－５地区発掘調査前全景
(北東から)

(3) ３－５地区全景航空写真
(上が南)

図版第28　岡ノ遺跡第４次

(1) ３－５地区検出遺構全景
（北東から）

(2) ３－５地区掘立柱建物跡
ＳＢ3501・3403全景（北から）

(3) ３－５地区遺物出土状況
（北から）

図版第29　岡ノ遺跡第４次

(1) ４－３～６地区全景航空写真
（上が南）

(2) ４－３～５地区検出遺構全景
（西から）

(3) ４－３～５地区検出遺構全景
（東から）

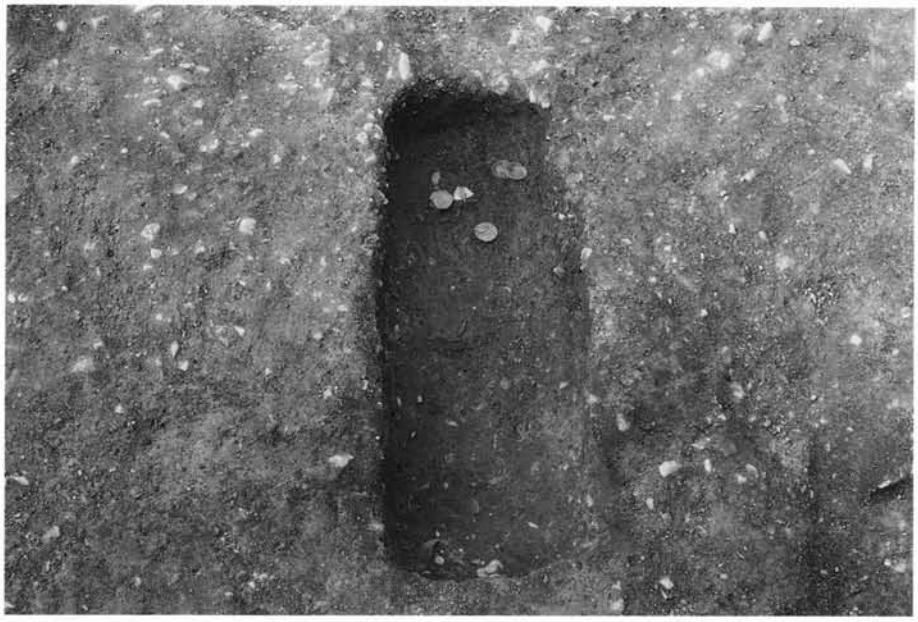
図版第30　岡ノ遺跡第４次

(1) ４－６地区発掘調査前全景
（北北東から）

(2) ４－６地区検出遺構全景
（北から）

(3) ４－６地区検出遺構全景
（西から）

図版第31　岡ノ遺跡第４次



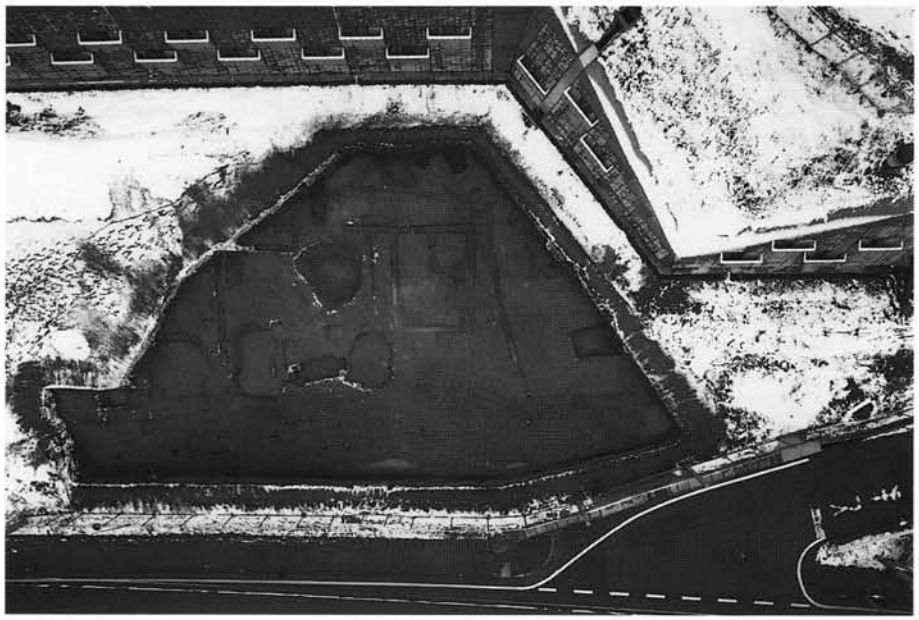
(1) ４－６地区中世墓ＳＸ4006
全景(南から)

(2) ４－６地区中世墓ＳＸ4006
遺物出土状況(北から)

(3) ４－６地区柵ＳＡ4007全景
(北から)

図版第32　岡ノ遺跡第４次

(1) ４－８地区発掘調査前全景
（西から）



(2) ４－８地区全景航空写真
（上が南）

(3) ４－８地区検出遺構全景
（東から）

図版第33　岡ノ遺跡第４次

(1) ５地区全景航空写真(上が北)

(2) ５－１地区調査区全景(西から)

(3) ５－１地区調査区全景(東から)

(1) ５－２地区検出遺構全景
（東から）

(2) ５－２地区検出遺構全景
（西から）

(3) ６地区（上）・16地区（下）
全景航空写真（上が南）

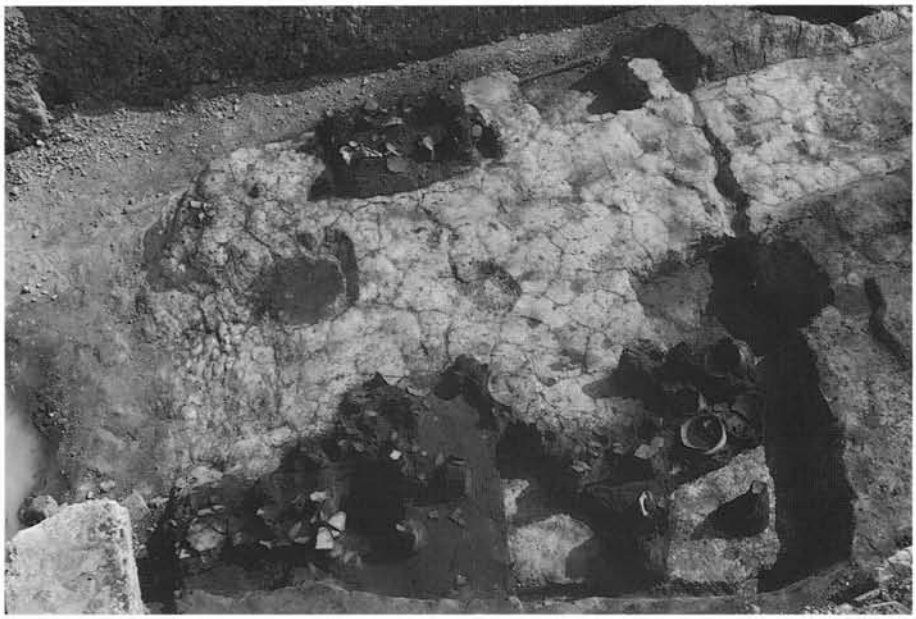
図版第35　岡ノ遺跡第４次

(1) ６地区全景航空写真(上が南)

(2) ６地区検出遺構全景(西から)

(3) ６地区竪穴式住居跡ＳＨ6013
全景(北から)

(1) 6 地区竪穴式住居跡ＳＨ0601
全景(北から)



(2) 6 地区竪穴式住居跡ＳＨ0601
遺物出土状況(北から)

(3) 6 地区井戸ＳＥ6001
遺物出土状況(北から)

図版第37　岡ノ遺跡第４次

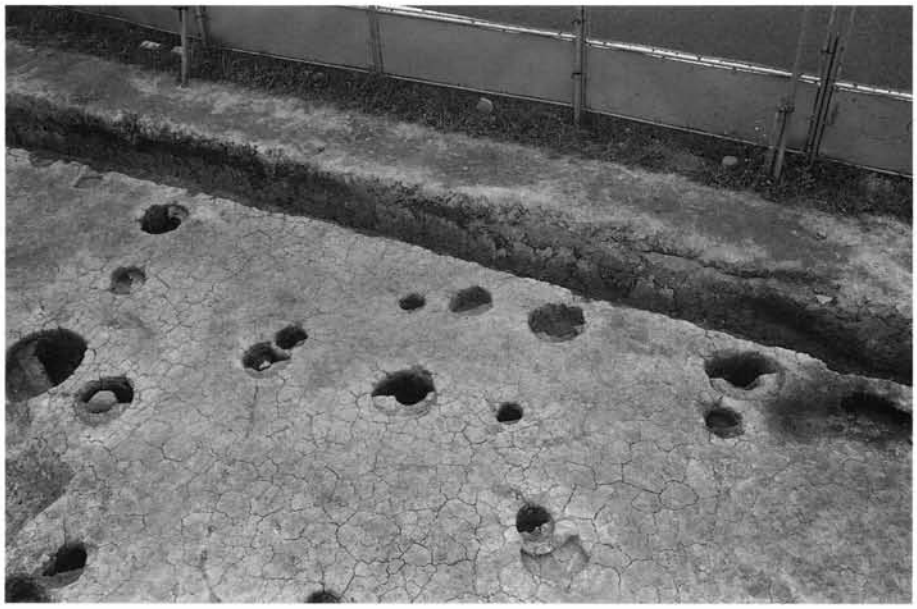
(1) 7 地区全景航空写真(上が北)

(2) 7 地区東部遺構検出状況
(西から)

(3) 7 地区西部遺構検出状況
(東から)

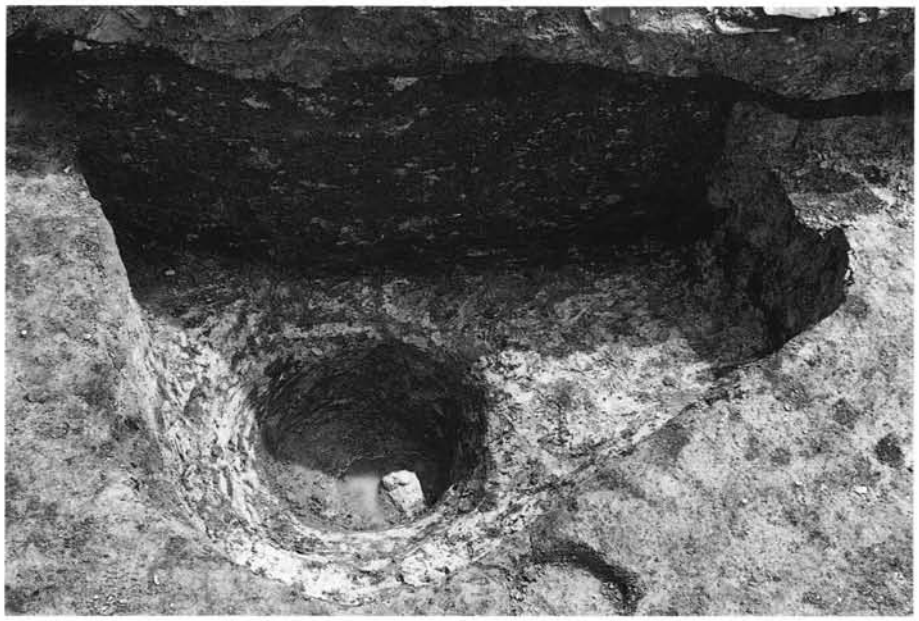
(1) 7 地区掘立柱建物跡
ＳＢ7050(南東から)

(2) 7 地区掘立柱建物跡
ＳＢ7051(北西から)

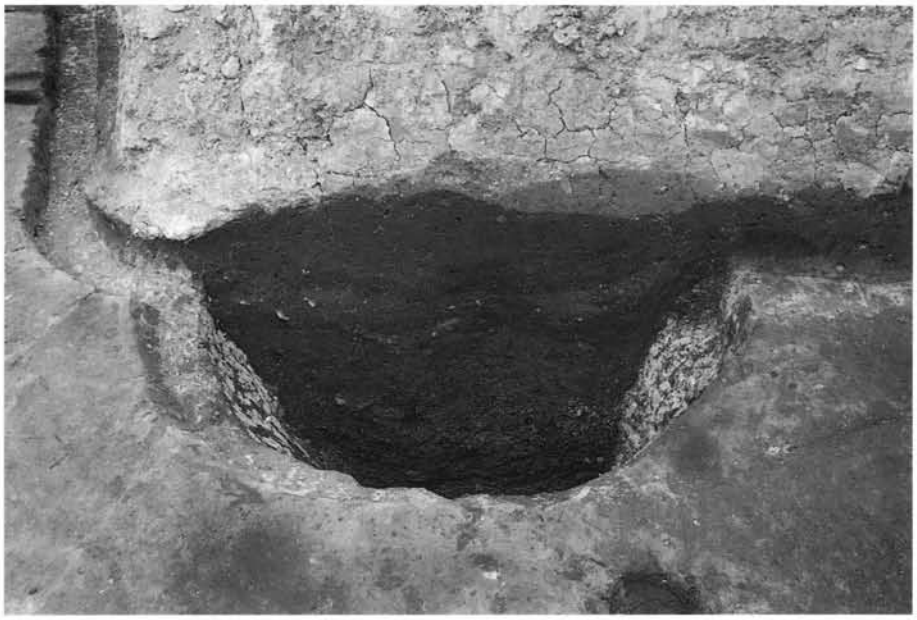


(3) 7 地区掘立柱建物跡
ＳＢ7048(北西から)

図版第39　岡ノ遺跡第４次



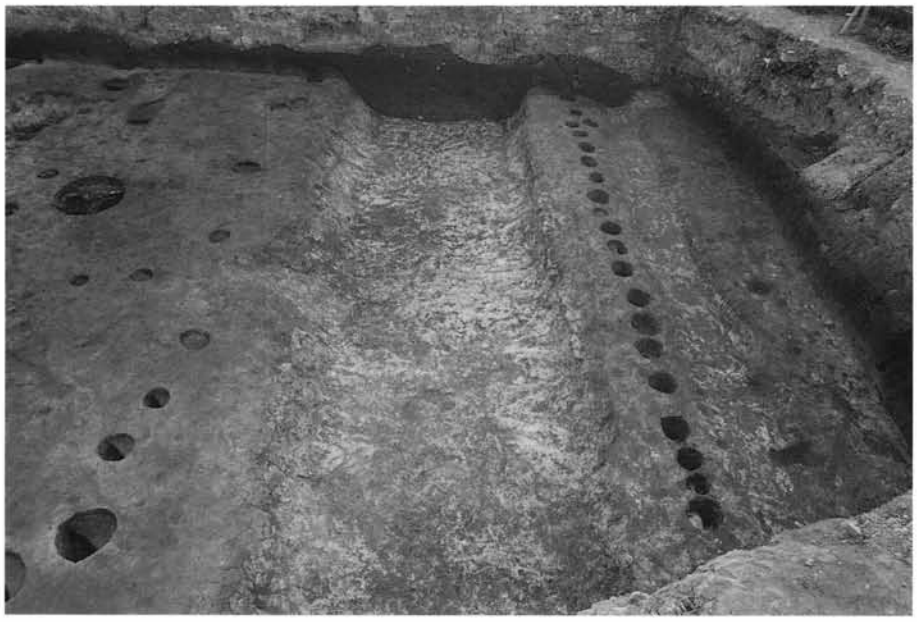
(1) ７地区井戸ＳＥ7052(北から)



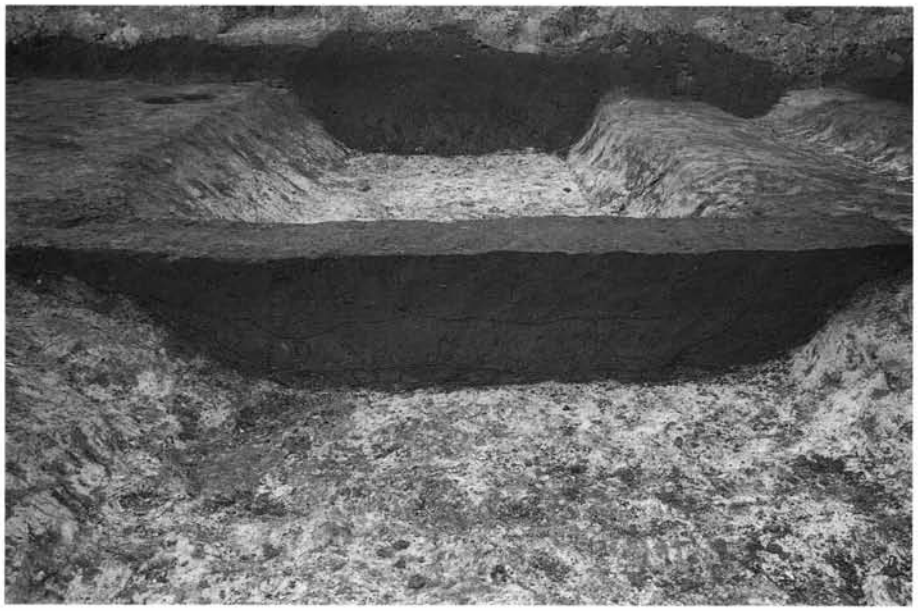
(2) ７地区井戸ＳＥ7020(南から)

(3) ７地区土坑ＳＫ7019(南から)

(1) 7地区溝ＳＤ7021・7042・柵列ＳＡ7048全景(西から)

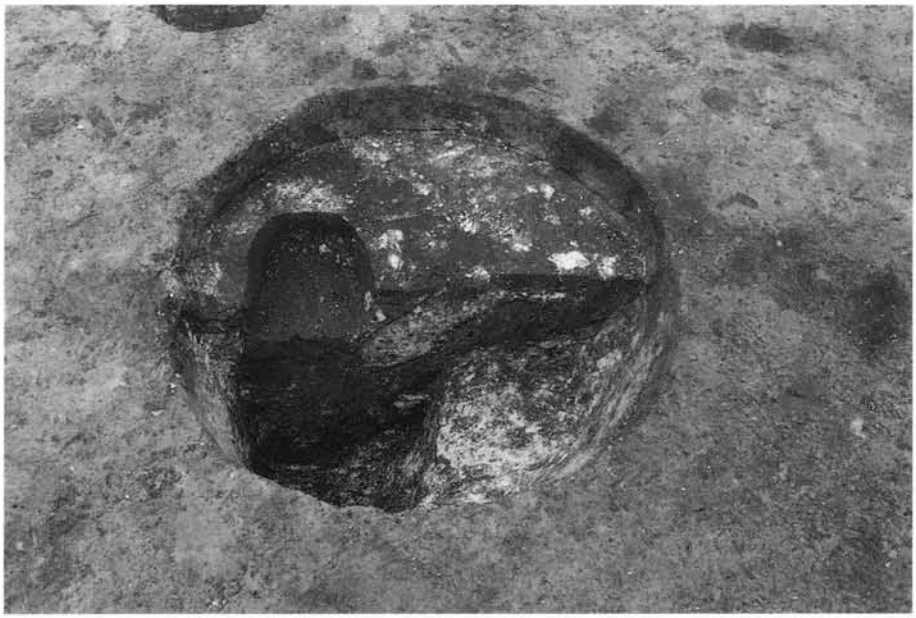


(2) 7地区溝ＳＤ7021・7042・柵列ＳＡ7048全景(南から)

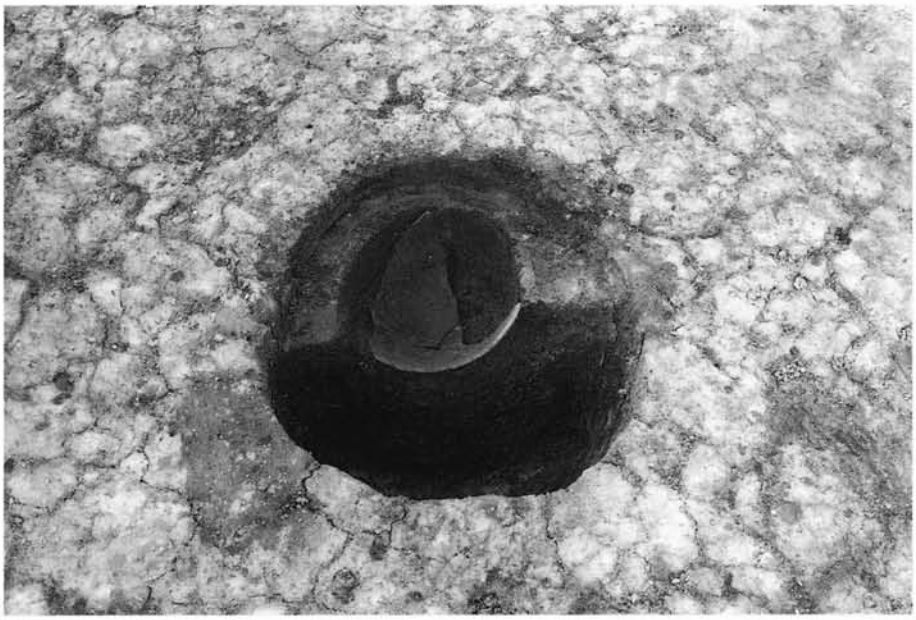


(3) 7地区溝ＳＤ7021土層断面(南から)

図版第41　岡ノ遺跡第４次

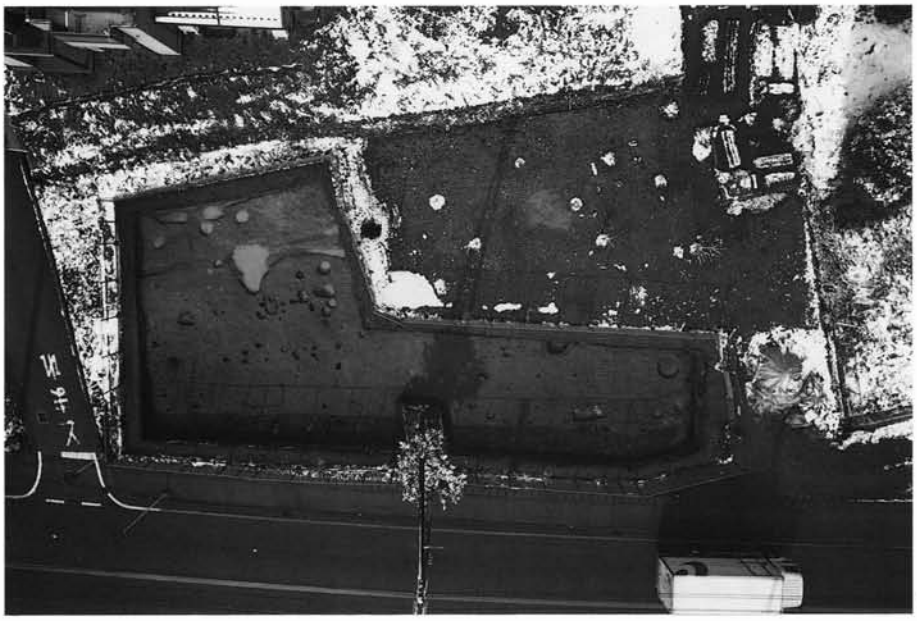


(1) ７地区掘立柱建物跡ＳＤ7050
柱穴Ｐ7037土層断面



(2) ７地区柱穴Ｐ7038遺物出土状況

(3) ７地区掘立柱建物跡ＳＢ7048
柱穴Ｐ7024土層断面



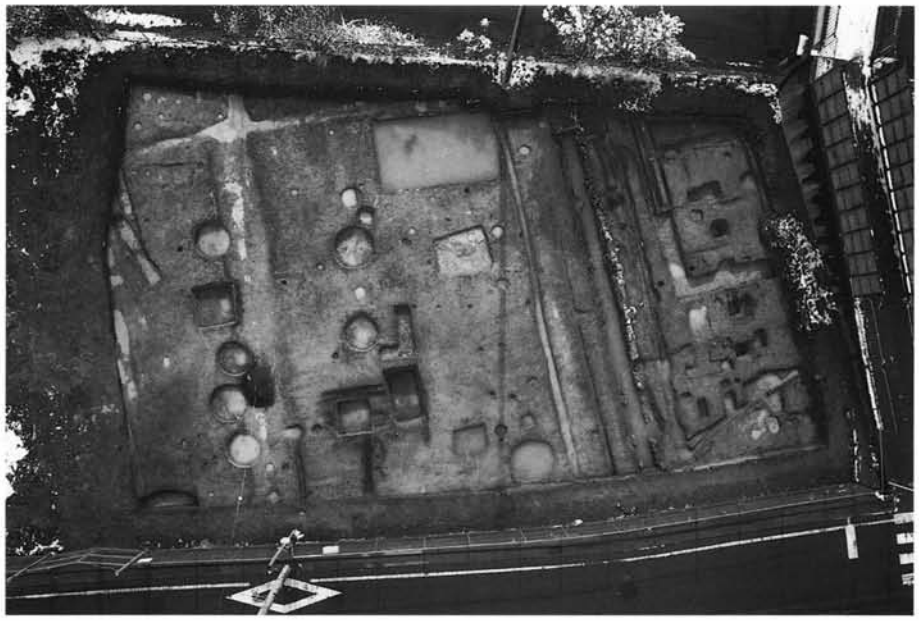
(1)14地区全景航空写真(上が北)

(2)14地区検出遺構全景(西から)

(3)14地区柵ＳＡ1401(東から)

図版第43　岡ノ遺跡第４次

(1) 4 － 8 ・14・15地区
全景航空写真(上が北)



(2)15地区全景航空写真(上が南)

(3)15地区検出遺構全景(東から)

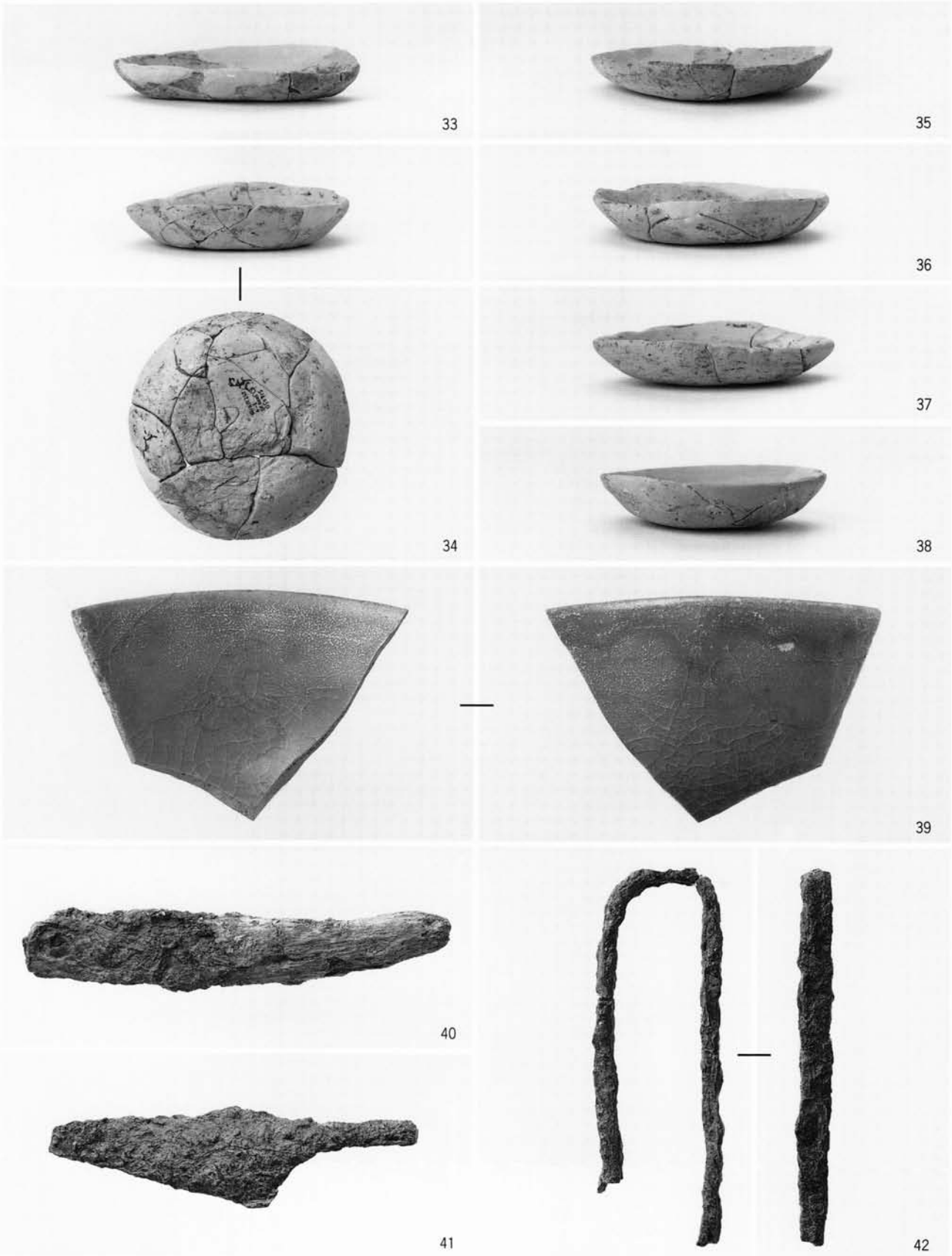
図版第44　岡ノ遺跡第４次

(1)16地区検出遺構全景(西から)

(2)16地区竪穴式住居跡ＳＨ16101
全景(南から)

(3)16地区掘立柱建物跡ＳＢ1602
全景(南から)

出土遺物(1)　３－５地区出土



出土遺物(2)　４－６地区中世墓ＳＸ4006出土

70

75

76

72

78

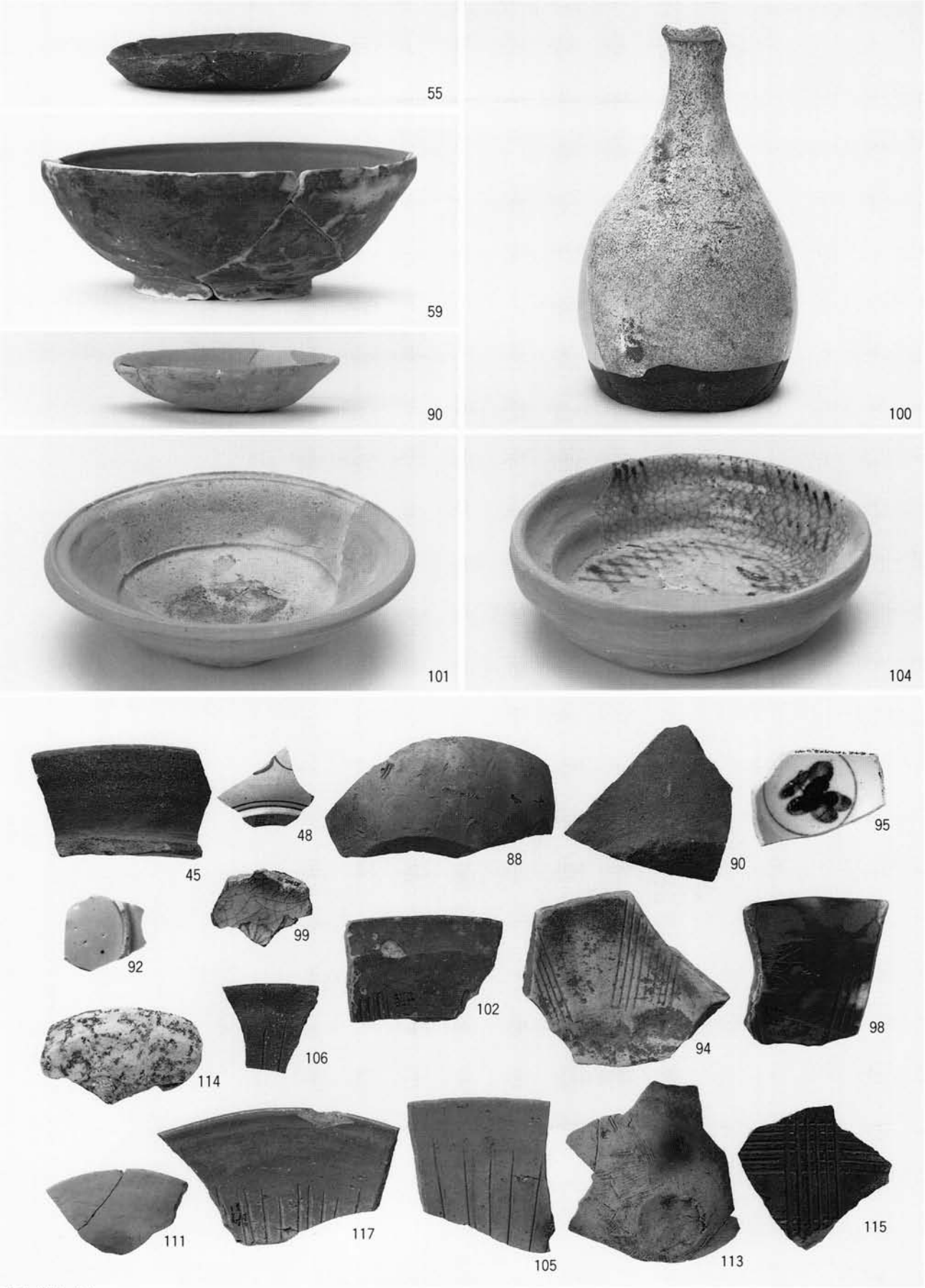
73

84

79

85

出土遺物(3)　６地区竪穴式住居跡ＳＨ0601出土


55
59
90
100
101
104
45
48
88
90
95
92
99
102
94
98
114
106
111
117
105
113
115

出土遺物(4)

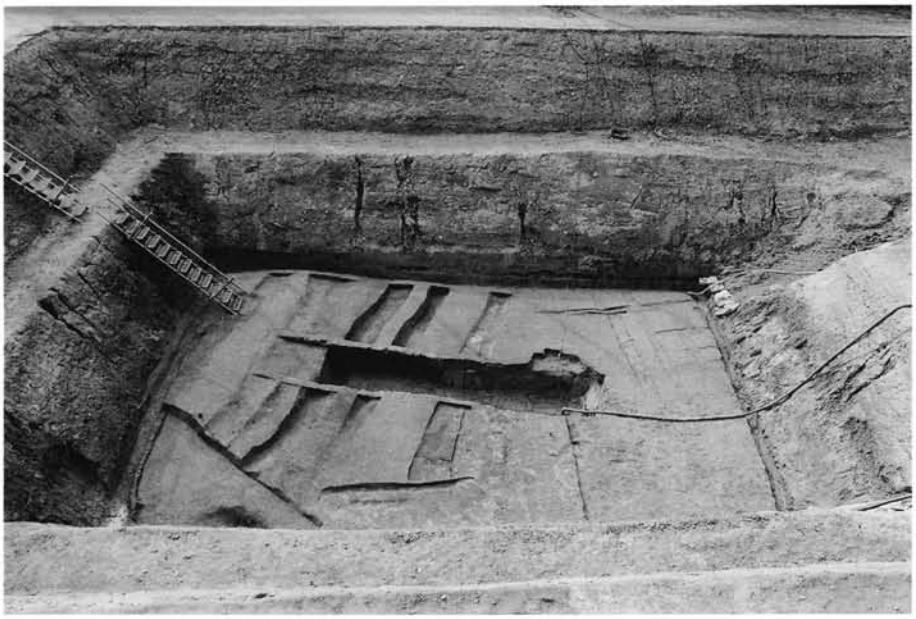
図版第49　美濃山遺跡

(1)調査前状況(南西から)

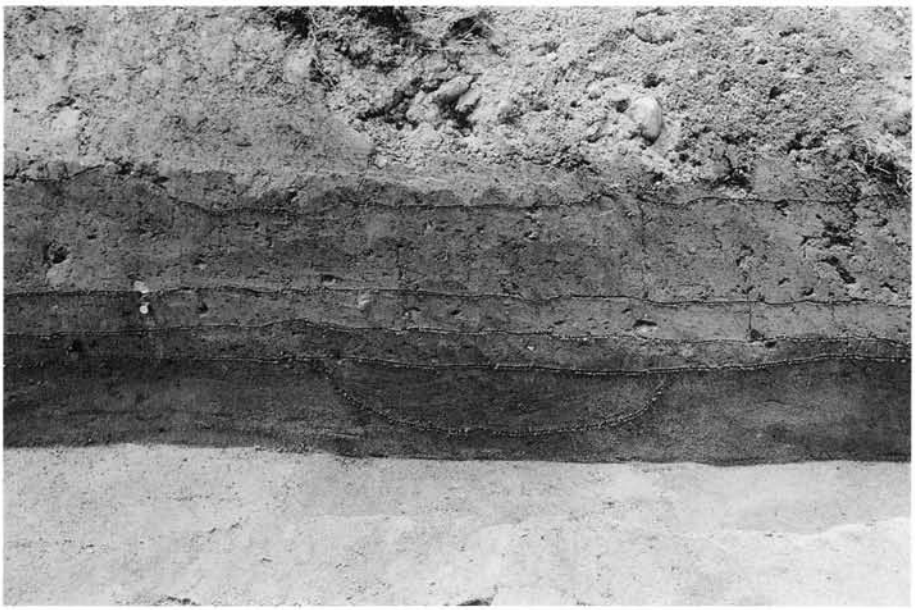
(2)調査前状況(南東から)

(3) 1トレンチ重機掘削状況
(南東から)

(1) 1トレンチ全景(南西から)



(2) 1トレンチ全景(南東から)



(3) 1トレンチ西側壁断面
(南東から)

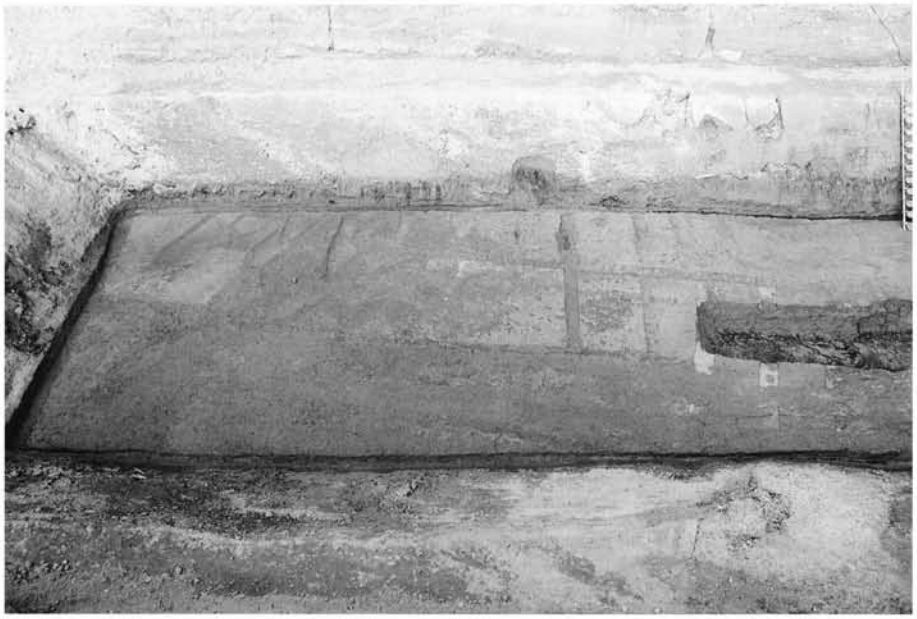
図版第51　美濃山遺跡

(1) 1トレンチ下層掘削状況
(北東から)

(2) 1トレンチ下層西側断面
(南東から)

(3) 2トレンチ作業状況(南から)

(1) 2トレンチ全景(南から)



(2) 2トレンチ溝群(西から)

(3) 2トレンチ西壁断面(東から)

図版第53　薪遺跡第７次

(1) A地区調査前の状況(北西から)

(2) A地区全景垂直写真(左上が北)

(1) A地区掘立柱建物跡ＳＢ57(左上が北)

(2) A地区掘立柱建物跡ＳＢ56(左が北)

(1) A地区掘立柱建物跡ＳＢ57　柱痕検出状況(北から)

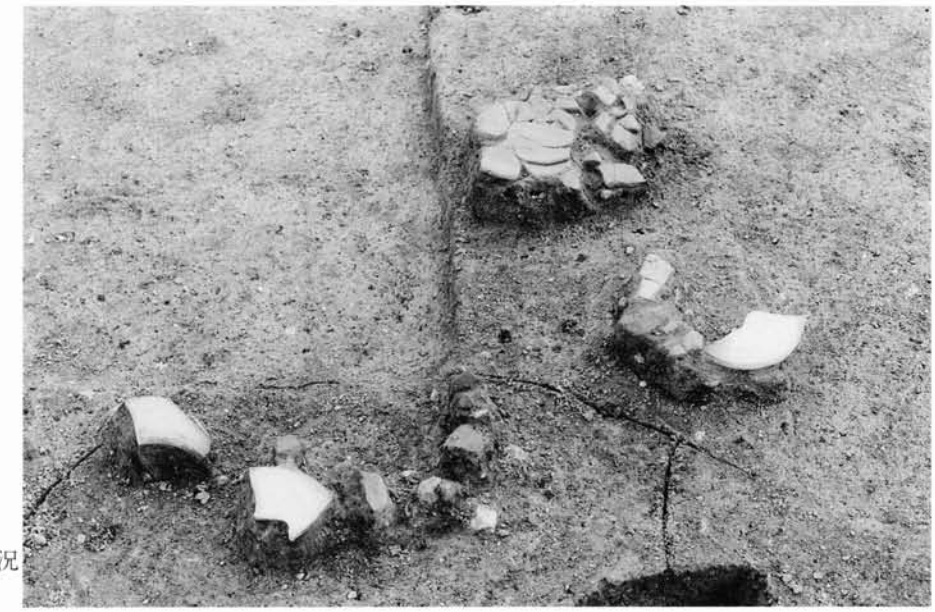
(2) A地区掘立柱建物跡ＳＢ56完掘状況(北から)

(1) A地区掘立柱建物跡ＳＢ57　Ｐ２柱根出土状況(東から)

(2) A地区掘立柱建物跡ＳＢ56　Ｐ２柱根出土状況(北から)

(1) A地区溝ＳＤ66遺物出土状況
(南東から)

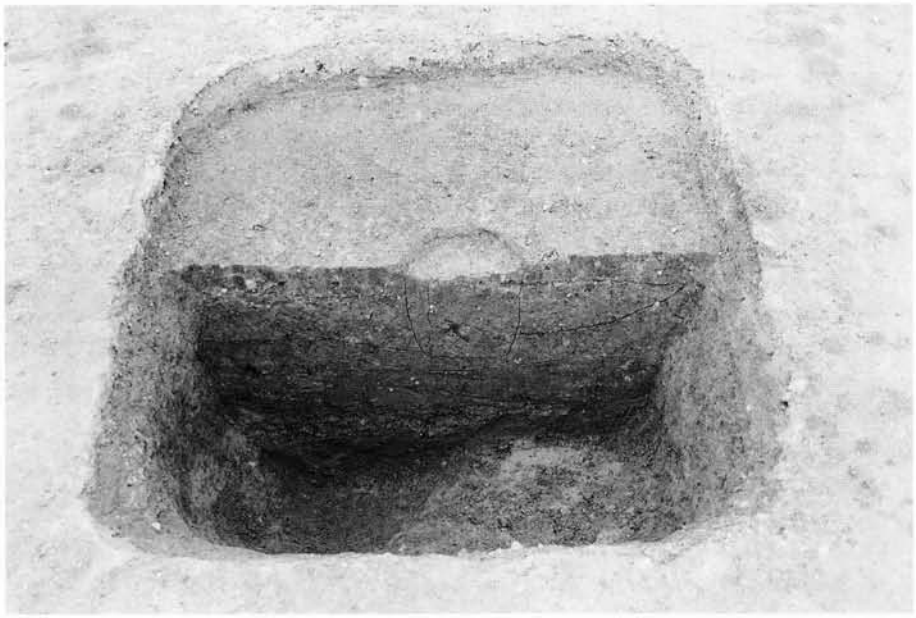
(2) A地区土坑ＳＫ51、溝ＳＤ55
(中央)遺物出土状況(東から)



(3) A地区土坑ＳＫ51遺物出土状況
(北から)

図版第58　薪遺跡第７次

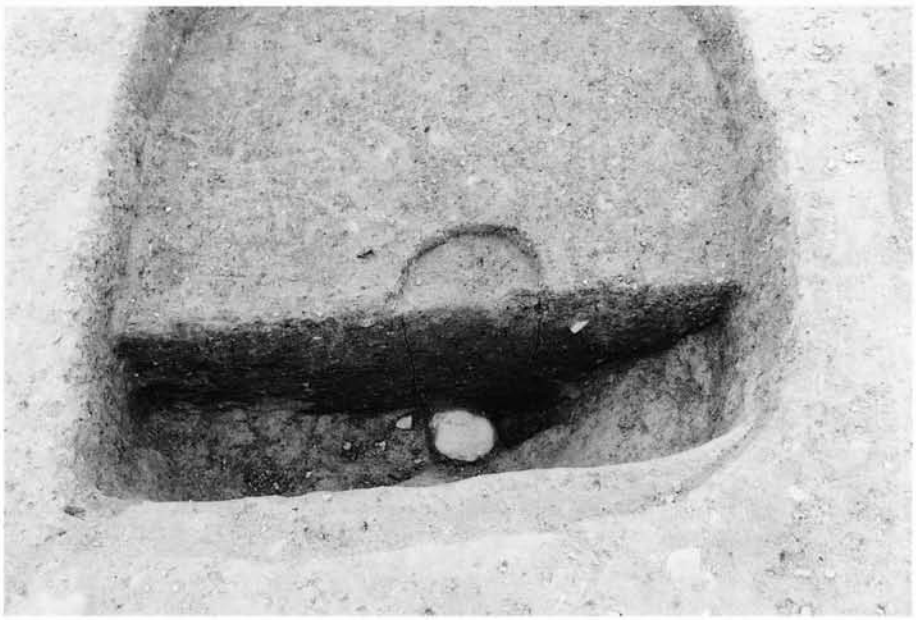
(1) Ａ地区掘立柱建物跡ＳＢ57
Ｐ５断面(東から)



(2) Ａ地区掘立柱建物跡ＳＢ57
Ｐ８断面(南から)

(3) Ａ地区掘立柱建物跡ＳＢ57
Ｐ15断面(北から)

図版第59　薪遺跡第７次



(1) A地区掘立柱建物跡ＳＢ57
Ｐ16断面(北から)

(2) A地区竪穴式住居跡ＳＨ84
ピット半裁状況(西から)

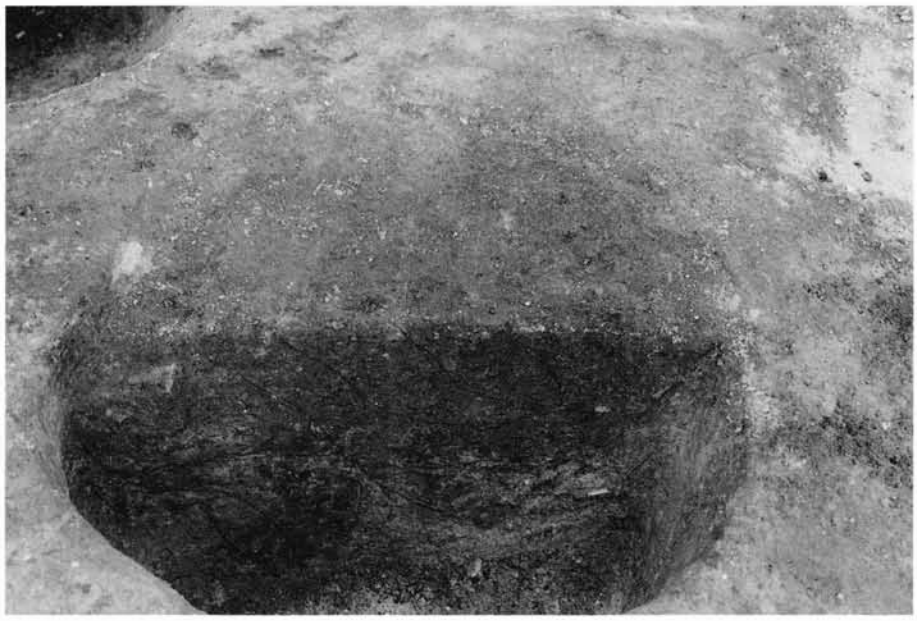
(3) A地区竪穴式住居跡ＳＨ84
完掘状況(西から)

(1) A地区溝ＳＤ01完掘状況
（南東から）

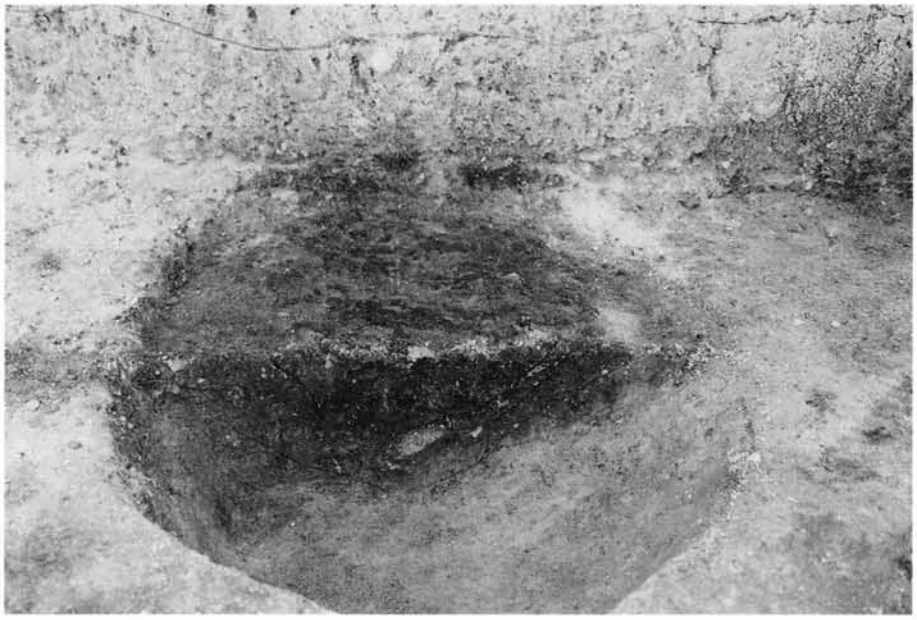
(2) A地区溝ＳＤ02完掘状況
（北西から）

(3) A地区溝ＳＤ02断面（北東から）

図版第61　薪遺跡第７次



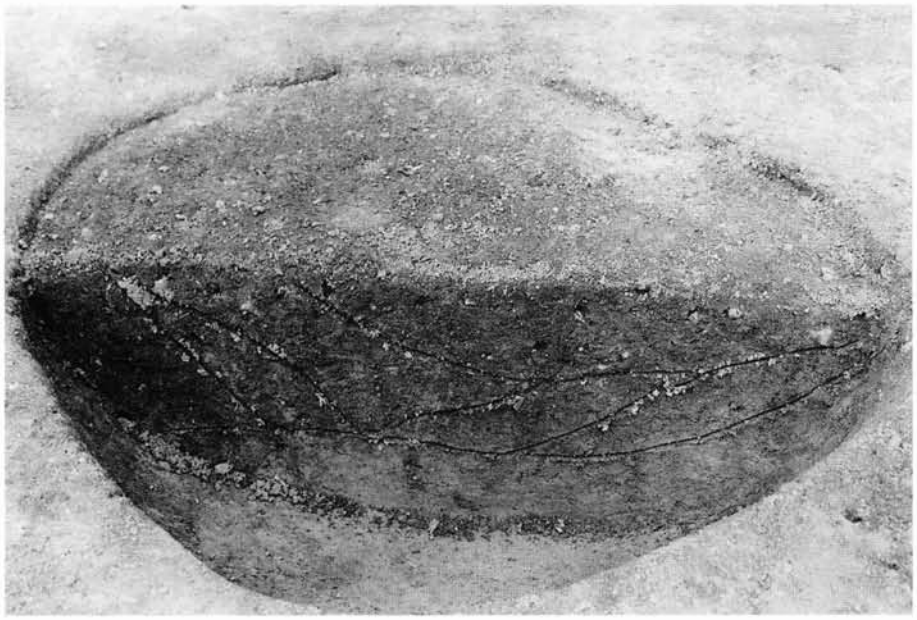
(1) A地区土坑ＳＫ11断面(西から)



(2) A地区土坑ＳＫ12断面(西から)

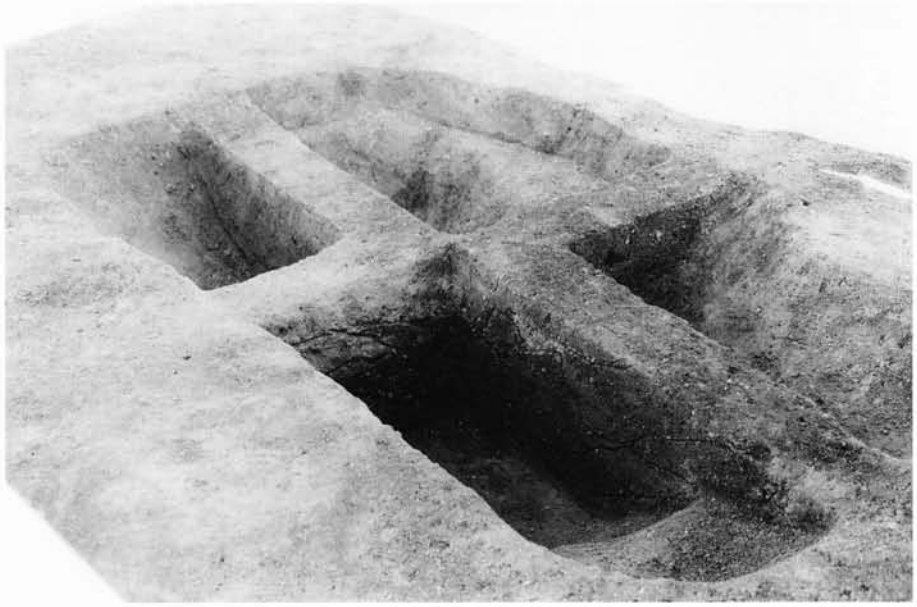
(3) A地区土坑ＳＫ15断面(西から)

図版第62　薪遺跡第７次



(1) A地区土坑ＳＫ16断面(西から)

(2) A地区土坑ＳＫ22断面(西から)



(3) A地区土坑ＳＫ24断面
(北東から)

図版第63　薪遺跡第７次

(1) Ａ地区土坑ＳＫ62断面(南から)

(2) Ａ地区土坑ＳＫ07完掘状況
(南から)

(3) Ａ地区土坑ＳＫ14(手前)・
ＳＫ08(右)・ＳＫ09完掘状況
(南から)

図版第64　薪遺跡第７次

(1) A地区土坑ＳＫ11完掘状況
（南から）

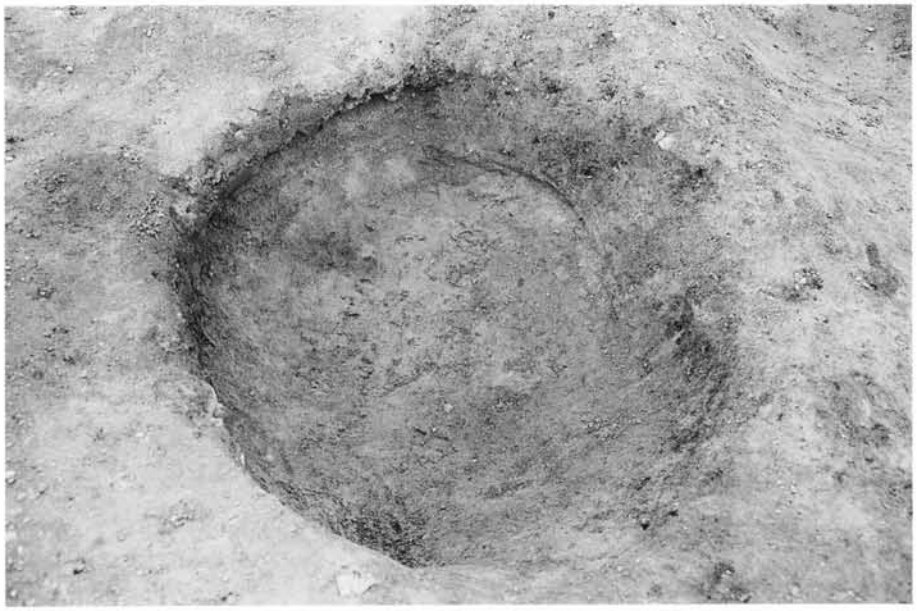
(2) A地区土坑ＳＫ11(左)・ＳＫ12
完掘状況(北東から)

(3) A地区土坑ＳＫ15完掘状況
（北西から）

図版第65　薪遺跡第７次

(1) Ａ地区土坑ＳＫ17完掘状況
（北から）

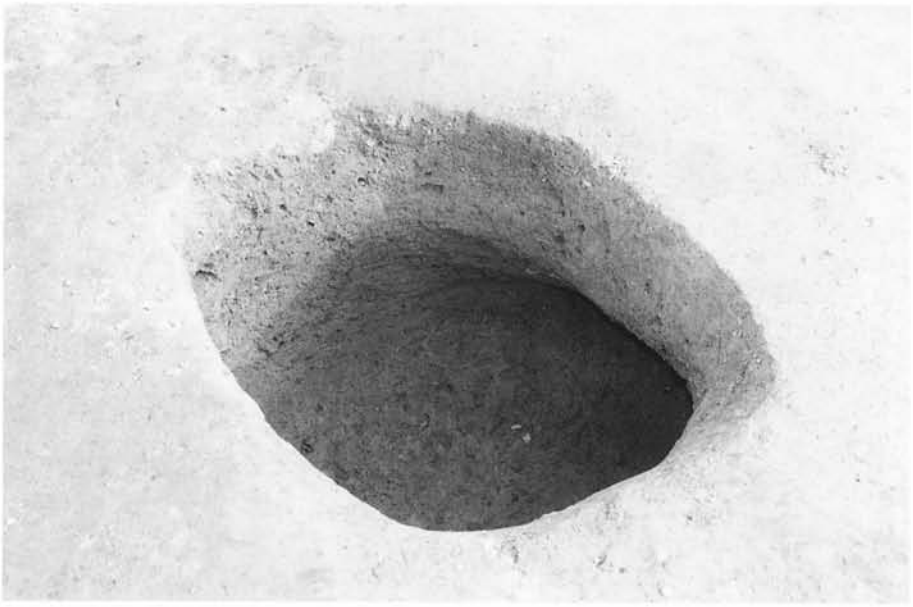
(2) Ａ地区土坑ＳＫ22完掘状況
（北西から）



(3) Ａ地区土坑ＳＫ23完掘状況
（南東から）

(1) A地区土坑ＳＫ24完掘状況
（南から）

(2) A地区土坑ＳＫ61完掘状況
（北東から）



(3) A地区土坑ＳＫ62完掘状況
（西から）

図版第67　薪遺跡第７次

(1) B地区調査前の状況(南東から)

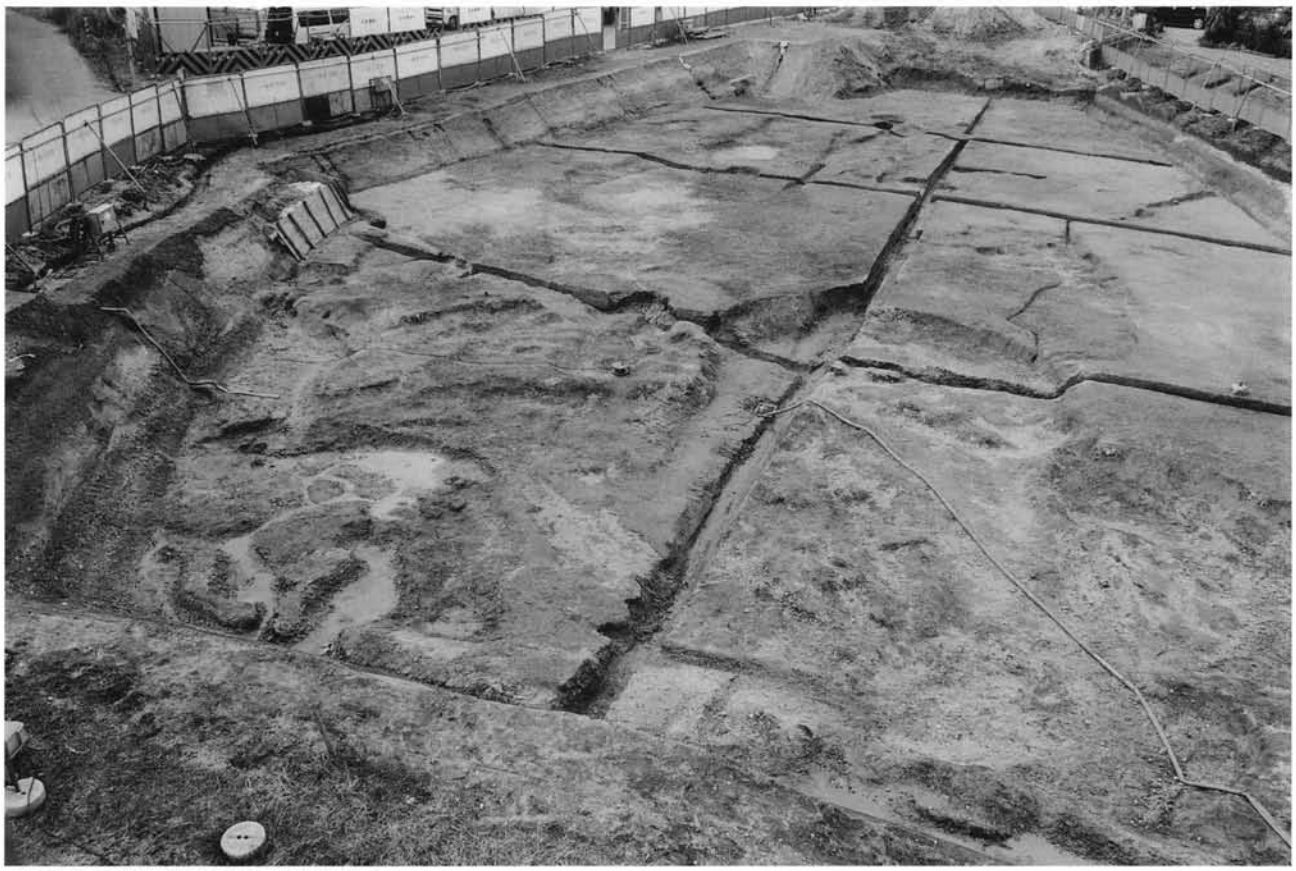
(2) B地区全景(南から)

図版第68　薪遺跡第７次

(1) C地区調査前の状況(南から)

(2) C地区全景(上が北)

図版第69　薪遺跡第７次



(1) C地区流路跡完掘状況(南東から)

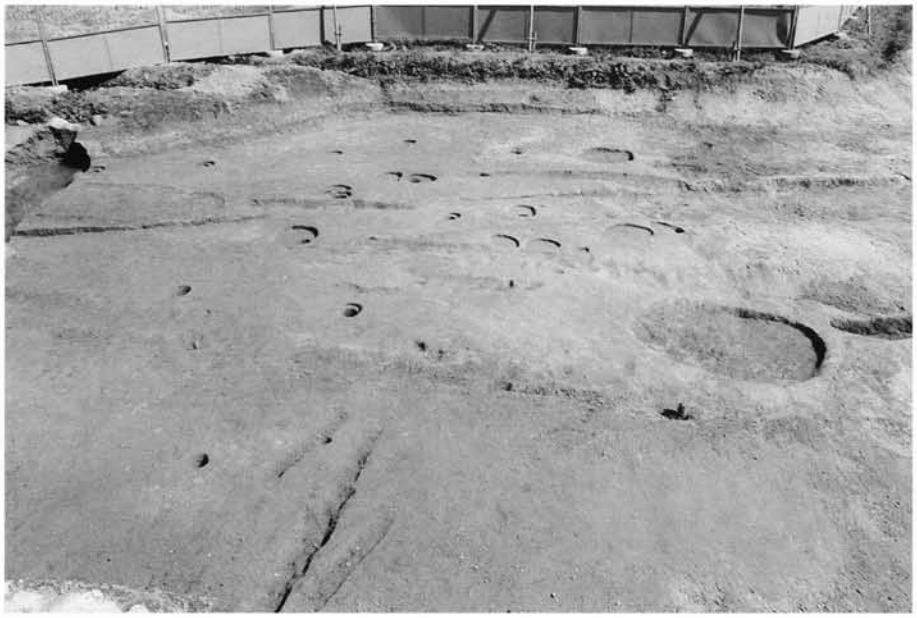
(2) C地区全景(北西から)

(1) Ｃ地区流路跡全景(北西から)

(2) Ｃ地区流路跡ＳＲ15完掘状況(北から)

(1) Ｃ地区流路跡ＳＲ15・19完掘状況(東から)

(2) Ｃ地区流路跡ＳＲ19近景(東から)

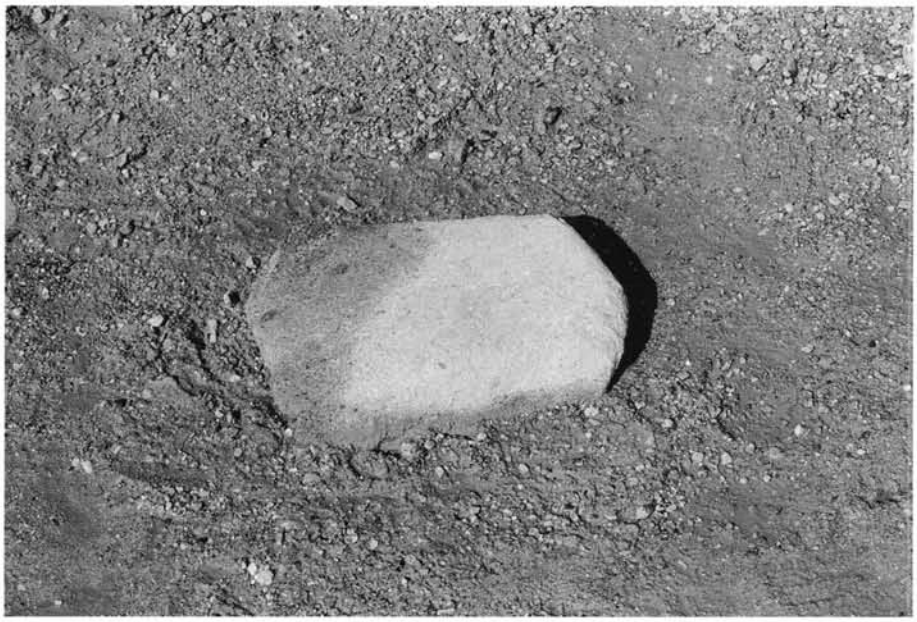


(1) Ｃ地区上層検出遺構(南西から)

(2) Ｃ地区流路跡ＳＲ21杭列
検出状況(南西から)

(3) Ｃ地区流路跡ＳＲ15石棒
出土状況(南西から)

図版第73　薪遺跡第７次



(1) Ｃ地区流路跡ＳＲ15石皿
出土状況(南西から)

(2) Ｃ地区土坑ＳＫ18土器
出土状況(南西から)

(3) Ｃ地区土坑ＳＫ18完掘状況
(南から)

10

11

93

107

94

106

4

92

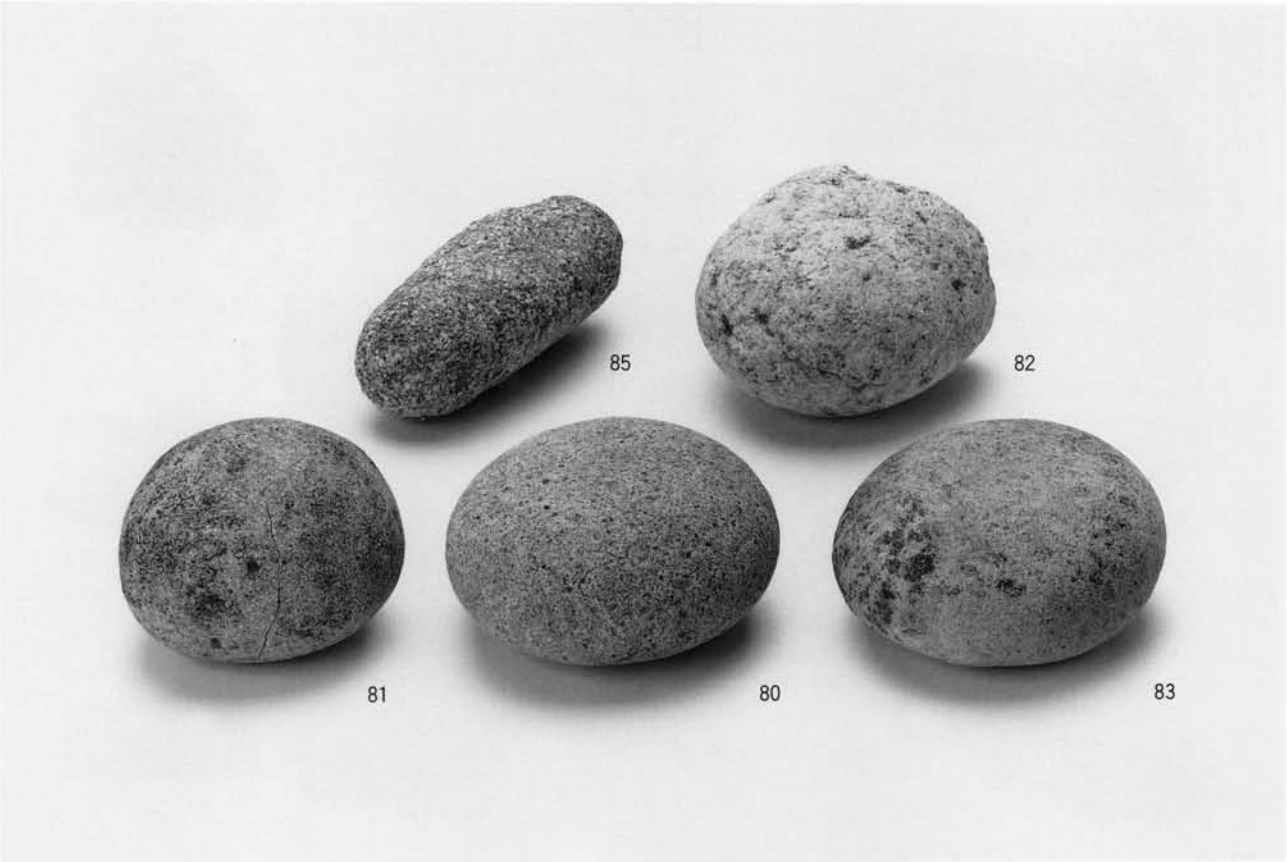
7

19

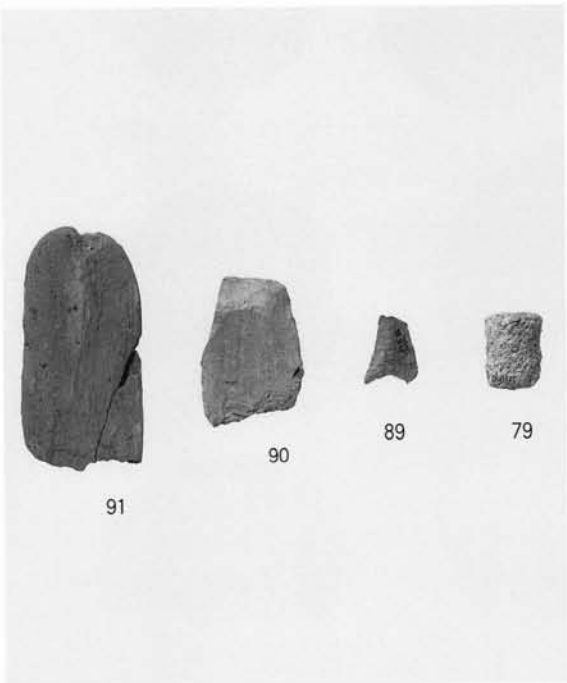
99

須恵器

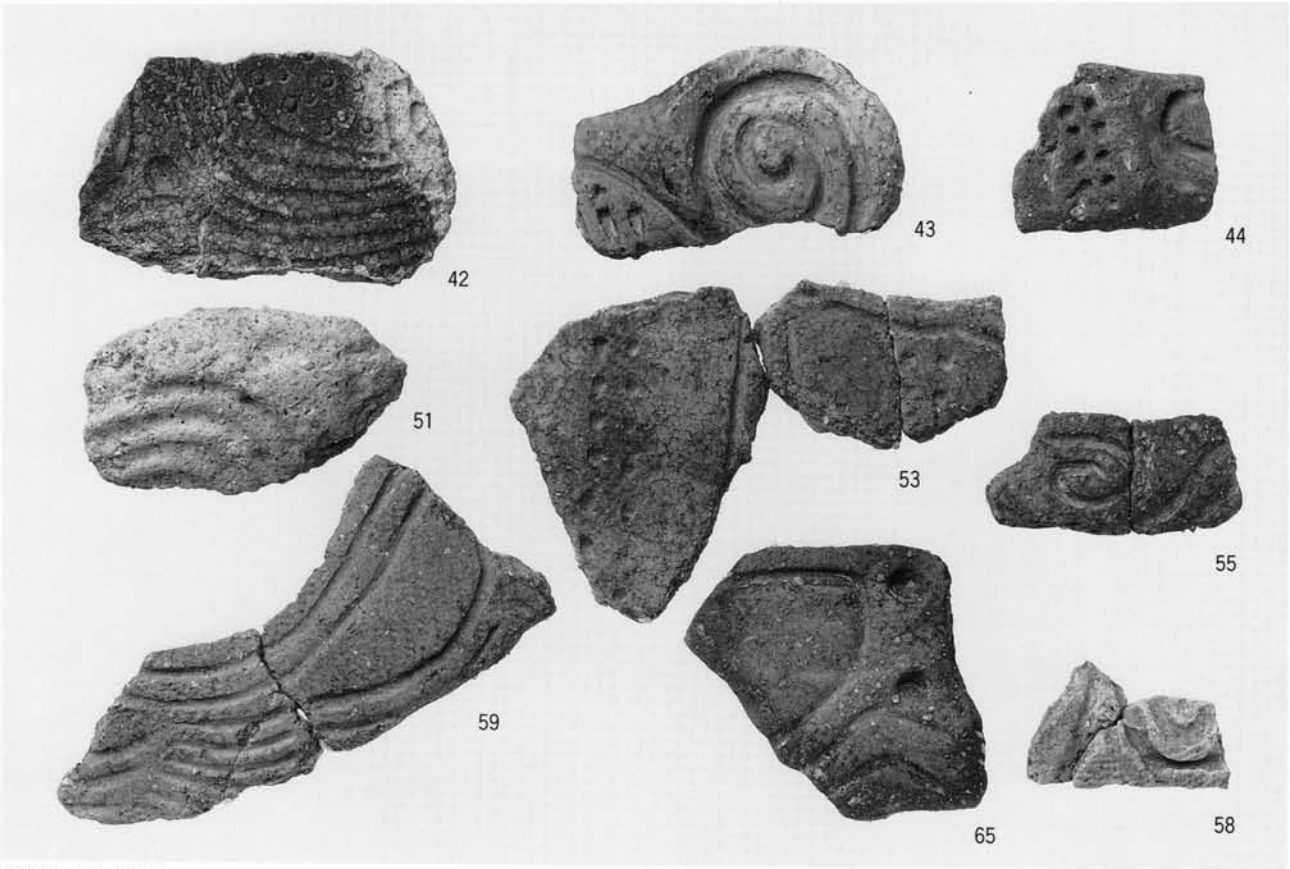
図版第75　薪遺跡第７次



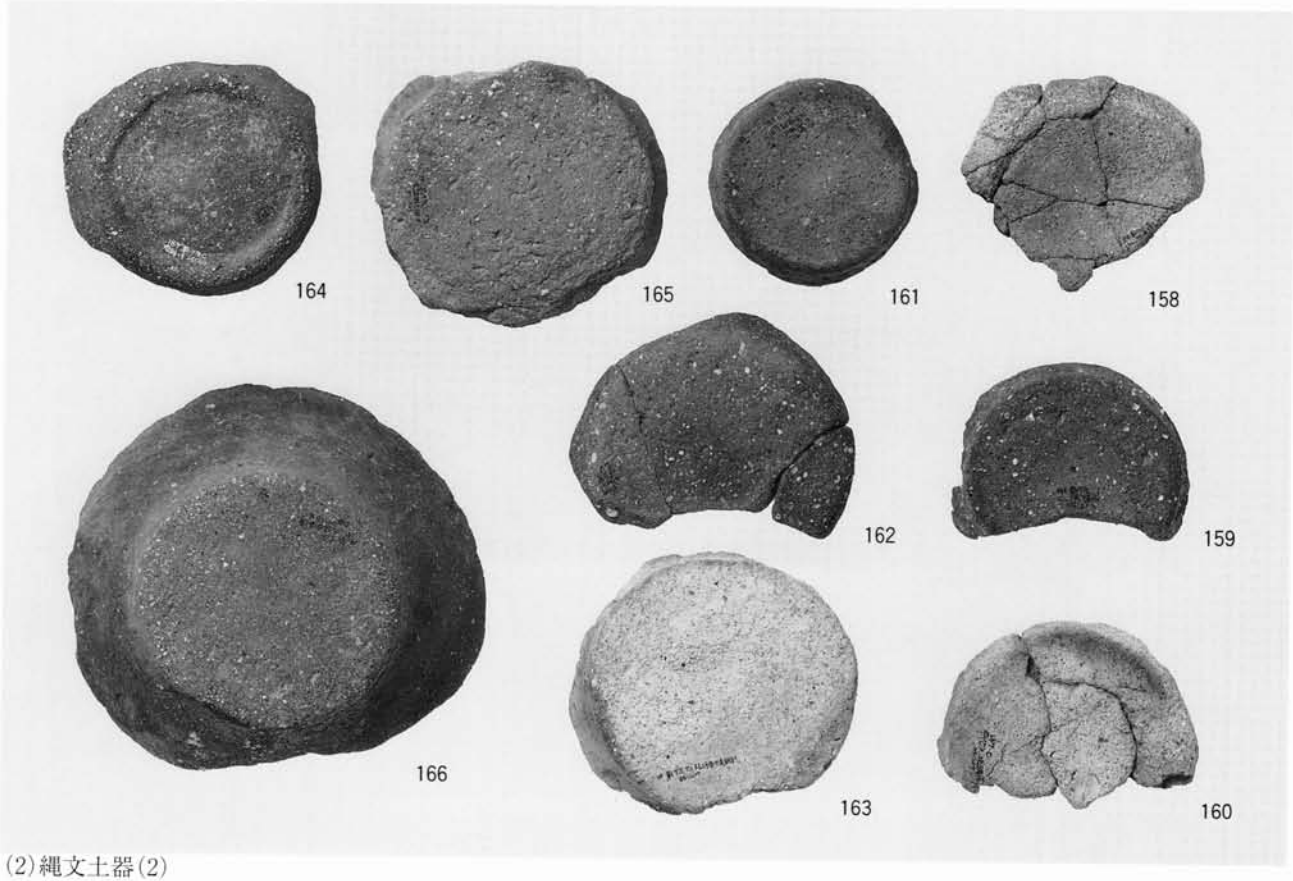
(1)石器(1)



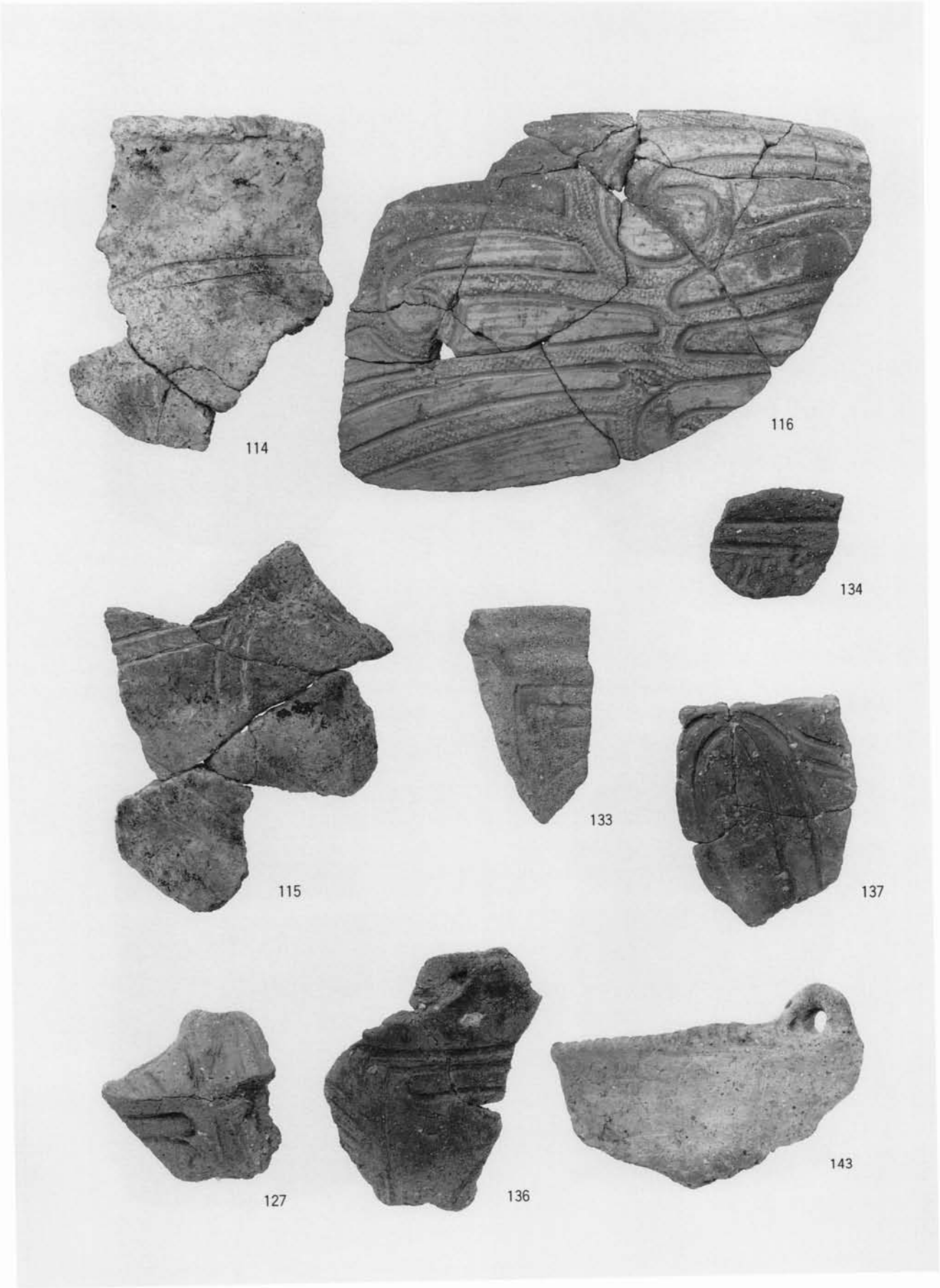
(2)石器(2)・土製品

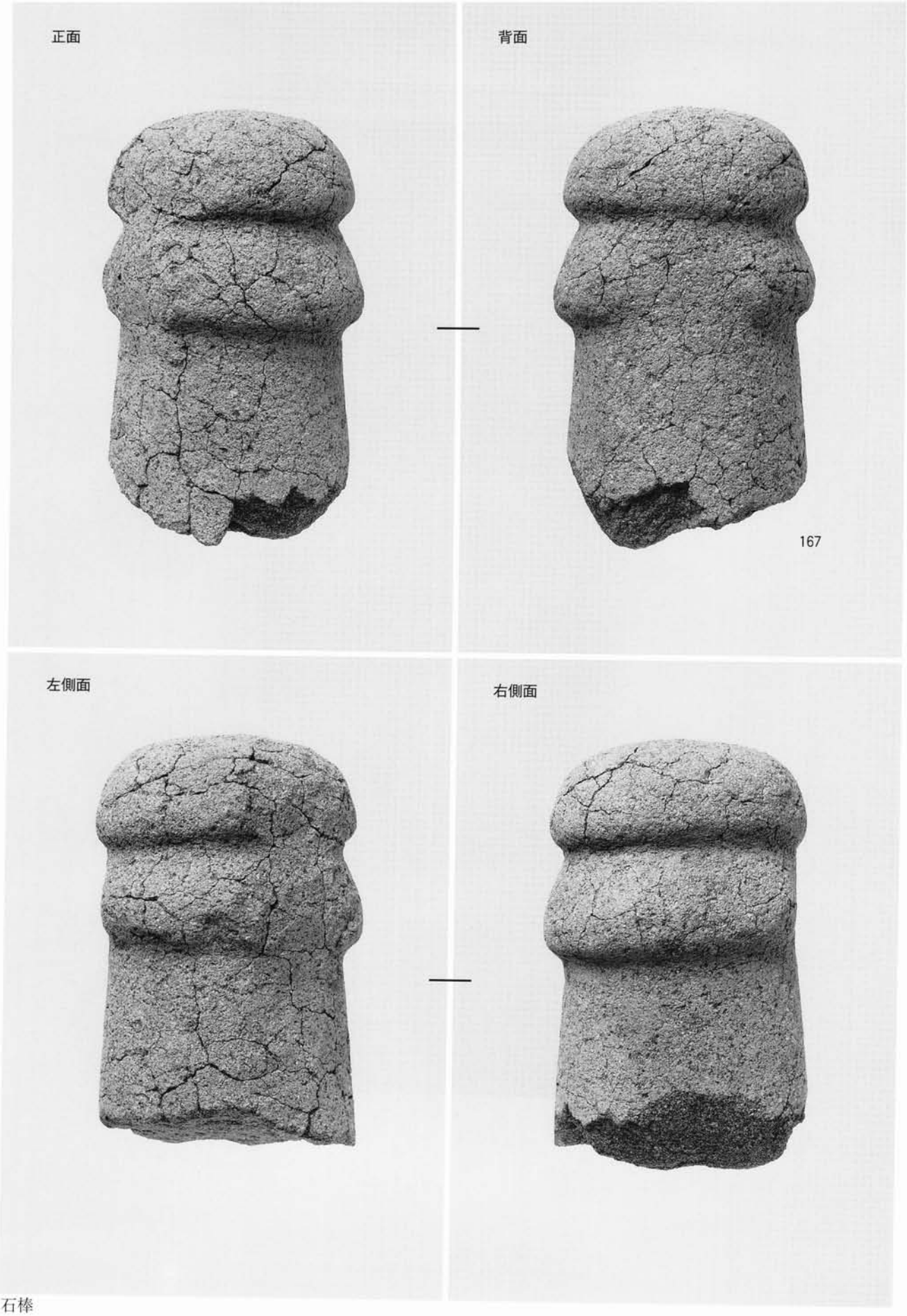


(1)縄文土器(1)



(2)縄文土器(2)


114
116
134
115
133
137
127
136
143



石棒

報告書抄録

ふりがな	
書　　名	
副書名	
巻　　次	
シリーズ名	京都府遺跡調査概報
シリーズ番号	第121冊
編著者名	
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40-3　　Tel　075(933)3877
発行年月日	西暦　2007　年　3　月　30　日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
なんばのじょうりせいいせき・なんばのいせき 難波野条里制遺跡・難波野遺跡	きょうとふみやづしあざおおがき・えじり・なんばの 京都府宮津市字大垣・江尻・難波野	26205	90	35°34'55"	135°11'49"	20051006～20060327	1,300	道路建設
おかのいせきだいよんじ 岡ノ遺跡第4次	きょうとふふくちやましひがしおかちょう・みなみおかちょう 京都府福知山市東岡町・南岡町	26201		35°17'25"	135°07'29"	20050510～20060112	2,700	道路建設
みのやまいせき 美濃山遺跡	きょうとふやわたしうちさとかきたに 京都府八幡市内里柿谷	26210	44	34°51'01"	135°43'13"	20060601～20060818	1,200	建物建設
たきぎいせきだいななじ 薪遺跡第7次	きょうとふたなべしおおあざたきぎこあざたつみ・どろどろ・せばみち 京都府京田辺市大字薪小字巽・泥々・狭道	26342	24	34°49'24"	135°45'23"	20050926～20060227	2,500	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
難波野遺跡	墳墓 集落	弥生 古墳 奈良～平安 鎌倉	方形貼石墓 竪穴式住居跡 掘立柱建物跡・柵列・溝 井戸・洗い場遺構・土坑	弥生土器 土師器・須恵器・勾玉 土師器・須恵器・墨書土器・黒色土器・緑釉陶器・土馬・風字硯・銭貨 土師器・陶磁器・中国製陶器・墨書土器・製塩土器・木製品・石鍋	弥生時代中期後半の方形貼石墓を2基検出。

岡ノ遺跡第４次	集落	弥生 平安 鎌倉～室町 城跡	竪穴式住居跡 掘立柱建物跡・柵列・井戸 掘立柱建物跡・柵列・井戸 掘立柱建物跡・柵列・井戸・大溝	弥生土器・石鏃 須恵器・土師器・黒色土器・緑釉陶器・土錘 土師器・陶磁器・中国製陶磁器・瓦質土器 近世陶磁器	安土桃山時代から江戸時代初頭の福知山城形成期の遺構群を検出。
美濃山遺跡	集落	江戸	耕作溝	近世陶磁器	顕著な遺構なし。
薪遺跡第７次	集落	縄文 奈良 平安	土坑・流路跡 掘立柱建物跡 土坑・溝	縄文土器・石器・石棒・土製品 土師器・須恵器 土師器・須恵器・黒色土器・製塩土器・平瓦	縄文時代の大型石棒の出土。

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

京都府遺跡調査概報 第121冊

平成19年３月30日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Tel (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　河北印刷株式会社
〒601-8461　京都市南区唐橋門脇町28
Tel (075)691-5121(代)　Fax (075)671-8236